

◇5 とある魔術と科学にお気楽転生者が転生 《完結》

こいし

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

問題児の世界を終えて、神様の下へやって来た瑛嘎。新たな力を手に入れて転生した先は、とある魔術の禁書目録の世界。

瑛嘎は暗部や魔術師や超能力者などの様々な強敵相手に、どのような無双をみせるのか。

ほぼ全ての戦闘で相手をおちよくる瑛嘎。貰った力はほぼ最弱の能力、さて、どうなる？

時系列的には妹達編開始位です。

※原作知識の不足により細かな設定の無知や独自解釈があります。

またかなりの原作崩壊、シリアスブレイクなどありますので、それがお嫌な方はブラウザバック推奨です！汗

頭空っぽにして読んでいただけの方のみどうぞ！

# 目次

## 妹達編

好み満載なスタート	1
レベル5祭	8
絹旗の無邪気さ	16
絹旗最愛はお年頃	21
休日のほのぼの	27
対御坂美琴戦	34
マイペース瑛嘎	40
とある瑛嘎の逃走中	46
統括理事会理事長	51
能力開発と仮入学	55
一位探し	59
レベル5ラリー	65
最強だからこそ、挑む相手	69
実験中止だってさ	76
食蜂操祈	80
操祈イジメ	84
ドツキリ成功を伝える簡単なお仕事	89
瑛嘎の力押し	93
落ちて、オチる。	98
打ち上げ	103
御使墮し編	
閑話 禁書目録との邂逅	111
小萌先生、無双	117

小萌先生の魔術サイド入り	120
あくまでも、姿は小萌先生である	128
小萌先生の授業	132
小萌先生のありがたい授業	137
閑話 小萌無双の裏側で	141
打ち止め編	
ジエング	147
瑛嘎の進化	151
背中を押して	157
閑話 後日談	168
風斬氷華編	
第二位への足掛かり	171
垣根帝督	175
第二位対人外	180
風斬氷華	186
法の書編	
学園都市の外へ	190
もやしつくす!	195
地獄巡り茶パート2	199
一方、その頃は	205
やはり、進行上手がかりを残す	209
地獄巡り茶の当たり	213
オルソラ無双	218
キリストの信仰は歪んでしまった	223
大覇星祭 木原幻生編	

大覇星祭	227
一方通行とラストロリ	233
食蜂操祈の競技状況	237
第一位と第五位と	242
集まるレベル5	246
話し合い	249
瑛嘎達の始動	253
しいたけフラグ	257
瑛嘎への難題	264
一方通行の推理	267
御坂美琴は？	271
瑛嘎の罠	274
瑛嘎の追撃	277
ツツコミ人員増加	281
木原幻生と泉ヶ仙瑛嘎の格の差	285
木原幻生の終わり	289
大覇星祭 恋人繋ぎ編	
恋人繋ぎ	292
人間関係	297
言い訳失敗	301
長峰美紀	304
第一種目『子守り』	307
一步先んじて	311
V S 初瀬遊里	315
ペイントボール	319

美紀の視点	323
V S 島風沙耶	328
V S 島風沙耶 2	331
間違い	335
V S 汐見栞	340
第一競技終了	344
一時終了	348
休憩	352
新たな伝説の始まり	355
二人目の伝説の少女	359
こんな大覇星祭	363
次への布石	366
女王艦隊編	
お引越し	371
女王艦隊 (イージーモード)	375
氷の部屋の中で	379
女王艦隊	383
年齢を考えて	387
D T S	391
解決?	394
動き出すローマ正教	397
原作12巻で瑛暎がやってた事	
日常編 睡魔の罟	400
日常編 変革	404
先生の問題	408

小萌の意地悪	412
第一位と滝壺	417
ヒント集め	420
決着	425
学園都市襲撃	430
シリアスの裏のギヤグ	442
崩れ落ちた二人	450
前方のヴェント編が終わった日	455
瑛嘎が動くきっかけを与えた犯人はアイテムの方々です	459
オティヌス、出番終了	465
全世界VS瑛嘎（＋巻き込まれた上条当麻）	471
娯楽主義者は、	475
最終決戦だ	483
憂い	489
エピソード	496

## 妹達編

### 好み満載なスタート

「やあ神様」

「ん、瑛嗶。おかえり」

「問題児の世界、中々楽しかったよ」

「それは良かった」

瑛嗶は基本、死ねば神様の下へ戻ってくる。そして、次の世界へと転生するのだ。

「また転生するんだよね？」

「うん。この際だからとことん楽しんでやろうと思って」

「なるほど……ま、それじゃ問題児世界の力は没収ね」

神様はそう言って瑛嗶の胸に手を当て、ギフトを没収した。そして、神様は少し思わせぶりな表情を浮かべて瑛嗶に言う。

「次の世界では俺が与えた力の他に、もう一つ別の力が手に入るかもね」

「どういうことだ？ 行く世界はランダムだろ？」

「俺がくじで決めてるからね。俺は行く世界を知ってるのさ」

「初めて知ったよそのルール」

瑛嗶と神様はとても気が合う性格をしている。

「それじゃ、行ってくるよ」

「もう行くのか？ 全く、少し位ゆっくりしてけばいいものを」

「神様の話し相手より、次の世界を楽しんだ方が面白い」

「言ってくれるじゃないか。それじゃ今度は少し与える力をあまり強いものにしないでおくれよ」

「お、神様も分かかってるじゃないか。その方が、面白い」

瑛嗶と神様は鏡映しの様に、ゆらりと笑った。そして、瑛嗶はひらりと手を振って、真っ白な空間から、その姿を消したのだった。

「次の世界はとある魔術の世界か……念能力、魔法、スキル、ギフトと来て……お次は超能力と来たか。全く、瑛嗶の適応力には驚かされる



ねえ……さて、与える力はどうしようかな？ 攻撃的な能力は避けておこう……ああ、これがいい。なんの攻撃力も持たず、ほとんど防御力も持たない、クソみたいな超能力……ああ、この場合は人工的に開発される超能力じゃなくて……天然モノの、原石……かな？」

どちらにせよ楽しみだ。

神様はそう言って、楽しげに笑った。

◇◇◇

瑛嗶が転生後にまず確認したのは、自身の身に宿る力の確認だった。身体能力はこれまで通り、使用できる能力はなんとなく、使い方と効果位は理解出来た。服装は着物では無く、青黒いタンクトップの上に黒いパーカーを着て、下は七分丈のズボンで靴はサンダルだった。とりあえずパーカーの袖を適当に捲って肘程まで腕を露出した。気温が暖かい事から恐らく季節は夏頃なのだろう。

そして次に瑛嗶は周囲の確認をする。場所はどうかやら路地裏で、時刻は既に夜も更ける頃合いだった。ふむ、と短く頷いて、最後に瑛嗶を挟む様に現れた二人の人物に視線を向けた。

「で、お前ら誰？」

瑛嗶の視線の先で、ポケットに手を突っ込みながらめんどくさそうに視線を送ってくる白髪の少年。赤い瞳がぎらりと生温い殺気を向けてくる。そして、対面には軍用ゴーグルを装着し、無骨な銃を構えて満身創痍な茶髪の少女が息を切らして立っていた。どうやら瑛嗶はこの二人の戦闘の合間に転生してきたらしい。とはいえ、瑛嗶がパーカーの袖をまくった辺りで現れたから、転生時の姿は見られていないのだろう。

「はア……ったくなんなんですかア？ 折角人がノって来た所に茶を濁す様な登場しやがってよオ」

「子供が随分と吠えるじゃないか。ところでその話し方疲れない？」  
「うるせエ、こちとら生まれつきだつツウの。ま、とにかく……目撃者は始末しろつてのが定番だし、とりあえず死ねよ、オマエ」

白髪の少年は呆然とする茶髪の少女を無視して瑛嘎に突っ込んできた。その両手を広げて、一步で瑛嘎との間にあつた5、6m程の距離を詰める。地面を軽く蹴っただけでありえない速度だった。しかも、跳躍の様に放射線を描く一步ではなく、まさしく直進する弾丸の様な一步。瑛嘎であっても、その様な動きをするのは軽く蹴った程度では無理だ。前に蹴りだせば出来ないわけではないが、それほど白髪の少年の動きは物理法則を無視していた。

「へえ……」

が、所詮弾丸より劣る程度の速度。今まで亜光速で動く生徒会長や、第三宇宙速度で動く快樂主義者なんかを相手してきた瑛嘎だ。その動きは随分と鈍く見えた。

「とりあえず、俺はお前とあの女の子の過激なプレイを邪魔するつもりは一切無い訳で……面倒だからそこ通してね」

「んなつ……?!」

瑛嘎は白髪の少年の腕を『掴み』、一瞬で投げ飛ばした。そして、彼が呆然としている間にゆらゆらと歩いて去って行ったのだった。

「なんだ……アイツ……俺の『反射』が効かなかつた……?」

白髪の少年はそう言って、暗闇に姿が見えなくなった瑛嘎の去った方向を見続ける。だが、そこに、茶髪の少女が隙アリとばかりに引き金を引いて打った。背後を捉える弾丸は、少年の後頭部にぶつかり――

――少女の胸を撃ち貫いた。

「ああ? ワリイな、いたのか。オマエ」

白髪の少年は無傷。少女はそんな少年の言葉を最後まで聞きとる事が出来ずに、その命を落とした。

とある少女からクローン技術を用いて作りだされた、2万もの個体の内の……一人だった。



瑛嗶は白髪少年を投げ飛ばした時、能力を使っていた。神様に与えられた能力。瑛嗶の持つこの能力は、人工的に開発された能力では無く、神から与えられた天然モノで、この世界ではそんな能力者の事を『原石』と呼ぶ。また逆に、人工的に薬物投与や電極なんかで創り出された能力者を『超能力者』と呼ぶのだ。瑛嗶は前者、原石だ。

「成程……こういう力か。ふむ、限界時間は……今の所5秒って所かな？」

瑛嗶は右手を握ったり開いたりと繰り返しつつ、そう呟く。とはいえ、今は金があっても住居はない状況。一応ポケットに財布と中身の金があったので、生活には困らないが、住処は必要だろう。

「どうしたものかな……一応カードとパスワードのメモはあったから俺の口座はあるだろうけど……住居はなあ」

瑛嗶はとりあえず、ご飯を食べる事にした。どうやら神様は弱い能力の他に、瑛嗶の身体を少し弄ったようだ。これまでは生理的欲求が必要無かったのだが、今では食事や睡眠が必要な身体になっているらしい。瑛嗶は久しぶりに感じる空腹感に、そう確信していた。

外食なので、適当なファミレスに入る瑛嗶。一人なのが少し寂しいが、早めに座れるだろうとポジティブに行く事にした。だが、何故か夜中なのに席は満席。柄の悪い不良っぽい輩が大量に居て、席を占領していた。

「……………うわ、めんどくせ」

「あの、お客様。お一人様ですか？」

「あーはい、そうですね」

「相席でもよろしいでしょうか？」

相席。見ず知らずの他人の座っている所に座って気不味い雰囲気の中食事をする行為。この場合はこの不良陣の中に入るのかと瑛喰は少し思案し、まあいいかと頷いた。

「それでは此方へどうぞ」

「あいよー……なるべく怖くなさそうな所にしてね」

「あはは……大丈夫ですよ。女性の方ばかりだったので」

店員がそう言つて瑛喰を連れて行つたのは、ファミレスの端。4人の女子がいる席だった。

「相席よろしいでしょうか？」

「え？ んー、まあいいか……ええいいですよ」

店員が話し掛けると、ウェーブの掛かった茶髪の長髪の女性が答えた。見れば、中々の美人でスタイルも見た感じ良かった。瑛喰はこれまで見てきた女性陣の容姿の順位を脳内で作って、彼女は上の下辺りに食い込むかなと感想を抱いた。

「よろしくー」

「ええ、よろしくね」

瑛喰はガタツと椅子を持って来て所謂お誕生日席に座った。そしてついではばかりに自身を連れてきた店員に注文する。

「えーと、ここからここまで全部持つて来て下さい」

「え」

「嘘です。とりあえずこのオムライス下さい。あと  
Drink bar」

「あはは……roger、です」

無駄にノリの良い店員だった。

「何というか……超フレンドリーな性格してますね。貴方」

店員が去った後、橙色のフード付きジャケットを着た小柄な少女が瑛喰にそう言った。瑛喰はその少女に向かって若干苦笑する。

「初対面で年上の男に気軽に話しかけられるお嬢ちゃんも中々フレンドリーだと思うけど？」

「超嫌な揚げ足の取り方しますね……」

「まあいいじゃないか。自己紹介しておこう、俺の名前は泉ヶ仙瑛唄だ。よろしく」

「……ま、名前位なら良いか……私は麦野沈利よ。よろしく」

茶髪の長髪の女性、麦野沈利はそう言うって自己紹介する。そして、他の三人も続く様に自己紹介をした。まず、橙色のフード付きジャケットを着た小柄な少女が言う。

「私の名前は絹旗最愛です。超よろしくしてあげなくもないですよ」

「よろしくもあい……最愛ちゃん」

「……まあ超見逃してあげます」

次に、金髪でベレー帽をかぶった元気そうな少女

「私はフレンダっていうの。よろしくね」

「め、メアリー……だと……!?!」

瑛唄は彼女の容姿がかつて救った絵画の世界の少女、メアリーに似ていたことから少し驚愕した。金髪で、目の色も一緒だったので、一瞬成長したメアリーかと思った位だ。だが、良く見ると違ったので普通に挨拶した。

「よろしく」

「結局、メアリーって誰なわけよ?」

「気にしなくて良いよ」

そう言う瑛唄に首を傾げるフレンダだが、割り込む様に黒髪を肩ほどまで伸ばしてジャージを着た少女が自己紹介した。

「………滝壺理后、よろしく」

「眠そうだね。よろしく」

少女はそう言うと、頭をテーブルに突っ伏して寝の体勢に入ったのだった。こうして自己紹介を終えた瑛唄は四人の前で空になっているコップを見て少し気を聞かせる事にした。

「何か汲んで来よう。何が良い?」

「あ、悪いわね。それじゃ私はアイステイー」

「私は超オレンジジュースで」

「私メロンソーダ!」

「……なにか適当に」

瑛暎は4人のコップを持ってドリンクバーの前に歩いていく。そして、今日の寢床は何処にしようか考えるのだった。

## レベル5祭

瑛嗶はとりあえず、自分と四人の分のジュースを汲んで戻って来た。一瞬、適当にといった滝壺理後の飲み物を地獄茶にしてやろうかと画策したものの、そんな親しくなったわけでもないので止めておいた。ので、代わりに炭酸水入りのアイスコーヒーを持っていく事に抑えておいたのだった。ちなみに、炭酸水の出し方は、メロンソーダのボタンを長押しでなく連打する事だ。炭酸水だけ出てくれるので、悪戯には持つて来い。但し、そんなにリアクションは求められない。

「ほい」

「ん、ありがとう」

「超ありがとうございます」

「ありがとー……ってあれ？　なんか炭酸入って無くない？」

「……………ありg……………コーヒーがしゅわしゅわしてるんだけど……………」

瑛嗶はフレンダのメロンソーダの炭酸水をコーヒーに、メロン部分をフレンダの分として入れて来たのだ。つまり、フレンダのは炭酸激薄メロンジュースである。

「なんだろうな。ここのドリンクバーちよつとおかしいね」

「いや確実になんかしたでしょ！」

「してないよ。炭酸水の部分だけコーヒーに入れたりしてないよ」

「したんだな？　そんな面倒な作業をしたんだな？」

「ああもうそうだよ。悪いか」

「悪いよ、何言ってるの!?!」

フレンダが突っ込みながら申し訳程度に入った氷を炭酸代わりにメロンジュースを飲む。ただそんなに不味くないので大した文句も抱かなかつた。が、滝壺の方は別の様で、若干嫌な汗を掻きつつ一口飲んでみた。リアクションするにも微妙な味でどうすればいいか詰まった。瑛嗶はそれを見て笑った。

「いやまあアレだ。なんというかアレだ。アレなんだよ」

「超説明になってませんね」

「説明する必要、ある？」

「私は被害に遭ってないので超どうでもいいですが」

「……………むう、別に飲めないわけじゃないから良いけど」

フレンダと滝壺は特に文句は言わなかった。そこに麦野が瑛唄に質問する。

「で、瑛唄はなんでこんな時間にこんなファミレスに？ 正直、スキルアウトには見えないし……………」

「んー……………住処が無くてねえ……………財布はあるからしばらくホームレスでもしてやろうかと」

「なのにファミレス入るって……………結局、お金の使い方間違えてる訳よ」  
「お前は言葉の使い方間違えてるけどな」

「あれおかしいな、私への対応ちよつと冷たくない？」

フレンダの言葉に瑛唄は苦笑した。だが、麦野は瑛唄のホームレス生活に少し引き攣った表情を浮かべている。とはいえ、なにかしてやる程仲が良いわけではないので、何もしないのだが。

「こちら、オムライスです」

「あ。あぎーす」

「ごゆっくりどうぞ」

瑛唄はやって来たオムライスにスプーンを突き立て、次の瞬間には食べ終わっていた。一瞬の出来事。すぐさま消えたのだ。麦野達はその光景に驚愕し、心の中で早っ、と突っ込んだ。

「ごちそうさま」

「もっと味わって食べなさいよ」

「いや、味わって食べたよ。とても美味しかったね」

「へー……………ぶっとんでるわね貴方……………」

「良く言われる」

瑛唄はぺろっと口周りに付いたケチャップを舐め取って、そう言った。そして瑛唄は立ち上がった。そして、伝票を取ってレジに向かう。

「代金は全部俺が払っとこう。女の子と同席出来たお礼だ」

瑛唄は麦野達がどうこう言う前にささっとお金を払ってファミレスを出て行ったのだった。





「なんか、変な奴だったわね」

「超マイペースというか、随分と我が道を超行く人でした」

「でも結局、もう会う事はないって訳よ」

瑛嗶が去った後、同席していた四人はそう言つて嘆息した。ここで彼女達の素性を公開する前に、この世界の事を語っておこう。

瑛嗶の転生したこの世界は、とある魔術の禁書目録の世界。舞台は超能力開発を行なつており、東京都の西部に作られた、通称『学園都市』だ。この街は出入りを厳重に管理しており、外周を壁で覆われている。そして、なにより特徴的なのはその進歩し過ぎた科学力にある。

学園都市は科学力が壁の外と30年程の差があるのだ。分かりやすく言えば、外の世界で開発された最先端のハッキングソフトは、学園都市にとっては30年前の作品という事だ。学園都市で使おうものなら速攻で解体され、居場所も掴まれる。

そして、この学園都市の人口の八割は学生であり、その名の通り学生の街となっている。さらに、人口230万人の全ての学生が、学園都市で行なわれている『超能力開発』を受けている。

人によつてその効果に強弱はある物の、学園都市内の学生は全員漏れなく超能力者という訳だ。

また超能力者はその効果の大きさにレベル分けされる。レベル0からレベル5の六段階だ。

無能力者は、血管が浮き出る程頑張つてようやく効果が出るか出ないかというレベル。

低能力者は、日常では殆ど役に立たないレベル。

異能力者は、レベル1とほぼ同等か少し上程度。

強能力者は、日常生活でも役立つレベル。

大能力者<sup>4</sup>は、軍隊で価値を得られるレベル。

そして超能力者<sup>5</sup>は、単騎で軍隊を相手に出来るレベルとなる。

また、レベル5は学園都市広しといえど、たったの7人。その全員が凄まじい超能力を持っているのだ。そして、その7人の内の1人が、麦野沈利。瑛嘎と同席した、3人の少女達のリーダー的な存在である。

そしてそんな彼女をリーダーとして活動する彼女達四人組は、アイテムというグループ名を名乗る、学園都市暗部の組織である。

学園都市の大部分の学生は、暗部という組織やこの組織が活動する学園都市の裏部分を知らない。残虐な実験や、人間を利用した人体実験等々、学生の暮らしている裏部分では、そういった残酷な世界が広がっているのだ。

アイテムはその間とも言える世界の組織の一つ。もちろん、まともな仕事はしていない。人殺し、強奪、施設破壊等々、様々な仕事を依頼されるままに行なってきているのだ。

「ん、仕事よ」

そして、そんな麦野沈利の携帯が震えた。相手は、普段アイテムに依頼を持ってくる仲介人。麦野達もこの仲介人の顔を見たことはなく、これからもそれでいいと思っている。

「何？」

『仕事よ。どうやらこの学園都市に侵入者が現れたらしいのよねー……で、どうやらその侵入者が『原石』らしいから、アイテムで保護しろだつてさ』

「どこからの依頼よソレ……」

『ん、統括理事長から直々にねー』

「はあ？ どういう訳よソレ。ふざけてんの？」

『こいつとききたらー！ こつちだつて結構びっくりしてんのよ！ つべこべ言わず働け！』

仲介人はそう言って一方的に電話を切った。そして、耳から電話を離して嘆息する麦野。すると、またも携帯が振るえ、こんどはメールが届く。どうやら侵入者の画像が添付されているようだ。麦野はそ

の画像を開くべく携帯のボタンを押す。画面上で画像を読み込み中と表示されている間に、仕事を説明する。

「仕事よ。どうやら学園都市に侵入した奴がいるみたい。そいつ、『原石』らしいからアイテムで保護しろってさ」

「ふーん……どんな奴？」

「ちよい待ち、今画像を——！」

「超どうかしましたか？」

麦野は読み込みが終わった携帯画面を見て眼を見開いた。そして、その画面をフレンダ達にも見える様に差し出す。三人はその画面に視線を向け、同様に驚愕する。

「こいつって……！」

「さっきの人？」

「確か名前は——」

その画面に映っていたのは、絹旗最愛の小さな口から紡がれた名前を名乗ったあの男

——泉ヶ仙瑛嘎

彼女達は先程友好的に話していた相手が捕獲対象と変わる瞬間に、妙な縁を感じたのだった。

◇ ◇ ◇

窓のないビル内部

ここは、学園都市の中に設置された窓も扉も無いビルの内部である。この中に入るには、案内人である瞬間移動能力者<sup>ポーター</sup>を介す必要がある。そして、この内部にいるのは、学園都市の最高責任者で、統括理事長の座に付く人物。

その名も、アレイスター・クロウリー

オレンジ色の液体の入った培養機の中で上下逆さまに浮かんでお

り、その姿は聖人の様でもあり、囚人の様でもあり、子供の様でもあり、老人の様でもあった。

「唐突に出現したイレギュラー……しかも原石と来たものだ。興味深い」

彼の目の前に浮かぶモニター、そこには瑛嗶が転生して来てからの行動が移っていた。

学園都市には、彼のばら撒いたナノマシンレベルに小さい監視用カメラ、『アンダーライン滞空回線』が浮遊しており、彼はそれを通して一カ所に居ながら学園都市全域を監視している。故に、瑛嗶の出現も察知出来たのだ。

「アクセラレータ二方通行を一蹴する能力……一体どのような物なのかな？」

アレイスター・クロウリーは、そう言って瑛嗶が白髪の少年を投げ飛ばした映像を見て笑う。彼は自身の計画に、瑛嗶をどう組み込もうかと画策しながら、楽しみに笑った。

だが、彼は気付かなかった。視界から見切れた監視映像の中で、瑛嗶がこちらを見てゆらりと笑っていた事に。



転生早々理事長に目を付けられた瑛嗶は、道の途中で一人の少女と対峙していた。時刻は午前1時と少し。夜更かしする位の時間帯である。外は夏なのか涼しく、随分と快適な気候だった。

そして、瑛嗶が対峙しているのは、瑛嗶も見覚えのある少女。茶髪を肩まで伸ばし、何処の制服なのかは知らないが上質な生地を使った制服を着ていた。違う点があるとすれば、軍用ゴーグルを付けていない事か。

「なんでこうなったんだろう」

瑛嗶は聞こえない様に呟いた。原因は良く分からないが、瑛嗶の言葉聞いた少女はいきなり瑛嗶に電撃をぶつけて来たのだ。とりあえず能力を使って弾き飛ばしたは良いモノの、硬直状態が続いていた。

発端は、瑛嗶が進む方向から歩いてくる少女を見て、「あれ？ さつき満身創痍で死にかけてなかったか？」と呟いた事にある。それを聞きとった少女はとんでもない形相になって怒り狂ったのだ。あとは先も言った通り。

「アンタも……あのイカれた実験の協力者ね……!!」

そんなものは知らねー、と瑛嗶は心の中で突っ込んだ。

「あの実験に関わる連中は皆殺す……!」

「あの一、俺は関係ないんですけどー」

「言い訳は良いわ。とりあえず、死になさい!」

またも電撃を放ってくる少女。瑛嗶は能力を使って電撃を素手で弾き飛ばした。後方に流れて地面を焼く電撃。少女は瑛嗶の行動に驚愕するが、どのような能力なのかと考察を始めた。

「……面倒だなあ……話が通用しない」

「強い絶縁性を持った能力か……念動力か……」

「逃げよう」

瑛嗶は彼女の目が追いきれない程度の速度で地面を蹴り、飛び上がった。彼女は瑛嗶の姿を見失う。瑛嗶はそのまま空中を蹴って二段ジャンプ。隣に立っていた2階建ての建物の屋上に着地し、下できよろきよろと瑛嗶を探す少女を見下ろす。

「ふむ……この世界はどうやら超能力的な力があるみたいだね……となると、あの白髪の少年、同席してた茶髪美人、そしてあの短髪少女からして……なるほど、とある魔術の世界か。4兆年も昔に読んだ話だから内容はきれいさっぱり忘れたけど……設定はなんとなく覚えてる」

瑛嗶はこの世界の舞台設定を転生する以前に読んだ事が有った。内容や登場キャラクターのほとんどは忘れたが、学園都市や超能力、レベル5のメンバー位はなんとなく覚えていた。

「となると……あれは御坂美琴か。レベル5の第3位……で、あの白髪少年は第1位、茶髪美人は第4位か。おお、俺ってば転生初日でレベル5に3人も出会ったのか。ラッキー」

瑛嗶はそう言って笑う。そして、瑛嗶の気配もなく、姿も見えなく

なったので諦めたのか、茶髪の少女……レベル5の第3位、  
発電能力者で、通称【超電磁砲】の異名を持つ中学2年生、御坂美琴  
はとぼとぼと去って行った。

「さて……流石にもう何も無いだろうし……寝るとしますか。状況の  
理解はまあ……明日で良いか」

瑛噺はそう呟いて、屋上に寝転び、ぐーすかと睡眠に入ったのだっ  
た。

## 絹旗の無邪気さ

翌朝

目を覚ました瑛嗶は、寝た時にいた屋上にいなかった。見れば、腕は縄で拘束されており、能力を制限する手錠も掛かっていた。周囲を見渡せばどこか生活感の残る部屋の中だった。転がっている空の缶詰、なんとなく見覚えのあるぬいぐるみ、微妙に散らかっている部屋は見た感じ女子の部屋だった。

「……………何この状況」

とりあえず瑛嗶は腕力任せで縄も手錠も引き千切る。そして腕に残った手錠は握りつぶすことで粉々にして取った。腕を擦りつつ、ベッドを見つけて寝っ転がった。

脱出は考えていない。折角拠点が自分からのこのこやって来たのだ、思う存分使わせて貰おうと考えたからだ。幸いなことに、冷蔵庫やベッド、テーブル位の必要最低限の家具はある。故に生活するには困らなそうだ。

「誘拐犯としてはまあ及第点かなあ……………俺じやなきや」

瑛嗶はそう言って、肘を立てて寝ながら頼杖を付く。所謂おじさんがテレビを寝転がってみる時の体勢である。服装は変わっていないし、財布も無事、中身も取られていない所を見ると、目的は金では無く瑛嗶自身。ならば、ここでこうしていても特に害はないだろう。

「さて、確か昨日はここがあるとあるの世界だっことを知って寝たんだけ……主人公忘れたけど、確か身体能力的にはどの敵も大したと無かった気がするなあ……………体術は皆そこそこ身に付けてたっけ……………」

瑛嗶は現状確認を終えて、この世界での立ち回り方を考える。これまでの世界ではそこそこ身体的に優れたキャラが多かったので、手加減は程々にしていたのだが、この世界は異能の力の方が戦闘においてメインになる。となると瑛嗶の身体能力は持っている能力と組み合わせると少し圧倒し過ぎる。

そこで、瑛嗶は手加減しつつ全力で戦える方法を考えた。それは、

今までの変幻自在で掴みどころのない戦い方から、規則性のある戦い方に変えること。つまり、柔道や剣道なんかにある、一定の『型』にそって戦うのだ。

こうすることで、敵は技の前の『構え』から次の動作を予測し、繰り出される技に対抗する事が出来る様になるだろう。これまで構えず自然体から技を繰り出していた瑛嘎からすれば、これは相手に対する最大の手加減。そして、その型に沿いながらなら全力を出す事も出来るだろう。万事解決である。

「んじや、即席だけど型作る。技名とかも考えた方が良いかな？」

中学二年生が色々な設定を考える様に、自身の行なう構えや技の名前を思考する瑛嘎。あまり考えなかつた事なので、少し楽しくなってきた。

「超何してんですか？」

「ああ、おかえり最愛ちゃん」

「ええまあ……一応その挨拶で超合ってますが……少々落ちつき過ぎてませんか？」

「あれ、フレンダちゃん達はどうしたんだ？ 学校？」

「私達は超学校には行ってません。行けるような環境で育ってませんし……麦野達は超買い出し中です」

そこへ、相席になって知り合つた絹旗最愛が帰つて来た。瑛嘎が拘束具を破壊している所とベッドの上で楽しげに鼻歌を歌っている所を見て引き攣つた笑みを浮かべている。

何処の世界に誘拐されたにも拘らず、拘束具を破壊出来たのに逃げずに寛ぐ被害者がいるのか。しかも鼻歌交じりに誘拐犯にお帰りと来たもんだ。マイペースにも程がある。

「買い出しか……見た所缶詰？」

「フレンダは鯖缶が超好きですから。麦野は多分鮭弁当だと思います」

「それ、俺の分ある？」

「超知りませんよ。麦野達の機嫌が超良ければあるんじゃないですか？」



「マジかー……仕方ない。俺も買い出し行ってくるわ」  
「あ、はい。超行つてらっしゃ——って待てコラ」

思わず自然な感じで送り出す所だった絹旗。瑛嗶の腕を取って引きとめる。瑛嗶はいきなり腕を取られ、意外な怪力につんのめった。そして、絹旗に掴まれているかと思えば、彼女の手と瑛嗶の腕の間には数ミリの隙間があり、実際には彼女の手は瑛嗶に触れてなかった。  
「……ふむ、これも能力？」

「ええ、まあ……【窒素装甲】オフエンスアーマーといいいます。詳細は超秘密ですが、抵抗は超無駄ですよ？」

「いや、そうでもないぜ？」

瑛嗶は能力を発動させ、自身の腕を掴んでいる絹旗の腕に纏っている窒素の鎧を『掴み』、剥がし取った。そしてそのまま直に絹旗の腕を掴んで引きはがした。

絹旗はレベル4の大能力者だ。能力名は【窒素装甲】オフエンスアーマー。空気中の窒素を全身に纏い、鎧の様な防御力を得たり、鬼の様な怪力を得る事が出来る能力だ。故に、銃弾程度では彼女に傷一つ付ける事など出来ず、重トラック程度なら軽く持ち上げる事も出来る。だが、能力を使わない彼女自身の筋力を見た目通りの貧弱な物。大の大人である、まして瑛嗶の力なら簡単に引きはがす事が出来た。

「なっ……私の装甲を……!?!」

「ああそうそう、俺の能力言つて無かったね。そっちも教えてくれた事だし、技名考えてる時に能力名も思い付いたんだ。俺の能力名はデイスパーザルシステム【危機処分】デイスパーザルシステム。よろしく」

瑛嗶の能力。【危機処分】デイスパーザルシステムは、今はまだレベル3程度の能力だ。その効果は、ただ『触れる』さわというだけ。あらゆるものに、ただ触れるだけだ。しかも、一回の発動時間はたったの5秒間。なんの役にも立たないクズ能力だ。

だが、瑛嗶が使う場合においてはとても役に立つ能力に変わる。『あらゆる』モノに触れられる。それはつまり、超能力で生み出された物にも触れられるという事だ。

つまり、白髪の少年。レベル5の第一位——『アクセラレータ一方通行』との一

合では、ベクトル変換という能力で作られた、向かってくるもの全てを反射する反射膜を纏っていた彼を、その反射膜ごと能力で掴んで投げたのだ。触れられる、というからには触れる物から拒絶されてはいけない。つまり、瑛嗶が能力を持って触れる物は、その性質を触れている間だけ無効化する。つまり、反射膜は反射せず、電撃は感電や伝熱の性質を失い、窒素装甲は装甲の性質を持たなかったのだ。

故に、白髪の少年は反射膜ごと投げ飛ばされたし、御坂美琴の電撃は弾き飛ばされたし、絹旗最愛の窒素装甲は剥がし取られた。たったの5秒だけでそれが出来るのはやはり瑛嗶の身体能力故なのだが。

「……ある意味、私と超似たような能力ですね」

「そうだね。5秒間だけなら俺は無敵だしな。しかも銃弾なら触れた瞬間『撃ち貫く』って性質を無効化されて止まるからね」

5秒間は性質を無効化されるが、時間を過ぎればそれは再開するのだ。だが、それは5秒後もその勢いを止めていないモノだけだ。銃弾は5秒間止められれば当然勢いを失って、時間を過ぎれば地面に落ちるのだ。

「てことは、核爆弾も触れて勢いを止めれば超意図的に不発弾に出来るんですね」

「出来そうではあるよね」

ある意味、絹旗や一方通行に似た能力。言ってしまうえば反射膜や窒素を纏う感じでは無く、肉体自体に能力の効果が付与された様な感覚だ。絹旗の能力を身体強化系能力の様な発動形式にした感じだ。

「となると……超勝ち目がありそうにないですね」

「ま、5秒だけだからね。発動と発動の間には若干インターバルがあるし、隙を衝けば勝てるかもよ？」

「いえ、超止めておきます。でも、私としては超此処にいて貰いたい所なのですね」

瑛嗶のチート能力を知って尚、仕事は全うする絹旗。どうやら瑛嗶には敵意はないと見て、交渉する事にしたのだ。

「ん……ま、ご飯くれるならいいか。朝ご飯も欲しい所だし」

瑛嗶は交渉の余地も無く、案外あっさりそれを承諾するのだった。



「え、瑛嗶にはA I M拡散力場が感じられない？」  
「うん」

麦野達は瑛嗶と絹旗がごちゃごちゃやってる間に、買い出しを終えて拠点に帰る途中そんな会話をしていた。

「体晶は使ってないけど、A I M拡散力場は感じられなかった」

A I M拡散力場とは、学園都市の開発によって超能力を得た能力者が全員漏れなく発している微弱な能力の波動の様なものだ。無意識下で微弱な能力の力場を身体から形成しているのが人工的に作られた能力者達の法則で、滝壺理后はその力場を記録し、特定の人物を探索する事が出来る能力、【A I M追跡<sup>A I Mストーカー</sup>】を持っている。ちなみにレベル4だ。

それで瑛嗶の力場を測ってみると、瑛嗶には力場が無かったのだ。それもそのはず、瑛嗶の能力は神様から与えられた物で、学園都市内の超能力者とは少し起源を別に行っているのだから。

「ふーん……ま、無能力者か……原石だから分からないけど……その辺は追々聞き出せばいいでしょ」

「結局、瑛嗶って何者な訳よ……」

「……興味深いね」

瑛嗶に関しての興味が深まる中、麦野達は拠点の扉を開ける。中には先に戻した絹旗がいる筈だと思いつつ、入っていった。

すると、中には……

「うわっ、何ですかコレ!? 超逞しいんですけど!」

「わはは、軽いなあ最愛ちゃん」

瑛嗶の片腕にぶら下がってはしゃぐ絹旗最愛とそれを軽々と持ち上げる瑛嗶の姿。足が地面に付いていない絹旗はいつも以上に子供っぽく見えた。

## 絹旗最愛はお年頃

絹旗と瑛嗶のじゃれあいを帰ってきて早々に見せつけられた麦野達は、普段とは大きくかけ離れた同僚の姿に唾然としていた。瑛嗶と絹旗の身長差は確かに大きく、瑛嗶の腕にぶら下がれば足がつかなくなるのも分かる。が、問題は何故こんな状況が生まれてしまっているのかということだ。

「……あの、絹旗？」

「はっ……む、麦野……フレンドに滝壺さん……こ、これは」

「大丈夫だよ絹旗、私はそんな絹旗を応援してる」

「応援されても!?! 違うんですこれは超誤解があります!」

絹旗は弁解を始める。

まず、絹旗と瑛嗶は軽い準備運動的な戦闘を終え、待機する事を決めた後、暇潰しになにかする事にした。だが、この部屋は特になにかの娯楽品が有るわけではないのだ。遊びも何も、特に何か出来る訳ではない。故に、瑛嗶と絹旗はとりあえず腕相撲をすることにした。勿論能力ありだ。

そこで、瑛嗶は能力を使わずに、絹旗は能力を全開にして対決。結果は瑛嗶の勝ちだった。だが、その結果に満足する絹旗では無く、なんどもなんども連戦を繰り返す。結果は瑛嗶の全戦全勝。

瑛嗶の腕力に手も足も出ない絹旗は不審気な顔をしながら、ぺたぺたと瑛嗶の腕を触り始めた。これが発端。瑛嗶の筋肉に触れた絹旗は、殺し以外で異性の身体に触れたという状況に没頭。興味津々な様子で瑛嗶の身体に触れていた。

瑛嗶が立ち上がれば絹旗も同様に立ち上がり、瑛嗶が歩けば同様に歩く。絹旗は最早男性の身体への興味に意識を奪われていた。

いい加減うっとおしくなってきた瑛嗶は振りほどくべく腕を上げたのだが、持ち前の能力を使ってしがみつくと絹旗。ゆらゆらと自身の身体がぶら下がり、絹旗を持ち上げた事で若干膨らんだ筋肉が絹旗のテンションを向上させた。そしてそこへやって来たのが麦野達な訳だ。

「……………それって結局、絹旗が子供だった訳よ」

「ち、違うんです!」

弁解しようとして墓穴を掘る絹旗。最早言い訳の程も無かった。

「まあ絹旗の思わぬ一面が見れた訳ってことでもう良いわ。まずは貴方よ」

「やあ麦野ちゃんお帰り。俺のご飯ある?」

「フレンドの缶詰でも分けて貰いなさい」

「分けてくれ、フレンドちゃん」

「嫌よ! 結局、この鯖缶は全部私の物って訳よ!」

瑛夏の言葉に麦野もフレンドも食料を渡してくる事はなかった。瑛夏はまあそうだろうなと頷いて食事を諦めた。別段腹が空いている訳でも無いので、別にどうしても食事が欲しいという訳でも無いのだ。

「で、何?」

「私達はこの学園都市の暗部の組織、通称アイテム……………まあ早い話が侵入者である貴方を保護しろって依頼が来た訳」

「ふーん……………侵入者か。まあそうなるか」

「貴方のこれから先の選択肢は二つあるわ。このまま学園都市の暗部を知ったという事で抹殺されるか、私達アイテムの一員として暗部で働くか……………この二つよ」

そんなもの選択肢とは言わない。瑛夏は嘆息して、絹旗を見た。視線を向けられた絹旗は絹旗で首を傾げる。

瑛夏の考えは、レベル4の能力者である彼女である程度なら、レベル5も大したことないのではないか、というものだ。ならば、この場で全員叩きのめして脱走するのもよし。

だが、瑛夏は敢えてその考えを実行にはうつさない事にした。

「じゃあアイテムに入れて貰おうか」

「賢明な判断ね。改めて自己紹介するわ……………学園都市の内、7人のレベル5の一人、第四位【マルチタウナー原子崩し】の麦野沈利。アイテムのリーダーよ、ヨロシク」

「昨日言った通り、俺の名前は泉ヶ仙瑛夏。面白い事が大好きな男だ。

よろしくレベル5」バケモノ

瑛嗶と麦野はしっかりと握手を交わした。瑛嗶のアイテム入りはこうして果たされる。そして、瑛嗶がアイテムに加入した事で、この先の未来が少なからず、変化する。それは小さな変化となり、積み重なって大きな変化を引き起こすことになるのだ。

◇◇◇

場面変わって御坂美琴は憔悴しきっていた。毎晩の様にとある『実験』に関わる施設を破壊して回り、その度に体力と能力を使っているのだ。寝る間もなく、その身体は疲労によって満身創痍だった。

その実験というのが、瑛嗶が最初に出会った白髪の少年を中心として行なわれている――

### 絶対能力進化計画レベル6シフト

この学園都市には7人のレベル5が存在する事は知つての通りだが、彼らはその能力の実験価値や戦闘による単純な強さなどの統計から順位付けされている。麦野沈利は第4位、御坂美琴は第3位といった具合にだ。

そしてこの順位付けで第1位に君臨する、学園都市最強のレベル5。それがあの白髪の少年。その本名は不明。現在は能力名を持つて彼の呼称となっている。その呼称が、

【一方通行】アクセラレータ

能力の詳細は、ベクトル変換で、触れたあらゆる力の方向を操作出来るという凄まじい能力だ。故に、彼に攻撃した物はその攻撃力の分己に帰ってくる結果となり、逆に怪我を負う破目になる訳だ。

そして、そんな彼をレベル5から、絶対にして無敵、神の領域にまで足を踏み入れた存在、レベル6へと成長させるのが、この実験の内容だ。

では、なぜそんな利益しか生まない様な内容の実験に関わる施設を

御坂美琴は破壊しているのか。それは、その実験の方法に問題があるからだ。

学園都市には、【樹形図ツリーダイアグラムの設計者】と呼ばれる世界最大最高峰のスーパーコンピュータがある。1カ月前の天気を、空気中の水分量などを全て演算して予言する程の計算を可能とするコンピュータで、普段は宇宙の衛生上に漂っている。

このコンピュータで演算した結果、第1位のレベル5【アクセラレータ二歩通行】がレベル6に到達する方法は、同じレベル5の第三位御坂美琴を128回殺害する事だった。勿論、彼女は128人もいない。そんな方法を達成するのは不可能だった。

そこで、彼女が過去提供していたDNAマップを手に入れた研究者達は、彼女のクローンを作り、その代替品にする事にした。とはいえ、レベル5の品質を持ったクローンは出来上がらず、最大でもレベル3程度の欠陥品しか生まれなかったのだ。

なので、そのクローンを使った場合を最演算。クローンを使えば、2万通りの戦闘環境を整え、2万通りの戦闘を行ない、2万回クローンを殺害すれば、【一方通行アクセラレータ】はレベル6に至る事が出来るという演算結果となったのだ。そしてその演算結果の通りに第1位と研究者達、そして2万体のクローンは実験を開始した。

御坂美琴がこの実験を知ったのは、9982回目の実験が終わった時だった。つまり、彼女のクローンが9982人殺された後という事だ。レベル5とはいえ、人の命の重要性を知っている彼女は、DNAマップを提供したせいでそれだけの命が死んだと責任を感じたのだ。だから、こうして実験を止める為に施設を破壊し続け、こうして満身創痍に憔悴している。周囲の心配を顧みず、ただがむしやりに走り続けているのだ。

「はあっ……はあっ……まだ、こうしている間にもあの子達は……！」  
彼女の通う学校。常盤台女子中学校の寮。自室のベッドに倒れ込みながら荒い呼吸を整える。

「それにしても……あの男は……」

御坂美琴は、寮に帰る途中で遭遇した実験関係者と思われる男、瑛

嗚の事を考えていた。仮にもレベル5の電撃を弾き飛ばし、視認出来ない速度で姿を消した。

考えてみれば、瞬間移動能力か、また別か……学園都市でもまだ存在しない多重能力保持者なのか、分からないがあレベルの実力者がいるとなると、御坂美琴でも勝てるかどうかは分からなかった。厄介にも程がある。

「でも、大方の施設は潰した……あと少し……!」

御坂はそう呟いて、力なく笑う。後少しで残っているクローンを助ける事が出来る。そう思えば力が湧いてきた。

「頑張らないと」

御坂はそう言って、ほんの少しの仮眠を取る事にしたのだった。



「それにしても、嗚の能力って結局なんな訳?」

「ただいろんな物に触れるだけの、大したことない能力だよ」

「ふーん……てゆーか、私の鯖缶1個取ったでしょ!」

「ほら、いろんな物に触れるから無防備な鯖缶にも触っちゃった感じ? みたいな?」

嗚は現在、フレンダと共に拠点で待機していた。それというのも、この二人以外のメンバーが依頼をこなす為に出て行ったからである。二人は鯖缶を突きつつ、雑談をしていた。フレンダはそうしながらそこら中の人形に爆弾を詰めていた。

「何が、みたいな? よ。もう……あーあ、麦野達はいないし鯖缶は取られるし……結局散々な訳よ」

「頑張れ、フレンダちゃん」

「誰のせいだと思ってるのよ!?!」

嗚に噛みつくフレンダ。実の所、アイテムに嗚が入ったと言っても、まだ認められている訳ではない。暗部とは、信頼した瞬間裏切られる闇の世界だ。フレンダとしても、嗚はまだ会ったばかりの間で、信用するに値するとは思っていないのだ。



だが、それでいい。瑛嗶もそう思って貰っていて結構だった。無条件の信頼ほど、薄っぺらい物はない。

「さて、それじゃあ暇潰しにモノマネでもしようか？」

「……………どんな？」

「あーあー……………こほん！ 『フレндаって超可愛いですよ。凄く羨ましいです』」

「今のって……………絹旗の声!？」

声帯模写。瑛嗶の持つ特技の一つである。フレндаは瑛嗶のその特技に目を丸くする。

「まあ暇つぶし程度に色々やれるし、今度は麦野ちゃんのモノマネでみましょうかねー」

「わ、わ、凄い！」

瑛嗶とフレндаは、結局、麦野達の帰ってくる時まで、そうして共に暇を潰すのだった。

## 休日のほのぼの

瑛嗶は実の所、アイテムに加入したとはいえ、未だに学園都市の中では侵入者という肩書きを払拭出来ていない。学園都市に住むのなら暗部といえど何かしらのIDは登録せねばならないし、追々改竄するが、自身のプロフィールを学園都市の全学生のプロフィールが登録された書庫に登録しなければならぬ。

とはいえ、その辺は暗部ということ、理事長のアレイスター・クロウリーが片手間で済ませてしまった。今の瑛嗶は一応表向きは高校三年生で、能力もレベル3の「危機処分」デイスパーサルシステムとなった。

そして、アイテムとして学園都市の闇の足を踏み入れた瑛嗶は、そこそここんな立ち位置も悪くないと笑ったのだ。そして現在、アイテムの麦野沈利と絹旗最愛、滝壺理后は共に依頼をこなして拠点に帰る所だった。

「ところで麦野。何故瑛嗶さんを超同行させなかつたんですか？ 今日の依頼は比較的超簡単でしたし、連れて行っても超問題なかつたのでは？」

道路を走る黒いボックスカーの中で、絹旗は麦野にそう尋ねる。すると、麦野は薄く笑みを浮かべながら答えた。

「ええ、絹旗をあしらう彼の實力なら今回連れて行っても問題なかつたでしょ。でも、物には順序が有るわ。まして、彼はまだ経験が足りない。私達位の年頃は普通、殺しや施設破壊なんか経験した事はないわ。だから、今回も連れていかなかつた。大した仕事じゃなかつたけど、それでも数人殺したでしょ？」

「成程、超納得しました」

瑛嗶の経歴を知らない彼女達は、瑛嗶には未だ殺し合いの経験はないと思っっているのだ。故に、今回の様な殺しを伴う依頼にはまだ連れて行かなかつた。

だが、その思惑は大きく外れる。瑛嗶には十分過ぎる程の経験と殺しの経験がある。殺してきた数で言えば、彼女達は足元にも及ばない。

「……ま、追々経験させていくとしましょう。あの分だと即戦力になりそうだし、ね」

「ところで……フレンダと瑛嗶さんは仲良くやってるかな？」

「さあ……でもフレンダは超感情的な面がありますから。きつと瑛嗶さんに超遊ばれてるんじゃないですかね？」

絹旗の言葉に麦野と滝壺は苦笑した。ただ純粹にありそうだと考えたのだ。実際、この頃フレンダは瑛嗶の声帯模写の虜になっていた。

「ま、あまり気兼ねしなくても良い様な性格してるし、苦労はしなさそうじゃない」

「超そうですね」

滝壺はそんな二人のなんとなく楽しそうな雰囲気にくすつと笑った。



翌日

暗部といっても、仕事の無い時は基本フリーだ。ずっと一緒にいなければならぬという訳ではない。普通の学生と同じく、ファミレスで屯する程度には自由な行動をする事が出来る。故に、瑛嗶はアイテムのメンバーと行動を別にして、学園都市を散歩する事にした。

未だに何処に何があるかも分からない状況だ。少しでも都市内の構造を把握した方が良いだろうとの考えだ。

「さて、さっき俺の口座を調べてきたらそこそこお金も入ってたし……当分生活には困らないかなつと」

瑛嗶はそう呟きながら街を飄々と歩く。過去に着ていた着物の格好は目立つので、黒いタンクトップに青黒いパーカー、そして七分丈のズボンにサンダルという比較的現代風な服装に変わった事には感謝していた。色的に神様が着物を現代風に改変したのだろうと予想は普通に付いていたので、その感謝は神様にすることにした。

「そういえば、この世界って魔術師いたよな。魔術師」

とある魔術の禁書目録、というタイトルからして超能力都市内だけで済む物語構造はしてないだろうと思う。魔術と行っているからには魔術を行使する魔術師もいるという事だ。

となると、原作に関わるのなら主人公に関わる必要がある訳だ。だが、今の瑛嗶は特にそれに興味はなかった。今は散歩である。

「っと」

「うわっ……す、すいませんぼーっとしてて」

とそこに、瑛嗶にぶつかって来た少年がいた。かなり勢い良くぶつかったのだが、瑛嗶にはなんのダメージも無い。逆にぶつかって来た少年の方が地面に尻もちをついていた。

瑛嗶としては、素直に謝れる所を見ると、この少年は少なからず良い部類の人間なのだろうと思う程度だった。

「いや、いいよ別に——っ」と

瑛嗶は上空から落下してきた卵パック10個入りを衝撃を逃がす様にキヤツチした。瑛嗶が見逃せば地面に落下し、ぐちゃぐちゃに割れていただろう。

これはぶつかった時に少年の持っていた買い物袋の中から飛び出したものだ。

「あ、それは俺の！ 良かった！ 割れずに済んだ！」

瑛嗶は涙を浮かべて心底安心した様に息を吐く少年に、卵を手渡した。少年は助かりましたと何度も頭を下げた。

「えーと、俺の名前は上条当麻って言います。本当、ありがとうございます！」

「ああうん。俺は瑛嗶だ、良かったね」

瑛嗶はそう言って、彼の横を擦れ違う。そして、後ろから聞こえるお礼の声を聞きながら、苦笑気味に散歩を再開するのだった。

◇ ◇ ◇

「あれ、また会ったねお嬢ちゃん」

「アンタ……!?!」

それから、しばらく歩きまわった先で、瑛嗶は御坂美琴に遭遇した。少し一休みしようとして公園に入ってボロボロの自動販売機からジュースを買おうとしたら、普通に120円飲まれた時に御坂美琴がやって来たのだ。

取り敢えず瑛嗶は120円飲まれたのが気に食わなかったもので、自動販売機の側面をコンツと叩いて衝撃をジュースを固定しているバネに伝えた。結果、瑛嗶の入れた金額の、瑛嗶の飲みたかったジュースがガコンという音と共に排出された。ちなみに出てきたのは、ガラナ青汁。いちごおでんと双壁を並べて不味いと評判のゲテモノジュースである。

「……それ美味しいの?」

「地獄巡り茶の外れよりは美味しい」

瑛嗶はそう言ってガラナ青汁をぐいっと口に含み、飲んだ。

「ふう、で? そんな険しい表情でどうした?」

「……アンタ、あの実験の関係者でしょ?」

「実験?」

「え、知らないの?」

「知らないよ。ただ、この前通った路地裏で白髪の少年とお嬢ちゃんに良く似た子が激しいプレイの真っ最中だったのは見かけたかな。いやあ、良い所で見つけちゃったもんだから気まずかったね」

瑛嗶の言葉に、御坂美琴はただ実験を見かけた一般人である事を理解した。理解して、彼に問答無用で電撃を浴びせた事を思い出した。彼女の顔が青褪める。

「あ、あの……! この前はいきなり攻撃してすいませんでした!」

「ああ、いいよ別に。特に問題なかったし」

仮にも自分のレベル5である自分の攻撃がなんの問題も無いと言われ、少し苛立ちを感じる御坂だが、非は彼女にあるので、引き攣つた笑みを浮かべながら頭を下げた。

「それにしても、お嬢ちゃんは随分とまあ忙しそうだね。やっぱり中学校は忙しないのか?」

「いえ……ちよつとやらなきや行けない事があるので」

「ふーん……ま、何かは知らないけど、精々頑張ると良い」

「はい」

御坂は真剣な面持ちで短く返事をすると、そのまま行く所があるのか走って去って行った。とことん急いでいるようだ。というより、何かに追われる様だった。周りが見えておらず、焦りと罪悪感から精一杯逃げている様な、そんな感じだった。

「——ま、どうでもいいか」

瑛嗶はぱつと切り替えて、御坂美琴から興味を消し去った。正直、誰が死んで誰が生きて誰が戦って誰が負けようが、どうでもいい。瑛嗶からしてみれば全て二つの事に絞られる。

とどのつまり、面白いか、面白くないか、それだけだ。

◇ ◇ ◇

「おーっす」

「早かったわね、瑛嗶」

瑛嗶は散歩の途中で仕事用にと持たされた携帯からメールが来て、麦野からファミレスに集合という内容だったので、切り上げてファミレスにやっってきたのだ。到着したころには麦野しかいなかったの、まだ他の三人は向かっている途中なのだろう。

「とりあえず人数分ドリンクバー頼んどいたから」

「そう思って既に飲み物持ってきたから」

「うん、対応おかしいわよねソレ!？」

「とりあえず紅茶でいいよね」

「出会ってまだ24時間も経ってないのになんで私の飲みたい物が分かったのかはこの際聞かない事にするわ……」

麦野は瑛嗶のゆらりとした笑みを見て、紅茶を受け取りながらため息を吐いた。気兼ねしなくても済む性格とは言った物の、この人を食った様な性格には多少苦労しそうだと考えを改める事にした。

「そういえば、フレンドから聞いたけど……貴方は声帯模写がかなりのレベルで使えるんだってね」

「いやいやそんな……精々学園都市の音声認識ロックを騙す位のレベルだよ」

「あれ、謙遜してる様でしてなくね?」

アイテムのリーダーである麦野も、瑛嘎の前ではかなり押され気味だった。やはり。レベル5といえど、出来ない事と出来る事があり、瑛嘎は人間の出来ない事を己が身一つでやってのける。その点がやはり人を驚愕させるのだろう。しかも悉く高レベルの出来なのだから、なおさらだ。

「そういえば、俺もフレンドちゃんから聞いたけど……麦野ちゃんは寝る時にボロボロのぬいぐるみを抱いてるんだってね」

「フレンドああああ!!!」

「ひっ……………」

「…………フレンド」

瑛嘎は麦野の背後から大量のぬいぐるみを抱えてやって来たフレンドを見つけてそんな話題を振ったのだが、麦野とフレンドはまんまと瑛嘎の掌の上で転がされている。

「む、麦野? ここはファミレスで、騒がしくするのはちよつとどうかなって私思っただけどお……………」

「ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

フレンドは店外へ逃げ出し、麦野はそれを追って行った。瑛嘎はそんな二人の姿をガラスの向こうから眺めつつ、紅茶と共に持って来ていたコーラを飲んだ。

「元気だなあ」

「いや黄昏られても超困るんですが……」

「おや絹旗ちゃん。フレンドちゃんと一緒に来たのか? はい、オレンジジュース」

「……超何処から取り出したんですかそのオレンジジュース」

「何言ってるんだよ。今汲んで戻ってきたんだよ」

「私はいつから時間を超跳躍できるようになったんでしょうか!?!」

麦野に続いて絹旗も瑛喰に対して突っ込む。この一瞬で瑛喰は席を立ち、ドリンクバーに移動し、ジュースを汲んで、戻ってくる、という動作を行なって見せた。やはり人間超えている。

「ま、座んなよ。どうせ、少ししたら皆やってくるさ」

「……超不本意ですが、疲れるのでそうしときます」

絹旗はいつもの定位置に座ってオレンジジュースに刺さったストローに口を付けた。ちゅーっと吸いながら外を走るフレンドと追いつける麦野を眺める。やはり暗部やレベル5という事もあって目立つ事は避けたいのか能力は使わない麦野。

そして、彼女達が戻って来た頃には、さり気なく滝壺も座っているのだった。



## 対御坂美琴戦

瑛嘎がアイテムに加入してからおおよそ三日。八月十九日のこと。その日、瑛嘎はアイテムとしての依頼に初めて出動する事になった。やる事はただ単純にとある施設内で行なわれる密売を阻止し、その組織を殲滅することだが、瑛嘎の仕事は麦野の気遣いで人殺しをすることのないであろう、監視だった。逃げ出す者の監視をし、無線機で麦野達殲滅組に連絡するということだ。

「はい、麦野ちゃん達。敵さん車に乗り込んでくぜ？」

『ええ、こつちでも把握したわ。ただ、狙撃役や周囲の警戒役がないのが気になるけど……まあいいわ』

「頑張れ」

瑛嘎は無線を切った。そして、振り向き、嘆息して地面を転がる数体の人間に視線を向けた。それは、逃げる為の車周辺で待機していた狙撃と警戒役の構成員。一応殺しても問題ない様だったので、瑛嘎は気晴らしついでに彼らを全員始末したのだ。麦野の気遣いは、無駄に終わった。

「さて……どんなもんかね」

瑛嘎の背後、脱出用の車が爆発する。フレンドダの爆弾が車を吹き飛ばしたのだ。そして間髪入れずに鈍い音が響いた。これは絹旗の殴打の音。そして、最後に緑色の光が光り、そこら一帯が破壊された。これは麦野の能力、「原子崩し」メルトダウンの攻撃だ。ここまでやれば、ほぼオーバークイル。密売組織は一人残らず命を落とす結果となった。

「ひゅー、派手だねえ……ま、こんなもんか」

瑛嘎はそう呟いて、ゆらりと笑った。



「結局さ、水着って魅せる為にある訳よ。だからプライベートプールで誰もいないなら高い奴買った意味ないってゆーか」

「でも市民プールや海水浴場は超混雑していて泳ぐスペースは超あり

ませんが」

フレンダと絹旗はお互いまだ命のある構成員の無力化をしながらそんな話をしていた。無論、瑛嗶も既に合流済みで、無力化された構成員をぽいぽいと投げ捨てて一カ所にまとめていた。瑛嗶が構成員の3割を殺している事には4人とも気付かなかつた。

「滝壺はどう思う?」

「ん……浮いて漂うスペースが有ればどつちでもいいよ?」

「あ……そう」

「というか、フレンダ。見せる相手なら瑛嗶さんがいるじゃないですか」

滝壺は瑛嗶の方に視線を向けてそう言う。するとフレンダは少し照れ臭そうに瑛嗶の方を見て言葉を詰まらせた。

瑛嗶はあんな性格故に、かなり恋愛事は少ないが、実の所中々整つた顔立ちをしている。しかも、生きてきた長い年月と経験から、行動の子供っぽさとは裏腹に貫録を感じさせる雰囲気纏っているのだ。加えて、気は利かせられるし、実力は申し分ないし、多芸だして文句無しの優良物件だ。しかも、まだ分かっていないが瑛嗶はその年齢故に女性の年齢を気にしたりもしない。まあ流石に恋愛感情を持てる年齢は限られるが。

「お、瑛嗶はその……アレよ! なんとというか、ほら、ね?」

「ほらと言われても超理解できませんが」

「むー……絹旗だって瑛嗶の事ちよつと気に入ってる癖に」

「なっ……だからあれは超誤解だつて言ってるじゃないですか!」

わーぎやーと言い合うフレンダと絹旗。興奮しているのかその手の先では気絶した構成員の関節や骨がバキバキに折られていた。痛々しい。

「はーい、工作中に駄弁らない。次の仕事よ」

「何?」

そこに先程まで電話をしていて空気だった麦野が介入する。どうやら新しい仕事の様だ。

「謎の侵略者インベーターからの施設防衛線!」

麦野はそこそこ楽しそうに、そう言った。

◇

御坂美琴の施設破壊行動は、かなり終盤だった。絶対能力進化実験に関わる施設は残り2つ。御坂美琴はレベル5の電撃能力者、科学のセキュリティで固められた施設はかなり分が悪く、今まで随分と破壊されていた。

故に、アイテムに施設防衛を頼んだのだ。暗部は学園都市の精鋭の集まる組織、実力だけなら折り紙付きだ。しかも、金さえ積めば動いてくれるのだから、これほど便利な物はない。

ここで実験を頓挫させるには、コストも人材も機材も大量に積んでいる。いまさら中止するわけにはいかないのだ。故に、研究者達は残り2つの施設に残るデータを他の施設に移動させ、再度実験を行えるように環境を移す事にしたのだ。

「侵入者は電撃能力者か……」  
エレクトロマスター

琰嗶はそう居ながら内心で御坂美琴を思い浮かべた。知っている電撃能力者が彼女しかいなかったからだ。まあ彼女をあしらえる琰嗶からすれば、それ以下の電撃能力者など敵では無い。

「ま、単騎で乗り込んでくるのなら楽に捻れるでしょ。ギャラも悪くないし、丁度いい仕事じゃない」

「超問題なのは、敵が襲撃する施設が2つあるってことですな」

「あ、じゃあじゃあ片方には私一人で行く！」

フレンドがそう言って名乗り出た。その真意は、撃破ボーナス分のギャラを貰う為である。それを聞いた麦野と絹旗は、苦笑気味に肩を落とした。

「まあいいわ。それじゃあ頼んだわよ……くれぐれも、早まるんじゃないわよ?」

「まっかせてよ!」

意気込むフレンド。そこからはトントントン拍子に役割は決まり、フレンドを一つの施設に、他はもう一方の施設に行く事になった。とはい

え、麦野と滝壺は追々フレンドの居る施設の方へと援護に行く事になっっているが。

「ああそうそう、瑛唄」

「何だよ麦野ちゃん」

「貴方はフレンドの方に行ってくれるかしら。援護とか戦闘とかは最低限でいいから、万一フレンドがピンチになった時用に付いて頂戴」

「リーダーが言うのなら、そうしよう」

瑛唄はフレンドの方へ付く事になった。フレンドは特に能力は持っていない、故に卓越した爆弾使いな訳だが、それでも相手が能力者となれば万が一の事を考えざるを得ない。5秒間とはいえ、防御性を見れば無敵な瑛唄を付けておくべきだろうという事だ。

「それじゃ、仕事を始めましょう」

麦野の言葉を仕切りに、瑛唄達は移動を開始した。

◇ ◇ ◇

アイテムの仕事が来た夜、御坂美琴はとある製薬会社に忍び込んでいた。目的は勿論、施設の設備及び過去の収集データの完全破壊。此処を潰せば残りの施設は一つ。全て潰せば御坂美琴のクローンが殺される事はなくなり、また実験も中止となる。満身創痍な身体はただそれだけの為に突き進んでいた。

「残りは後二基……何事も無く終われば良いけど……」

施設内を走り、最奥のデータベースへと向かう。幸い、研究者の姿はない。このまま何も無ければ、彼女はデータベースを無事に破壊し、残る一カ所の施設を襲撃するだろう。

だが、研究者達も汗水垂らして収集してきたデータの全てを簡単に失う訳にはいかない。故に、彼女を食い止める手段がアイテム。

刹那、御坂美琴の頭上、天井に火花が奔り——瓦礫となって落ちてきた。

「っ……！」

だが、磁力で落下の軌道を逸らすことで事なきを得る御坂。内心、ため息を吐きながら、やはりそう上手くはいかないかと気を引き締めた。そして次の瞬間には敵、フレンドアの次の手が打たれている。天井を崩した、壁なんかを焼き切るツールが火花を散らして彼女に迫る。見れば床や壁、果ては天井にもテープのりの様なツールが張り巡らされていた。そして、その火花の向かう先には……爆弾入りの人形「なっ……爆弾?! つ……なんでこの手の奴はぬいぐるみに入れたがるかな……!」

瓦礫を磁力で持ち上げ、爆風や熱の盾にし、走る御坂。次々と奔る火花と爆発する人形達。状況は、フレンドアが御坂美琴の動きを読んでいた。

◇

「おっしいなあ……いつもみたいなりモコン式ならやれてたのにい」

「どうよフレンドアちゃん。敵はやれたか?」

「んーん、全然。どうやら今まで相手してきた能力者とはレベルが違うみたい」

「へえ……ってあれは……」

瑛唄はフレンドアが導火線に火を付けて爆弾を遠隔で爆破している横で、御坂美琴の姿を見つけた。フレンドアはレベルが違うと言ったが、確かにその通り。能力のレベルが違う。言ってしまうとレベル5だ、爆弾程度でやれるほど甘くはない。

「なるほど……あの子のやってたのはコレか……」

瑛唄はゆらりと笑った。そして、フレンドアの作っておいた爆弾入りの人形を投げて、御坂の通る道に張り巡らせてある導火線の上に置く。先程までなかった場所に急に現れた爆弾が、御坂美琴の不意を衝く。さらに、導火線の途中に置かれたので、その先にある爆弾も時間差で爆発するのだ。原作よりも厄介な敵となっている。

「フレンダちゃん。アレは多分相当な使い手だ、油断しない方がいいかも」

「分かってる訳よ！ おりやつー！」

どうやら御坂美琴は近づいて来ている様で、フレンダと瑛唄は移動しながら導火線に火を付けて行く。

だが、流石の超能力者<sup>レベル5</sup>。あらゆる爆弾と知略戦略が全て対処されてしまう。

通路を崩壊させて足場ごと落とそうとしても、磁力で崩壊した通路の瓦礫を繋ぎ合わせて落下防がれちゃお手上げである。

「何アレ、ずっるー！」

当然、フレンダもそんな力技の対処法をされてはそう言いたくもなる。とはいえ、瑛唄としては見てて面白いので、良いのだが。

「どうする？」

「とりあえず……あそこに入って！」

フレンダの指示のままに、かなり広めの部屋の中へ入る。薄暗く、道はなかった。つまり、袋小路である。勿論、御坂美琴も追ってきて部屋に入ってくる。結果、瑛唄達に逃げ場は無くなった訳だ。

「……慌てて逃げ込んだのか……それとも」

「——どう思う？」

フレンダは追い詰められた側の人間であるが、余裕を持ってそう言った。

## マイペース瑛暁

学園都市という都市には、学生のほぼ全員が認識している、確固たる上下社会が出来上がっている。それは、同じ学校の先輩後輩とか、同じ部活の先輩後輩とか、先生と生徒とか、そういう一つのグループ内の年功序列というわけではない。

超能力があるか、ないか、という事だ。

まず最初に言っておくが、学園都市に存在する230万人の学生達の内、その6割は無能力者である。

つまり、学園都市ではつきり効果を発揮しているのが分かる程の能力を保有している学生は、実は全人口の半分にも満たないのだ。学園都市のカリキュラムの大半は能力の開発という事もあって、学園都市内では能力者が無能力者を虐げる事も少なくない。逆に、無能力者も能力に憧れるので、才能が無いと烙印レッテルを貼られる事で非行に走る者も数多くいる。

そしてそういう非行に走った無能力者達、所謂不良と呼ばれ、学校にも行かない様な生徒達を総称して、武装無能力集団スキルアウトと呼ぶのだ。そしてスキルアウトと対象的に、都市内の犯罪を取り締まる能力者で構成された組織を、風紀委員ジャッジメントと呼ぶ。

こういった要素と生徒達の認識から、学園都市内で、能力者と無能力者の無意識下の上下関係が出来上がっている。また、レベルの高い能力者ほど、自分の力に酔いしれ、無能力者を見下す事が多い。

だが、

けして、無能力者が超能力者に適わないというわけではない。

結局の所、能力を持つている者が、能力を持っていない者に確実に勝っているのは、言ってしまうえば超能力だけだ。裏を返せば無能力者はその分身体を鍛えて身体能力面で能力者より上に行く事も出来るし、一芸を極めて能力者に差を付ける事も出来る。何も能力だけが勝負の方法ではないのだから。

そういう意味では、能力者との戦闘で無能力者が勝つ事も、方法と戦略によつては可能なのだ。

つまり――

無能力者フレンドは超能力者御坂美琴を追い詰めていた。

「学園都市特製の気体爆薬――『イグニス』。吸つても身体に害はないけれど、室内に解放されれば一気に拡散して部屋中を満たし、火花の一つで連鎖爆発を起こす。謂わば、この部屋自体が強力な爆弾という訳よ。もし、電気なんか起こしたらどうなるか――……」

「っ……………!?!?」

追い詰められたフレンドは、入口を塞ぎ、室内を密室へと変えた後、配管工の中に仕込んでおいた大量の爆弾入り人形と、あらかじめ仕込んでおいた導火線ツールを組み合わせ、退路の無い状況を作りあげた。だが、走る火花は御坂美琴が磁力で持ち上げられた床によって打ち切られ、爆弾は爆破されなかった。

だが、その後もスタンングレネードによる五感封じおよび小型ミサイルを使った攻撃で善戦するも、電磁波で空間把握が出来る御坂美琴はそれをなんなく回避。逆に油断したフレンドの背後を取る事に成功していた。

だが、その後もフレンドは諦めず、小瓶に入った気体爆薬を投擲。御坂美琴はこれを電撃で対処するも、電気に触れた気体爆薬は普通に爆発した。といつても少量故に、御坂にはなんのダメージも入らなかったが。

「どう? 能力を封じられた気分は?」

だが、彼女はそれを「ハッター」として利用する。配管の中に詰めていた窒素ガスで部屋を満たし、それを『気体爆薬』と嘯く事で、御坂美琴の能力を嘘で封じたのだ。

まんまとその嘘に引っ掛かった御坂美琴は、電気を出す事は出来ず、磁力で鉄塊を操るのも摩擦で火花が出る事を恐れ、使えない。全面的に能力を封じられたのだ。



「じゃ……ゆっくりやらせて貰う訳よ！」

フレンドは爆弾を使わず、単身で近接戦闘を開始した。

◇ ◇ ◇

そんな中、瑛嗶はというと

「回収回収全回収つと……」

フレンドの爆弾入りぬいぐるみを回収していた。その数は数十を超えるのだが、御坂美琴のせいでフレンドの労力は無駄に終わってしまった。まあ次の依頼で使用すれば良いので、爆弾費用や労力の成果は次回に持ち越しになっただけなのだが。

「んー……フレンドちゃんは中々上手いハツタリを使って追い詰めるみたいだし……爆弾使って援護も止めといた方がそさそうだし……ぶっちゃけ暇だな」

此度の戦闘において、特に戦闘らしい戦闘はしていない。軽い援護はしているものの、やはりフレンドが一人で殆どの戦闘を進めているのだ。とはいえ、瑛嗶の状況把握はこの場の誰よりも正確だった。

「麦野ちゃんと、滝壺ちゃんはもう施設内に入ってるみたいだし……直に此処に来るだろ……フレンドちゃんがみこつちゃんを倒せば最良、負けても麦野ちゃん達が来ればどうとでも出来る……まあ俺の手助けはいらないかね？」

気配とは、微かな足音や息遣い、話し声、空気の動き、体温等から感じ取る事が出来るものだ。瑛嗶の鋭い五感はそれを壁越しの振動や空気の動きを察知して感じ取る事が出来る。故に、この施設に入つた時から研究員がいない事を察知していたし、麦野と滝壺が歩いて来ている気配を察知する事も出来たのだ。

「……いや、違うな。仮にもレベル5、戦闘じゃ勝つ事はないだろうけど、俺達から逃げる事はギリギリ可能、か？」

瑛嗶はフレンドと御坂美琴の勝負を見る。現在、フレンドがいつちよ前に習得した体術で御坂美琴を圧倒しているものの、御坂美琴もそこそこ体術の心得があるのか躲し続けている。瑛嗶からすれば拙

い体術ではあるものの、拮抗した勝負はやはりどこかで崩壊する。  
「おっ。」

御坂美琴が攻勢に出た。電気を起こせず、また踏み込み等の摩擦を恐れ、取った手段は絞め技。フレンドの首を背後から腕で絞めて呼吸困難による気絶を狙う。

「だあらっしやああい!!」  
「うぐっ……!」

だが、フレンドもただ絞められてる訳にもいかない。背負い投げの要領で御坂美琴を投げ飛ばした。

が、その拍子に導火線ツールに火を付けていた工具がスカートの中から幾つか零れ落ちた。そして、それは地面に張り巡らされていた導火線ツールの上に落ち、火を付けた。

「なっ……!?!」  
「よっとー」

瑛瓊はフレンドを抱き上げ、その導火線上から退避させる。浮いた足の下で火花が通過していくのを見て、フレンドはぞつとする。少しでも遅れていれば下半身が吹き飛んでいたのだから。

「あ、ありがと瑛瓊」  
「おうよ」

「——は、はははは……」

だが、これによって御坂美琴に対して吐いた嘘は、見破られる。気体爆薬は、火花を散らしても気体爆薬として機能しなかった、爆弾とは幻想で、その幻想は殺されたのだ。つまり、御坂美琴は存分に能力を使っても良いという事になるのだ。

「結局、私も詰まらないハツタリに騙されたって事か……ははは、結局だって、移っちゃったかな?」

「いや知らねーけど」  
「……アンタは?」

「最初から居ただけだなあ……電磁波で空間把握してもそんな確かなもんじゃねーのか」

「……まさか……アンタ……あの時の!?!」

御坂は瑛唄の顔を見て、公園で会った一般人だと理解する。だが、一般人であつた瑛唄は、もはや一般人では無くなつてしまつた。常識の世界にいた光の人間は、一転して非常識の世界の闇の人間に変わつていた。

「どうも、昨日ぶり、俺の名前は——まあ教えちゃいけないんだけど」

「どうでもいいわよ。アンタの名前なんて……やっぱり、あの実験に関わる人間だつたのね」

「いや？ 俺はお前の言う実験に付いては何も知らないし、知るつもりも無い。ただ、クライアントから要求された依頼をこなすだけだ。つまり、お前から此処を守れば俺らはそれで良い訳だ」

「……なるほど、つまりはまあ頼まれれば何でもやる裏の組織的な奴な訳ね」

御坂美琴はその手にビリツと電気を発生させ、威嚇する。

「裏の組織的な奴とかお前中二病か。ああ、確か中学二年だもんね」「違うわよ!?!」

「いやいや、拒否すんなつて。さつきお前爆弾入りぬいぐるみの中にあつたカエルの人形に反応してたし、その年で子供向けファンシーグッズが好きなのはちよつと成長遅いかなつて思うけど、その上中二病まで患つてたらまあ手遅れ極まりないよね。最早手の付けようも無い子だよ。やれやれコレだから子供は……」

「えーとこの状況つて確かシリアスなバトルシーン突入じゃなかつたっけ？ なんでこんなほのぼのした掛けあいしてるんだらう？」

「お前何言つてんの？」

「アンタがそれを言うの!?!」

瑛唄はそんな威嚇にも動じずに御坂美琴を弄り始めた。所謂時間稼ぎだ。麦野や滝壺が此方へ援護に来ている以上、瑛唄が無理に戦闘する必要はないのだから。とにかくここは時間を出来るだけ稼いでどうにか場を繋ぐに限るのだ。

「お、瑛唄。アイツ、知ってるの？」

「ああ、まあ知ってるね。公園で良く缶蹴りした仲だよ」

「貴方三日前に学園都市に来たばつかで何してんの!？」

「私はアンタと缶蹴りした覚えはない!!」

「何言ってるんだ。俺もお前と缶蹴りした覚えはねーよ」

「アンタが言ったんでしようが!」

フレンダと御坂の息がぴったり合った。そして興奮した御坂美琴がガシガシと頭を搔きながら電撃を放ってきた。威力は全力とは程遠いけれど、人の意識を奪う程度には力を持っている。

だが、それは瑛嘎達にぶつかると寸前で真横から襲い掛かって来た薄緑に光る光線に掻き消された。

「あ、来た」

「なっ……私の電撃が……っ!？」

「はーい、時間稼ぎ御苦労さま瑛嘎。貴方も結構やるじゃない」

「まあ無理に戦闘しなくてもいいかなって思って。後は全部投げるからよろしく」

「私も結構我が強い方だけど、貴方はそれ以上にマイペースよね!」

「俺の個性なんで、これからもこんな感じで行かせて貰おうと思つてます」

「知らねえええええ!!」

瑛嘎のせいでシリアスが台無しだ。御坂美琴はもうこの隙に先に進んじやえれば良いんじゃないやね? と考え始めている。勿論そんな事は許されない。

「ほら、みこっちゃんが呆然としてるよ? そろそろ相手してあげないと。案外構ってちゃんな所があるから寂しくて死んじやうよ?」

「私はウサギか!？」

「はあ……まあいいわ。とにかく……アンタに好き勝手やられるのはこっちとしても困る訳。ともかく、死んでもらうわよ。謎の侵略者さん♪」

「っ……」

麦野と御坂は向かい合う。学園都市の誇るレベル5の序列第3位と第4位が、何やら微妙な空気の中、衝突しようとしていた。

## とある瑛叟の逃走中

空気を突き破って何かが進む音が連続し、その一瞬後に壁を爆砕し、大きな穴を作りあげる轟音が響く。密室だった部屋の壁には、他の道へと出る大穴でぐちが出来上がってしまった。

メルトダウナー  
原子崩し

レベル5の第四位、麦野沈利の能力だ。これは本来、粒子と波形のどちらかに属する筈の電子を、その中間の『曖昧な』状態で固定し、強制的に操作する能力。その曖昧なままの電子を白い光線として放つ事が出来、それは絶大な破壊力を持つ。なにせ、分厚い金属の壁ですら紙の様に打ち貫き、融解させてしまうのだから。

その破壊力が、今の状況を作っていた。磁力で壁や天井に逃げ回る御坂美琴を追い詰めながら、次々と破壊の限りを撒き散らす。また、これは御坂とは違った形だが電子を操る能力だ。つまり、御坂美琴の電撃に干渉し、曲げる事も可能。圧倒的に御坂美琴が不利だった。

そして、それだけでもピンチな御坂美琴に、更なる追いうちが掛かる。それが、滝壺理後の存在だ。彼女の能力は「AIM追跡AIMストーカー」といい、本来なら瑛叟と同等のレベル3。しかし、AIM拡散力場を不安定にし、暴走させる薬品、「体晶」を使う事で、能力の暴走状態を引き起こし、結果的にレベル4相当の効果を発揮する事が出来るのだ。まあ身体にかなりの副作用が残ることになるのだが。

その効果は、『AIM拡散力場を記憶し、追跡すること』。この能力を使えば、例えば地球の裏側へ逃げようと位置情報を捉えられる。また、AIM拡散力場に干渉して相手の能力を乗っ取ることも可能。とはいえ、乗っ取りに関してでは高位能力者に成功する確率が低いので、そこまで多用出来る代物では無い。

とにかく、今御坂美琴を追い詰めるのはその追跡能力の方だ。逃げても壁を気にせず攻撃出来る麦野と、その攻撃対象の位置情報を把握出来る滝壺。この連携はかなり強力だった。

「——ターゲット、まだ消えてない」

「ちっ……立体に逃げる敵つてのは厄介ね」

とはいえ、そんな連携攻撃に逃げない訳にも行かず、御坂美琴は普通に大穴から逃げた。今この場には姿が無いモノの、その攻撃は未だに続いている。御坂美琴はその攻撃の系統が電子を操る能力故に、その瞬間を察知出来る。それ故になんとか避け続けられているのだが、そこにフレンドの導火線爆破攻撃も加われば厄介以上に敗色が濃過ぎる。

「あれ？ 瑛唄？」

フレンドが瑛唄の姿を探す。御坂美琴と同様に、瑛唄の姿は此処に無かった。



「くるっ……なっ!？」

御坂美琴は通路を走りながら、麦野の攻撃を察知した。そしてその察知通り、右の壁を融解させて白い光線が迫りくる。が、それをジャンプすることで躲す。

「まだまだ」

しかし、そんな声が通路に響いた瞬間。躲した光線は何か曲げられ御坂美琴にもう一度迫った。

「このっ……!」

御坂美琴はそれに能力で干渉して軌道を逸らし、事なきを得る。着地してその声の方を見ると、そこには瑛唄が立っていた。今のは瑛唄が【原子崩し<sup>メルトダウン</sup>】の軌道を素手で折り曲げて御坂美琴の方へと修正したのだ。これによって、御坂美琴は圧倒的な敗北を突き付けられた気分になった。

「やあみこっちゃん。こんな所で奇遇だね」

「……アンタ……どうやって私の居場所を……」

「決まってるじゃないか。お前の後ろにぴったりくっ付いてきたんだよ……ずうっと、ね？」

「ストーカーかよ」

「嫌だな、そんな言い方は止めてくれ。言うなら追跡者<sup>ハンター</sup>だぜ」

Run of moneyな逃走中ではない。決して、御坂美琴の背後から……ハンター……！とか思ってたなんかいない。

ともかく、瑛噎が麦野達の攻撃パターンに組み込まれた事で、更に追いこまれたのは確かだ。

「てゆーか、みこっちゃん」

「みこっちゃん言うな……っていうかあたしが御坂美琴だつてことはもうバレてんのね……」

「え、そうだったんだ。適当に呼んでただけだから知らなかったよ。

へえ、お前ってレベル5の第三位の御坂美琴だったんだ……なるほど、つまり【超電磁砲<sup>レベルガン</sup>】か。かっくいー」

「こいつ腹立つつ……!!」

瑛噎は人を馬鹿にする事に関しては超一流。それが例え学園都市が誇るレベル5の超能力者であっても、例外ではないのだ。

だが、この場合状況が状況だ。瑛噎は御坂美琴とそんなやりとりをする間でも、迫りくる光線を御坂美琴の方へと修正している。とはいえ、瑛噎の方から自分の方へ向かってくると分かっていたら、御坂としても躲すのは容易かった。

「うーん……中々当たらないなあ」

「……アンタの能力、あのレベルの攻撃を折り曲げられる位だし……相当のレベルね。念動力か、光学操作系の能力か……それは分からないけど、どうやら発動には触れる必要があるようね」

「大正解。飴ちゃんをやろう」

「……要らないわよ」

「何だその間は。迷ったな？ ちよつと迷ったな？」

「うっさいー」

瑛噎から投げ渡された飴を、全力投球で投げ返す御坂。こんなところでも無駄に体力を使っていた。

「ん——？」

『ザ——ザザ……瑛噎？ 貴方今何処にいる訳？』

「みこっちゃん目の前にいますが」

『……私の能力を曲げたから察してはいたけど……やっぱりそいつ、御坂美琴なのね?』

「そうらしいよ? 今さつき馬鹿正直に自分から名乗ったから確かでしょう」

『ふーん……案外間抜けなのね……まあいいわ。瑛嗶、フレンド達はもう離脱させたから貴方も離脱しなさい。絹旗の方を援護して頂戴』  
「へーい、了解。リーダー」

麦野から無線を利用してやってきた通信を切って、瑛嗶は警戒する御坂美琴に視線を移動させて、ゆらりと笑った。

「良かったね、みこっちゃん。こっから先は対一だつてよ。二人つきりで存分にラブって頂戴。んじゃ」

瑛嗶はそう言つて、御坂美琴に背中を向けて去っていく。御坂美琴は、瑛嗶の背中が見えなくなるまで、警戒を緩めず視線を逸らさなかつた。

恐らく本能か、勘かで察していたのだ。本当にヤバイのは麦野沈利でも、滝壺理后でも無く、他でも無い瑛嗶なのだという事を――



「あ、瑛嗶! 何処行つてた訳よ、もう!」

「悪かったよフレンドちゃん。そうぶりぶりしないでくれ」

「ふん!」

「瑛嗶……ターゲットは……?」

「んー……しばらくは麦野ちゃんと戦うんじゃね? ま、運が良ければ逃げ切れると思うよ? ヒロインだし」

メタ発言だった。二人とも瑛嗶の発言に首を傾げるが、早々にボックスカーに乗り込んで絹旗の待つ施設へと向かう事にした。

「そういえばフレンドちゃん。爆弾の方幾つか回収しといたぜ」

「あ! ありがとう! 忘れてた訳よ」

「まあまだ幾つか残つてたけど……どうせみこっちゃんが使うで



しよ」

「う……全部回収してくれたわけじゃない訳ね……結局、麦野が怒らないか不安な訳よ……」

フレンドダはそう言っただけで肩を落とした。瑛嗶はフレンドダから滝壺の方へと視線を移動させる。見れば、かなり消耗している様だった。息も荒く、顔も青白かった。

これが『体晶』の副作用。身体に多大な負荷を与えるのだ。故に、このまま使い続けければ勿論能力は使えなくなり、身体を動かすことすら出来なくなる。今はまだいいが、早々に治療を行わなければならぬだろう。

「……ま、そういうのは主人公とかがやってくれるでしょ」  
「？」

「なんでもないよ。ちよつと横になったら？ 滝壺ちゃん」

「うん……大丈夫。ありがとう、瑛嗶」

瑛嗶はそういう滝壺に対して、ゆらりと笑って頭に手刀を落とすた。

「寝てろアホめ」

「……きゆう」

瑛嗶はフレンドダを自分の隣に座らせ、空いた長椅子に滝壺を寝かせた。

「確かにその方がいいかと思ったけど、問答無用すぎる訳よ……」  
フレンドダは一人、そう呟いたのだった。

## 統括理事会理事長

絹旗最愛のいる施設へと向かうボックススカーの中、瑛嗶はふと不穏な気配を感じて閉じていた瞳を開いた。視界には、自らが気絶させて横にしている滝壺理后と、隣で瑛嗶の肩に頭を乗せて仮眠を取っているフレンドがいる。ボックスカー周辺の気配を探っても、特にこれといった反応はない。

だが、瑛嗶の右耳に装着された無線機、これからノイズが鳴り響いた。

「……………」

『ザ——ザザ……！ やあ、泉ヶ仙瑛嗶君。初めまして、私は学園都市統括理事会、理事長……つまりは学園都市のトップの、アレイスター・クロウリーだ。よろしくお見知りおきをと言った所かな？』

「へえ、学園都市のトップか。校長先生と呼ばせて貰うわ」

『ふむ、まあこの学園都市を一つの大きな学校と見るのなら、私は校長に値する訳か……それもまた良いだろう』

通信相手は、アレイスター・クロウリー。学園都市統括理事長であり、未だ瑛嗶の前には現れてはいないが、魔術を使う学園都市という科学サイドの反対側、魔術師の領域でその名を轟かせた最高の魔術師にして最悪の魔術師である。実年齢にしてみれば、並の人間の寿命などとうに超える年齢をしているのだが、まあ瑛嗶の過ごしてきた年齢と比較すれば特にどうとでもない些細な事なので、あまり気にしなくてもいい。

瑛嗶はそんなアレイスターに対して、いつも通り、軽快に会話を続けた。

『さて、何の用かと疑問を抱いているだろうから、単刀直入に言わせてもらおう。私は君がこの学園都市になんの前兆も無く、いきなり姿を現した事を知っている』

「ああ、まあ見てたもんね」

『おや、気付いていたのかな？』

「まあこんなあからさまな視線を感じる街だしな」

『普通の人間なら気付けない筈なのだが……まあいい。私の要求は一つだ。君に、学園都市の能力開発を受けて貰いたい』

アレイスター・クロウリーの考えは、原石である瑛嗶に能力開発をし、あわよくば多重能力者デュアルスキルを作りあげようという物。イレギュラーな瑛嗶だからこそ、実験の価値があるのだ。

「へえ……なるほど。そういう事か。いいよ、受けてあげよう。それで、対価としてお前は俺に何を差し出すんだ？」

瑛嗶は、神様が言っていた言葉を思い出した。自分が与える能力以外に、もう一つ能力を手に入れる事が出来るかもしれないと言っていた、神の言葉を。おそらく、これがそのもう一つの能力を手にする機会なのだろう。

そして、瑛嗶はゆらりと笑いながらアレイスターに問う。その依頼に対して、お前は何を差し出すのかと。瑛嗶自身の身体を弄らせるこの依頼に対して払う対価は、なんなのかと。

『ふむ……金では納得しては貰えないだろうな。では逆に問おう、君はその対価として何を望む？』

「言い値で良いって事か。なら俺は、お前の首でも貰おうかな？」

『……………私としてはそれは困るが……………本気か？』

「冗談だ。お前の首なんて、いらねーよ」

瑛嗶がケタケタと笑うと、その表情を『アンダーライン滞空回線』で見ていたアレイスターは、何十年振りか、はたまた初めてか分からないが、久しく感じていなかった恐怖を感じた。ぞわりと鳥肌が立ち、背筋が震える。画面の向こう側の瑛嗶は、ただ笑っているだけ。それはもう心の底から楽しんでる様に笑っているだけだ。それだけなのに、アレイスターは素直に瑛嗶を怖いと感じたのだ。

「そうだな……………それじゃあ一つ頼みを聞いてもらおうか」

『……………何かな？』

「俺の行動に文句を付けるな。手を出してくるのは良いが、その時俺は俺の娯楽の為に——お前という害虫を殺してやろう」

瑛嗶の言葉は、本気だった。蚊を潰す様に何かを壊し、宝物を小箱に仕舞う様に何かを護る。瑛嗶の行動は何より薄っぺらい。やりた

いからやる。やりたくないからやらない。邪魔だから潰し、有益だから護る。

だからこそ、怖い。何も知らない無邪気な赤ん坊が、世界を壊してしまう爆弾のスイッチを手に笑っている様な感覚が、アレイスターが感じたのは、そんな純粋な恐怖感だった。

『……いいだろう。私は君の行動に最低限口出しはしない事を約束しよう。ただ、私にも私なりに求めるものがある。その為に君が邪魔だと感じた場合は、私も君を私の為に排除しよう』

「いいね、面白いぞお前。そうなった時が楽しみだ」

瑛嗶はそう言つて、ゆらりと笑う。

「ああ、とりあえずレベル5勢と……幻想殺しはぶっ殺しても良いって事で良い？」

『おい待て、要求を聞こうじゃないか』

「冗談だよ。じゃあね校長センセ」

『ちよ——』

瑛嗶は返答を聞かずに無線を外した。一応配布された機材なので、破壊すれば無駄金が掛かりそうだという判断だ。金に不足はないが、意味の無い所でお金を使うのはちよつと避けたい。

「さて……能力開発の場所を知らないからどうにも出来ないけど……ま、何れ迎えが来るでしょ」

瑛嗶はそう言つて嘆息する。瑛嗶の冗談に慌てるアレイスターの声は、中々に滑稽な物があったと満足気に笑った。瑛嗶とアレイスターの交渉戦は、瑛嗶の圧倒だった。

しばらくして後、御坂美琴と麦野沈利の戦いがそろそろ決着が付きそうという中で、瑛嗶達は絹旗の居る施設に辿り着いた。フレンドを起こしてボックスカーから降りる瑛嗶とフレンド。滝壺は未だに気絶しているの、とりあえず寝かせておく事にした様だ。

「よー最愛ちゃん。瑛嗶さんが来ましたよー」

「超腹立つ登場をどうも。こちらは既に仕事は終えたので、特にこれといった援護は超必要ないのですが」

「えー……それじゃあ結局私達はどうする訳よ？」

「とりあえず、麦野に超連絡しておきます」

絹旗はそういって、麦野に電話する。電話の向こう側では超ハイテンションな麦野が御坂美琴を追い詰めていた様だが、自分達だけで捕らえた者達を移送しても良いとの事で、作業を進める事になった。

ちなみに、フレンダは麦野から直々の伝言で、『オ・シ・オ・キ・か・く・て・い・ね』だそうだ。

「みこっちゃんはどうなったかねえ……ま、ヒロイン補正でどうにかなるでしょ」

琰嗶はそう言って、くつくつと喉を鳴らす様に笑った。

## 能力開発と仮入学

アイテムに依頼された、御坂美琴の件が終着を見せた翌日の事。瑛嗶はアレキスターから寄越された案内人と居た。

この場にアイテムのメンバーは居らず、各々自由行動をしている。アレキスターの方で手を回したのか仕事はなかったもので、幸いなことに暇なのだ。

「……よ」

「ありがとさん。名前なんだっけ？」

「慣れ合うつもりはないわ。それじゃ、後の事は引き継ぎの研究員を用意してあるから、そいつの言うとおりにして頂戴」

「まあ知ってるんだけどね。それじゃねあわきん」

「初めて呼ばれたわそのあだ名!？」

瑛嗶を案内していた少女、レベル4の空間移動能力者である、結標淡希は瑛嗶の言葉にそう突っ込んで去って行った。まあ当然の如く、空間移動だが。

そして、一人となった瑛嗶は目の前に佇む研究所の中へと足を進めた。



数時間後、瑛嗶は頭に付けていた機材を外して冷たいベッドから身を起こした。そして、自分の中に芽生えた力を確認する。

まず、これまで使用していた『触れる』能力は現存。そして、新たな能力も自身の中に芽生えていた。つまり、この時点でレベル1だろうがレベル5だろうが、計二つの能力を持っている訳だ。それは暗に瑛嗶が複数の能力を持つ能力者、『多重能力者』デュアルスキルである事を示している。

「……ふーん、こういう能力か」

「おめでとう瑛嗶君。AIM拡散力場の計測した結果、暫定的だけど君のレベルは4よ。いきなり能力開発しろなんて上からの要求が来

たから少し困惑していたのだけど、素晴らしい才能ね。修練次第ではレベル5にも至れるかもしれないわね」

「ああそう。つっても、この能力も戦闘で相手にダメージを与えられる能力じゃなさそうだ。手から風とか炎出すとかちよつとやってみたかったんだけどなあ」

「あ、あはは。そればかりは素質次第だからね……」

瑛嗶と話しているのは、白衣を着た女性の研究員。瑛嗶の能力開発の全てを担当した人物だ。名前は芳川桔梗といい、瑛嗶から見れば優しそうな面持ちの人物であった。

「ま、都合よく使っていくでしょう。ありがと、桔梗ちゃん」

「まあ君がレベル5になれば、私も鼻が高いし、頑張つてね」

瑛嗶はその言葉を聞いて立ち上がる。そして、首をゴキつと鳴らしながら部屋を出て行った。後に残った芳川桔梗は、嘆息して椅子に座る。そして、テーブルの上の瑛嗶の開発結果が書かれた用紙を見る。

「……こんな能力、聞いた事も無いわ。原石の能力もそうだけど、『触れる』能力に加えて、この能力……何か関係が有るのかしら……？」  
彼女の持つ用紙の右上、そこには簡単に彼女が名付けた能力名が表示されていた。

——  
【逸化精神】



さて、面倒な覚醒シーンはつつが無く終わり、瑛嗶も能力の実験をしながら街を歩いていた。時折、そのせいで何度か人とぶつかったのだが、それは能力が正常に作動している事の証明なので、瑛嗶としては不満を抱く物では無かった。

「うん、便利だな。戦闘でも使えそうだ。ただ案の定攻撃系じゃねーのが残念だけど」

瑛嗶の新たな能力は、『逸らす』能力だ。簡単に言えば、あらゆるものを逸らす事が出来る能力。強力な所では事象に対しても効果を発

揮する。

簡単な例として、人の意識や認識を『逸らす』事が出来たり、自身に降りかかる災厄や能力、事故を『逸らす』事が出来たり、ダメージや衝撃の行き先を『逸らす』事も出来るという訳だ。便利な使い方としては、雨を全て『逸らす』事で傘要らずな雨の日を過ごす事が出来ちやったりする。

今の瑛嗶は、行きゆく人々の瑛嗶に対する視線を『逸らす』事で瑛嗶は人々の視界から姿を消しているのだ。故に、気がつかない人々は瑛嗶にぶつかる訳だ。

「さてさて……能力実験も済んだ所で……『触れる』と『逸らす』の組み合わせを考えてみようかな？」

瑛嗶が能力の発動を解いて、そう呟くと、

「あの一、貴方が泉ヶ仙瑛嗶ちゃんで合ってます？」「ん？」

瑛嗶の視界の更に下の方から声が聞こえた。高く幼い声は、それだけで小学生位の年齢を感じさせた。試しに下へ視線を向けてみると、そこには瑛嗶を見上げる、全体的にピンク色の少女がいた。

「……………誰？」

「あ、私の名前は月詠小萌といいます。今日から私の勤めている学校に編入してくるとい話だったはずなんです……」

「え？ あ……………なるほど」

瑛嗶はなんとなく理解した。アイテムという暗部にいる以上、学校に通う必要はないのだが、やはり学園都市の生徒である以上、学校への編入手続きは必要なのだ。故に、アレイスターが能力開発ついでに瑛嗶を入れる学校を用意したというところだろう。

また、瑛嗶はアレイスターがなんの面白みも無い学校に通わせる事も無いだろうと思い、その学校にはなにかしらの主要キャラがいるだろうと察した。

「そうそう、そうですよー。で、小萌ちゃん」

「私は先生なのですよー？」

「知ってるよ。年齢はそうだな……………25歳位か？」



「初対面で先生の年齢を20以上と見たのは瑛嗶ちゃんが初めてですよ！」

凄く嬉しそうな顔で小萌はそう言ったのだった。

「それじゃあ学校に案内するですよー」

「ていうか俺の居場所なんて分かったんだ？」

「実は此处先生の通学路の途中なのですよ。そこでつい見かけたのです」

瑛嗶と小萌は何気なく会話しながら、通学路を歩き始めた。

## 一位探し

「それで、小萌ちゃん。これは何処に向かっているのかな？ さつき検問的な所を通った気がするんだけど」

「はい、実際は私の勤務している学校に通わせたい所なのですが、どうやら瑛嗶ちゃんは学生よりは私と同じ側の方がいいだろうとお達しなのですよー」

「へえ」

月詠小萌に連れられて、瑛嗶が連れて来られたのは『学び舎の園』。御坂美琴の通っている常盤台女子中学校等の所謂お嬢様校が集まって共同開発を行っている学園都市内のもう一つの街。この中には多くの有名菓子店やジュエリーショップ、フアンシーショップなどなど、THE・お嬢様な雰囲気漂う店が立ち並び、学園都市の中でも多くの生徒が羨望の眼差しを向ける上流街だ。

中に入る為には学び舎の園内に通う学生達からの招待が必要で、教員や警備員、バスの運転手でさえ女性という女性の為の街。別に男子禁制というルールが有る訳では無いものの、上層部のそういう女性への配慮が男性の入園を必要以上に敬遠させ、男子禁制というイメージが付いてしまっている。

瑛嗶もまた男性なのだが、ここは月詠小萌の先導があったからこそ入れたという物だろう。

というより、何故月詠小萌は自分の学校ではなくお嬢様学校の立ち並ぶ此処へ連れて来たのだろうかと疑問を抱く瑛嗶。

実の所、学園都市内の教師達は別々の学校といっても十分過ぎる交流の場が多々存在する。教師達で組織された警備部隊、『警備員』アンチスキルというものがあり、ここでは学校関係無く教師が集まる。学園都市は広いので、各部署ごとに人員は配属されるが、やはり教師同士交流も持つ。訓練などで集まった時など、話す機会は色々だ。

また、教師という役職から、別の学校へ講義に駆り出される事もあるし、学園都市全ての学校を上げての大運動会『大覇星祭』では全学校の教師が集まって会議を開いたりもする。

こうしたことから教師達は嫌でも顔が広くなるのだ、

つまり、月詠小萌もその一人。教師として他の学校にも多少顔が利くのだ。しかも、身長が130cm代という超ミニサイズの小学生並教師という目立つ風貌からも、その顔の広さと認知度は学園都市でもトップクラスだ。故に、瑛唄を連れて他の学校へ案内する役目というのも、案外ぴったりの人選なのだろう。

「で、ここか？」

「はいー。ここが瑛唄ちゃんが『教え導く側』として勤務する学校、お嬢様校としては学園都市でも有数の有名校！ その名も——」

——常盤台女子中学校なのですよー。

月詠小萌は、その小さく慎ましい胸を張りながら、誇らしげにそう言った。



常盤台女子中学校、それは学園都市でも能力開発において五本の指に入る超選りすぐりのお嬢様校だ。入学している生徒の全てが全員強能力者<sup>レベル3</sup>以上なのに加え、学園都市にも七名しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>の第三位と第五位の二名を保有している女子中学校だ。第三位は知つての通り【超電磁砲<sup>レベルガン</sup>】の御坂美琴だ。第五位は追々出てくるが、学園都市最強の精神干渉系能力者にして、記憶の抹消や改竄、乗っ取り、等々精神干渉に置いて十徳ナイフのような改竄力を持つ超能力者、【心理掌握<sup>メンタルアウト</sup>】の食蜂操祈という。

とまあこれほどの優秀な面を数多く持つ常盤台中学に、瑛唄は教師として務める事になった訳だ。女子中学校に男が入るのは中々抵抗があるものだが、瑛唄は特に気にしなかった。それもその筈、瑛唄からすれば中学生など総じて赤ん坊の様なものだ。何処の世界に赤ん坊に対して緊張する大人がいるのだろうか。

「という訳で、今日から此処に努める泉ヶ仙瑛嘎ちゃんです。それじゃあ後はよろしくお願いしますね！」

「はい、案内、ありがとうございます。月詠先生」

「では、またなのですよー」

そう言つて、小萌は瑛嘎を常盤台中学に勤務する教師に引き渡して去つて行つた。

「よろしくお願いしマス」

「ええ、貴方には今後二年生の体育を担当して貰います。勉強を教えるにはここは些かレベルが結構偏差値の高い大学並みなので、少し荷が重いでしょうとの判断ですが、気を悪くはしないでくださいね」

「いやいや、面倒臭い座学を教えるのはかつたるので、そっちの方が気が楽でいいつすわー」

「といつても、この学校には体育教師の先生が既に居ますので、その先生の手の回らないクラスを教えてくれれば結構ですけどね」

常盤台の教師はそう言つて苦笑した。瑛嘎はその苦笑に対してゆらりと笑つて返した。

「そういえば、瑛嘎先生は——」

「ああ、もう先生扱いなんだ」

「ええ、この学校に入ったからにはもう立派な一教師ですよ」

「成程、悪くない」

瑛嘎はそう言つて、ゆらりと笑つた。



その後、瑛嘎は教員免許的な物を預かつていると言われ、暗部の方で偽の免許証が発行された物を受け取り、それに準じて学び舎の園内に入るIDも貰い、今日の所は常盤台中学から帰る事になった。

とりあえず、学び舎の園内に点々とある菓子店の中から適当な所を選んで、アイテムのメンバーのお土産を買う。一応は女子だし甘いものなら選択は間違つていない筈だと思つたのだ。

「むぐむぐ……にしても、随分とまあ注目を浴びるなあ」

瑛嗶は周囲の生徒からの視線が多く、少しだけうつとおしく思っていた。というのも、この学び舎の園に招待者も連れずに男一人で歩いているとなると、いやでも注目を浴びる。元々お嬢様校は男性にあまり免疫が無い。故に、男性に対して興味津津なのだ。

「うん、きつさと出ようかな。こんな所」

瑛嗶はそう呟いて、来る時も通った検問を通過して、普通の学園都市の空気の中へと戻る。ため息を一つ吐き、歩きだす。すると、目の前に立ち止まった『御坂美琴』がいた。

「……いや、違うな」

「貴方は……第9985号実験の際、実験途中で巻き込まれた人物ですね。と、ミサカは確認をとります」

御坂美琴では無いミサカ。御坂美琴の二万体のクローンの一人、ミサカだった。軍用ゴーグルを頭に付け、常盤台中学の制服を身に纏った姿はどうみても御坂美琴だが、その佇まいと雰囲気は全くの別物で、御坂美琴がお転婆娘だとすれば、ミサカはクールビューティーと言ったところか。

「やあ、俺の認識ではお前は確か死んだ筈なんだけど」

「貴方の見たミサカとこのミサカは別の個体ですので、ミサカはまだ生きています。と、ミサカは貴方の認識を訂正します」

「成程、クローンって奴か。へえ、みこっちゃんが駆けまわってるのはお前らの為か。で、お前は何番目な訳？」

「ミサカの検体番号は10039号です。と、ミサカは自身の検体番号を伝えます」

10039号。この番号のクローンが外をうろついているということは、実験は既に一万台を超えたという事だろうと瑛嗶は予測する。御坂美琴のやっている事はほぼ無駄に終わっている事も理解した。

「で、お前はなにしてるの？」

「研修中です。と、ミサカは正直に答えます」

「研修ね……まあいいや。ほら、コレ餞別だ」

瑛嗶はミサカ10039号の手に買ったお菓子の内の一つ、水饅頭

を手渡ししてその場を去る。そして、何かを思い出したかのように首だけ振り向いてこう言った。

「そうそう、お前らが相手してるあの第一位、【一方通行】アクセラレータだっけ？興味が湧いたから一回会ってみるよ。こう見えて、レベル5の知り合いは多いんだ。この際コンプリートしようかと思ってるね」

「そう、ですか。まあ頑張ってください。と、ミサカは命知らずな行動に対して見て見ぬふりをします」

瑛嗶は今度こそ振り向かず去っていく。ミサカはその後ろ姿を見送りつつ、手渡された水饅頭に視線を送りながら歩きだした。

「水饅頭、ですか。どんな味なのか楽しみです。と、ミサカは初めて食べるお菓子に期待を膨らませます」

ミサカはそう言つて、少しだけ歩くペースを速めたのだった。

◇ ◇ ◇

その後、瑛嗶は一旦アイテムの拠点に戻ってきた。だが、中にいたのは滝壺のみ。他のメンバーはぬいぐるみや爆弾集め、映画鑑賞、鮭弁の買い出しなんかで出払っているようだ。

「ほい、コレお土産」

「お帰り瑛嗶。そしてありがとう」

瑛嗶はお土産を滝壺に渡し、皆で食べる様に言つてからもう一度外に出る。時刻はまだ昼頃だ。時間はたっぷりある。

「いつてらっしゃい」

滝壺はそう言つて、またぼーっと虚空を見つめた。

◇ ◇ ◇

外に出た瑛嗶は、とりあえず第一位を探す事にした。先程も言つた通り、レベル5全員と会つてやろうと思いついたので、唯の興味本位だ。現在知り合いなのは第三位、第四位の二人だけ。第五位は常盤台中学にいるのだから直ぐに会えるだろうと考えたのだ。となると、居

場所が分からないのは第一位、第二位、第六位、第七位の四人だ。といっても、第六位に関しては情報すらないので、会うつもりはないが。「あつくせつられーたはどくこっかな〜♪」

妙にリズミカルな歌を歌いながらゆらゆらと歩く瑛唄。白髪に紅い目のちよつと変なTシャツ来た少年だ。目立つ事この上ないのだから直ぐに見つかるだろうと考える瑛唄。いざとなれば暗部利用して住所つきとめてやろうとも思っている。

「さっきのミサカちゃんに聞いた方が良かったかね？」

瑛唄は少しだけ後悔した。

「さて、それじゃあ気を取り直して……探しに行こっかな——と？」

バチヂイ！ と叩く様な音が瑛唄の右側から迫り、瑛唄はとりあえず『逸らす』能力で迫ってきた『電撃』を逸らした。瑛唄の身体から逸れて、電撃はあらぬ方向へ飛んで行き、地面を焦がした。

「……今日は良く見る姿だねえ、丁度いい」

瑛唄は右方向へ視線を向けて、ゆらりと笑う。その視線の先、そこには怒りの形相を浮かべ、殺気を振りまく——レベル5、御坂美琴が立っていた。

## レベル5ラリー

瑛嗶の目の前に現れたのは、御坂美琴だった。こめかみからバチバチと電気を奔らせ、瑛嗶を睨みながら威嚇する。周囲の人々はその様子に風紀委員や警備員ジャッジメントや警備員アンチスキルを呼ぶべきかとぎわめく。といっても、喧嘩とは程遠い、これは殺し合いなのだが、平和に浸かっている人々は全く気付く事はない。

瑛嗶は御坂美琴の殺気に対して欠伸を漏らす。本当の殺し合いの間に身を置いていた瑛嗶だ。女子中学生が相手を叩きのめすものに電撃を使うだけで生まれたちっぽけな殺気程度、そよ風程度だ。

「丁度良かったよ。みこっちゃん、一方通行アクセラレータの居場所知らない？」  
「はっ。」

「ここでお前とドンパチやるのも良いんだけど、お前はもうダブってんだよ」

「何言ってるか全然分かんないけど、アンタらのせいであたしの行動も無駄になったのよ！」

「へー」

そんな事はもう知っているとはばかりに瑛嗶は聞き流す。どうしてもいい事のように、よそ見をしながら淡々と。

「それで、みこっちゃんは俺に食い掛かってどうしたい訳？俺を此処で殺したとして、それで実験が止まるとでも？」

「それは……！ そうだけど……！」

「それでもいいってんなら相手になるけど？」

御坂美琴は此処まで言われて、継続するつもりはなかった。力なく両手を下ろして俯く。バチバチと音を立てていた電気も収まり、唇を噛む。

「それで、一方通行の居場所。知らない？」

「……知ってる。でも、アイツに会ってどうするつもり？」

「決まってるんじゃない、おちよくってくんだよ」

「アンタ馬鹿なんじゃないの!？」

瑛嗶の言葉に美琴は素で突っ込んだ。



「まあ実際の所はレベル5巡りなんだけど。今んとこ第三位と第四位とは知り合いになったから上から順に会ってこうと思ってるんだ」  
「レベル5巡り？ ああ、だからさつき私はダブってるって言つたのか……………」

「そういうこと。それじゃあ第一位の居場所教えてくれよ」

「あたしが知ってるのは実験の場所だけよ。アイツが今何処で何をしてるかなんて知らないわ」

御坂美琴はそう言って、瑛唄に次の実験場を教えた。

「なるほど、ありがとうみこっちゃん。お礼にコレ上げるよ」

「コレって…………ゲコ太!？」

ゲコ太、それは御坂美琴絶賛のキャラクターマスコット。カエルのデザインで、かなりの種類があるらしい。先程、お土産として買ったお菓자에付いて来たのだ。

「それじゃ」

「う…………あ、ありがとう…………」

瑛唄は小さくそういった美琴に対してゆらりと笑い、去って行った。



その後、瑛唄は実験時刻はまだ来ていないので、実験場に第一位はないだろうと思い、とりあえず手当たり次第に探す事にした。とりあえず、コンビニに入ってみる瑛唄。すると、御坂美琴の助言虚しく

第一位は見つかった。籠の中に缶コーヒーをこれでもかかと入れている第一位は、なんとなく頭おかしいんじゃないかなーのと思わせる程馬鹿に見えた。

「やあ」

「あん？ テメエは…………ああ、そうだ。ちつとばかし前に実験途中で割り込んで来た奴じゃねエか」

第一位、あらゆるベクトルを操る超能力者、アクセラレータ一方通行は意外そうなお顔でそう言った。それに対して、瑛唄はゆらりと笑って会話を始め

た。

「よく覚えてたな。俺はお前の事なんてうる覚えだったのに。あれ？

髪切った？」

「切ってねエよ」

「アレ？ 女の子じゃなかった？」

「女じゃねエよ」

「アレ？ 何そのTシャツ？」

「ファッションだよ」

「黒髪じゃなかった？」

「白だよ」

「もやし」

「喧嘩売ってんだな？ よオし分かった、表に出やがれ」

最後はもはや質問では無く唯の貶し文句だ。瑛嗶は思った通りに良い反応をしてくれる第一位に内心満足していた。レベル5とはかくも弄りやすい性格をしている。御坂美琴しかり、麦野沈利しかり、一方通行しかりだ。

「で、何の用だよ。俺に喧嘩でも吹っ掛けようってか？」

「んな訳ねーだろ。誰でもお前に喧嘩売ろうとしてる訳じゃねーよ。自意識過剰め」

「いやテメエ絶対喧嘩売ってるだろ？ 売ってんだよなアオイ？」

「缶コーヒー好きなの？」

「話を聞けよテメエ！」

瑛嗶はゆらゆら笑って一方通行を弄る。第一位も瑛嗶に掛かれればやはりツツコミに回るようだ。やはりある程度常識を学んだ者は基本的に瑛嗶のペースに乗せられるのだろう。

「冗談は置いといて……まあ見かけたから話しかけただけだよ」

「ハン……んな訳ねエだろ。このアクセラレータに見かけたから話しかけるだど？ 冗談にしては笑えねエな」

「お前………友達いないだろ」

「うるせエよ！」

一方通行は不機嫌にレジに向かい、アクセラレータを大量に購入し、その

ままコンビニを出た。瑛嗶も続く様にコンビニを出る。そして彼と並んで歩きだした。

「オマエ、付いてくンじゃねエよ」

「良いじゃないか別に。俺は俺でお前に用があんだよ」

「ンだよ用って」

「お前と友達になつてやるよ。喜べ」

「滅茶苦茶上から言ってくれンじゃねエか。この第一位によ」

「……なあお前さ、中二病引き摺ってたりしない？ 相当ヤバイよ？」

「素で最強なンだよ」

瑛嗶はその言葉に確かに、と苦笑した。そして苦笑した後、なら、と一言おいて続けてこう言った。

「それじゃあさ、第一位。俺と勝負しようぜ？ 俺が勝ったらメアド交換な」

「ほオ……そんじゃあ俺が勝ったら二度と俺の目の前に姿を現すな。

ま、俺が勝った時お前が生きてつかどうかは分かんねエけどなア」

一方通行はアクセラレータ歯を剥き出しにして鋭く笑みを浮かべ、瑛嗶はそれに対して吊り上げる様にゆらりと笑った。二人の間に張りつめた緊張感が生まれる。そして、一方通行の案内で人気のない所へと二人して歩き始めた。ビニールの中の缶コーヒーがカタカタと音を立てる。

「あ、俺携帯持つてねーや。ちよつと今から一緒に買いに行つてくれる？」

「オマエ前提条件から崩すんじゃねエよ!!」

やはりというか、締まらない瑛嗶だった。

## 最強だからこそ、挑む相手

瑛嗶に緊張感を崩されたアクセラレータは興が削がれたとばかりにガシガシと頭を掻き、去って行くこうとする。

「おいおい待てよ。勝負するんだから携帯買いに行こうぜ？ な？」

「うっせエ。お前と話してっと疲れンだよ」

「ああ、じゃあこうしよう。一回一緒に携帯買いに行つて、それで勝負しよう？」

「ああ、成程……つて変わつてねエよ！」

「流星は第一位。ノリ突っ込みもキレキレだな」

「なんなんだコイツはアアアアアアアア!!」

遂に叫び出す第一位。周囲の人々がビクツと驚いて瑛嗶達を見るが、すぐに通り過ぎて行つた。瑛嗶はそんな第一位に対して爆笑する。それを見たアクセラレータはぶちつとキレて瑛嗶に殴りかかった。

「駄目だよアセロラ。不意打ちする最強が何処にいるんだ」

だが瑛嗶はその触れただけで人を殺す拳をペしつと叩く事で弾いた。勿論、『触れる』能力発動済みだ。瑛嗶は反射膜に触れて反射膜ごとアクセラレータの拳を叩き落したのだ。

「っ……前も思ったがテメエには反射が聞かねエみてエだな……どうなつてンだ？」

「俺の能力だよ。まあお前と似通つてはいるけど、全く別物の能力だ」

「……チツ。わアつたよ、携帯買いに行くぞ」

「お、どういう風の吹きまわしだ？」

「勘違いすンなよ？ テメエの能力に興味が湧いた、ただそれだけだ」

「……なんだツンデレか」

「ちげエよ!!」

携帯ショップに向かつて歩き出す一方通行に瑛嗶はそう言つて並び、歩く。学園都市第一位の超能力者と誰にも知られない無敵が歩いている光景は、両者を知る者からすれば眼を疑う光景だろう。

あらゆるベクトルを操る最強の能力者は、あらゆるモノに触れられ

る無敵の能力者に牙を向けた。



「さて……」

携帯を買った二人がやって来たのは、かつて御坂美琴が一方通行と殺し合い寸前になった砂利場。そして、御坂美琴が初めて出会ったクローン、妹達シスターズの一人、ミサカ9982号が死んだ場所でもある場所だ。

「約束は覚えてンな？ 俺が勝ったらお前は二度と俺の目の前に姿を現すな」

「ああ、俺が勝ったらメアド交換の上と一緒に遊びに行く、でいいな？」

「……なんか増えてっけどまあいい。現代アート風の面白オブジェに仕立て上げてヤンよ」

一方通行はそう言って凶悪に笑った。

「……さて、マジ戦闘はこれが初か……つつーことはだ。新戦闘術を試す絶好の機会って訳だ」

瑛唄はそう呟くと、一方通行に対して半身になり、後ろに引いた右手で手刀を作り、前に出た左手は握りこんで拳を作る。腰を若干落として——『構えた』

今までの戦闘において、瑛唄が構えた事は一度もない。何故なら、瑛唄程の実力の持ち主なら自然体の状態から変幻自在の手を打つことが出来るからだ。故に、相手は瑛唄が次に何をするか予測がつかないし、予測がつかないから先手を取られる。そして、瑛唄はその身体能力と異能力からその先手が一撃必殺になったりするのだ。

故に、瑛唄と戦ってきた全ての敵達はその初手で撃墜される事が多かった。だが、此処に来て初めて瑛唄は『構えた』のだ。さっきも言ったが、構えはある程度の実力者からすれば次の一手を予測させる事が出来るのだ。それはつまり、相手に対して次の手を予測させるヒントを与える様なものだ。

これが、瑛嗶が考えた——『手加減』

ハンディキャップ

本気でやれば強過ぎる。なら、手加減した上で全力を出せる様に構えを生み出したのだ。

「名前はその時その時考えるか迷ってたけど、まあ強いて言うならこの構えは——」

——瑛嗶式壺の構え：陽桜ひびくら

「ほオ、なんかの拳法的なモンかア？」

「ま、そんなもんだ。掛かって来いよ第一位レベル5、うんと手加減した上で叩きのめしてやるよ」

まだ出来てまもない瑛嗶式戦闘術。故に、まだ使いこなせないのだ。更に言えば、規則性のある動きの為に一定以上の速度を出す事が出来ないのだ、大幅に弱体化した状態を自分で作りあげた瑛嗶に対して、一方通行は勝算を上げて貰っている事に気付かない。

「じゃあまア……精々足掻けよ三下ア！」

そう言つて始まる殺し合い。一方通行は手近に転がる小石を蹴りとばす。その速度はベクトル操作で力の方向を全て瑛嗶に向けられた事から、拳銃以上。だが、瑛嗶は構えを崩さずに左の拳で小石を横に弾き飛ばした。

「なっ……拳銃並の速度の小石を捉えるとかどんな動体視力だったの！」

一方通行は瑛嗶の化け物染みた行動にそう突っ込みながら砲弾の速度で瑛嗶に迫る。蹴りだす際にベクトルを操作して速度を上げたのだ。そして、右手を瑛嗶の顔に向けて伸ばす。

「——瑛嗶式、『風草』」

なびくせい

瑛嗶はその右手を左足を軸に一回転して躲し、その回転のまま右の手刀を下から切り上げる。切り上げた先にあるのは、近づいてきた一方通行の顎。『触れる』能力で一方通行の反射膜に触れて、反射膜を手

刀で上へと吹き飛ばした。そして、反射膜が纏っている一方通行の身体もつられて上に吹き飛んでいく。

「あがつ……!?!」

「続いて、**瑛嘎式**、『突風』」

真上に吹き飛ばされ、重力に従って落ちてきた一方通行の腹に、切り抜けた右の手刀が流れる様に勢いよく掌底となつて襲つた。そのまま一方通行は元居た位置へと転がる様に吹き飛ばされ、その衝撃から若干吐血する。

「げほっげほっ……いーちィ……反射は効かねエ……が、反射膜が全く効果を發揮してねエ訳じゃねエ、か」

瑛嘎の攻撃を二発も貰つておいて、一方通行がまだ戦闘可能な理由は、瑛嘎の能力にある。

元々、この『**危機処分**』デイスパーザルシステムという能力は、能力に触れる際、能力自体を無効化する訳ではない。あくまでその能力の持つ性質を一時的に無効化するだけだ。つまり、電撃であれば感電や伝熱等の性質を奪い、ただそこにある『電気』という名の人体が触れられる『物質』に一時的に変換される訳だ。故に、瑛嘎は電撃に触れて弾き飛ばす事が出来るのだ、

一方通行の反射膜の場合は、反射するという性質を無効化して唯の『身体を包む膜』へと変換する訳だ。そして、その膜は瑛嘎の手刀と掌底を『反射』しない、が一方通行の身体を『護る』事は出来るのだ。つまり、瑛嘎の手刀で上空に吹き飛ばされたのは一方通行ではなく、あくまで『反射膜』なのだ。一方通行の身体は、反射膜が上に吹き飛んだから、同じ様に上空へと投げ出されたのだ。

簡単な例を上げるのなら、石の入った箱。その箱を上空に投げたでしょう。投げられたのは箱、だが中に入っている石はその箱に包まれている故に実際には投げられていないが、結果的には上空へと投げ出される。これと同じ状況が今の一方通行な訳だ。

箱反射膜に包まれた石身体は、箱が宙に投げられれば当然宙に投げ出されるのだ。

故に、実際ダメージを受けたのは反射膜であつて、一方通行では無

い。瑛嗶の手刀と掌底の衝撃は一方通行の反射膜によって一方通行の身体を傷つけなかったのだ。

とはいっても、進んでいた方向とは別方向へ吹き飛ばされれば当然身体の方にも多少負担が掛かる。一方通行が吐血する程度のダメージを負ったのはその負担が原因である。

「ふーむ……『触れる』能力での一撃じゃやっぱ反射膜を貫けないか……なら」

瑛嗶は『逸らす』能力を発動して、地面を蹴る。すると、一方通行と同様に砲弾の様に一方通行の目の前に一步で迫った。これは、前に進もうとする身体に迫る空気抵抗を『逸らす』事で速度を上げたのだ。前に進む際の邪魔が無くなった事でその速度は空気摩擦も気にする事も無く、音速を超える。

「ンなっ……!?!」

「瑛嗶式…蹴掌しゅうしょう」

瑛嗶は前屈みに立ちあがった一方通行の腰より低く潜り込み、一方通行の足を蹴って体勢を崩す。そしてそのまま一方通行の顔を掴んで地面に叩き付けた。そしてそのまま掌底を一方通行の鳩尾に叩き込んだ。すると――

「瑛嗶式…透掌とうしょう」

「ぐっ……ぱっ……!?!」

瑛嗶が抑えていた口から更に吐血した。瑛嗶の手が血で染まる。そして5秒経たない内にその手を放した。

「やっぱり、反射膜が機能して無い以上……衝撃通しは効くみたいだな」

瑛嗶が使用したのは衝撃通し、または鎧通しとも呼ばれる衝撃伝達法だ。これによって瑛嗶の掌底は反射膜を伝わり、一方通行の身体へ伝わり、直に掌底を喰らわせた場合と同様の衝撃を彼の身体に与えたのだ。

「ぐっ……がア!!」

「おっと」

だが、瑛嗶は手加減している。実際瑛嗶が本気でそれをやっってい



ば一方通行の腹は潰れ、それこそ一方／通行となっていただろう。だが、瑛叟が手を抜いた事で彼はまだ生きているし、戦闘も続行できるのだ。

「が、はア……はア……！」

「随分と息が上がってるじゃないか第一位」

「うるせエよ……！ はア……俺はまだまだやれンぞ」

「ははは、そいつは上等だ。だがよ、一方通行、俺はお前に触れられるぞ？」

「？ ……だからどオした……どうやらお前の能力、ずっと触れてられる訳じゃねエ様だなア……さっきから攻撃する一瞬しか触れなかった事から……その時間は大体……3秒から5秒ってトコか……はア……はア……」

大した解析力だと、瑛叟は素直に感心する。あれだけやられている中でそこまで解析するとは心底恐れ入る。甘く見ていたが、これが学園都市最強の超能力者。最強を謳うだけはある。

「で、それが分かったお前はどうするんだ？」

「決まってンだろ……はア……はア……それ以上触れていれば血液逆流させて俺の勝ちだ……!!」

一方通行は諦めていなかった。瑛叟に勝つ事を。最強を超える無敵、それは確実に彼の人生を変える筈だから。

——だから認めよう。最強が手も足も出ねエお前は、無敵だ。

——だが、だからこそ諦められない。そこは俺が目指した領域だから。

——お前を倒せば、俺が無敵になれるのだから。

「諦める訳には……行かねエんだよ……!!」

「ひゅー、かつくいー」

本当なら、死んでいなくても普通に立ち上がれないダメージ。まし

て、今まで反射のおかげで痛み免疫の無い虚弱な身体の一方通行ならなおさらだ。

だが、彼は立ち上がった。まだこの戦いは始まって10分も経っていない。だが、その短い間で実力の差がはつきり分かった。互いに人を殺してきた人間だ。実力の上下位、察する事が出来る。

つまり、両者は分かっている。瑛嘎が上で、一方通行は下なのだ。

「愉快に素敵につ……………下剋上してやんよ……………！ この無敵野郎！」

だが、最強はそれでも立ち上がった。腕で血を拭い、衝撃で倒れそうな身体を無理矢理動かす。

「流石はセカンド主人公——中々どうして、面白いじゃないか」

そんな主人公に対して、瑛嘎はいつも通り、ゆらりと笑ってそう言った。

実験中止だつてさ

「瑛嗶式、式の構え——」  
『満影』みちかげ

瑛嗶は、立ち上がった一方通行アクセラレータに対して敬意を表し、瑛嗶式戦闘術の式の構えを見せた。今度は先程とは違って両の手の平を広げ、そのまま両腕を若干広げた風に構えた。腰は落とさず、直立状態から腕を少しだけ上げた状態。一方通行はその構えを見て、次の行動を予測する。何千人と人間の身体を嬲り殺してきたのだ。人の身体がどう動くか位分かる。故に、その構えから繰り出される最高の動きをその第一位の頭脳で演算、予測する。

「はア……すウー……ふっ……!!」

一方通行は瑛嗶に向かつて駆け出す。ベクトル変換を使つてはいるが、それは若干速度を上げる程度に力を抑えられた物で、実際にはただ走っているようにしか見えない。瑛嗶はそれに対して、広げた手をそのまま一方通行に『突き出した』。手刀ではなく、指は開かれていたので、五本の指による同時の突きだ。

だが、

「読めてんだよー」

一方通行はそれを事前に予測していた。瑛嗶の五本の突きを体勢を低くすることで躲し、その伸びた腕を両手で『掴んだ』。

「へえ……」

瑛嗶の能力が発動し、触れてられる時間——否、一方通行の能力を防いでられる時間は残り5秒。

「っー」

瑛嗶はその手を放させようともう一方の手で一方通行の顔を掴み、地面に叩き付けた。が、離れたのは一方通行の片手だけ。もう一方の手は、瑛嗶の腕を放さない。そして、その地面に叩きつけられた一方通行は瑛嗶をその赤い瞳で鋭く見抜く。残り、3秒

「やるじゃないか一方通行——じゃあ、こうかな？」

「う——オ……!?!」

瑛嗶は掴まれた腕を振り回して一方通行の身体を振り回す。そし

て、その腹を身体の流れる方向に歯向かう様に殴った。

「ガッ——アア!!」

それでも、一方通行は放さない。掠れる意識の中、瑛嘎の腕を掴んだ感触を放さない様に、その手だけに意識を集中させる。放さない、絶対に放さない。ここで放せば勝機はもう訪れない。それが分かっているから。無敵に届く一筋の光明、それを絶対に見失わない様に、一方通行は咆哮を上げた。残り、1秒。

「なるほど、ここまで追い詰められたのは初めてだ。誇れよ第一位、お前はこの俺を死ぬ一步手前まで追い詰めたのだから」

だが、瑛嘎は殴るのを止めて、一方通行の腕を掴んだ。そしてその握力で血液の流れを一時的に遅くする。すると、一方通行の手から力が抜け、瑛嘎の腕を——『放した』。

「な……………」

「人間の身体のどうこうを知ってるのはお前だけじゃないぜ、第一位。とはいえ、その根性は気に入った。だから、」

瑛嘎は一方通行の腹を蹴り飛ばして無理矢理距離を取らせた。そして、蹴られた事で若干体勢を崩す一方通行の懐に、瑛嘎は踏み込んだ。だ。

「思い付きだが必殺技をお見舞いしてやろう」

瑛嘎はそう言つて、肩幅ほどに広げられていた一方通行の足の間からその奥へともう一步、踏み込んだ。もう数センチでも進めば身体と身体がひつつく距離だ。そして、その距離のまま瑛嘎は右手を一方通行の胸に置いた。

「……………」

「瑛嘎式——壺の奥義【はちめんれいろう八面玲瓏】」

瑛嘎はトン、と一方通行を押して、擦れ違う。一方通行は疑問の表情で瑛嘎の方を振り向こうとして——

「——ア? ガ、アアアアアアアア!!?」

激痛に倒れた。まるで、内部から内臓が暴れまわっているかのよう

な激痛。そして、その激痛を更に加速させる様な鈍い気持ちの悪さ。あるべきモノが別の場所に収まってしまっている様な感覚。

「周囲の音という音から発せられ、体内を伝わっている振動を、衝撃を通すことで共振させ、結果的に内臓全体を揺らす技だ。身体に傷を負う事はないが、代わりに死にたくなる位の違和感と激痛が体中を駆け巡る」

「が……………ア……………ッ！」

一方通行は白眼を剥いて、うつぶせに倒れた。気絶したようだ。

「中々に白熱した勝負だったぜ第一位」

瑛嗶はそう言つて、一方通行のポケットから携帯電話を取り出し、メアドを強制交換したのだった。



「……………何？ アクセラレータが敗北しただど？」

「ああ」

「誰に？ 他のレベル5か？」

「いや、唯のレベル3だ。能力の詳細からすると、戦闘能力はレベル0とそう変わらないがな」

ここはとある上層部。絶対能力進化実験を取り行っている部署でもある。そこが一方通行が敗北した事を知り、色々と慌ただしくしているのだ。

「……………えー」

「……………どうするよ？」

「……………あー……………じゃ、止める？」

「ツリーダイアグラム樹形図の設計者も大破してるしなあ……………最強って前提条件が崩れたし……………そうするか」

そんな会話を皮切りに、研究者達は伝達を始めた。御坂美琴の襲撃によって引き継がれた130を超える研究施設に、実験中止の旨を。

「今研修に出ているクローンはどうする？」

「とりあえず……………あー、今日明日は手が付けられないな……………仕方ない。」

今日明日の実験を行なうクローンは回収しないで明後日以降のクローンは全て回収しよう」

「そうだな。色々と手続きもあるし」

研究者達の行動は早い。こうして、誰にも知られない所で実験が中止になったのだった。

「ところで一方通行にはどう説明するんだ？」

「……………今すぐ一方通行を倒したレベル3を探せエエエエエエ  
!!!!!!」

## 食蜂操祈

瑛嘎が一方通行と殺し合いならぬ喧嘩をした翌日。原作で言えば上条当麻が一方通行を倒す日、実験は中止作業を進めていた。とはいえ、一方通行も、御坂美琴も、上条当麻もそれを知らない。なんせ、殺される側のミサカクロン達すらもまだ知り得ていないのだ。仕方のない事だろう。

そんな中、瑛嘎はといえば、御坂美琴の登校していない常盤台中学へと講師にやって来ていた。といっても、学び舎の園では男性は基本的に信用されていない。そういう街なのだ。故に、瑛嘎は常盤台中学の二年生の体育教師として紹介されたものの、あまり芳しい反応は貰えなかった。

「まあ別にいいんだけど」

だが、元々女子中学生に欲情する瑛嘎ではない。乳臭い小娘に何をしろというのだと瑛嘎は軽く呟いた。

現在の時刻は昼休み。生徒達がこぞって食堂やお弁当等で昼食を取る時間だ。瑛嘎は下の方で食事を取る生徒達を眺めながら、ぼけーっと屋上で寛いでいた。元々、この学校の食堂の値段からして食事自体食べられないだろうなど考えていたので、昼食はコンビニのおにぎり。それも先程食べ終わってしまったので、やる事が無いのだ。「……そういえばこの学校ってレベル5の第五位居たよな……確か精神操作系の能力者で、リモコンを媒体にしてるとか——！」

「その通りよお」

瑛嘎は背後に感じる気配に首だけ振り向くと、そこには金髪を腰のあたりまで伸ばし、瞳を素でキラキラさせた女生徒が立っていた。肩から小さなカバンを掛け、両腕をすっぽり覆うレース付きの白い手袋、それに手袋と同様のデザインのニーハイソックスを履いている。そして、なにより、女子中学生とは思えない発育の良さを持っていた。

「食蜂操祈ちゃんかい？」

「ええ、その通りよお。そう言う貴方は昨日第一位を倒した瑛嘎先生、よね♪」

「へえ、良く知ってるな。しいたけって呼んでいい?」

「この眼? この眼の事を言ってるの? 怒っちゃおうよ?」

「自覚あるんだな。しいたけちゃん」

「よーし怒っちゃったわよお? 精神攻撃、えい!」

食蜂操祈はカバンからリモコンを取り出して瑛嗶に向け、ボタンを押した。普段、これが彼女の能力使用スタイル。リモコンのボタンを押すことで能力に方向性を持たせてコントロール出来る様になっているのだ。彼女の能力は良くも悪くも応用性が広過ぎるのだ。

そして、彼女の能力を向けられた者はレベル5の化け物でもない限り、操られるのがオチだ。

だが、

「はい没収」

「あつ!」

瑛嗶はその能力を『逸らす』能力を使ってリモコンから発せられる能力を瑛嗶に届くまでに逸らしたのだ。故に、彼女の精神干渉は効かなかった。といつても、瑛嗶がこの能力を発動していない場合は普通に効くので瑛嗶が彼女の天敵という訳ではないが。

「ちよ、ちよつとお! リモコン返してえ!」

瑛嗶はリモコンを持つ手を上に上げる。食蜂操祈はそれを取り返そうと必死にぴよんぴよんと飛び跳ねるが、瑛嗶の身長は平均的に見てもかなり高い。まして女子中学生である食蜂操祈にはその瑛嗶の手元にその手を届かせるのは無理があった。

そして、しばらく飛び跳ねていると、食蜂操祈は息切れし始め、地面にへたりこんだ。どうやら彼女は相当な運動音痴らしい。たったこれだけの運動で息切れするなど、どこの箱入り娘だと思う。

「はあ……はあ……リモコン……返してよお……」

食蜂操祈は若干涙目でそう言った。可哀想になつてくる表情をしており、息切れのせいかな少しだけ色っぽく見えた。だが、瑛嗶にとつてはそうではなかった。

「リモコン壊して良い?」

「……まで弱ってる……! 女子中学生に対して……はあはあ……言



う事がそれえ……げほ……!?!」

「生徒には飴：0、鞭：10で行こうと思ってるから」

「鬼畜！・鬼畜すぎるわあ！」

ぶんすかとへたり込みながらそう突っ込む操祈。瑛嗶はそんな操祈に対してゆらりと笑う。

「全く……もう——つと？」

「どうしたよ？」

操祈は立ちあがろうとするが、何かに押されたようにまたお尻を地面に付けた。瑛嗶はゆらりと笑っている。もう一度立ちあがろうとするが、また倒された。瑛嗶を見るが、彼は何もしていない様に見える。もう一度、転ぶ。もう一度、転ぶ。

実は瑛嗶が眼にもとまらない速さで操祈の額を押しているのだが、それに操祈は気付かない。

「……手、貸してくれないかしらあ……」

「……案外子供っぽい所が有るんだなお前」

「ち、違うわよお……なんでか立てなくて……」

瑛嗶は操祈の手を引っ張って立たせた。ここまで瑛嗶がやってきておいて、操祈は全然気付いていない。自分が先程から幾度となく瑛嗶の掌の上で弄ばれている事に。

「ほれ、リモコン」

「わ、とと……全く、悪戯力が酷いわよお？」

「知らないよ。そっちこそ弄られ力がやばいんじゃない？」

「えい」

「効かん」

またリモコンのボタンを押す操祈だが、瑛嗶は先程からずっと『逸らす』能力を発動させている。操祈の能力は瑛嗶の『逸らし』の前に何処かへ飛んで行った。

「むう……なんで効かないのかしらあ……貴方の能力ってただ『触れる』だけでしょお？　なのになんで……もう！」

「うわいきなりキレたよ。全くコレだから最近の若者は……」

「貴方と私ってそんな年違わないわよねえ!?!」

「ほれ、次は体育だ。着替えなくていいのか？」

「良いのよ。サボるから」

「ああ、運動音痴だもんな」

「違いますうー、ただちよつと体力に乏しいだけですうー」

「しいたけが何かほざいてるな。ちよつと外周しようか、30周位」

「いやああああ!!」

まるでムンクの叫びの様な顔で絶望する操祈。瑛嘎はそんな彼女を見ながら、ゆらりと笑うのだった。

{IMG312}

## 操析イジメ

能力者と無能力者には、上下関係があるという話を以前しただろう。今度は能力者の中での分類の話をしてみよう。

能力者には、能力に頼り切りの能力者と、能力と身体能力を合わせられる能力者がいる。前者は強力な能力者であるほど、後者は能力の効果が余り著しくない能力者であるほど、その数が多い。例を上げるとすれば、能力に頼り切りの能力者として、一方通行が、アクセラレータ能力と身体能力を掛け合わせる能力者として、瑛唄が挙げられる。

当然の様に、能力と身体能力を掛け合わせた方が、いざという時強いのは分かるだろう。

——では何故、能力に頼り切りの能力者がいるのか？

理由は単純。身体能力等必要ない位、その能力が強力だからだ。一方通行は自分で動くまでも無く、相手に好き勝手やらせておけば、『反射』でどうにでも出来る。だから肉体による戦闘技術は必要ないのだ。故に、こうして能力に頼り切りの能力者が出来る訳だ。

逆に、瑛唄や御坂美琴の様に、攻撃力に欠ける能力や、防御に欠ける能力というのは、やはり自身がある程度動けないと話にならない。攻撃力に優れていても、所詮それを扱うのはただの人だ。ナイフ一本で死んでしまう様な弱い肉体なのだ。故に、こうして身体能力を併用する能力者が出来る。

これが、能力者の中にある、一つの分類だ。戦えばどちらが強い、というのやはり能力の相性によるもの大きい。一方通行の『ベクトル変換』に対して、瑛唄は『触れる』能力で勝利を収められたし、御坂美琴の『電撃』に対して、一方通行は『反射』で圧倒する事が出来た。

やはり、そこは対峙する相手によってまちまちなのだろう。

さて、ここまで話した内容を鑑みて、レベル5超能力者の序列第五位、食蜂操析をこの二つに分類すると、彼女は『能力に頼り切りの能力者』に

分類される。

相手の精神を乗っ取れば、最早勝敗は決定的だ。そのまま相手を操って気絶させる事も、殺すことも可能なのだ。故に、彼女は能力に頼る能力者で、身体能力的には小学生にすら劣る運動音痴だ。

つまり、何が言いたいかというと――

「はあっ……はあっ……ひゅー……はあっ……ひゅー……げほっごほっ……！」

レベル5の第五位、最強の精神干渉系能力者の食蜂操祈は現在、体育の授業で屍と化していた。

「わはは、どうしたしいだけ。もうバテたか？ まだ100mも走ってないんだけど」

「う……る……さい……！」

最早掠れた声で地面に横たわる食蜂操祈は、その身体を汗だくにして、荒い息を必死に整えようと周囲の酸素を精一杯吸い込む。ただこれでもまだ100mも走っていない所を見ると、やはりその身体能力はゴミの様だ。

「……食蜂操祈、体育の成績だーいげーんてーん！」

「うぐぐ……！ ぜえったい……仕返ししてやるう……！」

「頑張れ頑張れし・い・た・け！ ファイトファイトし・い・た・け！ わあ〜！」

「悔しいい〜……!!」

瑛喰がリズムに合わせて応援する。それもとてもウザイ顔で。見下す様な視線に、この常盤台で最高の派閥の頂点で女王気取ってるお嬢様が悔しそうに歯噛みした。しかも、未だその四肢は地面に投げ出されたままである。

「――隙ありっ！」

「はい残念」

「ああっ……!?!」

寝っ転がりながら瑛喰に向けてリモコンを向け、能力を発動させる

操祈。だが、瑛嗶は操祈の腕がリモコンを取る時点でその行動を先読み、『逸らし』能力を発動していた。再度操祈の能力は見当違いの方向へ飛んで行き、屋上に居た生徒Aに当たった。勿論直ぐに解除されたが。

「なんで……なんでそう都合よくバリアー発動出来るのよお……!」

「実は昔人の気持ちを理解して言葉を届かせる技術を習得しててね」

めだかボックスのスタイルの事だが、瑛嗶は今でもスタイルの基本の部分なら使えるのだ。そう、それは『人の気持ちを理解し、行動を先読みする』というモノだ。まあそれ以上の、言葉を届かせて別次元の力を発動させるのは無理なのだが、それはただの技術なので、出来るのだ。

故に、瑛嗶は操祈の際を衝きたいという気持ちを先読みしたのだ。

「チート! チートずるい!」

「うるさいしいたけ」

「しいたけじゃないんですけどお!」

「操祈ちゃんうるさいよ」

「え………下の名前呼んじやう? ちよ、ちよつと早くなあい……?」

「意外と純粹だなオイ」

瑛嗶が下の名前を呼ぶと、照れ照れと頬を赤くしてもじもじと身体をくねらせた操祈。瑛嗶はそんな操祈の頭に手刀を落として黙らせ、ゆらりと笑った。

「いたあ………え?」

「まだ授業は終わってないぞ? ほら、とりあえず——走れ」



放課後。瑛嗶は一通り食蜂を走りまわせた後、学び舎の園から早々に出て街の中を闊歩していた。実験が中止になったという事は、日く情報収集力だけは高いのお。という食蜂から聞いたので、知っているのだが、当の本人達はそれを知らないらしい。

なので、瑛嗶は一方通行達にそれを知らせるべく彼らを探してい

た。メールを送ればいいのだろうが、一方通行が素直に見てくれるとは限らないので、直接言いに行く判断をしたのだ。

「そういえば俺ってアイテムの一員だったなあ……麦野ちゃん達は今頃何してんだらうね」

瑛嘎は歩きながらそう呟いた。あの第四位からの呼び出しは、今のところない事を見れば、おそらく仕事が入っていないという事なのだろうが、しばらく会ってないと少しだけ気になってくる。とはいえ、今はレベル5巡りという遊びがあるので、優先順位は低いのだが。

「さて、時間は……18時57分か……そろそろ19時だな。常盤台中学って中学校なのに学校終わるの遅くねえ？」

教師としての事務処理もあるが、それでも終わり時刻が随分と遅かった。流星はお嬢様校、他の学校とはそういう部分でも格が違った。

そんなこんなで、ぶらぶらと歩き回りながら街を散策する瑛嘎だが、進行方向から走ってきた人影に足を止めた。ツンツンしたウニ頭の少年。瑛嘎と先日ぶつかって卵が護られた少年だ。名前は、上条当麻。その右手に異能を殺す能力を秘めた、この世界の主人公である。

「はあっ……はあっ……！ アンタ、たしか瑛嘎だったっけ？」

「そうだよ。久しぶりじゃん上条ちゃん」

「小萌先生に聞いたけど……アンタ、常盤台の教師になったって本当か!？」

「まあね。周囲が女子ばっかで羨ましいか」

「聞きたい事があるんだ！」

「おお、スルーか。まあそういうのも悪くない。それで？ 何が聞きたいんだ？」

瑛嘎はなにやら必死の形相の上条当麻に向けてゆらりと笑う。上条当麻はそんな瑛嘎に対して、強い意思の籠った瞳をして、息切れ混じりにこう言った。

「ビリビリ……御坂美琴の居場所を教えてください!!」

既に止まった実験を止めるべく、イメージブレイカー上条当麻は立ちあがった。

## ドツキリ成功を伝える簡単なお仕事

「みこっちゃん居場所? (^o^)」

「ああ……アイツを止めないと……!」

「知りたい? (^o^)」

「頼む! 教えてくれ!」

「じゃあ仕方ないなあ。教えてあげるよっ! (^u^) プススス」  
「……………どうでもいいけど楽しそうだなアンタ……………」

瑛嗶は楽しげに表情を変化させながら上条当麻の相手をしながら、最近購入した iPhone 89s を取り出し、スクリーンをすっすつと指で動かし始める。

「何してるんだ?」

「ん、発信器。この前みこっちゃんに会った時にゲコ太のキーホルダーに発信機仕込んでくれてやったんだ」

「アレ、それ犯罪なのでは……………」

「わはは、今日び発信機盗聴機位風紀委員ジャッジメントでも私的利用してんだから問題なし」

「この街はどうなってるんだ!!」

瑛嗶はタッチした瞬間に切り替わる物凄い電波速度の iPhone 89s を弄り、そして見つけた。御坂美琴の居場所を。かなり遠い位置に居り、ここから移動するとなると、歩きで1時間半程かかるだろうか。とはいえ、瑛嗶としては特に急ぎの用でも無いのでゆっくり歩く事にする。

「じゃあ行こうか上条ちゃん。みこっちゃんのパンツ盗りに行くんだろ?」

「ちげえよ!?!」

「え、じゃあ何しに行くんだよ。俺はてつきり……………」

「俺はどういう風に見えてるんでしょうか!? というかアンタそういう性格だったのかよ!」

「えーでは、一旦コマーシャルです」

「不幸だああああ!!」





瑛夏の！ 通信販売のコーナー！

「えー始まりましたこのコーナー。今日紹介する商品は、こちら！」

『瑛夏の二次元薬』

「はい、此方の薬。飲めばなんと意識だけではなく肉体や衣服含めてまるごと好きな二次元世界に転生する事が出来るという薬です。行きたい世界の漫画やゲームやアニメを服用前に観賞することで行きたい世界を選ぶ事が出来ます。効果は死ぬまで！ よーく考えて、親や兄弟、友達等々全て捨てられる覚悟が出来てから使う様にしましょう！」

「でもお高いんでしょう？」

「神様じゃないか」

「俺も参加させてくれ。ほら値段」

「高い？ そんな事はありません！ 通常価格6870億2900万円  
の所、今回特別価格！ 6000億円でご提供させていただきます  
！」

「わー凄い！」

「お電話は、0120—0000—◇◇◇◇まで！ それではまた来週！」



「はい、コーマシヤルも明けた事で」

「なんだ今の、何だ今の!?!」

「騒ぐな上条ちゃん」

さて、瑛夏と上条当麻はその後バスやら電車やらを乗り換えながら御坂美琴の居場所へと向かっていた。時刻は既に20時37分。空

はもうかなり暗くなっており、街灯や店の明かりが随分と目立っていた。

「で、まだ着かないのか？」

「ん、もうじき着くよ——ほら、あそこ」

瑛嗶の指差した先、そこには鉄橋があり、この時間帯故に誰も通っていない。唯一人、鉄橋の欄干に寄り掛かり、呆然と川を眺める御坂美琴を除いては。

上条当麻は何時もと違う御坂美琴の雰囲気に一瞬たじろいだ。そして、片足が勝手に一歩下がろうとした所で、ドツと何かにぶつかった。それは、瑛嗶の腕だった。

「な……」

「おいおい上条ちゃん。此処まで来て怖気づいてんじゃねーよ。いかねーなら俺が教師としてアイツを補導するけど？」

「……悪い、案内してくれてありがとう」

瑛嗶の言葉に、上条当麻は駆け出した。御坂美琴の下へ走る。瑛嗶はそんな上条当麻の後ろ姿を見て、目を細める。夜だというのに、その姿はどこか眩しく見えた——

「アイツら何してんだろ？」

——ような気がただけだった。何故なら瑛嗶は彼らが止めようとしている実験が、既に中止してしまっている事を知っているのだから。

「ま、いいか。適当な所で中止したこと教えてやろ——と？」

瑛嗶のパーカーのポケットの中で携帯が震えた。電話の様だ。番号を知っているのは自分と一方通行位なのだが、誰からだろうと電話に出た。

『はい、瑛嗶。元気？』

「やあ麦野ちゃんじゃないか。なんだ？」

『とりあえず番号の方は暗部の裏情報で手に入れたと言っておくわね。で、貴方宛てに仕事が来たわよ？』

「どんな？」

『えーと、どっかの研究所からで……なんか『例の実験が中止になった事を第一位に伝えて下さいお願いしますマジで』……だつてさ。第一位といいなんかやったの貴方？』

「えー？ あー、うん。アセロラぶつ飛ばした」

『あーはい、もう良いわ。貴方の規格外っぷりには驚きを通り越して唾然とするしかないわ……じゃ、仕事お願いね』

瑛嗶はその言葉に対して軽い返事をして通話を切った。

「ま、仕事でも言われた事だしね」

瑛嗶はそう言つて、なにやらマジリンチを始めた御坂美琴と上条当麻の下へと歩いていった。

{IMG325}

## 瑛夏の力押し

「俺は、お前とは戦わない」

上条当麻は、御坂美琴の電撃にその能力、『幻想殺し』イマジンプレイカーを使わずに対峙していた。その焼け焦げた身体には何度も御坂美琴の数十億Vの電撃がダメージを与えている。既に満身創痍だ。だがそれでも上条当麻はその右手を振るわない。彼女を救うため、実験を中止するために、彼は彼女とだけは戦わない。

「なん……でよ……私が死ねば、あの子達も少しは気が晴れるわよ……！　なんで……邪魔するのよ……！　邪魔するなら拳を握れ！　戦う気が無いなら立ち塞がるな！」

上条当麻を糾弾する御坂美琴は、その感情の暴走から電撃を溢れさせる。そして、最後の通告だとばかりに上条当麻をその鋭い瞳で射抜いた。だが、それでも――

「戦わない」

上条当麻は彼女に拳を向けなかった。そして、その言葉を聞いた御坂美琴は涙を溢れさせ、その電撃を感情の荒ぶるままに、上条当麻へと叩き付ける。向かってくる閃光と電撃の音、そして遅れてやってきた電撃に上条当麻は眼を瞑った。

「なーにが戦わないだよ。めだかちゃんじゃあるまいし」

だが、その電撃はかくして弾かれる。一人の人外によって、全てが腕の一振りによって薙ぎ払われた。

「なっ………!?!」

「いいかい上条ちゃん。人を救う事に自分を犠牲にしてちゃ世話ないぜ？　結局お前がやってる事はみこっちゃんと一緒だよ」

「アンタは………!」

「おいおい落ちつけよみこっちゃん。ほら、こうしてる間にも実験は

始まつちやうぜ？」

「っ——！」

瑛嗶の言葉に美琴は携帯の時計を見た。時刻は8時50分。実験開始時刻は9時だ。時期に実験が始まってしまふ。そうなれば、またクローンが一人死ぬ。その前に向かわなければならぬ。

「ということ、実験を中止にする為の作戦を伝えてあげよう」

「何…？」

「上条ちゃんが第一位を倒す。これで一応実験は止まるよね」

御坂美琴は先程まで、自分が第一位に負けることで実験を狂わそうと考えていた。今は無き『樹形図ツリーダイアグラムの設計者』の計算では、御坂美琴は第一位に対して187手で敗北するとなっていた。だが、ここで彼女が最初の一手で敗北すれば、かのスーパーコンピューターにも間違いはあると思わせる事が出来るという寸法だ。とはいえ、この作戦は彼女が命を落とす事になり、また実験を中止に出来るとは限らない。

だが、瑛嗶の策は上条当麻というデータ上はレベル0の生徒が、最強の第一位に勝利する事で実験の前提の一つ、『一方通行が最強の能力者であること』というものを崩すのだ。これなら、確実に実験を中止に追い込める。まああくまで実験が続いていければの話だが。

「何言ってるのよ……！ そんなことっ」

「やろう」

「アンタ……!？」

「それで実験が止まるのなら……やってやる！」

上条当麻はその話を呑んだ。第一位に立ち向かうと決意した。

「場所はまあみこっちゃんに聞けや。それじゃ、俺は帰る」

瑛嗶は実験を中止する作戦を伝えるだけ伝えて帰る事にした。二人を置いて、瑛嗶は鉄橋から離れて行ったのだった。

◇ ◇ ◇

「なーんて、帰る訳がない」

勿論嘘である。そもそも一方通行に実験中止の旨を伝える仕事

あるのだ、帰るわけがない。とりあえず瑛嗶は一方通行とミサカ10032号の実験場であるコンテナの積まれた砂利場へやって来ていた。どうやらまだ実験は開始されていないようだが、一方通行とミサカの二人は既に定位置についていた。

現在時刻、20時58分。

「さてきて、どんな会話をしてるのかな？」

瑛嗶は聞き耳を立て始めた。

「なア、オマエらってよオ……なんで俺と戦ってんだ？ 流石に一万近く死んでく間にちったア色んなモン体験して来てんだろ？ その体験したモンの中に楽しいだとか嬉しいだとか思ったこたアねエのか？」

「何を言っているのか分かりかねますが。と、ミサカは首を傾げます」  
「どオなんだよ」

「……」

ミサカ10032号は、最近上条当麻が出会ったミサカである。まあそれ故に上条当麻は実験に辿り着く事が出来たのだが。その際、彼はミサカ10032号と黒猫を愛でたり、抱っこしたりと様々な経験をした。彼はそれを嫌とは感じてはいなかったし、ミサカも黒猫に触れた事は少なからず嬉しいと感じていた。

彼女は一方通行の言葉にその事を思い出す。

「……確かに、最近の出来事を挙げればミサカも胸が暖かいと感じる事はありました。と、ミサカは答えます」

「ンじゃオマエはそれを実験だからってなんで捨てられんだ？ 俺はそれがさっぱり分かんねエンだわ」

「ミサカは実験の為に作りだされた、単価にして18万円の実験動物です。と、ミサカは簡潔に答えます。それより、直に定刻になりますが、準備はよろしいですか？ と、ミサカは確認を取ります」

「……ハア、そオかい。ンじゃいいわもう。アイツとやりあってちったア俺の目指すモンに対して考えるようになったワケだが……やっぱオマエら相手じゃまともな返事も返って来ねエし」

一方通行は瑛嗶と戦ったことで少しだけ考えを改めることを始め

たのだが、それでも根底のミサカ達を人形として見るという意識は未だ根深い様だ。といつても、噛みついてくる不良を殺したりしなくなっただけマシなのだろうが。

「21時00分。第10032次実験を開始します」

ミサカ10032号はそう言つて、武器であるライフルを取り出す。一方通行はそれに対して不満気に首を鳴らした。そして両者が動きだすその瞬間――

ぴりりりり

「……………?」

両者は横から聞こえてきた着信音に動きを止めた。そして、その音の方向を見る。そこには、

「あ、ゴメン俺だ。はいもしもしー? え、実験中止っすか? りよーかいでーす。え、一方通行にも伝えとけて? そんな無茶言わないでくださいよー、幾ら俺がアイツと大親友だからって仕事回すのは違くないっすか?」

瑛嗶が電話を片手に立っていた。しかも、その電話内容が偉く聞き逃せない内容なのが腹立たしい。

「はい。はい、それじゃ」

「オイ、オマエと俺がいつ大親友になったんだよ。てか今の電話誰だよ」

「え、時報だけど」

「オイマジぶぎけんなよコラ」

「というより、先程の実験が中止になったというのは本当なのでしょうか? と、ミサカは確認を取ります」

瑛嗶の行動に二人とも実験を中断して問い詰め始めた。瑛嗶はとりあえずうーん……と考えた後

「マジだ」

「……………ですか、とミサカは何故だか肩の力が抜けました」

「つーかまア予想はしてたけどなア。俺がテメエに負けた時、実験が

続けられんのかどーか考えなかつた訳じゃねエし。ま、こんな実験で無敵<sup>レベル6</sup>に至れるのかどうかも分かんねエし、こんなもんか……」

ミサカと一方通行はそう言つて実験を続ける気が無い事を言外に伝える。瑛嗶はそんな二人にゆらりと笑う。そして、これから此処にやつて来るであろう上条当麻と御坂美琴をドツキりに嵌めるべく二人に協力を要求する事にした。

「という訳で、実験とか言う辛気臭い爺婆達のお遊戯会が終わつた事だし、今から此処にやつてくるヒーローさんとヒロインさんをドツキりに嵌めようと思います。はい拍手」

「はア？」

「どういうことでしょうか？」と、ミサカは説明を求めます」

瑛嗶は簡単に説明した。

まず、一方通行とミサカ10032号が戦闘まがいなチャンバラごっこをする。そこに上条当麻と御坂美琴登場、一方通行が上条当麻と徹底交戦。しばらくした所で瑛嗶がドツキリネタばらし。有耶無耶にする。で、最後に和解を目的とした打ち上げをファミレスで行なおうという感じだ。勿論、ファミレスはレベル5勢にたかろうという魂胆である。

「……くだらねエ」

「何故ミサカ達がそのような考えに加担しなければならないのですか？ とミサカは名前も知らぬ貴方に説明を求めます」

「うるせえいいから黙つて協力しろや殴るぞ」

「はい」

瑛嗶は余りにも理不尽な要望を力押しで通した。一方通行もミサカもその迫力にただただ頷くしかなかったのだ。また、脳波リンクで繋がっているミサカネットワークを通して、生きているミサカクローン全員がその場で恐怖の感情を覚えた事は、別の話。

こうして、絶対能力進化計画は絶対あいづら嵌める計画に変わったのだ。絶対能力進化計画は絶対あいづら嵌める計画に変わったのだ。



落ちて、オチる。

「ミサカ妹から離れろっつってんだ！ 聞こえねーのか三下あ!!」

さて、瑛嗶のドッキリ計画が始まってしばらく。やってきた上条当麻は一方通行の傍でうつ伏せに寝転がっているミサカ妹を見てぶち切れながらそう言った。勿論ミサカ妹は全くの無傷。瑛嗶の持ってきた血糊でそれっぽく怪我人メイクが為されているものの、一方通行が彼女にしている事といえば、能力を使わずに片足を乗っけている位だ。

だがそれだけでも十分上条当麻と後方に控えている御坂美琴の琴線に触れられたようだ。ちなみに、瑛嗶はにやにやしながらコンテナの影に隠れている。

(とりあえず戦えって言われた物の、こっからどオすりや良いんだっつの……)

とはいっても、一方通行とミサカはドッキリがどのようなように進行する物なのか知らない。とりあえず一方通行は上条当麻と全力で戦い、ミサカは邪魔にならない様に御坂美琴の居る場所らへんに退避してなさいと言われたのだ。

(が……コイツと戦う事でお前の何かが変わる、って言ってたしなあ……この三下が何を持ってるのかはしらねエが……戦う価値はある、か)

だが、一方通行はドッキリなど関係無く上条当麻との戦闘に集中するだけでいいと言われており、瑛嗶から上条当麻との交戦が今後の一方通行に何か変化を齎すと言われた。故に、彼はその言葉を信じる事にしたのだ。

「……オマエ、おもしれエな」

「……」

「じゃあまアひとつ相手して貰おうか。精々逃げ回れよ三下ア!」

一方通行はミサカから足を退けて上条当麻と対峙する。ミサカはそそくさと退避を開始した。

「自己紹介しとくぜ、一方通行だ。<sup>アクセラレータ</sup> ヨロシク」

「……上条、当麻だ」

「そかい。じゃあ上条、この世にお別れは済んだか？」

一方通行は両手をゆらアッと広げて吊り上げる様に笑みを浮かべる。上条当麻はそれに対して右拳を握った。御坂美琴には向けなかった、その最大にして唯一の武器を。

「現代アートの風の面白エ死体に変えてやんよ！」

一方通行の言葉で両者が動く。上条当麻は駆け出し、一方通行の懐へ潜り込んだ。だが、一方通行は地面を蹴ってベクトルを変換。その衝撃を増幅させ、地面を爆発させた。飛び散る砂利と砂が上条当麻の身体を打つ。その勢いは、上条当麻の身体を大きく吹き飛ばした。

「ガッ……ぐうっ……!!」

「おつせエなア……そんなンじゃ百年遅エぞ三下ア！」

追撃とばかりに敷かれていたレールを取り外し、上条当麻に向かつて二本、三本と投擲した。風を切って進むレールを上条当麻は転がる様にして躲す。だが、その衝撃は確実に上条当麻の身体に負荷を与えていた。近づくことすらままならない、これがレベル5の頂点。瑛噺と戦った時は分からなかったかもしれないが、元々彼はこの街最強の能力者だ。肉体一つで挑むには圧倒的に強過ぎる。

一方通行の超能力、『ベクトル変換』は基本的に反射として使用されていたが、その本質は力の向きの操作にある。殴られれば殴った方向とは別の方へとその力を流す事でどちらも傷つく事は無く、能力を叩きつけられればその能力を四方八方へ拡散させることでどちらも傷つかない。使い様によっては体内の血液の流れの向きさえも操作出来る能力なのだ。

無論、破壊のみではなく、創造や救助、治癒にもこの能力は使用する事が出来るのだ。彼自身が、そう使つて来なかっただけで。

彼はそれに気付かない。人を助ける事に力を使う事が、怖いのだ。助けられなかった場合、自身の力が破壊にしか使えないと認めるしかなくなってしまうから。だから彼は力を破壊にしか使わない。

逆に、上条当麻の能力、『幻想殺し』<sup>イマジネーションキラー</sup>は、異能の力を打ち消す能力だ。その効果は物理的な物には効かないが、異能の力であれば超能力

だろうが魔術だろうが神の奇跡だろうが打ち消す事が出来るというもの。故に、一方通行同様、基本的に『破壊』の力だ。その使用方法は基本的に人を殺す、ではなく自身を護る、という方向だが。

ある意味、彼と一方通行は似た方向性の力を持つておりながら全く真反対の力の使い方をするのだ。何かを破壊する力を持ちながら、それを破壊する方向に使う一方通行と、それを護る方向に使う上条当麻。同じなようで反対、反対なようで同じ。彼らは良くも悪くも鏡合わせの様な関係なのだ。

故に、瑛瓊は上条当麻と一方通行が戦えば、お互いがお互いに何かしらの変化を齎すと考えた。超能力者と無能力者、主人公と敵役、破壊者と守護者、反対だからこそ得られるモノがあると。

「……………はあつ……………はあつ……………！」  
(分からねエ……………唯の雑魚じゃねエか……………こんな奴と戦って何が得られるってんだ)

一方通行は荒い息を吐きながら此方を睨みつける上条当麻にそう感想を抱いた。自分に近づく事も出来ない無能力者と、そう思った。

だが  
(コイツの眼、全然諦めてねエ……………大抵の雑魚は腕の一本でも弾けばビビって震えあがるっつーのに)  
「はあつ……………はあ……………」

上条当麻の瞳からはまだ闘志が感じられた。最強を前にして諦めていないのだ。その姿には、一方通行も少しだけ興味が湧いた。

「なアオイ三下。てめエはなんでそう命を簡単に賭けられる？ テメエだって命は惜しい筈だろうが」

だから問う。主人公が何故人の為に命を賭けられるのかを。自分という敵キャラには出来ない行為を、何故そう簡単にやってのけてしまえるのかを。

そして、主人公は答えた。当然の様に、当たり前前の様に、それが普通であるかのように、答えた。

「決まってるんだろ……………皆が笑ってられる方が、良いに決まってるからだ……………！」

「アン？」

「これまで何百、何千のミサカ妹達を殺してきた？　そんだけすげえ力があるのに、なんで人殺しにしか使えねえんだ。ふざけんな！　ミサカ妹達だつて生きてんだぞ、必死に生きて、猫に餌やったり、ちよつとした事で言い合いになつたり、普通の女の子らしく過ごせてたんだ！　それをテメエの勝手で殺して良い訳ねえだろうが！　単価18万円だ？　実験動物？　そんなの知った事か！　お前みたいな奴の勝手で一人一人命を持った奴が死ななきゃなんねえなら！　俺は――」

一方通行は眼を見開いた。彼の言葉が、彼の姿が、彼の迫力が、何もかもが眩しかったから。闇の世界で人を殺し、クローンを殺し、襲い掛かってくる輩も、親しくしようとする教師も、同級生も、悪意も、良心も、敵意も、好意も、人望も、権力も、暴力も、善意も、親しみも、何もかもをその反射ではじき返してきた彼からすれば、上条当麻の最弱でありながら足掻き続けるその姿は、なによりも醜くて、何よりも気高く見えた。

「――その幻想をぶち殺す！」

上条当麻が駆け出す。一方通行は動けないでいた。その言葉が、輝きが、遠い場所にある光の様に感じられたから。

――ああ……

上条当麻が拳を握る。

――なるほど、これが……

そして、一方通行の目の前に足を力強く踏み込み

――これが、最弱か。

ずしやつという音と共に一方通行の視界から消えた。

「え？」

一方通行は間拔けな声を上げた。そして、視線を下に向けるとそこには、大きな穴おとしあなが開いていた。

「はーい、ドツキリ大成功！ やあやあ上条ちゃん。いい台詞だったね！ 中二精神溢れるとても感動する演説だったよ！」

そして現れる瑛嗶。どうやら瑛嗶は事前に一方通行の目の前に落とし穴を仕込んでいたらしい。上条当麻はその瑛嗶の言葉にきよとんとしながら土まみれになりつつ呆然とする。

瑛嗶はそんな彼の前に、『ドツキリ大成功！ 実は実験は既に中止だった！』と書かれた看板を、差し出したのだった。

## 打ち上げ

そういえば、ドツキリだった。と、一方通行は頭を冷静に整理して肩の力を抜いた。もしも瑛嗶が止めなかったら全力の拳が自身に迫っていただろうと思い、少しだけ瑛嗶に感謝する。それと、上条当麻と戦った事で、変化があるというのもあながち間違いでは無かったという事もあつて、中々有意義な戦いだっと思った。

逆に、上条当麻はドツキリという事を知つて、呆然とするしかなかった。止めようと思つて張り切っていた実験が、既に止まっている。疑問は疑問を生み、なにも言えない。

「ほら、とつとと出しておいで」

「あ、ああ……」

にゅつと出てくる瑛嗶の手を掴んで、上条当麻は落とし穴から這い出た。そして、そのまま疑問の表情を瑛嗶に向ける。

「えーと……どういふことでせう？」

「わはは、じつはさー……ちよつと前に俺実験止めちやつたらしくて」「えええええ!」

瑛嗶から告げられる衝撃の事実には、上条当麻だけでなく御坂美琴も駆け寄つてきた。

「どういふことよ?」

「いやね、昨日位に俺アセロラとちよつとしたきっかけでバトつちやつて、それで勝つたら実験が止まった」

「……じゃあ、もうミサカ妹達は死ななくても良いのか?」

「そオいうことになるなア」

会話に一方通行も参加する。若干警戒する上条と御坂だが、敵意が無い事を両手を上げて示すと、少しだが、緊張が和らいだ。だが、到底信じられないのも事実。どうすればいいのかとあたふたするしかない上条達。

だが、そんな状態の上条達に、証拠を示す様に、ミサカ10032号が歩み寄ってくる。

「その方の言っている事は事実です。と、ミサカは進言します」

「ミサカ妹!? お前、怪我は!」

「これは血糊です。と、ミサカは自身が無傷である事を示し、ドッキリが成功した事で優越感に浸ります」

「お前ノリノリだな!」

「とはいえ、生きていられるのは驚嘆に値します。喜ばしい半面、戸惑う気持ちがあるのも事実です。と、ミサカは内心の動揺を抑えながら答えます」

「どうやらミサカ自身も内心ではまだ戸惑っているようで、そう言う。瑛嗶はドッキリによつて戸惑う上条達三人を楽しそうに、満足そうに眺めながら、頷いた。

そして、落とし穴を手早く埋め直すとパンパンと手を叩き合わせて土を落とした。

「さて、詳しい話はもう少し落ち着いた所で話そうか。実験中止を祝って打ち上げしようぜお前の奢りで」

「オイコラ、さり気なくたかつてンじゃねエよ」

「レベル5なんだから金持ってたんだろ。奢れよ」

「……………チツ、仕方ねエな」

瑛嗶の言葉に反抗した一方通行だったが、今回の件で瑛嗶に感じる感謝の念もあつたことから、素直にその頼みを受け入れた。御坂と上条も詳細を聞きたいとその打ち上げに参加する事にした。当然、ミサカもだ。

「それじゃ、行きますか。ファミレスでいいよね」

瑛嗶の言葉を皮切りに、瑛嗶達は近場のファミレスに向かって歩き始めた。レベル5が二人に、片方のクローンが一人、教師が一人、そして無能力者が一人と、中々に奇抜なメンバーが歩く様は、全員を知っている者から見れば、中々面白い光景だった。



で、無事にファミレスのテーブルに座っている瑛嗶達。そして、事の顛末を全て瑛嗶から説明された上条当麻達は、くてつと椅子の背も

たれに力無く寄り掛かり、大きく息を吐いた。

御坂美琴は、実験が本当に終わった事への安堵から、上条当麻はこれ以上ミサカ達が死ななくても良いのかという事実への安堵から、そして、ミサカと一方通行は長い話が終わったことで、身体の力が抜けたのだ。

「という訳で、ここらで一旦関係を修復しようか」

「……どういふ事よ」

「みこっちゃんのアセロラ。お前らちよつと仲直りしろよ」

「……それは無理だろ。俺はクローンとはいえコイツにとつての妹を一万近く殺して来てんだ、今更仲良くなんて虫が良過ぎるだろ」

「そうよ。私だって、こいつを許すなんてありえない」

一方通行と御坂美琴はそう言っつて仲直りを拒否する。

「馬鹿言うな。俺は別に仲良くしろっつてんじゃねーよ。とりあえず、恨み辛みはおいといて、復讐云々するのはよそうぜつて話だよ。別に許せなんて言っつてない」

「……成程、そういう事ね。……良いわ、私はアンタを許さない。でも、私はこの件でアンタに復讐しようなんて思わない。それで良いわね?」

「ああ、お前は俺を許さなくていい。俺はコイツを一生背負つて生きて行く」

御坂美琴と一方通行はそう言い合つて、睨み合いながら握手をした。この先、彼女達に分かり合う時は無いだろう。彼女達が笑いあう事も無いだろう。だが、それでも彼女達がこの一件を巡つて殺し合う事もまた、無いだろう。

死んでいった一万とんで三十一のクローン達は、それを許すかは分からない。だが、それでも死んでいった彼女達の命を一方通行は背負う覚悟を決めたし、御坂美琴は彼女達の分まで一方通行を許さない事を決めた。それでいい。二人の関係は、それくらいがちょうどいいのだ。

「さて、これで一件落着きただし。何か食おうぜ、折角の奢りなんだし。ほら、上条ちゃん、お前も好きだけ頼め」



「え、あ、ああ……えーと」

瑛嗶と上条の会話に、一方通行と御坂美琴は苦笑した。深刻な話をしていた後に、もうこんな軽いやり取りになっている。瑛嗶のゆらりとした笑みを見ると、それも彼の持つ超能力なのではないかと思えてくるのだ。

あらゆるものに『触れる』能力は、見事に一方通行の心に触れ、妹達シスターズの命に触れ、御坂美琴の想いに触れ、上条当麻の正義に触れた。そして、それらを一番平和で一番平穩で一番幸せな結末へと導き、そしてこの状況を作りあげて見せた。

実験を行い、殺して来た者と、実験を知り、止めようと心を削ってきた者と、他人の不幸を知り、それを救おうと拳を握った者、そして、実験を行なう為、殺されてきた者が、こうして一堂に会して共にご飯を食べている。決して、それぞれがそれぞれを許した訳ではない。仲良しこよしでやって行こうという訳ではないが、それでもこの瞬間、この光景は、確かに全員が幸せを感じる時間だった。

「ん？ どうしたよ、みこっちゃんにアセロラ」

瑛嗶は自身を見ていた美琴と一方通行に笑いながらそう言う。そんな瑛嗶の言葉に対して、美琴と一方通行は一瞬視線を合わせ、笑いながらこう言い返した。

「みこっちゃん言うな、馬鹿」

「アセロラじゃねエよ、アホ」



その後、ファミレスから解散。各々自分自身の家に帰る事になった。一方通行は他のメンバーとは別方向で、ファミレスからは一人。瑛嗶と上条当麻は同じ方向故に一緒に帰る事に。そして、ミサカと美琴も同じ方向なのか一緒に帰って行った。

「……でもま、ちゃんと実験が止まってよかったよ。ありがとな、瑛嗶さん」

「あれ？　さん付けるんだ？」

「よく考えたらアンタ俺より年上だよな。教師やってるくらいだし。だからだ。でもまあドツキりに嵌められたから口調はそのままで行く」

「案外根に持つタイプなんだな、上条ちゃん」

瑛嗶と上条当麻はそんな会話をしながら歩いていた。空はどつぷりと暗く、街灯の光のみが彼らを照らしていた。

「あ!？」

「どうしたよ」

「…………インデックスのこと忘れてた…………!」

「インデックス？」

「居候のシスターなんだけど…………夕飯準備せずに出て来ちまったからきつと怒ってる…………!」

瑛嗶はそんな上条当麻の言葉に面白そうに笑った。頭を抱える上条当麻に、瑛嗶は思い付いた様に提案する。

「あのさ、頼みがあんだけど」

「な、何だ？」

「家、泊めてくんない？」

「……………はあ!？」

瑛嗶は自身の帰る家がまだ無い事に気づいたのだ。アイテムの拠点に帰るのも良いのだが、ここからだとしし遠い。今日はもう動きたくないので、このまま上条当麻の家に泊めてもらおうという魂胆だ。

「それに、俺きやくがいればそのシスターも無為に怒れないんじゃないかね？」

「よし分かった。じゃ帰ろうか瑛嗶さん」

「わはは、見事な手のひら返しだよ。そういうの好きだぜ上条ちゃん」  
瑛嗶と上条当麻は、若干楽しげに上条宅へ帰って行く。



また、御坂美琴とミサカは同じ道を歩きながら、若干気まずい雰囲気を出しつつも会話していた。

「……あのさ、アンタも私を許さなくても良いからね」

「どうしてですか？ と、ミサカは問います」

「どうしてって……それは、私のせいでアンタ達は実験に……」

「確かに、ミサカはお姉様の提供したDNAマップから生まれ、これまで殺される日々を送ってきました。しかし、それでもミサカ達がこうして此処に存在出来る理由も、またお姉様がDNAマップを提供してくれたおかげです。と、ミサカはお姉様に向かって真剣に言います」

ミサカは美琴に対して、微笑みながらそう言う。だが、空が暗いせいでその微笑みは美琴には見えなかった。それでも、彼女はつづけて美琴に言う。

「あの少年が言っていたように、此処に居るミサカが一人のミサカなのです。今回の件を通して、ミサカはそれを理解しました。一方通行が言っていた、感情というものがミサカ達にも確かにありました。それは、とても素晴らしい物ではないですか？ と、ミサカは自身の手を見ながら言います」

「そう、ね……」

「だから、少なくともこのミサカはお姉様に対して憎しみや恨みは抱いていません。ああ、いえ……これは今生きている全てのミサカ達の総意です。ですから、お姉様は誇って下さい。ミサカ達が生まれる事が出来たのは、他でも無いお姉様の『おかげ』なのですから。と、ミサカは頭を下げます」

ミサカの言葉に、美琴は眼を見開いて、涙を浮かべる。そして、それを見られない様に拭った後、ミサカに背を向けてボロボロと涙をこぼしながらも、笑みを浮かべた。嬉しかったのだ、そう言ってくれた事が。今まで恨まれて当然と思つて来た彼女達が、自身に感謝を抱いてくれたこと。そして、実験動物と自身達で自称せずに、一人一人に命があるのだと分かつてくれた事が、何より本当の意味で自分を姉と慕ってくれた事が、たまらなく嬉しかったのだ。

「そ、そう！ なら、良いわ」

「泣いているのですか、お姉様。と、ミサカは分かっている事を確認するためにお姉様の表情を覗きこみます」

「ちよ、ちよっと！泣いてないわよ！」

「はははー、とミサカは反応の良いお姉様をからかいながら逃げます」  
逃げるミサカと、追いかける御坂。その光景は、客観的に見ても、姉妹のようであった。

◇

一方通行は暗がりの中、一人歩いていた。途中で寄ったコンビニで缶コーヒーを購入し、いつも通りに自宅へ戻る。だが、気分はそう悪くなかった。

無敵へとなれるチャンスが潰れたというのに、それを後悔する事も無く、むしろ清々しい気分だった。無敵と評すに相応しい瑛噎と、さいぎょう最弱と評すに相応しい上条当麻。この二名と戦い、それを通して自身の中の何かが変わった事が、分かっていたからだ。今はもうクロールを殺せと言われても拒否するだろうし、殺人以外の平穏な方法で無敵になれると言われても拒否するだろう。

「なんなんだろうなア……この一方通行も甘くなっちゃったかア？  
アクセラレータいや、甘くならされた、かア？」

そう呟くも、その口元は笑みを浮かべていた。そして、現在の時刻を確認するべく携帯を取り出す。

「23時12分……か……つと……」

携帯をしまおうとして、また開く。そして、アドレス帳の一番上に何故か登録してある瑛噎のアドレスを見た。そして、操作しながら削除のボタンを押す。

すると、『本当に削除しますか？ Yes/No』の表示が出る。一方通行はYesの部分にカーソルを合わせ、決定ボタンを押そうとして、少し躊躇う。

「……………チッ」

一方通行は携帯をパツとしない待ち受け画面に戻し、携帯を閉じると、ポケットに仕舞った。

「本当に、甘くなつたもんだなア……でもま、悪くねエ気分だ」

一方通行はそう言って止まっていた足を動かす。そのポケットの中の携帯には琺瑯のアドレスが削除されずに入っていたのだった。

## 御使墮し編

### 閑話 禁書目録との邂逅

実験中止のドッキリを伝えた翌日。瑛嗶は上条当麻の家で眼を覚ました。時刻は既に午前5時30分、学生達が起きるにはまだまだ早い時刻だ。瑛嗶はとりあえず、iPhone89sを取り出して操作を始める。情報操作をするのだ。実験が中止になった原因は、瑛嗶が一方通行を倒したのではなく、上条当麻が倒したということにするのだ。でないと、後々面倒事が転がり込んでくる事になるのだから。元より瑛嗶は実験を止める為に戦ったのではなく、実験が止まったのは瑛嗶の予期して無い事態だったのだから。

「~~~~♪ つと、こんなもんかね？ さて、後は……電話電話つと」

大まかな情報操作を終えて、瑛嗶は適当な番号を押して携帯を耳にあてた。しばらくコールが鳴り響いた後、ぷつと音がして相手が応答した。

『……私はこの番号を教えたつもりはないのだがな、イレギュラー』

「俺の勘は百発百中なので」

『そ、そうか……それで、何の用だ？ こんな朝早くに』

応答した相手は、アレイスター・クロウリー。瑛嗶は適当な勘でボタンを押し、見事に彼の持つ番号の一つを叩き出したのだ。この現象を、『めだかボックス式番号抽出法』と呼ぶ。あの世界ではパスワード等は全て適当に押せば正解するという現象が多々起こる。それが此処でも起きたただけだ。

「情報操作を頼むわ。俺じゃなくて、上条ちゃんがアセロラ倒した事にしといて」

『ふむ、まあいいだろう……対価はなんだ？』

「対価？ そうだな……それじゃあお前の依頼を一つだけ受けてやるよ。何かあるか？」

『成程、仕事には仕事で返そうという訳か。ふむ、それでは依頼しよう。その幻想殺しと共に一時学園都市の外へ旅行へ行つて貰おうか』

上条当麻が一方通行を倒した、という事になれば当然各方面で騒ぎになるだろう。そこで、アレイスターは上条当麻は一時的に学園都市の外へ追いやって、ほとぼりが冷めるまで待機させておこうと考えたのだ。故に、それに瑛唄を同行させる。そうして瑛唄を魔術サイドへ関わらせようという魂胆だ。

「オツケー。じゃ、頼んだぜ」

『承った。精々頑張ると良い』

瑛唄とアレイスターはそう言って通話を切った。番号は直ぐに削除され、別の番号へと切り替わる。一つの連絡ルートをいつまでもそのままにしておくほどアレイスターも馬鹿では無いのだ。

「……さて、この事をアイテムの皆と常盤台中学に連絡しとかなないと」  
瑛唄は再度携帯を取り、アイテムと常盤台中学へと連絡を取り始めた。

◇ ◇ ◇

それから二時間ほど経って、瑛唄に起こされた上条当麻は瑛唄が作った弁当を持って学校へと出発して行った。恐らく、今日中には外出の件を伝えられるだろう。瑛唄は常盤台中学に連絡した所、そういう事なら今日は仕事も無いので休んで良いと言われたので、今日は休みだ。故に、上条宅で寛いでいる。

ただそれは一人で、ではない。瑛唄の目の前には猫を抱き抱えながら此方を見ている真っ白いシスターがいた。上条当麻曰く、インデックスという名前らしい。

「……インデックスちゃん」

「なにかな？ えーと、おうか」

「なんで君はそんな針のムシロを着てんの？」

瑛唄の問いに、インデックスは固まった。

インデックスは普通のシスターとは違って、白地に金色の刺繍の入った修道服を着ている。だが、それは布と布を安全ピンで留めただけの、針のムシロだったのだ、布と布を繋ぎ合わせただけの様なもの

だ。勿論元々こんな風な訳ではない。インデックスのこの修道服は、魔術的な技術で作られた服だったのだ。正式名称『歩く教会』と呼ばれ、絶対防御の結界を服の形にした最強の防護服だ。

しかし、それは上条当麻が右手で触れた瞬間ビリビリに破れ、結界の機能を失った。結果、安全ピンで縫い合わせてなんとか服の形を取り戻したのだが、それはただの服以下の物になってしまった訳だ。

「それは聞かないで欲しいかも……」

「そう。まあいいけど……それ、縫い合わせてやろうか？」

「え？」

「いや安全ピンだらけじゃなくて、ちゃんと縫って服にしてやろうかと言ってるの」

瑛嘎の言葉に、インデックスは笑顔になった。猫を横に置いてテールを乗り出し瑛嘎にキラキラとした眼を向けてきた。

「いいの!? 本当に良いの!? ありがとうなんだよ! おうか!」

インデックスはいそいそと服を脱ぎ始める。そして、瑛嘎が自身の着ていたパーカーを手渡すと、裸の上からそれを着た。やはりサイズが大きいので下が無くても膝上15cm位の部分まで十分隠れていた。

「ふむ……」

瑛嘎は安全ピンだらけの服を見て、とある知識を頭の中から引っぱり出した。

瑛嘎が転生する際、最初に神様に頼んだ特典は『人間の習得できる全ての技術』。これは、この世界において魔術や超能力には身体との相性の問題で応用出来ないが、服を作ったり、料理を作ったりといった物においては十分に発揮する事が出来る。

それは勿論——『歩く教会』を作る『技術』においても同じ事だ。

元々、彼女の『歩く教会』という修道服は、かの聖人イエス・キリストが十字架に貼り付けられ、処刑場で処刑人ロングヌスに槍によつ



て殺害された時、キリストの死体を包んだ『トリノ聖骸布』を正確にコピーした物なのだ。

ちなみに、その際使用された槍は、使用者であるロンギヌスの名前を取って『ロンギヌスの槍』と呼ばれていたり、槍を刺した部分から溢れ出た血液を受け止めた器があり、それが英霊の出てくるアニメでも有名な『聖杯』と呼ばれていたりするのだが、それは別の話。

まあそんなわけで、正確な計算と技術によって精巧に縫い合わされた修道服は服単体が魔術的な意味を持ち、法王級の絶対防御を持つ修道服へと変貌する訳だ。上条当麻はその魔術的意味を『イマジネブレイカー幻想殺し』で打ち消し、服を破壊したのだ。

故に、その修道服の繋ぎ目を精確に、精密に、精巧に、魔術的な意味を持たせられる様に縫い合わせることで、『歩く教会』は修復する事が出来るのだ。

「じゃ、始めようか」  
「？」

インデックスは瑛嘎の言葉に首を傾げる。彼女は『歩く教会』が復活するとは思っていないのだ。服が針のムシロから普通の服に戻る程度の考えなのだ。

だが、瑛嘎はその常識をふっとばす。裁縫セットを取り出し、白い糸を針に通して安全ピンで止まっていた部分を縫い合わせて行く。魔術的意味を失わず、元々の修道服と同じ効力を持たせられる様に、精密に縫って行く。

「！」  
それを見つめるインデックスは、縫い合わせた部分から復活している魔術的要素に眼を見開いた。

（これは……！　歩く教会がどんどん直されてく……!?　どういこうと!?)

インデックスがそう考えている中でも、瑛嘎の手は止まらない。

そして、瑛嘎がパチンと糸を切る音と共に——『歩く教会』は復活した。

「ほれ」

「う、うん……ありがとう……って違うよ！　なんで歩く教会を直せるのか教えて欲しいかも!？」

「知らね」

「嘘つけええ!!」

「いいじゃないか、直したんだから」

「む……確かにそうだけど……はい、パーカー返すんだよ」

インデックスはパーカーを返し、修道服を手早く来た。

「とりあえず、ちよつと殴ってみて欲しいかも」

「はいよー」

ズガアアアアアアアアアアン!!!　と轟音と共に部屋が振るえ、寮が振るえた。インデックスの腹を殴った音だ。

「ちよ、ちよつと！　そんな軽い返答でめちやくちやなパンチは無いと思うんだよ!？」　一瞬あ、私死んだと思っちやっただよ!!」

「だって殴れっというから」

「限度があるって言ってるんだよ！　というかお腹に少しダメージいってるんだけど!？　どんな威力!？」

どうやら瑛嗶の8割威力のパンチはインデックスの歩く教会を貫く事に成功したらしい。とはいえ、軽くお腹に子供の突進喰らった程度の威力だったらしいが。

「はいはい悪かったよ。ご飯作ってやつから許せよ」

「む……し、仕方ない、許してあげる。私は心が広いからね!」

インデックスは無い胸を張ってそう言った。

「それに、なんで貴方が魔術的な意味を持ったまま縫い合わせられたのか教えて欲しいかも」

「ああ、それはね。イエス・キリストの死体を包んだトリノ聖骸布を作ったの俺だもん」

「はあっ!？」

そう、瑛嗶は以前イエス・キリストに会った事がある。お忘れだろうか？　世界は違うが、瑛嗶は氷河期に生まれ、地球滅亡まで生きた世界がある。そう、めだかボックスだ。瑛嗶はこの世界でイエス・キリストに会った事がある。というか友達である。彼が宗教的な

救世主だの呼ばれていた時、瑛嗶は彼に出会い、何かの拍子に「こんど何か贈り物でもやるよ」とか言った矢先、彼が処刑されたのだ。

故に、瑛嗶は贈り物として死体を包む聖骸布を作った。そしてその三日後、死体を盗み出し、スキルで復活させたのだ。これが、キリスト復活の正体である。その後、聖骸布は誰かに回収され、キリストは何処かへ消息不明となった。

という訳で、瑛嗶は『歩く教会』のオリジナルを作っていたのだ。故に、『歩く教会』が聖骸布のコピーだと知識の中から引っ張り上げた時、直せるなど考えたのだ。結果、直った訳だが。

「貴方……何歳？」

「およそ4兆歳？　普通の人間だった頃を含めれば………およそ4兆歳？」

「数が多過ぎて変わってないかも!!」

「証拠もあるよ。ほら」

「こ、これは……!」

瑛嗶は懐からとある冠を取り出した。インデックスはそれを見て、驚愕する。

彼女の頭の中には、10万3千冊の魔導書の知識が一言一句存在しており、その知識の中からその冠があるとある聖遺物のオリジナルだと理解出来た。

### 『いばらの冠』

イエス・キリストが処刑される際に被らされた冠である。死体となったキリストを蘇生させた際に回収したのだ。

「ね？」

「納得いかないかも!!」

インデックスはぶつとびすぎた瑛嗶の言動と、それを裏付ける証拠に崩れ落ちた。

## 小萌先生、無双

八月二十八日。実験が止まった一週間後、瑛嘎とアレイスターの情報操作によって学園都市外にある海辺の旅館『わだつみ』に、実験のほとぼりが冷めるまで居て下さいという事で、上条当麻とインデックス、そして泉ヶ仙瑛嘎はやってきていた。やって来たのは昨日なのだが、着いた時には既に夕方を過ぎていたので、大人しくしていたのだ。

そして今日はその翌日。なんと、上条当麻の両親がやって来るらしい。学園都市外に来たという事もあって、普段会えない息子に会いに来るとのこと。上条当麻は朝早く起きて両親を旅館前で待っていた。

「当麻ー！」

「あ……」

「元氣そうだなあー！」

「あ、ああ……父さんも」

さて、ここで教えておこう。上条当麻は、七月二十八日以前の記憶が一切ない。記憶喪失では無く、記憶破壊と呼ばれ、今後一切記憶が戻る事は無いらしい。

そんなことになったのは、同居人であるインデックスを救ったのが原因だ。前回言ったが、彼女の頭の中には十万三千冊の魔導書の知識があり、魔術サイドではかなり危険視される怪物なのだ。故に、魔術サイドの上層部は、彼女に首輪の魔術を施し、一年ごとに記憶を消さなければ死ぬという枷を付けた。インデックスは一年ごとに記憶を消され、上層部から嚴重に管理されてきたのだが、そこでその首輪を破壊したのが上条当麻だ。

インデックスの喉の奥にあった首輪の術式をその右手で破壊し、暴走したインデックスの攻撃を、彼女の記憶を消しに来ていた魔術師二人と協力して凌ぎ、なんとか首輪の魔術を破壊する事に成功したのだ。だがその結果、暴走した彼女の魔術であり、歩く教会すら突破できる攻撃魔術、『竜王の息吹』<sup>ドラゴンブレス</sup>の余波で生み出された『羽』が上条当麻の頭に触れ、その日以前の記憶を消し飛ばしたのだ。

故に彼は家族の記憶も、それ以前に知り合った人の記憶も、思い出

も全て失っている。故に、父親と再会しても初対面同様なのだ。

「母さんたちは？」

「ああ、いとこの乙姫ちゃんと一緒にそろそろ来る筈だ」

父、上条刀夜がそう言うと、上条当麻を呼ぶ声が近づいてきた。そしてその方向を見ると、駆けてくるオレンジのワンピースを来た少女が見えた。その無邪気さに上条当麻は笑みを浮かべたが――

「おにーちゃんーん!!」

その少女は、御坂美琴だった。

「はあっ!？」

「ああお兄ちゃん会いたかったよお〜!」

そして抱き着いてくる御坂美琴。上条当麻は戸惑うばかりだ。

「な、なんでお前が此処に!？」

「あらあら、当麻さん的には久しぶりに会う乙姫ちゃんに抱き着かれるのは恥ずかしいのかしら？」

そんな上条当麻の後ろからそんな声が聞こえ、彼が振り返るとそこには……………お嬢様っぽい格好をしたインデックスが頬に手を当てながらそこに居た。

◇ ◇ ◇

上条当麻はとりあえず、戸惑いを抑えつつ父親達を旅館に連れてきた。瑛嘎とのやり取りでそういう予想外な出来事に耐性が付いていた様だ。だが、旅館に入ると女将の格好をしたミサカ妹が出迎え、従業員の格好をした、上条当麻と一緒に暴走したインデックスを止めるべく共闘した魔術師の一人、ステイルⅡマグヌスが土下座で挨拶をしてきたので、もはや上条当麻の頭はパンク寸前だ。

「どういふことだ!？」

「ふあ〜……………あ、おはようとうまー!」

そして、そこへ追い打ちを掛けるが如くやって来たのは、インデッ

クスの修道服を着た上条当麻の同級生で、変態の青髪ピアス。女の子の様な仕草をする背の高い男性というのは、異常なまでに気持ち悪かった。そして、そこへトドメとばかりにやって来たのは――

「おはよう上条ちゃん。とりあえずうるせーから黙れ」

そんな汚い暴言を吐きながら階段を下りてきた、瑛唄と同じ格好の月詠小萌だった。

「どういうことだあああああああ  
!!!!!!」

上条当麻の絶叫が響き渡った。

◇  
◇  
◇

さて、上条当麻が戸惑っている中、瑛唄は自身の身体の変化に気が付いていた。どうやら今現在の瑛唄の姿は他人から月詠小萌に見えるらしい。ついでに、瑛唄からみてもインデックスや上条当麻のいとこの姿はおかしいと感じられている。

「ふむ……ま、いつか」

だが、瑛唄は特に気にしなかった。ぐいっと身体を伸ばして欠伸を漏らす。身体に支障は無いのだから、これでもいいと思ったのだ。

「さて……この現象の原因は何かな？ まったく、面白いことやってくれるじゃないか」

瑛唄はそう言って、小萌の顔でゆらりと笑った。

## 小萌先生の魔術サイド入り

さて、月詠小萌もとい瑛噎は現在、海にやって来ていた。メンバーはとりあえず上条当麻、インデックス、上条家御一行だ。姿形が全くの別人に見えるからと言って、とりあえずは本人達なようなので、戸惑いながらも上条当麻は海へと連れて来られたのだ。

という訳で、現在インデックスの姿をした上条母と御坂美琴の姿をした上条当麻のいとこ、龍神乙姫、そして上条当麻の同級生である青髪ピアスの姿をしたインデックスがそれぞれ女物の水着を着て遊んでいた。

まあいい。インデックスや御坂美琴の姿をした上条母と乙姫は良い。だが、180cm程の大柄な男性がインデックスの持ってきたとても可愛らしい子供用水着を着ていれば、とんでもない醜悪な姿になる事をご理解いただけるだろう。

また逆として、小萌先生の姿をした瑛噎が、男物の水着——つまりはトランクスタイルの水着を着た場合、どうなるか分かるだろうか？

つまり、『ロリ』な『女』教師が『男物の水着』を着る訳だ。当然、上半身に付ける水着などありはしない。

まあ言ってしまうえばつるぺたおっぱい絶賛露出中という状況が生み出される訳だ

「上条ちゃん、日差しが眩しいな！」

「すいませんホント申し訳ないんですがパーカー着て下さいお願いします!!!」

上条当麻はそんな月詠小萌の姿を見て顔を真っ赤にした後全力で土下座をし、そう懇願した。瑛噎としては特に羞恥心を抱く様な場面でも無いので大々的に上半身を開放していたのだが、姿の入れ替わり現象に対して何故か認識出来ている上条当麻からすれば、その姿はあ

まりにも刺激的すぎたのだ。

「とはいえ、俺や上条ちゃん以外の奴らは認識出来てないんだ。この現象は」

「はあ………どういう事かは分からないけど、何かが起きてる事だけは事実だな」

「ふむ………まあ俺の姿が小萌ちゃんなのは面白いと思うけどね」

瑛嗶はパーカーを着て上半身を隠す。が、前は閉じないので風が吹けば普通におっぱいが晒される。上条当麻のドギマギは未だに続いていた。

「いっそのこと成りきってみようかな。んんっ！ あーあー、上条ちゃんおーけーですかー？」

「やべえ！ 小萌先生だ!! さっきまでは瑛嗶さんの声だったのに小萌先生だ！」

「声帯模写は一般教養なのですよー」

「いや絶対違うでしょ!?!」

瑛嗶は声帯模写を利用して、声まで小萌先生になりきっていた。ちよつとした仕草や口調まで完璧に真似ることで、上条当麻には目の前に本当に小萌が居る様に感じられた。

「さてさてー、それじゃあ上条ちゃん。この現象の犯人ちゃんを探しに行くのですよ」

「あ、はい。小萌先………瑛嗶さん」

「ふふふ、別に小萌先生と呼んでもオーケーですよ？」

「いや、ここで呼んでしまったら俺は何かを負ける気がするんで良いです」

瑛嗶と上条当麻は遊んでいる父親達に一言告げて、海辺を離れるのだった。



「夕日がきれいですねー上条ちゃん」

「ああ、なんの情報も得られなかったけどな」



瑛嘎の言葉に、上条当麻は肩を落とした。その後、瑛嘎と当麻は周辺を歩き回って何か無いかと情報収集をしていたのだが、なんの情報も得られなかった。現在、海辺近くの坂道を登りながら一望できる夕日を横目にそんな会話をしていた。

相変わらず瑛嘎は小萌の真似をしている。小萌の容姿を利用したおねだりの結果、上条当麻は食べ歩き代金を全て払わされてしまったのだが、やはり少女の綺麗な眼差しには弱いのだった。

「んむ?」

「どうした——つて……あれは……?」

瑛嘎と上条当麻の視線の先、そこには一人の少女がいた。金髪の髪をウエーブにして、真っ赤な防災ずきんの様な被り物に、腰に下げた鋸や金槌等の工具、明らかにおかしな格好だった。

だが、記憶喪失の上条当麻はその姿を見て、知り合いなのではないかと考え、考えなしに声を掛ける事にしたらしい。

「よっ! ひやし!ぶ——りっ!」

「駄目ですよー、そんな凶器を振り回しちゃ」

「っ!」

その少女は鋸を上条当麻の首筋に宛がおうとして、瑛嘎に捻りあげられた。上条当麻の視界には、拘束具を身に付けた凶器装備の金髪少女をロリ教師が踏みつけている光景があった。なんだこの珍百景は。

「あれ? もしかして知り合いでしたか? 上条ちゃん」

「い、いや——」

「いやあ、間に合ってよかったぜ——よっ!?! なんで此処に小萌先生が!?!」

上条当麻の言葉を遮って聞こえてきた男の声が、驚愕の声に染まった。瑛嘎と当麻はそちらへ視線を向ける。すると、そこには上条当麻の同級生である土御門元春が一人の女性と共に佇んでいた。ツンツンした金髪にサングラス、更にはアロハシャツという奇抜な格好は、やはりというか怪しかった。また、隣に佇む女性も白いTシャツをへそが見えるほどにめくって結び、履いているジーパンは片足が脚の付け根の辺りでバツサリ切られている。やはり怪しい。

「土御門!?! お前なんで此処に!?!」

上条当麻が驚愕の声を上げた。そして、上条当麻の言葉から名前を知った瑛嗶は小萌の声でこう返した。

「奇遇ですね土御門ちゃん。お隣の女性を見るに、デートですか? 不純異性交遊は先生認めませんよ?」

「い、いやあの先生? これはデートとかではなく、なんとというか……!」

「うん? そんなに慌ててどうしたのですか土御門ちゃん。先生は別に怒ったりしてませんよ? ただなんでこんなところにいるのか理由を聞いているのです」

「や、はい、そうなんですがにやー……言いづらい理由があつてその……!」

「成程ー、つまり土御門ちゃんは不良になっちゃったわけですね……先生悲しいのです……ぐすつ」

「あああ! 泣かないで欲しいにや小萌先生! 別に俺は何もやましいことはしてないぜよ!」

瑛嗶の演技に土御門はダツシユで駆けよつて弁解を始める。上条当麻は瑛嗶の演技力の高さにただただ脱帽していた。

「まあいいのです。とりあえずくたばれ生徒T」

「ぐはっ!?! もはや名前すら呼んでもらえないとは……!!」

「ほらほら、道の途中で項垂れられても通行の邪魔なのです。クズ野郎は肥溜めにでも突っ込んで出くださいねー」

「うげつ……! せ、先生に踏まれる時が来ようとは思ひもしなかつたにやー……! しかも結構力強い!?! めっちゃ痛いぜよ!」

「あ、あの……すいません。私はその金髪の彼女とかではないので、放してあげてくれませんか?」

瑛嗶が項垂れている土御門を、今はすすべの小さな足で踏みつけていると、女性の方が居たたまれずそう話しかけてきた。

彼女の名前は神裂火織。かつて、上条当麻、ステイルIIマグヌスと共に暴走したインデックスを救うべく共闘した最後の一人である。しかも、その実力は世界でも指折りの物で、神の力を一時的に使用出

来る人間、『聖人』である。その力を使えば、膨大な力を振るう事が出来る程だ。

「そうなんですか？　じゃあ放してあげます。ほら起きやがれゴミ」

「先生の俺への扱いが酷過ぎて心が折れたにやー……」

「で、この変態集団は何処の何宗教なのですか？」

「我々はそこに居る少年。上条当麻に用があつて来たのです。現在、世界規模で起こっている大規模魔術の影響を解決するのが我々の目的です」

大規模魔術。それも世界規模の魔術だ。

彼女と土御門は一旦瑛噎が捻りあげた少女を落ちつかせ、なんとか交渉の場を作りあげ、その説明を行なった。

要約すると、現在世界規模で魔術が発動しており、その影響で全世界の人間の姿と中身が入れ替わっているということ。辛うじて土御門と神裂は結界を張ってその魔術を防ごうとしたらしいが、瑛噎と同じで外見は入れ替わってしまったらしい。そして、周囲の人の外見も入れ替わっている様に見えるようだ。

そして、この魔術の中心に上条当麻の存在がいたらしい。つまり、彼女は上条当麻が術者ではないかと疑っているのだ。その証拠に、上条当麻は姿が入れ替わっておらず、入れ替わっている筈の神裂と土御門の姿がちゃんと認識出来ている。証拠だけなら揃っていた。

とはいえ、彼には魔術の知識は無く、幻想殺しもある。幾ら証拠が揃っていても、術者には足りないのだ。

「我々はこの魔術を便宜上、『御使墮し』エンゼルフォールと呼んでいます」

「この魔術は、通常人間が干渉出来る筈の無い天使や神の居る世界、天界に干渉し、天使をこの世界に墮とす。その結果、墮ちてきた天使は自身の入る器を見繕うんだ。結果、天使が墮ちてきた影響で全世界の人間の中身が入れ替わったって訳だ」

「……なるほど、それで術者を探してへーこら頑張ってるって訳か。わはは、精々頑張れば？」

「なあかみやん……小萌先生なんでこんな毒吐くの？　俺内心ボロボロぜよ」

「いや、こいつ小萌先生の姿をした別人だから。中身男だから」

「なにっ?!? 男だと?!? 俺は男に踏まれてちよつと喜んじやった訳か?!? うわー……死にてえ」

土御門はそう言つて崩れ落ちた。瑛嗶はそんな土御門の頭に再度その小さな足を落とした。

さて、ここで状況を整理すると、まずインデックスが何故入れ替わり現象を受けたのか? 『歩く教会』が復活している以上、この魔術の影響は受けないはずなのだ。だが、彼女は昨夜、旅館の浴衣を着て過ぎたのだ。つまり、運が悪かったというべきか。

そして、瑛嗶が何故中途半端に影響を受けたのか。それは瑛嗶の危機察知が自身に迫る魔術に気付き、咄嗟に『触れる』能力を無意識に発動させたのだ。結果、5秒間だけその入れ替わりの性質を無効化された『御使墮し』エンゼルフォールは中途半端に瑛嗶を入れ替わせたのだ。上条当麻は言うまでも無く『幻想殺し』イマジンプレイカーで打ち消したのだ。

「まあともかく、上条当麻が術者である可能性は極めて低いでしょう。何せ、彼には異能の力を打ち消す力、『幻想殺し』イマジンプレイカーが宿っているのですから」

神裂は当麻を疑つて襲い掛かって来た拘束具の少女、ロシア正教の殲滅白書のメンバー、ミーシャクロイツェフに対してそう言った。

対して、ミーシャはその言葉に少し考えた後、水を操る魔術を行使し始めた。

「数価、四十・九・三十・七、合わせて八十六——」

彼女がそう唱えると、後方にある海から水が猛り狂い、蛇の様に動いた。

「照応。水よ、蛇となりて剣の様に突き刺せ」

そして、その水は勢いよく鋭い剣となって上条当麻へと迫る。

「——くっ……?!?」

だが、その水は上条当麻の右手に触れ、甲高い音と共に消し飛ばされた。

「回答一、これを持って容疑消失の証拠とする。少年、疑惑の念を向けた事を此処に謝罪する」

「あ、ああ……」

イマジンブレイカー  
「幻想殺しを体験するために攻撃か……ま、いいか」

瑛嘎はその光景に対してそう呟いたが、小萌の姿ではジト目幼女になるだけだった。

「さて、容疑も晴れた所で。この魔術を止める方法は二つ。術者を倒すか、またはこれほどの大規模な魔術を発動する為に必要な儀式場を破壊すること。これだけです。今だこの魔術は未完成の様ですし、今ならばまだ間に合います」

「かみやんがこの魔術の中心であることには間違いないぜよ。だから、これからはかみやんの近くでしばらく行動を共にする。いいかな？」

「いいですよー。ただ私には近寄らないでくださいね、ゴミが」

「かみやん……なんか俺ちよつと小萌先生に貶されんの癖になってきたにゃー……コレ大丈夫かな？」

「駄目だろ」

上条当麻はそんな土御門元春にたいして、冷たくそう言い放った。

「しかし……上条当麻が我々を正しく認識しているのは分かるのですが……彼女、いえ中身は彼ですか、彼が我々を正しく認識しているのは気になりますね」

「ああ、それはまああれですー。私にも上条ちゃん程じゃないけど魔術云々を無効化出来る能力があるんですよー。ただ完全には防ぎ切れなかったみたいですねー」

「なるほど……」

神裂は瑛嘎の言葉に少し考えつつも、とりあえずは納得するのだった。

{  
I  
M  
G  
3  
3  
7  
}

あくまでも、姿は小萌先生である

さて、入れ替わりの原因である世界規模級の広範囲魔術『御使墮し』エンゼルフオールが露見した事後の事。取り敢えず、神裂を上条家族に紹介して午後十時。ちなみに、結界で防いだとはいえ瑛噺と同じく彼女達も姿は入れ替わっているようで、神裂はステイルⅡマグヌスに、土御門は名前の与えられた幸運なモブキャラ、人気アイドルひとつい「一」の姿になっているようだ。

で、現在だ。小萌姿の瑛噺は上条達とは行動を別にして、旅館『わだつみ』の屋根の上でいつも通りの格好をしつつ、胡坐を掻いていた。吹き抜ける夜風に眼を閉じて、集中している所だ。

瑛噺としては、別に肉体にこだわりはないので、この姿として認識されようが別に構わないのだが、世間の眼からして女性として過ごさないといけないのは少し面倒だった。故に、犯人探しには協力の姿勢を見せている。

というわけで、瑛噺は瑛噺なりのやり方で犯人探しをしているのだ。極限まで集中し、自然とほぼ一体になる。余りにも自然と溶け合っている瑛噺に、普段は警戒心の強い筈の小鳥が近寄り、野良猫が瑛噺の膝の上で丸まっていた。

瑛噺のやっているのは、周辺の警戒だ。元々、様々な世界でスキルや念能力、魔法、ギフトと様々な能力を使って来た瑛噺だ。魔術だなんだと言われても、結局はそれを構成する魔力等の要素がある。その動きを察知する事くらい、容易い。この場合は魔法だが、元々は瑛噺も魔力を扱っていたのだから覚えがあるのだ。

「……………」  
瑛噺はすうっと眼を開いた。その視線の先には視界に移る物以外の何かが見えている。

「……世界規模、されど個人にとっては小っせえ世界だね」

瑛噺はそう呟く。世界規模の魔術、確かに凄いスケールの凄い魔術だ。だが、それは誰から見た凄いのだと瑛噺は吐き捨てる。瑛噺からすれば、世界規模と言われてもその影響は自分を中心に小さな範囲

でしか認識出来ない。神様ではないのだから、結局世界規模だろうが小規模だろうが結局の所、同じ魔術だ。

「さて、犯人さんは随分と予想外な人間みたいだ。全く、拍子抜けだぜ」

瑛噎はつまらなそうに片目を閉じ、退屈そうにそう言った。そしてごろっと寝っ転がり、さも小さな問題とばかりに欠伸を漏らしたのだった。



上条当麻と土御門元春、神裂火織はそれぞれ疲れを癒すべく束の間の休息を取っていた。上条当麻は自室で、神裂はステイルの姿である故に、男湯で汗を流し、土御門はその間見張りをしていた。

「あれ？ 土御門ちゃん、何してんの？」

「小萌先生……いや、中身は瑛噎、だったか？ いやいやねーちゃんが風呂に入ってる間の見張りぜよ」

「へー、じゃあ私もお風呂に入るのですー。土御門ちゃん、見張りお願いしますねー？」

「はーい！ って待て待て！ アンタ中身は男だろ!? ねーちゃんが入ってんだって！」

「大丈夫ですよ。今は小萌先生なので」

「おいおいおいおい、姿が幼女である事を良い事に覗きしようとしてますよこの人！」

瑛噎はそんな中、風呂場へ突撃しようとして土御門に全力で止められた。まあ冗談なので素直に引き下がったが、土御門はなんとなく瑛噎に対する苦手意識を抱いていた。

「さて、土御門ちゃん。この『エンゼルフォール御使墮し』の犯人、分かったのかな？」

「いや、皆目見当も付かないぜよ。情報も無し、手かがりも無いわけだしにゃー」

「まあ俺は犯人分かったけどね」

「やっぱり分からないよn……ん？」



「……じゃ、おやすみー」

「待てオイ。犯人分かったってどういうことかにやー？」

去ろうとする瑛嗶の肩をがしつと掴む土御門。絶対に逃がさない  
とばかりに力が込められていた。

「簡単な事だよ。とりあえずはヒントをあげよう……上条ちゃんの  
引っ越し先に行つて見ると良い」

「どういうことだ？」

「俺が全部教えたら面白くないだろうが。少しは自分で無い知恵絞  
れ」

「……世界中の人間が危険に晒されるのかもしれないんだぞ」

瑛嗶の言葉に土御門は少し怒った風に言った。だが瑛嗶はその苛  
立ちすらも纏めて面白いとばかりに笑う。土御門はその笑みに少し  
気圧されたのか、一歩後ろに足を引いていた。

「それがどうした。逆に、それくらいやってくれなきや——面白  
くないだろう」

瑛嗶はただひたすらにこの状況を楽しんでいた。面白くて、嬉しく  
て、楽しい。この世界の全てが彼にとつては娯楽なのだ。世界規模の  
魔術事件、随分と楽しい展開ではないか。これを楽しまずして娯楽  
主義者は名乗れない。瑛嗶の人間性は、こういう物なのだ。

「っ……お前、何者だよ」

土御門は瑛嗶のその人格に恐怖を感じた。これはヤバい、人間とは  
全く異なつてしまつている。故に、アレクスター・クロウリーと同様  
の恐怖を抱いた土御門は、瑛嗶が何者かと聞いたのだ。人間では無  
く、化け物の様な理性を失い、力を振るうだけの存在でも無い。化け  
物以上の力をその身に宿し、それを理性的に振り回す存在。それはま  
るで——

「泉ヶ仙瑛嗶。面白い事が大好きなだけの、唯の『人外』だよ」

瑛暎はそう言って、月詠小萌の表情で、ゆらりと吊り上げる様に笑った。

## 小萌先生の授業

事態は、急展開を見せていた。

事件の犯人を突き止める事が出来たのだ。

翌日、瑛嗶のアドバイス通り、上条当麻と土御門元春、そしてミーシャ・クロイツェフは神裂を旅館において上条家族の引越先へ向かった。そこには海外へ数多く出張する上条刀夜、つまりは上条当麻の父親が毎度の如く購入してくるお土産グッズが所狭しと並べられていたのだ。

土御門元春は、魔術師。それも陰陽道のエキスパートである。故に、そのグッズが風水において魔術的な意味を持ってしまっている事に気が付いた。つまり、上条当麻の新家がこの『御使墮し』エンゼルフォールの儀式場だったのだ。

そして、上条当麻は気付いてしまった。家に飾られていた写真の中で、上条刀夜の姿が入れ替わっていない事を。この魔術の入れ替わり現象は、過去の記録の姿まで入れ替わらせる訳ではない。現在の姿が魔術によって『容姿A』から『容姿B』に替わっていたとしても、過去に『容姿A』の状態で撮影した写真や動画には、魔術が発動した後も『容姿A』として映るのだ。ここで問題なのは、写真上に移る上条刀夜の姿は元々の『容姿A』でありながら、魔術が発動した後に会った彼の姿もまた『容姿A』だということだ。

この魔術の中で入れ替わり現象が起こっていないのは、上条当麻の様な例イレギュラー外を除けば、術者のみ。

つまり、この事件の犯人——術者は、上条当麻の父親。上条刀夜だったのだ。

そして、現在。上条当麻と土御門元春は急いで旅館『わだつみ』に戻るべくタクシーに乗っていた。何故なら、上条刀夜が術者と判明した途端、あのロシア協会の一員、ミーシャ・クロイツェフが高速で術者を殺しに向かったからだ。

彼女は事件の犯人を始末するべくやってきた者だ。つまり、上条刀夜が一般人であろうとなかろうと、関係無く、術者であるという事実

に基づき抹殺する。それを止める為に上条当麻達は急いでいるのだ。

故に、急展開なのだ。上条当麻にとっては最悪の事態、ミーシャにとっては最高の好機、土御門元春にとっては都合が悪い展開、神裂火織にとってはまだ知らぬ事態、そして――

「やあ親父さん。ちょっと俺とお話ししようぜ」

「君は――当麻の知り合いの方だね」

あの人外、泉ヶ仙瑛嗶にとっては、いつもと同様に面白い展開だった。誰よりも早く上条刀夜が犯人だと辿りつき、誰よりも早く上条刀夜に接触した。瑛嗶はゆらりと笑う。

「なあ親父さん。アンタ、今めちやくちや酷い状況に巻き込まれてるけど、どう思う?」

「どういう事だ?」

「アンタは命を狙われているってことだよ。そうだな、少なくとも後一時間ちよいでアンタ殺されるんじゃないか?」

瑛嗶の言葉は軽い。下手をすれば冗談なのではないかと思える位に簡単かつ軽く放たれた。だが、上条刀夜はその言葉を嘘だと思いう事が出来なかつた。何かの冗談だろうと思つた、嘘だと考えた。だが、その考えが確定するまでに本当だと思えた。

「そうか……それで、君はそれを私に伝えてどうしたいんだ?」

「どうもしないよ。俺は人間相手に戦うのにはちよつと飽きて来ただけだよ」

「……当麻は、どうしてる? なにか関係しているんだろう?」

「まあね。だがそいつは本人から聞けばいい。なんせ、血の繋がつた親子だ。俺にはもうそんな人はいないけど、多分大事にしなきゃいけないモノなんだと思うくらいには、深い絆があると見てるぜ?」

瑛嗶は少し視線を後ろに向ける。そしてそれにつられる様に上条刀夜もそちらを見た。そこには、上条当麻が、息を荒くしながら鋭い視線を放ちながら立っていた。

◇ ◇ ◇

「どういうことでしょうか？」

「んーまあ犯人があの父親さんだったんだよ」

瑛噺と神裂は上条親子が話しあっている中、その光景を眺めながら会話をしていた。神裂にこの現状を全て説明し、しかる認識をさせた瑛噺は、そのくりくりした瞳を動かし、上条当麻達に近づく存在に気が付いた。

「……………なあ火織ちゃん。ちよいと頼みを聞いてもらっても良いかね」

「なんででしょうか」

「上条当麻の新居……………まあ儀式場だね。ちよつと吹き飛ばして来てくれ。儀式場をまとめて吹き飛ばせばこの事件は終了だ」

「まあ良いですが……………その間貴方は何を？」

「決まってるじゃないか」

神裂から見ても、小さな矮躯と桃色の髪、そしてすべすべの肌をした幼女、月詠小萌の姿をした瑛噺は、可愛らしく笑って、トントンとつま先で地面を叩く。そして、その可愛い顔に似合わない吊り上げる様な笑みを浮かべてこう言った。

「あのロリを至極個人的な理由で補導するんだよ。俺は今、教師だし」

その視線の先には、ボールを構えたミーシャークロイツェフが砂を踏みしめて佇んでいた。

◇

ミーシャークロイツェフという名の人間は、実はロシア協会には存在していない。本来存在しているのはサーシャークロイツェフという名の少女だ。そして、彼女がこの事件解決に動いている魔術師、神

裂や土御門に偽名を名乗る理由はない。

故に、彼女は本来のサーシャ・クロイツェフではない。その正体は、入れ替わった人間である。そう、サーシャ・クロイツェフの姿をした、何者か。その正体は、この大魔術の名前にも出ている。

『エンゼルフォール御使墮し』——つまり、この人間の世界へ堕ちて来た、『天使』だ。

その名は、『ガブリエル神の力』。神より名付けられた四大元素を司る天使の一角である。つまり、彼女自身が堕ちて来た天使。そして、天使は元の世界へ帰る為に術者を殺そうとしているのだ。

「さて、上条父を殺すのはまあいいんだけど——その前に俺とこっちよ喧嘩しようぜ天使さま」

「……………」

「アツキさん！」

「よー上条ちゃん。さくつと親父さん連れて逃げな。ほら漫画とかによくある、俺に任せて先に行け、って奴だ」

「……………悪い！ 父さん、こっちだ！」

「と、当麻!? これは一体どういう——」

アツキの言葉に上条親子は逃げた。追おうとするミーシャに対して、アツキはただ何もせず視線を送った。背中を見せたら、殺す、という殺気を込めた視線を。

すると、ミーシャはその殺気に反応し、動きを止める。アツキを視界に捉え、一瞬たりとも放さない。彼女の瞳は、天使が入っているのが分かるほど冷たく、そして赤く輝きを秘めていた。ミーシャがその身体をアツキの方へと向けると、途端に空が暗くなった。まだ完成していない魔術によって呼びだされたからといって、天使は天使。その力は地球の半分を焦土へと変えられる程だ。

彼女はまず、自身が最も戦いやすい環境を作ることから始めた。つまり、時間帯を夜へと変えること。『天体制御』位、やってのけるのだ。「おーおー、流星は天使。俺も吸血鬼や人外や蟻や魔王や人間や獣人

や神の類なんかと戦った事はあるけど、天使は初めてだぜ。まーだからどうしたってわけじゃねーけど……この展開はかなり、面白い」

瑛嘎の言葉と同時に、ミーシャの背から水の翼が生えた。巨大な水の翼が広がり、瑛嘎個人を殺す為だけに、その力を集中させている。

「さて、始めましょうか天使ちゃん。先生のありがたい授業の時間ですよ。オーケーですかー？」

瑛嘎はそんな天使という名の脅威を眼の前に、月詠小萌の姿で笑った。

{IMG342}

## 小萌先生のありがたい授業

天使、『神の力』ガブリエルは水を司る天使であり、常に神の後方を守護する者。故に、その力が存分に発揮されるのは水場及び月の加護が発生する夜である。なので、彼女はその膨大な力で『天体制御』を行ない、強制的に戦場を夜へと変えて見せた。

対する人外、瑛嗶は得意とする戦場など無い。むしろ、どの戦場であらうともその順応性の高さ故に適応してみせる。故に、夜だろうと海辺だろうと関係は無かった。

そして、現在。『神の力』ガブリエルはその属性である水を操り、凶悪な水の翼を展開。瑛嗶へとその翼を叩きつけていた。連続して響く轟音と、同時に広がっていく『一掃』という、世界を焦土へと変える術式は、世界の終わりへと近づくカウントダウンのようだった。

だが、翼を叩き付けるだけで浮いた状態のまま動かない天使に対して、瑛嗶もまたその場から一歩たりとも動いていなかった。

瑛嗶の開発によって手に入れた能力。『逸化精神』リザイエススピリットが発動しているのだ。

次々と飛来する水の翼の攻撃は全て瑛嗶を捉える軌道から逸れ、砂浜にザクザクと刺さるだけ。この状況が現在10分ほど続いていた。瑛嗶としては能力の維持に対してかなり意識を取られており、天使としてはその能力の壁を突き破ろうと攻撃を続けるのみ。

だが、この均衡は直ぐに崩される事になる。瑛嗶が地面を蹴って天使に肉薄する。逸らす能力がその効果を発揮し、接近する瑛嗶に対して水の翼は一切届かない。

「瑛嗶式——いや」

瑛嗶は瑛嗶式戦闘術を繰り出そうとして——ゆらりと笑った。あくまでこの状況も瑛嗶の娯楽なのだ。そして、現在瑛嗶の姿は月詠小萌なのだ。つまり、瑛嗶が思い付いたのは、

「小萌ちゃん式一の奥義——『幼災張手』！」

「——！」



瑛嗶はそう言つて、ミーシャの姿をしている天使の頬に、その小さな手でビンタをぶち込んだ。スパァン!! と甲高い音が響く。瑛嗶のビンタで天使の身体が空中でぐらつくが、飛んでいる為衝撃が逃され、そこまでのダメージは与えられなかったようだ。

「おお……思い付きだったけど、結構いい音鳴ったな……今度小萌ちゃんに伝授させようかな」

「!!」

一撃を貰つた事で怒りを買つたのか、天使がその翼を動かして今までは威力が段違いだと分かる巨大な一撃を繰り出してきた。瑛嗶は現在、空中に居る。避けるのは不可能だった。普通の人間ならば。

「あつぶね……!」

瑛嗶は『触れる』能力を使って、空気を蹴つた。神による肉体の改変のせいで変わったのは食欲や睡眠の必要性だけでなく、肉体の耐久性においても同様だった。以前の様に身体能力任せで空を蹴ると、その反動で脚にかなりの負荷が掛かる様になってしまっている様だ、今では能力を使用しなければこんな真似は出来ない。

そのせいか、少しだけ人外染みた身体能力を使いきれない。本来の実力を10とすれば、今の瑛嗶が引き出せるのは大体7割程度だ。とはいえそれでも人外染みているのだが。

「あー痛えな。俺の全力に耐えられる身体じゃなくなったみたいだ。全く、神様も面倒な改変をしてくれたもんだ——面白い」

瑛嗶はとっさの行動だった故にその身に余る速度で空を蹴つてしまった故に、脚を擦りながらそう呟く。案外、瑛嗶が思っていたより瑛嗶の弱体化は強いようだった。

「だからこそ、瑛嗶式で更に手加減してんだけどな」

「——」

「ああ、悪い悪い。無視してたわけじゃないぜ、ほら続きた。掛かってこいよ天使ちゃん?」

瑛嗶の言葉と同時に、天使が初めて飛行した。水の翼を羽ばたかせ、唸らせ、飛沫の音を響かせる。そして、瑛嗶の懐に高速で潜り込んだ。

「——瑛嗶式」

「！」

『裂駆』えー！』

「——っ」

だが、瑛嗶はほぼ反射で天使が懐に入ってくる前に、天使の低く下がった頭より姿勢を腰を落とし、カウンターの下方回転蹴りを打ち込んだ。だが、天使はそれを翼を動かして瑛嗶の上を飛び越える様に躲す。

視線が合う、そして一瞬お互いの身体が硬直し、視界に映る世界がスローモーションの様にゆっくりと流れた。そして、その硬直が解けた瞬間にゆっくりとした世界が元の速度で動きだす。

瑛嗶と天使は前へと飛び、お互い反対方向へ距離を取った。そして、即座に反転。高速で接近する。

速かったのは、天使。本来の瑛嗶の速度ならまだしも、今の瑛嗶の出せる速度では天使の飛行速度に対して、少しだけ遅かった。

「——」

「いいな、俺とやり合える相手は久々だ。弱体化もそういう意味じゃ——悪くない」

天使の翼が枝分かれし、大量の攻撃となって瑛嗶に迫る。瑛嗶はその翼を逸らし、弾き、躲し、薙ぎ払いながら天使に接近する。未だにお互いが無傷。だが決定的に違う点がある。

天使の力は尽きる気配が無く、瑛嗶の『逸らす』能力はいずれ使えなくなるということ。

瑛嗶の『逸らす』能力は学園都市の開発によって手に入れた能力だ。故に、その発動は演算によって成り立っている。つまり、永遠に使用する事は出来ず、使い続ければ脳の疲労によって効果が小さくなり、最終的には一時的に使用が不可能になるのだ。それはレベル5であろうと同じこと。

「この緊張感、若い頃を思い出すな」

」  
迫る瑛嗶に、今度は天使がカウンターを繰り出す。背中から直接生えていた巨大な水の翼本体を上から叩き潰す様に瑛嗶へと叩き付ける。だが、瑛嗶はそれを『触れる』能力で掴み、握力で握りつぶす。

「まだまだ遅いぞ、天使ちゃん」

「っ——！」

「小萌ちゃん式奥義、『ファーストシヨッピング初めてのお使い』！」

瑛嗶は握りつぶした翼を引っ張り、天使の体勢を崩す。そして、翼を引かれた事で必然的に背中を見せる天使に、瑛嗶は掌底をその背に叩き込む。その衝撃が背中から腹へと貫通し、空気を振動させる。天使の口からカハツと空気が吐き出された。

「……………」

天使が海へ落ちる。瑛嗶も砂浜へと着地した。

「ふう……………ん？」

瑛嗶が空を見上げる。暗い夜だった空は『一掃』の術式が崩れて行くと同時に夕方の茜色に戻っていく。どうやら切り良く神裂が上条宅を吹き飛ばしてくれたようだ。儀式場が破壊された事で、天使も元の世界へと戻っていく。視線を戻せば海に落ちた天使はふらふらと立ち上がり、光の粒子となって元の世界へと昇って行った。そしてそれと同時に、瑛嗶の姿が小萌から元の姿に戻った。

「どうだい天使ちゃん。幼女も中々、強いだろ？」

瑛嗶はそう言って、いつもの姿でゆらりと笑った。

## 閑話 小萌無双の裏側で

時間は少し戻って、瑛噺が天使と戦闘を開始した頃。上条親子と土御門元春は旅館の一室にいた。そして、土御門元春と上条当麻は現在進行形、まあ読者視点で言えば過去進行形になる形で敵対していた。

理由は一つ、土御門元春が上条刀夜を殺そうとしていたから。当然、上条刀夜の息子である上条当麻は反抗する。記憶が無かろうが、術者であろうが、父親である事には変わりはないからだ。だが、術者を殺さない限りこの魔術は止まらない。この場合、大多数の人間が見れば、世界を救う側として、土御門元春はどこまでも正義であり、術者を庇う上条当麻は、父親を護るためであつても悪だった。

だが、上条当麻は父親を護る一心で世界を捨てようとしている訳ではない。父親を生かしつつ、世界も救いたいという、至極甘っちょろい考えをしているのだ。

当然、ただ右手に異能を破壊するしか出来ない能力が備わっているだけの男子高校生に、世界を救うなど不可能だ。まして、自身の父親ですら護れそうにも無いのに。

土御門元春は魔術師。以前も言った様に陰陽道のエキスパートだ。しかも、魔術に特化している訳では無く、対人格闘術にも長けていた。学園都市風に言うのなら、身体能力と超能力を併せ持つ能力者、という訳だ。故に、上条当麻が殴りかかろうが掴みかかろうが一切通用しなかった。

殴ろうとすれば躲され、空ぶつた隙に後頭部を打たれる。掴み掛ろうとすれば真下に殴られ、下がった上半身を膝で蹴りあげられる。しかも、悉く人体の急所を的確に打ち貫く技術に、上条当麻は早くもグロッキーだ。

「止めろっ！ これ以上当麻に手を出すな！」

「ほお、お前程度の一般人が俺に勝てるんでも？」

「思っちゃいないさ。だが、私は上条当麻の父親だ！ 息子に手を出すようなら、私はお前を許さない！」

だが、反抗するのは上条当麻だけではない。息子を痛めつけられて

黙っていられるほど、その父親は弱い精神をしていない。

「止める……！　土御門！」

「下がってろ素人が」

蹲りながら呻く上条当麻に、土御門は冷たく吐き捨てた。

「いいかかみやん。ちよつと詳しく状況を説明してやる」

「……………」

「この魔術、『御使墮し』<sup>エンゼルフォール</sup>の術者は確実に上条刀夜だ。それも、無自覚な。そして、儀式場はかみやんの新居。あの場所にあつたお土産の数々を見ただろう？　あれは単体では特に意味を持たないが、置かれた場所において風水的に魔術的意味を持つ。風呂場には水の守護獣である亀の置物があつたし、台所には金を司る白虎、玄関には赤いポストの置物、合計3000ものお土産がそれぞれ意味を持っていた。

そして、それらは一種の魔術回路を生み出し、上条夫婦が家を空けたのを切っ掛けに、この『御使墮し』<sup>エンゼルフォール</sup>が発動した。だが、恐ろしいのはこの魔術が本当に偶然の偶然で発動したってことだ。あの儀式場には場合によっては別の魔術が発動する可能性が数多く存在し、たまに発動したのが今回の入れ替わりだった訳だ。故に、あの儀式場のお土産を一つ動かしたただけでもつと恐ろしい魔術が発動する事もあつたんだ。

だから、儀式場は全てのお土産を、それこそあの家ごと吹き飛ばしてしまわない限り、無数の魔術を発動させるんだ。だから、残った停止方法は術者の殺害。つまり、上条刀夜の殺害って訳だ」

これが、土御門元春が上条刀夜を殺す理由。上条刀夜が殺される理由。世界の為に、魔術師は一人を切り捨てるのだ。

「分かったか？　この魔術を根本から解決するには一人を生贄に捧げなければならぬんだよ」

「……………」

上条当麻はふらふらと立ち上がる。土御門の言っている事は理解出来た。納得もしている。確かに、この事態を止めるには上条刀夜を殺すしかないのかもしれない。

だが、それを分かった上で、理解した上で、納得した上で、それで

も上条当麻は受け入れる事は出来ない。

「それでも、この人は俺の父さんだ。この世界でたった一人の俺の父さんなんだ！ だから父さんは殺させない、殺させる訳にはいかない！ その為なら土御門、お前と敵対しようが世界を滅ぼそうが関係ねえ！ どうしても誰かが犠牲にならなきゃいけねえってんなら、その幻想をぶち殺す！」

「……………吠えたな。良いだろう、これより上条当麻は土御門元春の——敵だ」

土御門は歯を見せて笑った。サングラスの奥の瞳が、凶悪に輝いた。

「おおおおお!!」

「遅いぜよ」

「がっ…………ぐふっ…………!!?」

だが、それでも、上条当麻の拳は、土御門元春には届かない。踏み込もうとした上条当麻の足を踏みつけ、上条当麻の体勢を崩した土御門は、前のめりに倒れる上条当麻の鳩尾に拳を叩き込み、息を吐き出す上条当麻を投げ飛ばした。たったそれだけで、上条当麻は立ち上がれない。どれほど立ちあがろうとしても、身体が動かない。どれだけ吠えようが、どれだけ努力しようが、所詮素人は素人、プロ玄人には勝つ事は出来ない。

「当麻っ！ くっ…………うあああああ!!」

「ハッ」

「ガッ…………あ、ああつ……………!」

上条当麻がやられて、上条刀夜は土御門へと迫る。しかし、彼もまた上条当麻同様の素人。隙だらけのボディに土御門が拳を叩き込むと、そのダメージで倒れこんでしまった。

「さて…………と。それでは皆さんお待ちかね、種も仕掛けもある手品をお見せしましょう——」

土御門元春は、面倒事は終わったとばかりに息を吐き、懐から出し

た紙吹雪をばら撒き、『魔術』を行使する下準備を始めた。

そう、能力開発を受けて、魔術を使えば拒絶反応で身体が壊れて行くにも関わらず――

◇ ◇ ◇

一方その頃、神裂火織は上条宅に辿り着いていた。見知らぬ他人の家を吹き飛ばしてしまうのは少し気が引けるのだが、この際仕方が無かった。

「家を吹き飛ばす為に『唯閃』を使う事になろうとは思いませんでしたよ」

頬を掻きながら微妙な顔をし、自身の愛刀であり、身の丈以上の長刀、『七天七刀』を抜刀術の要領で構えた。そして、自身の内に秘められた『聖痕』<sup>ステイグマ</sup>を開放し、一時的に神の子と同じ強力な力を使う事が出来る状態になった。

神裂火織は、世界に20人といないとされる、生まれた時から神の子に似た身体的特徴・魔術的記号を持つ人間、『聖人』である。彼女達はその身に宿す魔術的記号『聖痕』<sup>ステイグマ</sup>を開放する事で、一時的に人間を超えた力を使う事が出来るのだ。しかも、魔術を行使していない状態でも、幸運がヤバイなど、なんらかの加護を持っているらしい。

『唯閃』はその力を使った際の必殺奥義の様なものだ。一撃必殺の技みたいなおものである。

「では――『唯閃』！」

神裂の腕が一瞬ぶれて、次の瞬間にはその刀が鞘から抜き放たれており、更に振り切られていた。

そして、一拍後。上条宅は衝撃波と共に吹き飛んだ。

「――ふう……これで今回の事態は収拾を迎える筈……あの方は天使をお仕置きするとか言っていました……大丈夫でしょうか」

◇ ◇ ◇

「まずはめんどくせえ下拵えから、働け馬鹿共。青龍、玄武、白虎、朱雀——」

神裂が儀式場を破壊した頃、土御門元春は魔術の準備を進めていた。その身体からは血液が噴き出し、既に拒絶反応で満身創痍だ。

「お前……………何を……………!」

「言っただろ、かみやん。この事件は誰かが犠牲にならないといけな  
いってよ」

「まさか……………!」

土御門は、元々上条刀夜を殺すつもりは無かったのだ。自身を犠牲にして、儀式場を魔術で吹き飛ばすつもりだった。だが、そんな事をすれば上条当麻は止めるだろう。だからこそ、こうして叩きのめす必要があったのだ。

「知らなかっただろうけどなかみやん。俺って実は——「あれ?」  
……………は?」

これを上げたのは、上条刀夜。

「あんた、誰だ?」

「は?」

「さっきまではテレビで見たことある様な姿だったのに……………今は金髪  
にアロハシャツと随分とファンキーな格好に……………」

「……………」

土御門は魔術の発動を一旦止めた。そして、窓に歩み寄って、海辺  
を見る。

「……………うん」

「どうしたんだよ……………土御門」

「いやね、なんかしらねーけど。『御使墮し』エンゼルフォール止まったみたいだにやー」

「は?」

「ほら、見てみるよかみやん」

上条当麻はふらふらと立ちあがって土御門の隣に歩みよって海岸  
を見た。そこには、少し前に見た瑛嘎の姿があり、ゆらりと笑いな  
がらこちらに手を振っていた。いつのまにか天使の姿は無くなっ  
てる。



「……………どういふことでせう?」

「んー…………シラネ」

上条当麻と土御門元春は、なんとなく達観したような表情を浮かべた。そして、とりあえずオチを付ける事にした。

「夕日が綺麗だな! かみやん! 俺血塗れだけど!」

「取り敢えず救急車呼べよ!」

こうして、上条当麻と土御門元春は神裂火織と瑛嘎によって解決された『御使墮し』エンゼルフォール事件に、遠い眼をするのだった。

## 打ち止め編 ジエンガ

八月三十一日、夏休みの最終日であり、馬鹿な学生達は総じて宿題の消費に精を出している日だ。瑛嗶達もあの大魔術が終わって既に学園都市に帰ってきてから二日が経ったという訳だ。

とは言っても、今はその三十一日に入ったばかりである。午前0時24分、八月三十一日はまだ23時間と36分も残っているのだ。当然空は暗く、コンビニやファミレスの明かりが目立つ時間帯。そんな時間、暗い夜道を、学園都市最強のレベル5、一方通行は歩いてきた。好物である缶コーヒーを大量に購入して帰る途中なのだ。

あの妹達の一件以降、一方通行は少しだけ変わった。突っ掛かってくる不良を叩きのめす事には変わりはないが、自分を最強とは思わなくなっていた。そもそも自分が負けを認めた相手が二人もいるのだ、最強を名乗る訳にも行かないだろう。あの最弱の彼が最強足る素質を持つている事を認め、あの無敵の彼が人外足る証拠を認めたとはいえ、一方通行も馬鹿じゃない。自分があんな風になれるとは欠片程も思っていない。

上条当麻が主人公なら、自分は精々悪党が限度だろうと認識している。上条当麻は光の世界の住人で、一方通行は闇の世界の住人なので、あつちから。

自分の能力が依然として破壊にしか使えないというのは、最早確定事項になっているし、救済の為に使う勇氣も無いのだ。だから、悪党なら悪党らしく、破壊する事で救える物もあるのではないだろうか、と思う様になったのだ。

「……………はア……………」

ため息を吐いて、空を見上げた。夜中に相応しい黒々とした空は、不安を誘う様な暗闇を作り出し、恐怖を誘う様な枯れ尾花を作りあげる。だがしかし、それでも夜空に浮かぶ散りばめた様な星々は、やっぱり美しかった。

ただ、自分の思っている事はこの星空の様な矛盾を成立させなければならぬ。恐怖や不安を誘うのに、それでも輝きを放つ存在。そこに至るまでに、どれ程の苦悩が待ち構えているのか、果たして自分に辿り着ける領域なのか、さっぱり分からない。

「やっぱ、俺もどっか変わっちゃまったみてエだなア……」

「なにが変わっちゃったの？ って、ミサカはミサカは訪ねてみたり」「あん？」

「やつほー！ って、ミサカはミサカは元気よく挨拶してみる！」

一方通行は後方から聞こえた幼い声に、怪訝な顔で振り向いた。そして、そこには汚いボロ布を巻いた小さな子供が立っていた。ちよこんと見える足は、裸足で靴すら履いていない。フードの様に頭まで巻いているので顔は見えないが、ストリートチルドレンとでも言いたげな風貌の子供がそこに居た。

「……何だオマエ」

「おお！ ちゃんとコミュニケーションが取れた事にびっくり！ って、ミサカはミサカはテンションを上げてみたり！」

「？ 待てよ、ミサカだと？」

「え？」

「オマエ、ちよつとその毛布取っ払って顔見せてみる」

一方通行は、聞き覚えしかない『ミサカ』というワードに眉を潜めてそう言った。あの実験は既に中止された筈で、もうクローンは作られていない筈だ。なのに、何故か知らないがミサカを名乗る通常より小さな子供が存在している。もしもこの子供もクローンの一体なのだとしたら、実験はまだ続いているということになるのだ。少なくとも、レベル5のクローン量産実験の方は。

「え、えと……女性に往来で服を脱げというのは些か理不尽で――」

「――」

一方通行はボロ布を掴んで引っ張る。すると、その下にあった子供の姿形が鮮明に現れた。まずは顔、御坂美琴そっくりの幼い顔立ちだった。次に胸、幼女体型に相応しいつるぺたの胸がそこにあった。

次に腰、まだくびれらしく線は無いが、無駄な肉も付いていない健康的な腰付き、次に下半身だが、まあ特に異常は無かった。

ただ、ボロ布の下が裸という事態で無ければ、の話だが。

「なんだこりやア!？」

「わああ! 返して! ミサカの大事なパートナーを返して! って

ミサカはミサカ——わぷっ!」

「チツ……誰にも見られてねエだろうな……」

一方通行はボロ布を投げ付ける様に返した後、幼女がボロ布を纏い直す間に周囲を見渡す。今の光景が見られていたら唯の犯罪者だ。まして、写真にでも撮られていたら最悪だ。

学園都市最強のレベル5はロリコンの性犯罪者という嫌な烙印を押されてしまう。

——ピロリン♪

だが、その不安は的中した。携帯の音が鳴り、一方通行はその方向を見た。するとそこには、

(^o^)( || ☆ 一柱 一

!! (。 ; (幼女)

カメラを構えた瑛噎が、ばっちりその光景を抑えていた。

「最近はさ、ツイッターなんてものが流行ってるらしいよ?」

「止めろオオ!!」

一方通行はその時、全力で瑛噎に飛びかかって行った。

◇ ◇ ◇

とりあえず、瑛噎を一晚泊めるという条件で、写真を消させる事が出来た一方通行は、内心ほっと息を吐いていた。

「いやー、中々味気ない部屋だね」

「生活感の無い部屋って言っても良いかも。って、ミサカはミサカは

感想を述べてみたり！」

「オイ待て、なんでオマエもいんだよガキ」

「え？ て、ミサカはミサカは至極今更な疑問に疑問で投げ返してみたり」

「良いじゃねーか子供は大切にすべきだぜアセロラ」

「……テメエは気になんねエのか？ コイツの存在が」

一方通行は実験を中止に追い込んだ張本人にそう問う。実際、彼女の存在は異常だ。ミサカを名乗る他とは違う個体。最早意味が分からない。

「正直どうでもいいかなって。というか、この世界って結構ロリキヤラ多いよね。ロリコンなのかな作者は」

「何言ってるんだオマエ」

「まあ気にしないでくれ。というか、気になるなら調べれば良いじゃないか。研究者に宛てはあるんだろう？」

「ミサカとしてはその方が都合がいいかも、ってミサカはミサカは進言してみる」

「……チツ……まあ良い。俺は寝る」

「よしうるさいのは寝るみたいだ。さあミサカモドキ、俺とジエンガやろうぜ。倒した時にアセロラを起こした方の勝ちな」

「オマエマジぶざげんなよ!!」

一方通行は、瑛嗶の相変わらずさにうんざりした様子で叫んだのだった。

## 瑛嗶の進化

翌日、瑛嗶と打ち止めのジエンガ騒ぎによって寝不足な一方通行は、眼の下に隈を作って朝を迎えた。寝ようとした所に落ちてくるジエンガは、何故か反射しているにも関わらず一方通行の頭を攻撃してくるのだ。二度と瑛嗶とこのミサカモドキを家には呼ばないと心に決めたのだった。

(……天使との戦いから『触れる』能力になんか違和感があるなあ)

対して、瑛嗶は自身の『触れる』能力に違和感を感じていた。別に悪い方向ではない。何か別の使い方が出来る様になったというべきか。試しに瑛嗶はジエンガに触れて、手の中で弄ぶ。そして、のそのそと立ち上がり、部屋を歩く一方通行に向けて投げ付けた。

本来なら、反射されて瑛嗶の下へ戻ってくる筈だ。だが、そのジエンガは一方通行の頭をスコーンと打ち抜き、普通に地面に落ちた。

「……………なるほど」

瑛嗶はその事象を見て確信する。レベル3程度の効果しか発揮して無かった『触れる』能力が、明らかに強くなっている。恐らく、今測ればレベル3からレベル4へと上がっている筈だ。そして、瑛嗶がレベル4の『触れる』能力になって出来る様になった事は、『発動時間の延長』と『能力付与』だ。

瑛嗶は能力を自分の手に発動させて、そのまま維持する。すると、その効果は30秒程経って消えて行った。つまり、5秒だった効果時間が30秒まで延びていた。

そして、『能力付与』。この『触れる』能力を瑛嗶以外の物に付与させる事が出来る様になったのだ。故に、『触れる』能力を付与されたジエンガは一方通行の反射の効果を無効化し、攻撃を与えた。とはいつても、付与が維持出来る時間は15秒程だが。

明らかに進化した『触れる』能力に、瑛嗶はゆらりと口元を歪める。レベル5になったらどうなるのか、見物だった。

「どうしたの? ってミサカはミサカは笑ってる貴方に問いかけてみる」

「ん、なんでもないよミサカモドキちゃん。ほら、ご飯にしようか」  
「わーい！ 外のご飯は初めてかも！ って、ミサカはミサカは期待を膨らませてみたり！」

「そうか、じゃあ君の初めてのご飯はファミレスだ。良かったな、水が飲めるぞ」

「ファミレスな上に水のみ!? ミサカはミサカはその鬼畜っぷりに驚愕してみたり！」

「今ならお子様ランチの——」

「あ、なんだやっぱりご飯をくれるんじゃない、ってミサカはミサカは——」

「——旗をやろう」

「ランチプリーズ!! ってミサカはミサカは必死の懇願を試してみた  
りい!!」

瑛嗶の言葉に翻弄されるミサカモドキ。なんとなくその突っ込む様子は、一方通行に似ているものがあつた。

「わはは、お子様ランチを食べる一方通行を眺めながら水を啜り、旗を持ってファミレスから出るが良い」

「しかもお子様ランチを食べるのは一方通行なの!? ってミサカはミサカは想像出来ない光景を生み出そうとしている事に驚愕してみる  
！」

「おいおい良く考えろ。アイツの年はなんだかんだ言って高校生位だぜ? そりやお子様ランチも食べたくなるって。知らないだろうけどアイツは三食お子様ランチなんだ」

「そうなの!?!」

「ああ、大親友の俺が言うんだ。間違いない」

「大親友なの!? ってミサカはミサカは開いた口がふさがらない！」

「オイコラ適当吹いてンじゃねエ!!」

瑛嗶が一方通行の反応に笑うと、ミサカモドキもつられて笑った。一方通行はそんな二人の笑いに頭を掻いてため息を吐いた。その光景は、普通の生徒の、普通の談笑風景に見えた。



さて、それからしばらく。瑛唄達は手近なファミレスへやってきていた。とりあえず三人とも適当にメニューを頼む。ミサカモドキはファミレスの途中で瑛唄が買ってきた普通の服を着用しており、ボロ布は瑛唄がミサカモドキの眼の前でゴミ収集車に突っ込んだ。ミサカモドキは「相棒おお!!」と叫んで崩れ落ちた。ちなみにミサカモドキが来ている服は原作で来ている様な水色のワンピースに大きめのYシャツ。サンダルは瑛唄とお揃いだった。

「うう……ミサカの今までのパートナーが……!」

「……泣くなミサカモドキ。アイツは自分の夢を叶える為にお前から離れたんだ。目指す場所があつたんだよ」

「目指す場所って何処? 埋立地じゃん! 夢? 灰になるじゃん!!」

「ってミサカはミサカは糾弾してみる!」

「うるせエよオマエら……」

「あ、さんくーアセロラ」

「ありがとう! ってミサカはミサカはお礼を言ってみたり」

瑛唄とミサカモドキが席で駄弁っていると、一方通行が三つのグラスを持って帰って来た。ドリンクバーを頼み、ジャンケンで負けた一方通行が飲み物を取りに行っていたのだ。

「ったく……っーかよオ、そろそろオマエの説明が欲しいトコなんだが」

「そう言えばそうだな。お前誰だよ」

「今までの友好的な対応が嘘の様に冷たい視線! ってミサカはミサカは変わり身の早さに吃驚仰天!」

「良いからさっさと話せ」

一方通行がスルーして話を促すと、ミサカモドキは自分に付いて話し始めた。

「まず、ミサカは貴方達が思ってる通り、御坂美琴お姉様のクローンで合ってるよ。検体番号は20001号、コードもまんま打ち止めの最終ロットとして生まれた個体なの。でも実験が中止になったから培



養途中で培養機から放り出されちゃって、なんだかチンマリしちやつてるの。ってミスカはミスカは説明してみる」

「つまりアレか、調整途中でまだ完成してねエって訳か」

「そう。だから実験に協力してた貴方なら研究者の誰かとコンタクトが取れるんじゃないかなって思っただけ。ってミスカはミスカは小首をかき上げて頼みこんでみたり」

一方通行と打ち止めがそう言って話している中で、瑛嗶はこの会話の不可解な点に気付いていた。

『20001』号？ 確か実験はきっかり2万通りじゃなかったっけ？)

そう、実験はぴったり2万通りだった筈だ。故に、製造されたクローンもぴったり2万体の筈なのだ。なのに、20001体目の最終検体が眼の前に存在している。これは明らかにおかしかった。

(……ま、いいか。面倒だし)

「——！」

「どうしたの？ って、ミスカはミスカは訪ねてみたり」

瑛嗶がそう結論を出すと、一方通行がいきなり立ち上がって外を睨んでいた。瑛嗶はその方向を見ると、そこには白衣を着た中年の男性がいた。一方通行が反応した、ということはあの実験の関係者だろうと考える。

「天井……亜雄……？」

「お待たせいたしました。ハンバーグ定食のお客様」

「はいはい！ ってミスカはミスカは自己主張してみたり！」

「どうぞ」

店員はテーブルに3人分の料理を置くと、そのまま去って行った。

「いっただつきまーす！ これ言うの密かに楽しみにしてたりして！」

ってミスカはミスカは夢の実現に喜んでみたり！」

「いただきまーす」

「……まあいいか……」

三者三様に食事を開始する。打ち止めは初めて食べるからかとても美味しそうに食べるので、瑛嗶は少しだけ微笑ましくなった。ちな

みに、一方通行は切るのがめんどくさいのか、熱を反射しながら鉄板自体を素手で抑えて乱暴に肉を切っていた。

「野生児かお前」

「うっせエな……面倒なんだよ」

「おいしー!」

一方通行は、クローンを殺しまくっていた自分に、どうしてこうも笑顔で話しかけられるのか、疑問だった。だが、それは敢えて聞かない。どんな理由があろうと、彼女達の命を自分は背負うと決めた。なら、別に今更無為に扱うこともないだろうと思っただのだ。

といつても、彼女達に必要以上に関わろうというつもりはないのも事実だった。

「——っ」

その時、ガシャン、と音を立てて打ち止めがテーブルに突っ伏した。突然の事で瑛嗶も一方通行も少しだけ驚いた。そして、打ち止めが顔を真っ赤にして息も絶え絶えに状況を説明し始めた。

「あ、あはは……こうなる前に、研究者とコンタクトが取りたかったんだけど……ミサカはまだ完成して無い培養途中の固体だから……本来なら培養機からまだ出ちゃいけないの……て、ミサカは……ミサカ、は」

その様子は酷く痛々しく思えた。一方通行も同じ様に思っただのだ。今にも死にそうなのだ。

しかし、一方通行は彼女を助けようと思えなかった。いや違う、助けられると、思えなかったのだ。破壊する事しか出来ないこの能力で、この状況は打破出来ないと考えてしまったのだ。だから、

「あれ……どこか……いっっちゃうの……? まだ、ご飯残ってるのに……」

一方通行は席を立った。伝票を取り、レジに向かう。瑛嗶はそんな一方通行を横目に黙々と料理を口に運ぶ。

「あア……食欲無くなっちゃったわ」

「そっか……ごちそうさま……つてのもやってみたかったな……」

「そりゃ残念だったな」

一方通行はそう言って、去って行った。ファミレスから出て行き、振り返らない。テーブルには瑛唄と打ち止めだけが残された。

「……………ごちそうさまっ」と

「……………ミサカの前で……………敢えてその挨拶するなんて……………本当、意地悪だね……………」

「って、ミサカはミサカは……………」

「残念なら俺はそういう性格なんだよ」

「あはは……………」

「さて、あのアセロラもなんとなーく変わったと思ったけど、まだ駄目だね。ありや粋がってた不良がただのヘタレ少年になっただけだわ」

瑛唄の言葉に、打ち止めは答えられない。もはや意識も朦朧としていた。

「ふー……………全く、こういう面倒事が起こるのは何処の世界も同じなのかね？」

瑛唄はそう言うと、打ち止めを抱え上げ、おんぶする。

「……………？」

「仕方ねーから少しだけ面倒見てやるよ。アセロラはちよいと教育が必要だ」

瑛唄はゆらりと笑うと、ファミレスを出た。

## 背中を押して

朝ご飯ならぬ昼ご飯を食べた後、瑛嗶はファミレスを出て街を『跳んで』いた。背中には衰弱した打ち止め、背中に伝わる体温の高さから、非常に不味い状態なのは分かる。

それでも、瑛嗶は彼女を今すぐに助けようとは思っていない。何故なら、助ける義理も正義感も瑛嗶には無いからだ。だから、例えば彼女が死のうが死ぬまいが、関係無い。瑛嗶は瑛嗶の思惑の為だけに、彼女を利用する。

とりあえず、瑛嗶はあのファミレスで見かけた白衣の研究員を探していた。車に乗って早々に逃げて行ったが、そのナンバープレートは覚えている。探す事は出来るのだ。故に、瑛嗶はビルからビル、建物から建物へと跳び移りながら、その車を探していた。一応打ち止めに衝撃が行かない様に配慮はしてあるが、やはり安静にしておかないと何れ死ぬだろう。

「——見つけた」

瑛嗶はファミレスで見かけた研究員の車を見つけた。そしてフロントガラスから見える研究員の焦った表情も見た。どうやら、彼の目的は打ち止めの確保の様だ。瑛嗶はあの場所に居た不自然さと今の焦りからそう判断した。

そして、瑛嗶はゆらりと笑って走行中の車のボンネットに、勢いよく着地した。

「ひっ!?!」

「よー何処ぞの研究員A。ちよつと付き合えよ」

「な、な……………!?!」

瑛嗶を見て更に振るえる研究員。天井亜雄は、学園都市のレベル5の第一位、一方通行を打倒した男、瑛嗶を目の前に眼を見開いて青褪めたのだった。



一方通行は、何処に行く訳でも無く、自身が実験で悪い意味で世話になってきた研究施設にやって来ていた。奇しくもその研究所は、瑛嗶が能力開発をした施設でもある。

といつても、この実験施設の本来の目的は、絶対能力進化計画の研究。故に、培養機やその為の設備は一通り揃っている。

「なんで俺はこんなトコに来ちまったんだか……」

やはり、冷たく突き放したとはいえ打ち止めの事は気になっていた様だ。

「チツ……」

一方通行は入り口を能力で破壊して入っていく。そして、最奥に入るとそこには、瑛嗶の能力開発を受け持った研究員。芳川桔梗が居た。

彼女も実はあの実験の研究者の一人だったのだ。そして、今は凍結した実験の後始末に追われている、という所だ。

「あらお帰り一方通行。ドアを破壊しなくても君のIDはまだ90日程有効だから」

「遅エよ」

「え、私がここで何をしてるか?」

「聞いてねエよ」

「実験が凍結したから後始末よ。他の奴らは此処で働いていたキャリアを失いたいらしいから、どこか消えたけどね」

「だから聞いてねエって」

「手伝えよ。この私を手伝えよ」

「お前キャラ崩壊してンぞオイ」

「ちよつと前に人を振り回す子の能力開発を受け持つてね。見習つてみたの」

「……まさかな」

一方通行は瑛嗶を思い浮かべたが、すぐに思考を掻き消した。そして、幾つもある柵から培養機についての資料と妹達のスペックデータを手に取っていく。

「クローンの培養機一式と検体調整用の資料貰つてくぞ。理由は聞く

な」

「でも敢えて聞いちやう私異端？」

「ホントムカつくなオイ」

「でもどうして気付いたの？ 今彼女達の人格データのバグを洗い出している所なのに……いや、正確にはウイルスかしら」

「なんの話だ」

芳川は少し俯く様にして話し始めた。その姿には既にふぎけた雰  
囲気は消えている。

「君にはまだ話して無かったわね……『ラストオーダー最終信号』と呼ばれる、特別な  
個体の事を——」

◇ ◇ ◇

「さて、始めようかね。まずはめんどくせえ下準備から」

その頃、瑛嗶は天井亜雄の車の中で、打ち止めを寝かせていた。しかも、原作同様にパソコンと電子パッチで繋いでウイルスの管理をしている。

「ほ、本当に協力してくれるんだな？」

「それより、さっきの話は本当だろうな？」

「あ、ああ」

瑛嗶は先程、天井亜雄を捕まえて打ち止めの状態について詳しく聞いていた。

曰く、打ち止めはミサカネットワークを統率する司令塔の役割を持つ個体だということ。

曰く、打ち止めを介してミサカネットワークにウイルスを流し込もうとしているということ。

曰く、その結果防衛本能として打ち止めが培養機から逃げ出したということ。

曰く、そのウイルスは上位命令文としてミサカ全員に伝わり、その命令を強制的に聞かせるというものであること。

曰く、その命令の内容は、民間人に対する無差別攻撃だということ。

曰く、自分は学園都市外に待機している組織に匿われる予定だということ。

とまあ学園都市を崩壊に導く計画が天井主導で進んでいるようだった。そこで、瑛嗶は良い事を思い付いたとばかりに天井に協力を申し込んだ。天井はそれを呑んだ。何故なら、ほかならぬ打ち止めは瑛嗶の背中にいるのだから。

「そうかい——それじゃあもう用はねーよ」  
「え？」

瑛嗶はハンドルを握る天井亜雄の首筋に手刀を落とした。

「なあっ……!? がっ、ぐ……があああ!？」

いきなり攻撃され、ハンドルに身体を打つ天井。幸い、そこまでダメージは無いが、動く事が出来なかった。

そして、瑛嗶はハンドルを取って車を乗っ取る。どこのグラ○フだ。

「じゃあね、天井ちゃん。お前の計画は俺がちやぁんと利用して、破綻させて、破壊して、崩壊させてやるから、安心して潰れてると良い」  
瑛嗶はそう言い残して、もう一発手刀を落とした。

「ぐ……あああ………!？」

天井亜雄は瑛嗶の笑みと言葉を頭の中で半濁し、絶望の表情で意識を失った。



一方通行は、先程の瑛嗶と同じ様に、ビルからビルへと飛び跳ねながら移動していた。その理由は、先程瑛嗶が聞いていた話を芳川桔梗から聞いたからだ。

この事態を解決するには、必要機材を用いてウイルスを取り除くか、打ち止めを殺して処分するかのみ二つだけ。そこで芳川はこの研究室でそのウイルスを取り除くプログラムを構築するので、一方通行に打ち止めの確保を依頼したのだ。

一方通行はそこで、打ち止めを処分するか、助けるかの選択を迫ら

れた。そして選んだのだ。

打ち止めを『救う』選択を

「こんな所で役に立つとはなア……オトモダチは大切につてかア？」

一方通行が打ち止めと別れた時、その場にはもう一人、瑛嗶がいた。故に、打ち止めを確保するには彼女の動向を知る必要がある。ならば、その後も一緒に居た瑛嗶に聞くのが一番だろう。一方通行は奇しくも携帯の中に入っている瑛嗶の電話番号にコールした。

『はいよー、どうしたアセロラ』

「聞きてエ事がある」

『打ち止めちゃんの事かな？ 何、やっぱりさみしくなっちゃった？』

あはは、このロリコンめえ〜』

コール一回で応答した瑛嗶は察しは良いモノの、やはりお茶らけてきた。

「おふぎけはいい。アイツは今何処にいんだ。オマエと一緒にいんのか？」

『いや、あの後天井亜雄とかいう胡散臭くてみみっちい白衣のオジサンが来たんで、引き渡したけど？』

「何？ ……そいつは今何処に？」

『知らね。でもまだ第七学区にいるんじゃないかな。そんなに時間は経ってないし』

「そオカよ。悪いな、こっちは急用だ。切るぞ」

『そうかい。じゃあ一つだけ言つとくぞ、アクセラレータ一方通行』

瑛嗶がアセロラではなく、ちゃんとした名称で彼を呼ぶ。そのことで一方通行は通話を切らずに次の言葉を待った。この間も走り続けるが、瑛嗶の言葉は聞き逃さないとはかりに耳に集中する。

『——ちゃんと救つて見せろよ？』

瑛嗶の言葉に、一方通行は眼を見開いて驚き、その後短く答えた。



「ああ……」

通話を切る。瑛嗶は全て分かっていた。この状況も、一方通行の行動の目的も、通話してきた訳も。だからこそ一方通行にそう言ったのだ。逃げてばかりで救おうともしない憶病な彼に、遠回しな言い方で、逃げるなよと。

ほんの少しだけ、背中を押された気がした。ほんの少しだけ、やれる気がした。ちゃんと救えると、自分にも出来るのだと、そう思えた。そして、こうして動く事を決めた時からよぎる疑問が、再度浮かび上がってくる。

—— 殺すことしか出来なかった自分は、してこなかった自分は、何かを救えるのか？

一方通行は汗をにじませながら、それでも強気に笑った。

「救えるか？ ハッ、俺を誰だと思ってる……！」

一方通行は地面を蹴る。能力が今までにない位に調子が良い。今までにない位に思考がクリアだ。ふっきれた様な表情を無意識に浮かべる一方通行は、少しだけ、自分の目指すモノに近づいた気がした。



—— P M 8 : 0 0

天井亜雄の車は、第七学区の量産能力者計画研究所跡地の影に停まっていた。車内には電極が付いた満身創痍の打ち止めの姿と、首に手を当てながら首を回す天井亜雄の姿があった。瑛嗶の姿は、何処にもない。

「……どうすれば良いか……」

「はあ……はあ……」

「！……ウイルス発動まで何とか保ってくれ……」

天井亜雄は、本来ならこの時点で学園都市の外へと逃亡していた筈だった。計画は瑛嗶と接触した時に破綻し、この時点で既にボロボロ

に破壊されていた。

だが、まだ手は残っている。ウイルスさえ発動出来れば、後は混乱に乗じて逃げればいいのだ。

「！」

「——みいつけたア」

だが、そこに現れたのは、学園都市の第一位。あらゆる向きベクトルを操る能力者、一方通行アクセラレータ。

天井亜雄の計画は、音を立てて崩壊していく。この時点で彼に一方通行から逃れる手段は無い。瑛嘎の言った通り、瑛嘎に会って破綻し、瑛嘎に気絶させられ破壊され、一方通行によって崩壊する。どんな予知だと思う。

「このっ……！」

天井亜雄はアクセルを踏み、車を一方通行に向かって発進させる。そして、普通なら引き殺す程の威力で衝突し——反射によって逆に車が大破する。

「ガッ!？」

「あん？ 随分と簡単に気絶すんだなあ……まあいいか」

天井亜雄はその衝撃で気を失ったのか、ハンドルに凭れる様にして動かなくなつた。そして、一方通行は壊れた車のドアを開き、中に居た打ち止めを確保する。そして、少しだけ息づいた。

そして、芳川に電話を掛ける。

「オイ芳川。ガキは確保した。こっからどオする？ ……ってオイ、なんかガキの頭に電極みてエなモンがひつついてんだが……コレは剥がさねエ方がいいのか？」

『ああ、それは妹達用の身体検査キットだわ。剥がしても問題ないわね』

「BC稼働率ってのは？」

『それは打ち止めの脳細胞の稼働率ね。とりあえず、今そっちに機材を持って向かつてるから、そのまま待機してて』

「ああ、分かった。だが、ウイルスコードの解析は終わってんのか？」

『8割方。でも時間までには——』

「ミサ、力は、みさかみさみさかhさみsかいんかミサカミかはみさb  
u h i f u u o 8 6 8 g y

みさみミ未済d3お8ふお81ミサか——!!!」

電話の最中で、芳川桔梗の言葉は遮られた。打ち止めが身体をかくがくと痙攣させながら訳の分からない言葉の羅列を叫び始めたのだ。「オイ！　こりやどうなつてんだ！　これもなんかの症状の一種かよ!?!」

『黙って……そのコード、ウイルススコッドよ！　0時起動というのはダミー情報だったんだわ……！　もう起動準備に入ってる!』

「ンなつ……!」

『——間に合わなかった……もう諦めなさい一方通行。彼女を……処分しなさい』

芳川言葉に、一方通行は歯を食いしばる。救えない、また殺すしかない。こんな仕組みされた様な結末に、怒りすら湧いてきた。

「クソツたれがアアアア!!」

だが、そんな中で、一方通行の携帯が震えた。見れば、それはメールだった。しかも、瑛叟からの。携帯を操作してメールを開く。通話中故に返信は出来ないが、内容は見る事が出来るのだ。

「——ハッ……うっせエよ」

書いてあった内容は、ただ単純な一文。

『ちよつとき、暇だから打ち止めちゃん連れて来いよ。ジエンガしようぜ。場所はお前ん家な』

こんな状況で、どんなメールだと思った。だが、瑛叟のこの文は、暗に一方通行が打ち止めをちゃんと救ってくるよと心から信じているよではないか。無敵である瑛叟から、このような信頼を寄せられるのは、中々どうして、誇らしかった。

「——芳川」

一方通行は先程電話した後の様に、思考がクリアだった。故に、思い付いた。救えるかもしれない、自身の能力なら出来るかもしれない

唯一の一手。

「確か脳内の電気信号さえ操れば、テストメント学習装置が無くてもこのガキの人格データを弄る事が出来るんだよな？」

『それはそうだけど……まさか、貴方自身がテストメント学習装置の代わりをするつもり!? 無理よ、貴方の能力でも!』

「出来るさ。反射が出来たんだ、その先の操作が出来てもおかしくはねエだろ」

一方通行はそう言つて携帯を投げ捨てた。そして、研究所から持つて来ていた打ち止めがウイルスに感染する以前の人格データをその最高の頭脳で記憶する。

「……此処までやるんだ。やっぱり無理でしたじゃ許さねエぞ、クソガキ」

一方通行は打ち止めの額に手を当てて、自身を纏っていた反射を解除する。そして脳内の電気信号を操る事に全能力をフル稼働させた。

「コマンド実行! 感染前の人格データを照合、修正コードを——削除……!」

一方通行の能力によって少しずつ打ち止めの人格が修正され、ウイルスコードが削除されていく。このままいけば、なんとかなる勢이었다。

だが

「こ、の……やめろ……!」

天井亜雄が、起き上がった。その手に持つのは、人差し指一本で人を殺せる拳銃。そして、それは反射を解除している今の一方通行を殺すには十分過ぎる凶器だった。

「んな……!」

焦る一方通行。今は集中していて反射に回せる演算など出来ない。撃たれば一瞬で死んでしまう。といつても、今手を放せば、打ち止めは修正されなのまま身体が拒否反応を起こして精神が死んでしま

う。

——残りの修正コード数 12402

「く、っそ……！」

——残りの修正コード数 6924

「邪魔を——」

——残りの修正コード数 128

「するなあ!!!」

銃声が鳴り響く。撃鉄が落ち、銃口が火を噴く。一方通行はそれでも手を放さずに、コードの削除を急ぐ。そして——

「——不正な処理により、上位命令文は中断されました」

打ち止めの冷静な声が車内に鳴り響いた。そして、その打ち止めの額には、まだ、一方通行の手の平が当てられていた。

一方通行は自身を覆う反射膜の感じ取り、閉じていた瞳を開く。そして、自身に向けられていた銃口を見た。確かに銃口からは硝煙が出ており、発砲があつた事が分かる。

だが、その銃口からは銃弾は出て来なかった。

「はっ？」

「——やーい、引っ掛かってやんの」

目の前の天井亜雄が、ゆらりと笑ってそう言った。一方通行は驚愕に眼を見開く。そして、天井亜雄は首の辺りに手を当てると、ベリベリとその顔を『取り外した』。

そして、その覆面の下から出て来たのは、先程メールを送ってきた

瑛嘎。銃口から出て来たのは、なんと小さなジエンガだった。

「オマエ……」

「でだ、アクセラレータ一方通行。お前の手で打ち止めちゃんが救われたようだけど、気分はどうだ？」

瑛嘎は分かりきった様に呆然とする一方通行に笑い掛ける。すると、一方通行はため息を吐いた後、自然な笑みを浮かべてこう言った。

「まったく……とりあえず一発殴らせろ。この野郎」

その言葉の裏には、確かに誰かを救った喜びが、秘められていた。瑛嘎はそれを感じ取り、舌を出していつも通りの調子で返した。

「やなこと」

## 閑話 後日談

さて、実の所、まだ状況が分からない人もいるかもしれないので、瑛唄の行動を公開しよう。まず、瑛唄は天井亜雄を気絶させた後、美容専門店を尋ねた。そして、そこにあつた機材一式を借りて、天井亜雄の顔マスクを作ったのだ。そして、気絶中の天井亜雄の服を剥ぎ取り、パンツ一枚にした後、縛りあげて車の後部収納スペースに詰め込んでおいたのだ。拳銃はその際改造させて貰ったのだが。

まあ一方通行に突っ込んで車が大破した時、その衝撃で天井は右足の骨を折り、左足にもひびが入っていた。逃げられはせず、結局闇の世界の方で始末される事になった。どうなったかは分からないが。

で、瑛唄はその後一方通行を待ちつつウイルスの進行を管理していたのだ。そして、アクセラレータの電話を車の中で応対し、メールはハンドルにもたれかかっている時にこっそり打ったのだ。

これが瑛唄の行動にして、一方通行の教育だ。結果、一方通行は人を救う事が出来たし、それによって自身の目指すものに近付けた訳だ。そしてなにより、救う事の恐怖に立ち向かう勇氣を持つ事が出来た。ここで瑛唄が感謝の言葉を貰ったとしても、

「俺は何もしてないよ。面白そうな方に動いてたらお前らが勝手に救ったりしてただけだ」

というだろう。しかも、心の底からそう思っているのだから本当になにもした覚えは無いのだろう。一方通行の教育だの言っても、具体的にどうしようとか考えていなかったし、ただただ面白そうだなあと思つた方向へと進んだらこうなっただけなのだ。

とどのつまり、瑛唄はどこまでいっても、瑛唄だった。



という訳で、見事に全員無傷で帰って来られた訳だ。

打ち止めは芳川の紹介で、信頼出来て一番の実力を誇る病院に連れて行かれ、培養機で身体の調整を行なう事が出来た。まあ身体はちん

まりしたままだが。

ちなみにその病院は上条当麻も良くお世話になる病院で、カエル顔の医者が務めている場所だ。そして、その医者は生きていれば必ず治す、という信条の下、執刀する。その実力は極めて高く、業界ではヘブンキャンセラー『冥土返し』とまで言われる医者だ。

「あはは！ いえーい！ って、ミサカは過去一番の元気で走りまわってみたり！」

「うるせエよ、クソガキ」

そして今、その病院から調整を終えた打ち止めと一方通行が出て来た。駆けまわる打ち止めはちゃんと全快したようで、その身体からは漲るエネルギーを感じさせる。一方通行は今まで着てた黒地に白い線の入ったTシャツでは無く、白地に灰色の線が入った服を着ていた。心境の変化だろうか？

だが、そこに瑛嘎の姿は無い。一方通行は知らないが、打ち止めには自分を救ったのは一方通行だと伝えられており、瑛嘎の事は一切聞かされていない。故に、三人でファミレスに入った事も、三人で一晩同じ部屋で寝た事も、一切覚えていない。一週間前の状態に戻されているのだから。

また、ミサカネットワークの方は丁度居合わせたミサカ妹、つまり実験中止の際にドッキリに付き合った個体に頼み、打ち止めの調整中、共有されていた打ち止めの一週間の記憶を非公開にしてもらった。故に、上位命令文を打ち止めが出さない限りは、その記憶は永遠に彼女に戻される事は無いだろう。

「——良い顔するじゃないか、アセロラも」

「よろしいのですか？ と、ミサカは尋ねます」

「やあミサカ10032号だったか、なにが？」

「あの件では貴方も少なからず上位個体との思い出があった筈です。それを隠して彼らと離れてもよろしいのですか？ と、ミサカは丁寧に説明つきで問います」

「いいんだよ。別にアセロラといつでも連絡取れるし、なによりそっちの方が、面白い」



瑛嗶はそう言ってゆらりと笑う。打ち止めとの記憶は自分が持つていれば良い。それに、また初対面を行なうのも中々面白い体験だろう。こっちは知ってて向こうは知らない。一方通行の怪訝な表情が眼に浮かぶようだった。

「それに」

瑛嗶は一旦区切って一方通行達を見る。ミサカ妹も瑛嗶に並んで彼らの背中を見た。

「アイツらはなんだかんだで良いコンビだからね。邪魔者はいらないよ」

「……そうですか。と、ミサカはこれ以上の追及を控えます」

「さて、俺はそろそろお仲間の所に顔出さなきゃ。一週間位ほつたらかしだからなあ」

「ちなみに男性でしょうか？ と、ミサカは興味本位で聞いてみます」

「いや、女性が四人だね」

「ハーレム構築済みですか、わかります。と、ミサカは少しだけ距離を取ります」

「ハーレムかあ……そんな感じじゃねーなあ……仕事仲間だし」

「そうですね……と、ミサカは少し期待外れ感に肩を落とします」

瑛嗶はそんなやり取りをすると、踵を返してその場から去る。

「それじゃ、また縁があつたら会おうか。案外、すぐに会う事になるかもしれないけどね」

「はい、それでは」

瑛嗶とミサカ妹はそう言い合って別れる。

こうして、打ち止めを巡る戦いは一旦結末を見た。だが、近い未来、打ち止めと一方通行は更なる闘へと足を踏み入れる事になる。学園都市の闇の底では、囚人の様であり聖人の様であり女の様であり男の様であり、人間の様に笑う化け物が、待ちかまえていた。

## 風斬氷華編

### 第二位への足掛かり

さて、打ち止めとの一件が終わった瑛嗶は、アイテムの拠点へと戻って来ていた。そこには珍しく全員揃っており、仕事が無くて暇なのかぐでーっと脱力して寛いでいた。

そして、拠点のドアから入ってくる瑛嗶に視線を向けて、久々とはかりに少しだけ笑みを浮かべた。

「おかえり、瑛嗶。もう厄介事は終わったのかしら？」

「ああ終わった終わった。見てくれ、携帯買って来た」

「携帯買うのに一週間以上掛けたのかよ！」

「んな訳ねーだろ。ほら見ろ、アドレス帳だって既に五件程登録されてんだぞ」

「五件……少ないわね」

「え、でもそれぞれのネームバリューは凄いで。ほら、第一位に第三位に第五位、あと第一位を倒した奴、あと統括理事長」

「馬鹿じゃねーの？ 馬鹿じゃねーの!？」

瑛嗶のアドレス帳を見ると、そこには確かに上から『アセロラ』『みこつちちゃん』『しいたけ』『ウニ頭』『ストーカー』と五件登録されている。しかも最後の『ストーカー』については3000件程の電話番号がまとめられていた。それは全てアレイスターの持つ3000件程の回線番号だった。まあ例によって適当打ち込んだだけの番号だが。「相変わらず超とんでもない事を超平然とやっつてのけますね、瑛嗶さんは」

「結局、私達じゃ理解の追いつかない所に居るって訳よ」

「……でも、瑛嗶さんらしいよ」

絹旗達もそれに同意する。瑛嗶はその反応に対してただゆらりと笑った。そして、瑛嗶のその笑い方が久々で、麦野達も自然と呆れながら笑った。

「ま、取り敢えず……無事な様で良かったわ。ドリンクバーのジュー

ス汲み係が居なくなっちゃうもの」

「今度地獄巡り茶御馳走してやるよ」

「…………それはなんだか遠慮したい所ね…………」

「残念」

麦野は本能で危機を回避した。

「さて、と。学生は本来夏休みを終えてうだるような熱気の中学校に行く訳だが…………」

「そういや貴方は常盤台の教師になったんだっけ？」

「なんか知らんけどそうらしいよ。あの学校ぶち壊して来て良いかな」

「止めてマジで」

「正直女子中学生の相手するの疲れんだよね。張り合い無いし、話し掛けた時点で犯罪になる世の中だぜ？」

「まああの空間じゃ男性である貴方はやり辛いかもね…………」

瑛嗶は麦野の言葉を背に拠点を出る。常盤台に向かうのだ。

「それじゃ、また行ってくる」

「行ってらっしゃい」

麦野が代表して瑛嗶を送りだしたのだった。

◇ ◇ ◇

瑛嗶は歩きながら3000件の電話番号の一つをコール。ワンコールで理事長が応答した。

『…………君は何故私に電話を掛けられるのかな？ 一回話し合ってみないか？』

「ははは、ごめんね」

『全然気持ち伝わって来ないのはまあ良いとしよう。それより登録名がストーカーとはどういう意味だ？』

「いや都市規模で盗撮してんだらうが」

『で、何の用かな？』

アレイスターは話を逸らした。瑛嗶は苦笑して用件を伝える。

「ちよつとさ、あの常盤台中学教師とかいう立ち位置面倒だから辞退したいんだけど」

『……仕方ない、ならばそう手配しよう。今回はこちらの不手際だ、対価は求めない、が……やってくれたね』

「何が？」

『君は私のプランを動くことに悉く潰して行ってくれる。正直、これほど厄介な存在は見た事が無いよ』

「それはまた、良い事を聞いたね」

『それに、君は——『聖人』だろうか？』

瑛嗶は凶悪に笑った。アレイスターは言った。瑛嗶が『聖人』だと。

だが、その条件を瑛嗶は確かにクリアしていた。人間離れた身体能力、神から与えられた特典チカラ、そして決して悪いとは言えない幸運。まさしく『聖人』の特徴ではないか。

「さあ、どうかな？」

『だがそうになると、君が超能力を使えている事がそもそも矛盾している。超能力を使えながら、魔術的なテレズマを行使する存在など、見た事が無い』

「そうかい。まあ確かに言える事は、俺は『聖人』ではないってことかな」

『……そうか。だが、君はあの幻想殺しよりも興味深い存在だ。そのあらゆるものに『触れる』能力、超能力でも無く、魔術でも無い。幻想殺しと同じとも言えないその理解出来ない力、それが今後の展開にどのように影響を与えるのか、楽しみだ』

瑛嗶の『触れる』能力は、神から貰った力であり、超能力や魔術では無い。この世界において、絶対に解明できない力なのだ。本来なら、レベルなんかで測定出来るものではない力なのだから。

瑛嗶も気が付いていないが、この力はもつと大きな力であり、瑛嗶はその力を未だ1割程しか引き出せていない。そもそも、この能力の本質は別の所にあるのだ。

「ま、俺にもよく分からないからね。期待には応えよう」

『それでは、手続きは此方でやっておく。電話番号は通話が終わった

後に全て変更するからアドレスにある番号は全て使用出来なくなるぞ』

「あいよ」

そう言つて、通話が切れる。瑛嗶は携帯をポケットに仕舞い、適当に数歩歩いた後、思い付いた様に携帯を取り出した。そして適当に番号を押して掛ける。ワンコールで相手は応答した。

「そうそう、言い忘れてたんだけど、第二位つて何処に居る？」

『おかしいな番号変えたんだが？』

アレイスターは瑛嗶の問いに対して逆さのまま首を捻った。

## 垣根帝督

アレイスターから第二位の超能力者<sup>レベル5</sup>が暗部にいるという情報を貰って、いい加減電話掛けるの止めてくれと頼まれたのを即答で却下して一方的に電話を切った後の事、瑛嗶は暗部に付いて調べていた。例によってiphone89sを使つて。

すると、暗部には瑛嗶が入る以前のアイテムと同じ様に、4人構成で作られている組織が幾つかある事が分かった。今確認取れているだけで、アイテム、ブロック、スクール、メンバーの四つ。原作では此処にグループと呼ばれる組織も加えられるのだが、まだ組織というには不完全なのだ。

そしてその内の一つ、スクールの中に、第二位のレベル5である垣根帝督が所属しているとの事。

という訳で、瑛嗶はその垣根帝督に会いに行く事にした。あわよくばメアド強奪してやろうと考えている。

「とは考えたものの、そのスクールの拠点は何処なんだろうなあ」

瑛嗶はそう考えてからしばらく街を搜索しているのだが、10分探しても見つからない。どういふことだろうか。いやまあ10分そこらで見つけられても困るのだけだ。

「よし、次目に入った建物に入る。それで大体合ってるんだ」

瑛嗶はそう言ってくるりとその場で一回転。そして止まった時向いていた先、そこに合ったのは、なんといか廃墟だった。だが、瑛嗶はそこへ普通に入っていく。中には地下へと続く穴や、上の階に続く階段、そしてボロボロに壊れた廃墟らしい部屋が幾つかあった。

「この穴は……なるほど、地下通路に繋がってるのか。誰か暴れでもしたのかねー」

瑛嗶は地下に続く穴を覗き込みながらそう言った。そして、階段を昇りながら誰かいないかと探す。すると、どこからか話し声が聞こえた。どうやら若い男と女の二人の会話の様だ。瑛嗶は気配を頼りにその二人がいる場所へと歩いていく。

『仕事は終わったんだし、私はもう行くわよ』

『ああ……つたく面倒な仕事だったぜ』

『文句垂れないの、それが私達の仕事なのだから』

『わあってるよ。いいから帰るならさっさと帰れ』

『はいはい、それじゃ——』

瑛嗶は一つの扉の前に立つと、中の話し声が鮮明に聞こえるようになり、若い少女が扉を開けて出て来た。そして、その少女は瑛嗶を見ると、驚いた様に固まる。瑛嗶はそんな少女に対して、

「あ、おつかれーっす」

「え、あ、うん」

そう言つて擦れ違う様に入つた。

「いや違うでしょ！ 誰よ貴方！」

「え？ お腹空いた？ つたく仕方ないなあ……ほら、猫缶」

「出すならせめて人間の食べ物出さないよ！ あと貴方誰よ！」

「なんだ、足りないのか。ほら、どんぐり」

「どんぐりい!!？」

「ほら、どんぐりならいっぱいあげるから、森へお帰り」

「おいどうい事だ。私は蟲か？ おい」

「ぴー」

「口笛は蟲笛じゃない!!」

瑛嗶は某ナウ○カの様には少女をあしらう。名前は分からないが、背中を開いた丈の短いドレスを着ている。コスプレかホステスとでも言いたいのだろうか。

「おい」

「え？」

瑛嗶は背後からの呼び掛けに首だけ回して視線を移すが、その視界には真つ白な『何か』で塗りつぶされていた。そして、瑛嗶はその白と身体の間腕を入れて、その白い何かを受け止めた。『触れる』能力は発動済みだ。そして、改めて良く観察してみると、それは白い翼だった。

「！ ほお、受け止めるとは予想外だぜ」

「何コレめっちゃメルヘンじゃん」

「てめえは誰だ。何をしに来た」

「俺はまあジョニーとでも呼べ。ちよつと友達を作りに来たんだ」

「友達作りに廃墟に入るのかお前。頭おかしいんじゃないのか」

「いやメルヘン中二病に言われたくない」

「殺すぞオイ」

瑛嗶に白い翼を叩きつけて来たのが、学園都市第二位のレベル5、垣根帝督。その能力は、この世にない物質を作り出す事が出来る『未元物質』と呼ばれる能力だ。まあ簡単に言えば思い通りの性質を持つ物質を作り出す事が出来る別次元の力だ。

「とりあえず、レベル5巡りしてるんだよ」

「……………へえ、命知らずな奴もいるもんだな」

瑛嗶の言葉を、垣根帝督は『レベル5に挑んで回ってる』と捉えた。

「で、この俺で何人目だ？」

「えーと、第一位三位四位五位には会ったから……………五人目だね」

「で、どうだったんだ？ 前の四人は」

「ん、中々骨のある子達だったよ」

「勝ったのか？」

「ん？」

瑛嗶は垣根帝督の勘違いに気付いた。そして同時に、これは面白い、勘違いさせるところとを考え、応答を続ける。

「でなきや五体満足じゃいらねーよ」

「ツハハハハ！ 第三位や四位はともかく、第一位のクソまで負けたのかよ！ 傑作だな！！ で、一番梃子摺ったのはどいつだ？」

「そうだね……………一番（弄りやすかったの）はしいたけかな」

「しいたけ？」

「第五位」

「ああ、確か精神感應系最強だったか……………まあ厄介だわな」

瑛嗶の言動を悉く勘違いする垣根帝督。やはり同じレベル5としては他のレベル5の話は興味があるようだ。

ちなみにドレスの少女は猫缶とドングリを抱えて帰って行った。もう付き合いきれなかったようだ。だが持つて帰る必要はないと思



われる。

「で？俺とも殺んのか？」

「その前にメアド教えてくれない？ 会ったレベル5のメアドを貰う様にしてるんだよ」

「ハッ、俺に勝てたら教えてやるよ」

「ああそう。順位が上がるとやっぱめんどくせえなあ」

瑛嗶は一方通行とメアドを巡って戦った事を思い出し、面倒臭そうに眼を細めた。レベル5というのは良くも悪くも好戦的すぎる。好戦的すぎて他人に迷惑掛ける所なんて全員に当てはまるではないか。まあその最たる存在は御坂美琴だが。

「仕方ねーな……じゃあいつちよやってやるよ。えーと……そうだな、何処でやる？」

瑛嗶は頭を掻きながらそう言う。すると、垣根帝督は凶悪に笑ってその背から『未元物質』<sup>データ</sup>で作りあげた三対の白い翼を生み出し、瑛嗶を攻撃した。

「此処で」

完全な不意打ち。正直、垣根は瞬殺だと思った。勝ったと思った。翼の速度はこの至近距離で出来る人間の反応速度を完全に超えているし、今度は受け止められない様に『防御を貫通する性質』を持つ物質で創られている。例え瑛嗶が受け止めた時に使った、おそらく防御の能力を使おうが吹き飛ばせると思ったのだ。

だが、

「不意打ちは感心だな。でも不意打つならちゃんと当てろよ」

その翼は何か『逸らされる』様に瑛嗶の身体から矛先を変えて地面を攻撃した。床が壊れ、二人は一回に落ちる。

垣根は翼で飛行し、瑛嗶は一回にくるつとまわって着地した。

「……何をしやがった？」

「教えると思ってるの？ おめでたい頭……ああ、ゴメンメルヘンだった」

「申し訳なさそうに言うんじやねえ！」

「それにしても、なんで翼？」

「この方が使いやすいんだよ。ほっとけ」

「ああ、そう。まあいいけど……さて、不意打ちは失敗した。正々堂々——掛かって来いよ。第一位共々手加減しまくって叩きのめしてやるから」

瑛嘎の言葉に、垣根帝督は青筋を立てて歯を見せながら笑った。

## 第二位対人外

瑛嗶と垣根の戦いは、実の所かなり接戦だった。何故なら、垣根は空を飛べて、瑛嗶は空を飛べないからだ。瑛嗶が一回地面を蹴って飛べるギリギリの高さよりも上に滞空する事が出来れば、瑛嗶の得意分野でもある先手必勝が出来ないのだ。勿論、その高さまで移動する事は出来る。以前の天使戦の様に、空気を『触れる』能力で足場にすれば何度か蹴った後に肉薄する事が可能。弱体化しているとはいえ、瑛嗶の速度は人よりもかなり速い。接敵すれば確実に先手を取れる。

しかし、幾ら瑛嗶だからといって、地面を蹴る、というプロセスを踏まない限り進む事は到底出来ないのだ。つまり、地面を蹴るという行為を始めて、終わらせるまでの僅かな瞬間が、垣根が攻撃を躲すだけの余裕を持たせる要素になっていた。

翼を使って飛行するという事は、地面を蹴る一瞬の間も移動出来るという事だ。瑛嗶の攻撃は基本的に身一つなのだから、近づけさせなければ勝つ事はあれど、負ける事は無いのだ。

だが、負ける事は無い垣根もまた、決定打に欠けていた。瑛嗶の攻撃を躲す中、瑛嗶に翼による攻撃を仕掛けているのだが、その全てが瑛嗶に当たる前に逸らされるか、瑛嗶に弾き飛ばされてしまう。『超能力による干渉を防ぐ性質』を持つ未元物質ダメージマターを作って攻撃すれば、逸らされる事は無いものの、やはり弾き飛ばされてしまうのだ。瑛嗶の『触れる』能力に関しては、垣根の演算能力を持ってしても演算出来なかったのだ。何故なら、超能力では無いのだから。

そして、物理的に攻撃するのでは駄目ならばと、『翼で回折した太陽光を殺人光線に変える性質』を使って、焼き殺そうとしてみたものの、瑛嗶の『触れる』能力は身体全体に及ぶので、進化した能力は30秒間瑛嗶の身体を護る。そして、その30秒間に瑛嗶は接敵してくるのだ。故に、その太陽光線を維持するのは接敵してくる瑛嗶を対処しながらでは無理だった。

同様の理由で、斬撃や暴風を起こしてみたりもしたのだが、斬撃も暴風も瑛嗶には全く効果を現さなかった。

故に、かなり接戦だった。というか、均衡状態だった。お互いに無傷、体力は減って行くものの、飛行している垣根はそこまで体力を消費していないし、瑛嗶が体力切れなどあり得ない。

だが、ここで確実に勝敗を付けるのは、垣根が能力を使えなくなつた時だ。学園都市の超能力者は総じて能力を使い続けられるわけではない。あの一方通行でも永遠に能力を使っている訳では無く、やはり何処かである程度脳を休めている。垣根としても同じこと。永遠に能力を使おうとすれば、演算を繰り返す脳が疲弊し、能力は強制的に使えなくなるのだ。例えるのなら、パソコンの電源を付けっぱなしにして計算を円周率を永遠計算させていければ、オーバーヒートして強制シャットダウンする様なものだ。

だが、瑛嗶の『触れる』能力は演算で成り立っていない。永遠に使続けられるのだ。それでなくとも、瑛嗶は身体能力だけで圧倒する事が可能なのだから、勝負は時間の問題だった。

「ッ……くそっ!!」

「おいおいどうした、その羽、段々動きが鈍くなってるぜ?」

「!」

「瑛嗶式——『断刀』!」タチガタナ

一瞬の油断。瑛嗶はその一瞬で垣根の上を取った。そして、真上から真下に振り下ろす様に踵を垣根の頭目掛けて落とす。その攻撃はなんとなく、ギロチンの様だった。

そして、その踵落としを躲そうと羽を動かして横に移動する垣根だが、一瞬遅く、瑛嗶の踵が垣根の右肩を抉った。

「——ギッ……!」

「まだ——まだあ!」

「なっ……!」

そして、右肩の関節をゴキツという鈍い音と共に脱臼させた瑛嗶は、振り抜いた足の先に『触れる』能力を発動し、空気の足場を作る。そして後退する垣根に追隨した。距離を放そうとした直後に距離を詰められ、身体が硬直する垣根。瑛嗶はその硬直を見逃さず、垣根の腕を掴んだ。

「落ちろメルヘン天使！」

「うお——！！？」

瑛嗶は背負い投げの要領で垣根を担ぎあげ、地面目掛けて投げる。そして、落ちて行く垣根は羽を使ってどうにか勢いを落とそうとするが、瑛嗶はそれを許さず、また空気を蹴って高速で落下していき、垣根の羽を掴み、地面に引き寄せて再度叩き付けた。

「ガッ……ぐぎっ……！」

すると、先程からの戦いのせい、廃墟だったせいか、床が壊れる。そして、そのまま地下通路に落ちた。そして落ちた先、そこには——

「え？」

上条当麻が居り、その後ろに警備員アンチスキルが銃器を構えており、そしてその前には土や瓦礫で作られた様な巨大なゴーレムが対峙しており、その傍には金髪に黒いドレスを着た女がいた。

「何この状況」

瑛嗶はそう呟きながら、垣根をゴーレムに向かってぶん投げた。すると、垣根は飛びそうな意識を繋ぎとめ、ゴーレムをその翼で破壊する。そしてそのまま一旦地面に着地した。

「げはっ……くそ、肩外れた……！ それに、アバラも何本か逝ったか……？」

垣根は脇腹を抑えつつ、未元物質で右肩を固定し悪化を防ぐ。そして手早く応急処置を済ませた垣根は瑛嗶を睨んだ。

「んだコイツら……ぺっ」

垣根は口内の血を吐きつつそう言う。

「なあ上条ちゃん。これどういう状況？」

「いやこれは……ちよつと魔術師が入り込んできて」

「なるほど……でもゴーレム壊れたけど……なるほど、再生可能な訳か」

瑛嗶の視線の先、垣根の姿を隠す様にゴーレムが復活した。そし

て、横に居た金髪の褐色女がゴーレムを操る。

「どうまー！」

「っ!? インデックス! どうしてここに!?!」

すると、破壊された床……この場合は天井からインデックスが姿を現した。どうやら瑛嗶達の戦闘の音を聞いてやって来たようだ。

だが、ゴーレムはインデックスに気を取られた上条当麻達を狙って拳を振りかぶった。

「しまっ——」

「インデックスちゃん、跳べ!」

「!」

瑛嗶の言葉に吃驚して咄嗟に飛んだインデックス。そして、瑛嗶は落ちてくるインデックスを受け止めて迫るゴーレムの拳の盾にした。

「あぶね」

ギイン! という音と共に拳がインデックスの『歩く教会』によって防がれる。流星は瑛嗶特製の霊装、その防御力は折り紙つきだった。

「な、なにをするの! 『歩く教会』があっても怖い物は怖いんだよ!」

「知らない。俺の作ったものを俺がどう使おうが勝手でしょうが」

「一番勝手なのはおうかかも!!」

「どうでもいいけど俺も忙しいの、とりあえず此処は任せた」

瑛嗶はそう言うと、ゴーレムに向かって駆け出し、擦れ違い様、一瞬でゴーレムをバラバラにした。そしてその先に居る垣根に接近する。

「このっ……!」

「地下に入れば空も飛べねーだろ」

「ウギッ——く——そーっ!」

咄嗟に三対の翼を腹の前で重ねて盾にすると、そこに瑛嗶の蹴りが容赦なく叩き込まれた。その威力に羽ごと吹き飛ぶ垣根。転がりながらもなんとか体制を立て直そうと翼をがむしやりに動かした。

「が……ハア……ハア……!」

「どうした、もう終わりか?」

「確かに……第一位を倒したつてのも分かるな……化けモンか、メモエ……！」

「一時期そう呼ばれてた事もあったな」

「げほっげほっ……あ、ー……くそ、もう限界か」

垣根がそう言うと、白い翼はボロボロと崩れて消えた。右肩を固定する未元物質はまだその姿を消してはいないが、どうやら垣根は演算能力の限界のようだ。戦闘する為に最低限の能力が発動出来なくなったらしい。まあ瑛嗶の止まらない攻撃と接近に対して休むことなく頭を回転させて即座に判断し、躲し、能力の演算を行っていたのだ。こうなるのも分かる。

「お前、俺を殺す気は無いんだろ？」

「まあね」

「なら、降参だ。……胸糞悪いが、流石に勝てそうにない。引き際は心得てんだよ」

「そうか、さて」

「んだよ」

「携帯、出せよ」

瑛嗶のにつこりとした笑みに垣根は大人しく携帯を差し出した。瑛嗶はそれを弄り、アドレスと電話番号を交換する。そしてそのまま携帯を垣根の手に握らせると、瑛嗶は垣根を抱え上げた。

「お、おいどうするつもりだ！」

「病院へ連れてく」

「別に良い！ 余計なお世話d——っ痛……！」

「大丈夫、暗部にも優しいお医者さんがみてくれまちゆからねー」

「ブツ殺すぞお前!!」

「わはは、出来ない癖に何言っただメルヘン頭」

「クソ、他のレベル5がどんな気持ちになったのか分かるわ……やりづれえ」

瑛嗶はその言葉を聞いて、ゆらりと笑った。

「いいのかな？ そんな事言っつて」

「はっ。」

瑛嗶の笑みを見て垣根は顔を青褪めさせた。何をされるのか予想は付かないが、悪い予感しかしない。

「はい、じゃあこの状態で病院まで徒歩で運んでやる」

「待て待て待て待て待て!!! 悪かったから! 謝るから! マジで止めるホントごめん止めてくれ!!!」

瑛嗶は垣根を『お姫様だっこ』して運び始めた。空いた天井から外へ出る。騒ぐ垣根を瑛嗶は無視しながら歩く。そして、廃墟から出ようとした所で、垣根が最後の力を振り絞って翼を出し、瑛嗶の腕から逃れ、全力で土下座を行なった。

「冗談だよ」

瑛嗶はそう言って、ゆらりと笑った。



## 風斬氷華

垣根提督をカエル顔の医者 of 病院へ連れて行ってからしばらく、瑛嗶は病院から『触れる』能力の練習も兼ねて、空中を継続的に蹴りつつ移動していた。そうしている内に気付いたのだが、瑛嗶の『触れる』能力は発動後、3秒ほどのインターバルが必要になっていったのだが、今の瑛嗶はそのインターバルが限りなく少なくなっていた。おおよそ1秒から0.5秒ほどだが、それでもかなりの進化だろう。やはりレベル3とレベル4では出来ることに大きな差があるようだ。

また、瑛嗶はこの『触れる』能力を自分以外のものに1.5秒程度だが付与出来るようになった。それは言ってしまったえば1.5秒間無敵の盾を作りあげる事が出来るという事だ。御坂美琴の超電磁砲<sup>レベルガン</sup>だろうが、垣根提督の未元物質<sup>タークマター</sup>の翼だろうが、一方通行のベクトル変換だろうが、その1.5秒間は何をしても破壊出来ない盾。これはある種、瑛嗶の戦闘の幅が広がったと言えるだろう。

「——でも、なんか違うんだよなあ」

瑛嗶は呟く。

この『触れる』能力に関しては、超能力でも魔術でも無い全く別の力だ。何せ、神から直接貰った能力なのだから。アレイスターはこの能力を神の力であるテレズマと表現したし、幻想殺しとも違うと言った。解明出来ない別次元の力。

瑛嗶はこの能力の、現在の使い方<sup>に</sup>少しだけ疑問を抱いていた。これまで数々の能力を使いこなしてきた瑛嗶だが、この能力に関してはただ『触れる』だけというわけではないと感じているのだ。

「ま、不自由はしてないし……いいか」

瑛嗶はそう結論付けて、一旦着地しようと能力の発動を止める。そして、工事現場の鉄骨の上に着地点を定めた。そして、少し考え事をしつつ足を伸ばすと——

「え」

ガシャン、という音と共に瑛嗶は何かを踏みつぶした。陶器を壊した様な音は、何処か人間にも似ていて、少しだけ違和感を感じる。

「いったあぁあ!!」

そして響く悲鳴。瑛嗶は冷静にその場からどいてその悲鳴の発生源を見た。

「ぐうう……!」

すると、そこには上半身と下半身が割れた様に分断された少女が転がっていた。だが、血は出ていない。本当に身体が陶器の様に割れていた。だが、痛みは感じているのか苦しんでいる。そして、中身は空洞だった。

「……………どういうアレだ、コレは」

「ふうう……!」

「あ、直った」

すると、苦しんでいた少女の身体は時間が戻ったかのように元通りに直った。すると、少しだけ自嘲気味に笑みを浮かべて立ちあがった。

「あ、あはは……痛いですよ、もう」

「ごめんね。ちよつとぼーつとしてて。ところでお前誰?」

「あ、か、風斬氷華っていいいます」

「へー、で、その身体はどういう構造?」

「あ……………その、これは……………私は化け物だから……………」

「へー」

「へー、って……………それだけですか?」

「ゴメン、俺見た目人間なら取り敢えず関わるタイプの人間だからさ」  
瑛嗶の言葉に、風斬氷華という名の少女はひくつと口元を引き攣らせた。それはつまり、人間の姿をしていれば中身がどうであれ関係無いという事ではないか。例えば中身が妖怪でも、例えば中身が悪魔でも、例えば中身が——空洞でも。

「でも流石に中身が無い奴に会うのは初めてだ。ちよつと触らせてー」

「え」

むにゅん、瑛嗶の手が風斬の豊満なおっぱいに触れた。中身が空洞だというのに、何故か柔らかい。しかも中身が無いのに弾力まである。どういう構造なのだろう、と瑛嗶は顎に手を当てて更にむにゅにと揉んだ。

「え？　え？」

風斬はその行動に呆然としていて反応出来ていない。そして、瑛嗶が手を放した頃にぱつと胸を抱えて顔を赤くした。遅い、反応が遅すぎる。

「ななななん、なにをしますか！」

「おっぱいを揉んだ」

「ハッキリ言わないでください！」

「母性の象徴に触れて、刺激を与えた」

「遠回しも駄目です！」

「感想言おうか？」

「い、言わなくていいです！」

瑛嗶の言葉に先程まで落ち込んでいた様子の少女が涙目で慌てだす。

「さて……どうでもけど此処で何してんの？　おかげでふんづけちゃったじゃないかどうしてくれる」

「え、これ私が悪いんですか？」

「普通こんな所に人がいるなんて思わないって」

「あ、はい、すいませんでした……？」

瑛嗶は謝罪を受け取ると、踵を返す。そして、顔だけ振り返って少し少女を見る。

「……………俺の名前は泉ヶ仙瑛嗶だ。じゃあまたね、氷華ちゃん」

「あ、は、はい！」

氷華が嬉しそうに笑うと、瑛嗶はゆらりと笑ってその場から跳躍し、去って行った。



瑛嗶は宙を跳び回りながら、先程であった少女の事を考えていた。

「——中々面白そうな存在だったね。会えたのは運が良かった」

彼女、風斬氷華は人間では無い。この学園都市に存在する230万の超能力者達の放つ、AIM拡散力場の集合体だ。所謂、生物では無く現象と言った方が正しいのだ。故に、先程のおっぱいを揉んだ時に瑛嗶が感じた感触は、念動能力の力で作られた感触、体温は熱操作系の能力者の力等々、様々な力によって作られているのだ。

だが、彼女はつまり能力の塊の様な物で、異能の力の塊。それは上条当麻の『幻想殺し』イマジネフレイカーで触れられれば簡単に消え去ってしまうのだ。「俺の勘だと、今後また会う気がする。まあその時は——この世界がどうなってるか分からないけれど」

瑛嗶の勘は良く当たる。嫌な予感も当たってしまうのが傷だが、逆に良い予感も当たるのだから結構便利である。

「さて、どうなるかな?」

瑛嗶は空気を蹴って、ゆらりと笑いながら、そう言った。空は既に茜色に染まっていた。

## 法の書編

### 学園都市の外へ

第二位と戦ってから一週間後、九月八日の事。

瑛嗶は風斬氷華に再会した。場所は、学園都市の出入り口である。彼女は学園都市の能力者によって作られているので、学園都市の外にはおおよそ出る事が出来ない。能力による補正が効かないからだ。だがそれ以前に、彼女は一週間までの九月一日、瑛嗶と話した後その姿を消した筈なのだ。その姿を実体化出来なくなり、風斬氷華という現象は視覚化出来なくなった筈なのだ。

さてここで、舐め回す様に見られる、や、視線に触れる、という表現をご存じだろうか。まあどつちにせよ見られるという訳だが、ここで重要なのは他人が他人に対して視線を送ると、その視線は相手に触れるという事になるのだ。故に、別に触られてもいないのに視線を感じる、という感覚を得る。

つまり、瑛嗶は本来見えない筈の風斬氷華を『触れる』能力で視覚化したのだ。視線で『触れる』ことで。つまり、瑛嗶はその身体で『触れる』ことや、他のものに能力を付与させて『触れさせる』以外にも、視線や聴覚等の感覚部分でも『触れられる』様にすることが出来たのだ。

文字通り、見て、聞いて、それに『触れる』

子供でも分かる事だ。故に、瑛嗶は見えないがそこに存在する風斬氷華を見る事が出来たし、当然の様に『見えない』という性質を無効化してその身体に触れる事も出来た。

また、直接触れていないことからこれに関してはどうやら時間制限は無いようだった。

「……………何してんの？」

「な、なんで見えるんですか」

「化け物だから?」

「そ、そうですねか……あ、近寄らないでください」

瑛嗶におっぱいを触られた経験から、風斬氷華の瑛嗶への警戒心は鰻登りだった。

「はいはい、で、何してんの?」

「えと……私約束通りあの修道服の子のそばに居たんですけど……あの子が学園都市の外に連れ去られてしまつて……でも私は学園都市からは出られないから……」

「どうしようつて?」

「……はい」

どうやら、風斬氷華は消えてから一週間ずっとインデックスの傍にいたらしい。なんというか、完全なステルスでのストーカーだな、と瑛嗶は感想を抱いた。そして苦笑気味に頭に手を乗せた。

「ふえ?」

「インデックスちゃんが連れてかれたつて事は、上条ちゃんも動くでしょ。仕方ねーから俺も助けに行つてやるよ。全く、友達思いなこつた」

瑛嗶はそう言うと、学園都市を囲っている高さ5m、厚さ3mの壁を見上げた。どこかの巨人アニメなら全員駆逐されてる。

そして、瑛嗶はその壁を普通に跳躍で乗り越える。そして氷華を見下ろして、手を振ると、インデックスを探すべく学園都市の外へと去つて行つた。

「まあ、それは建前で、本当は面白そうだからだけどね」

瑛嗶は空中を蹴りながら、そう言つた。

◇  
◇  
◇

上条当麻は、学校帰りに土御門元春の義理の妹、土御門舞夏に出会つた。そして、インデックスが身長2mほどで、赤髪で、啞え煙草

で、頬にバーコードの刺青、そして神父の様な格好をした怪しい奴に連れ去られたと伝えられた。

この作品ではまだ出て来てはいないが、この特徴は上条当麻がインデックスを救った時に共闘した魔術師の一人、ステイルⅡマグヌスの特徴に他ならない。神裂火織もそうだったが、彼もそうとう怪しい格好をしているのだ。

「はあ……学園都市の外出許可証に規定で書いた脅迫状……なんつー古典的な」

という訳で、上条当麻は舞夏がその誘拐犯から渡された封筒を受け取り、その中に入っていた外出許可証と脅迫文にため息を吐いていた。

「まあ……助けに行くかあ……」

上条当麻は現在、学園都市の外を歩いていた。地理も分からないので、地図を見ながらだが、とりあえずは徒歩で脅迫文に書いてある場所へと移動している。

そして、学園都市からしばらくあるいた場所、一つのバス停が見えた。そこにはインデックスとは違って黒い普通の修道服を着たシスターが運行表を見ながら首を傾げている。上条当麻としては、そういうものに関わりたくなかったので、スルーして通り過ぎようとするものの、不幸な彼にその選択肢は無い。

「あの、少しよろしいでしょうか」

「………はい」

「バスの運行表はどのようにして見ればよろしいのでしょうか？」

「えーと……何処に行きたいんですか？」

「ああはい、私、学園都市行きのバスに乗りたいのでございます」

修道女はそう言った。だが、学園都市行きのバスは無い。何故なら、学園都市に入るにはそれなりの手続きと許可証がいるからだ。バスでは学園都市の中には入れない。

「えーと……学園都市行きのバスは無いですよ？」

「あらあら、そうなのでございますか？　ありがとうございます、で

は」

修道女はやってきたバスに乗り込んだ。

「待って待って!! 話し聞いてましたか!？」

「え? あら、違いましたか?」

「学園都市行きのバスは無いの! だからこのバスに乗っても学園都市には行けねーの!!」

「そうなのでございますか……ありがとうございます。では」

修道女はバスに乗り込んだ。

「だから待ってつちゅーに!!」

「あらあら、どうやら少し汗を掻いているようでございますね。少し動かないでくださいませか」

修道女はまたバスから降りて来て、汗だくな上条当麻の汗をレースのハンカチで拭う。徹底的に話を聞かない修道女に上条当麻はたじたじた。

「くそ……このシスター……瑛嗶と同じ位めんどくせえ……!」

修道女は面倒臭さにおいて瑛嗶と同レベルになったようだ。まあ瑛嗶はわざとで彼女は天然なのだが。その点は特に違いは無いだろう。

「お茶を飲みますか?」

「え、ああ……ありがとうございます」

当麻は修道女から差し出された水筒のコップを受け取る。そして、中に入っているお茶を口に含んだ。すると、そのお茶はこの真夏日にも関わらず、ホットだった。

「あつつあ!?! なんでホット!?!」

「熱い時には温かいものの方が良いのでございますよ」

「お前はおばあちゃんか!?!」

「あら、それでは飴玉をどうぞ」

「……ありがとうございます」

上条当麻は飴玉を口に入れた。好意は受け取らなければならない。オレンジ色の飴玉なので、オレンジ味かと思っていたのだが、その実全然違う。



「何味コレ……？」

「渋柿味でございます」

「本格的におぼあちやんだな！ オイ！」

上条当麻は頭を抱える。なんだこの女版瑛喰みたいな存在は、と苦悩した。そして感覚的に直感した。この修道女と瑛喰を、一緒にしてはならない、と。

「えーと……学園都市行きのバスは無いんだ。此処まで良いか？」

「はい」

「……で、俺は学園都市から来たんだ。どんな理由があるか知らないけど……とりあえず一緒に来るか？」

「では、そうさせていただくのでございます」

「はあ……不幸だ」

上条当麻はそう呟く。

「ああそうだ。俺は上条当麻、よろしくな」

「ええ、私はオルソラ・アクィナスと言います。よろしくお願ひします」

そして、その修道女の名前は、オルソラ・アクィナスといった。

もやしつくす！

とある廃れた劇場跡地に、インデックスはいた。その場にはインデックスを攫った赤髪の魔術師、ステイル・マグヌスと、ローマ正教の修道女であるアニーゼ・サンクティスが居た。

彼らの目的は、『法の書』と呼ばれるアレクスター・クロウリー著書の魔導書の奪還だ。ちなみに、『法の書』は難解不読の暗号で書かれた魔導書であり、その解読方法は何千通りとある。そしてその全てが正解にして不正解。つまり、誰にも読めるけれど、誰にも読めない魔導書という訳だ。

だが、そんな『法の書』の『解読方法』を見つけ出した修道女がいるという情報が現れた。その修道女の名前は、オルソラ・アクイナス。彼女もまたローマ正教に所属していた修道女だった。

だがしかし、彼女は法の書の解読方法を目当てに寄ってくる欲深い者達から逃げた。国から出て日本の学園都市へと逃亡したのだ。

そして、『法の書』も何処かの魔術組織によって強奪された。解読者と暗号本が同時にローマ正教から失われたのだ。焦ったローマ正教は今慌てて回収しようとしているという訳だ。

そこで、学園都市に伝手があるイギリス清教にも協力を要請し、巡り巡って魔導書の歩く図書館である禁書目録にも協力を仰ぐために、誘拐されたという訳だ。上条当麻はそのついでである。保護者という役を担っている以上、彼にも居て貰わないといけないのだ。

「……卑怯者、ロリコン、ヤニ神父、ヘタレ、痴漢、セクハラ野郎……」  
「待て、君その言葉の意味分かってるのか？」

「……………死ぬ、喉にお餅詰まらせて死ぬ、もしくは焼かれて死ぬ、いつそ死ぬ、今死ぬ、すぐ死ぬ、早々に死ぬ……」

「うん待とうか、少しその言葉を教えたクソ野郎に付いて話し合おうじゃないか」

インデックスがステイルに対してぐちぐちと呪詛の言葉を呟くと、ステイルは珍しくうろたえながらそう言った。実はこれは瑛夏の影響だったりする。彼は基本呼吸をするように嘘を言い、日常である様

に暴言を吐く。故に、インデックスはその言葉を学び、自身の言葉と組み合わせるとんでもない暴言口撃を仕掛けているのだ。

「……別に良いかも。どうせとうま来ちゃうし、おうかもこの事を知れば来るだろうし、そうしたら秒読みで解決しちゃうかも」

「上条当麻は分かるが……おうか、というのは誰かな?」

「私に暴言の吐き方を教えてくれた人だよ」

ステイルはよし、そいつ殺そうと心に決めた。元々、彼はインデックスの同僚であり、彼女を救う為に長年生きて来た人間だ。しかも、彼女の為なら相手がだれであろうと燃やし尽くすと心に誓った程の意思の強い少年である。

「ところで、その保護者の方は何時きやがるんですかね?」

「さあね……でもま、そろそろ来るんじゃないかな?」

とんでもなく高い厚底のサンダルを履いたアニーゼがそう言う  
と、ステイルは煙草の煙を吹かしながらそう言う。すると、

「あ、いたいたインデックスちゃん。元気?」

男の声が響いた。ステイルは魔術を使うのに必要なルーンの刻まれたカードを取り出し、アニーゼも銀色の杖を構えて警戒する。

だが、二人が視線を向けた先には誰もいなかった。何故なら、その存在は既にインデックスの目の前でしゃがんでいたからだ。

「なっ……」

「何時の間に……!」

「おうか、やっぱり来たんだね。誰から聞いたのか教えて欲しいかも」

「風斬氷華ちゃん」

「ひょうか!? 嘘っ!」

瑛夏の言葉にインデックスは目を見開いて驚く。そして更に言及しようとする——

「はあ!!」

「ん?」

しゃがんでいる瑛夏の頭上から、ステイルが炎の剣を魔術で生み出

し、切り掛かってきた。会話が中断され、瑛嗶とインデックスは迫る熱気に視線を迫る炎剣に向ける。

「そしてその炎剣は瑛嗶の頭を焼き切るかと思われた——が、  
「えい」  
「あつつあ!!」

瑛嗶はインデックスの腕を取って盾にした。ギイン！ という音と共に『歩く教会』が炎剣を防いだ。だが、インデックスは炎剣による空気の温度の上昇で、飛び散ってきた油に当たった様な反応をした。

「おいおい、お前。いたいけな幼女シスターに攻撃するとかマジ鬼畜じゃん謝れよ」

「おうかの方が鬼畜かも!!」

『歩く教会』が復活している……？ まあそれは後でいいか……君に言われたくは無いな。というか普通切り掛かられたら後ろの彼女を庇う位するもんじゃないのかな？」

「ごめんね、俺はこの子が死のうが死ぬまいがぶっちゃけどうでもいいんで」

「酷い！ おうか酷い！」

インデックスが騒ぐが瑛嗶は無視する。そんな瑛嗶に対してステイルは嘲笑し、髪を掻き上げた。そして、殺気の籠った瞳を向けた。  
「ふざけるなよ、素人が」

「なんでそんな怒るのかねー。この子になんか思い入れでもあんのか  
ロリコン」

「……うるさい。僕は僕の信念に従って、邪魔する奴は誰であろうと燃やし尽くすと決めたんだ。ずっと昔にね」

「モヤシ、作る？」

「骨も残さず燃やし尽くしてやろうかお前!!」

瑛嗶はステイルの誓いな物を聞いて尚、だから？ と茶化した。正直どうでもいいのだ、彼の想いなど。インデックスが好きであろうが無かるうが、何を護りたいのかわからないが、瑛嗶にとっては特に取るに足らない道端の草みたいなものだ。

「ははは、さてはお前モヤシ知らないな？ 仕方ないな……ほら、これがモヤシだ」

瑛嗶はポケットからモヤシを一本出してそう言った。

「知ってるわ!! というかなんで都合よくモヤシ持つてるんだ！ しかも一本だけ!!」

「ほらインデックスちゃん。食べる」

「私はダストシュートじゃないんだけど!？」

「食べないの?」

「……あむ」

「生だけだな」

「ぶふっ!？」

瑛嗶の差し出したモヤシをインデックスは食べた。そして瑛嗶の言葉を聞いて吐いた。汚いことこの上にならない。

「吐くなよ汚ねーだろ」

「誰のせい? 誰のせい!？」

「あ、上条ちゃん来た」

「話を聞けえええ!!」

瑛嗶に弄られるステイルとインデックス。アニエーゼはいつのまにか置いてけぼりを喰らっている事に気付き、折角キャラを濃くするために銀の杖とか厚底とか用意したのに瑛嗶のキャラの濃さには勝てなかったと膝から崩れ落ちた。

そして、そんなカオスな状況を目の当たりにした上条当麻は、

「何コレ……」

とうんざりした様な顔で呟いた。

## 地獄巡り茶。パート2

さて、問題なのはここからだ。瑛嗶によってシリアスな雰囲気が一気に軽い雰囲気へと変わってしまった後の話。法の書と解読者が両方同時に失われてしまった事は前にも行ったが、その内の一つ、解読者である修道女の名前は、オルソラ・アクイナスだ。実は彼女が逃げたのは『天草式』と呼ばれる日本の魔術組織に助力を求めた結果なのだが、ローマ正教はそれを彼女の解読法を狙った天草式の誘拐と捉えている。また、法の書の方も天草式が盗んだのではないかと予測されている。まあそれはそれとして、彼女は上条当麻がバス停で瑛嗶並に振り回されたあの修道女と同一人物である。

そして、その彼女は上条当麻と共に現れたのだ。他でも無い、彼女を探しているローマ正教の修道女代表、アニエーゼ・サンクティスの目の前に。

「オルソラ……アクイナス……！」

そして、アニエーゼは当然の如くオルソラを見つけて目を見開いた。こんなにも簡単に見つけられた事と、目的の相手が見つかった事に拍子抜けしたのだ。とはいえ、オルソラの方はそうでもないように、アニエーゼの姿を見た瞬間に表情を固まらせて立ち止まった。

「おい、どういう事だよ！　なんで誘拐ごっこなんてしてんだ！」

「ああ、なんだ狂言誘拐ってバレてたのか……まあ行方不明の探し人の搜索を頼もうと思っただけだね」

「はあ？　俺にそんなスキルはねーぞ？」

「ああ、大丈夫。君の隣に居る彼女を引き渡してくればそれでいいから」

「は？」

「だーかーら、君の「隣の愛する」彼女が行方不明の探し人、オルソラ・アクイナスだ——っておいコラ話の腰を折るな！」

ステイルと上条当麻が話していると、瑛嗶は普通に茶々を入れた。そして、ステイルがそれを嗜めると、瑛嗶はべつ、と舌を出してそっ

ぽを向いた。

すると、瑛嗶は当麻の隣の女性、オルソラⅡアクイナスと目が合った。

「初めまして」

「あら、これはどうもご丁寧に。初めまして、私オルソラⅡアクイナスと申します」

「俺は泉ヶ仙瑛嗶だ。気軽に瑛嗶様と呼んでくれ」

「そうでございますか。では瑛嗶様、少し聞きたい事があるのでございますが」

「何?」

「バスの運行表の読み方を教えて欲しいのでございます」

「ああ、あれはね横読みと見えて縦読みなんだよ。基本的に全部『歩け馬鹿め』と読めるんだ」

「なるほど、ありがとうございます。お礼と言ってはなんですが、麦茶をどうぞ」

「お、ありがとう。んーやつぱり暑い時は熱いお茶だよねー、何かお菓子ない?」

「飴玉ならございます」

「ありがと。お、渋柿味じゃんうまー。じゃあお礼に俺もこれをあげよう」

「コレは?」

「地獄巡り茶」

「それはそれは、御大層な名前の紅茶でございますね。何という葉を使っているのでしょうか? あらあら、これはとても美味しい紅茶でございますねー!」

「おお、当たりを引くとは運が良いねー。外れたら死ぬのに」

「ごめんちよつと話止めて貰って良いかな!!」

瑛嗶とオルソラがボケにボケを重ねる会話を繰り返していると、ステイルと当麻がハモリながら会話に介入してきた。どうやらボケの質が良過ぎたらしい。

「なんだよ」

「あら、どうしました？」

「うん、分かってたけどボケまくるなお前ら！」

「平凡な会話の中に常識を覆す瞬間や昔を感じさせる瞬間や命のやりとりが行なわれている瞬間があったよ……なんだこの会話、異常すぎる……!!」

当麻はうがーとツツコミ、ステイルはわなわなと戦慄した。そして、この展開は予想していなかったのか、アニーゼは言葉を発せずに手をふらふらと彷徨わせるばかり。インデックスに至っては歯に引っ掛かっていたモヤシを取ろうと悪戦苦闘していた。普段からカオスだった空間だが、オルソラという要素が加わって更にカオスと化した。瑛嗶×オルソラではない。瑛嗶×オルソラなのだ。いや恋愛の意味では無く、数学的な意味で。

これでオルソラの天然が最大に発揮され、瑛嗶が全力でボケ始めた場合、これが瑛嗶のオルソラ乗、もしくはオルソラの瑛嗶乗という無限大のカオスが生まれるだろう。

「……ま、まあいい。とりあえず……彼女を引き渡せ」

「……ん？ オルソラ、どうした？」

上条当麻の言葉にオルソラは少し焦った様な雰囲気で一歩引く。すると、その瞬間、低い男の声が響き渡った。

「——いやいや、そう簡単に引き渡されては困るのよなあ」

魔術師達は直ぐにその者が何者なのか、理解した。オルソラを攫い、法の書を奪った日本の隠密魔術組織、

天草式

「天草式……!」

「オルソラ!! アクイナス。お前も分かっている筈よな? 我ら天草式と来る方が、有意義に過ごせるといいう事が」

男の声がそう響くと、地面からジャキツと剣が三本突き出てくる。



そして、その三本は三角形を描く様に動くと、その三角形の中心に立っていたオルソラを地面の下へと引き摺む――

「えーい、ついでにおりゃ」

が、失敗した。瑛嗶がオルソラの身体を抱えて落ちるのを避けたのだ。そして、ついでとばかりに先程オルソラへ渡した地獄巡り茶の残りを放り込んだ。勿論全て外れである。

元々、瑛嗶は地面の下に人間の気配が幾つかある事に気付いていたのだ。故に、普通に対応出来たという訳だ。

「なっ――かつらあああ!!?」

「残念だったな天草式、オルソラちゃんは頂いたあ！ わーははははは!!」

どうやら上手い事天草式のメンバーの数名が地獄巡り茶を口に放り込まれたようだ。最初にやってくる激的な辛さに悶える声が聞こえた。

そして、そこから瑛嗶はオルソラを抱えて走り去っていく。その速度は、音速を超える。『触れる』能力で空気を踏み、『逸らす』能力で空気抵抗で向かってくる風と空気の壁を逸らす。ノーダメージでスイスイ進んで行く瑛嗶は、すぐにその姿を天草式とステイル達から消して行った。

第三勢力、瑛嗶勢力が生まれた瞬間であった。



瑛嗶はその後、空気を踏んで空を歩いていた。今までは瑛嗶自身にしか『触れる』能力を使えなかったのだが、今は他のものにも付与出来る様になったので、オルソラにもその能力を行使しているのだ。

なので、オルソラは驚いていたものの、瑛嗶と共に空を歩きながら会話していた。瑛嗶は能力が切れる度に発動して連続使用している

ので、多少違和感はあるものの、空中散歩を普通にこなしていた。

「何故、私を攫ったのでございますか？」

「んー……まあ大した理由は無い」

「無いのですか」

「ああ、まあ強いて言うのなら——その方が、面白いから」

「……どういう事でございましょうか？」

オルソラは瑛嗶にそう言う。すると、瑛嗶はその問いに対して楽しそうにくつくつと含み笑いをしながら答える。

「だってさ、どうやらあの赤髪ロリコン神父と空気ちゃん、それにインデックスちゃんもか、それとあの天草式とかいううさんくさい宗教団体はオルソラちゃんを狙っているみたいじゃないか。なら、俺が君を攫った場合、アイツらこそぞつて俺を狙ってくるぜ？ 天使ちゃんまでとは言わないが、そこそこ楽しめそうだ」

「楽しめる……瑛嗶様は戦いを楽しんでいるのでございますか？」

「いや、そういう訳じゃない。俺は戦いを楽しんでるんじゃない、世界を楽しんでるんだよ」

そう、瑛嗶は世界を楽しんでいる。この世界に転生し、起きる展開やイベント、事件や戦闘、悲劇に喜劇、日常回やギャグ回、全てにおいて楽しんでいる。故に、瑛嗶は彼女を攫った後の事など考えてはいない。相手がどう動くのかも考えていない。ただ、その後の展開がどうであれ、後悔する事もしない。楽しんで楽しんで、その結果戦闘で負けて、死んだとしても別に良いのだ。

「……………」

そして、そんな生き方にオルソラは少しだけ身震いした。それはつまり、自分自身の命すらも、娯楽の糧としているという訳ではないか。自分が楽しんだ結果、死ぬのなら本望というわけだ。

楽しかったから死んでもいい。

人間、喜びを感じた時、そう比喻することもある。もう死んでも良い位嬉しい、とかだ。だが、それを受け入れる事が出来る人間はいない。いないのだ。

だからこそ、異常。瑛嗶は人生観から狂っている。まあそうでなけ

れば、人外などやっつけられない。

「さあて、どうなるかな」

オルソラの隣でそう言う瑛バケモは、狂ったように、純粹に楽しそうに、ゆらりと笑ってそう言った。

一方、その頃は

瑛嗶がオルソラを連れ去った後、天草式のメンバーは自分達が空けた穴からゆっくりと這い出て来た。ステイル達はそれに対して警戒したが、なにやら数名黒い笑みを浮かべている。更には嫌な汗も出ていた。

「ふ、ふふ、ふふふふふ……あの野郎、ぶち殺してやるのよ……」

その中の。黒髪をクワガタの様に逆立たせた男が嫌な汗を滲ませながらそう言う。後ろではその言葉に賛同する様に長い槍を持った二重が特徴的な少女や、その他数名のメンバーが怒りに武器を構えていた。どうやら瑛嗶の地獄巡り茶を喰らったメンバーの様だ。全員が青白い顔をしながら殺気を放っていた。

「天草式、ですね。オルソラⅡアクイナス奪還に関して、少し話があるので、話し合いと行きませんか？」

すると、その天草式に対してアニーゼが警戒しつつそう提案する。ここでオルソラを取り返すにせよ、法の書の情報を得るにせよ、天草式を味方に付けておくことは有益と見たのだ。

ローマ正教としては、その方が効率が良いのだ。

「……まあいいだろう。だが我らは天草式十字清教、オルソラⅡアクイナスの身柄は此方が保護したいと考えている。話し合いの結果、協力関係になったとしても、それはオルソラを奪還した時までだ」

「……いいでしょう。では、お互い警戒しながらというのもなんですので、代表同士の話し合いと行きましょう。此方は私、アニーゼⅡサンクティスが代表として話し合いをしましょう。其方はどうしますか？」

「俺が出るのよ。教皇代理、建宮齋字だ」

「では、こちらへ」

アニーゼと建宮が二人、話し合いを開始するべく広い場所へと移動していく。そんな中で、上条当麻やステイル達は情報の整理をしていた。

「上条当麻、あの男は何者だ？ 僕達プロの魔術師でも反応出来ない

気配を察知し、オルソラが攫われる前に攫って行った。しかも、空を駆けて行く始末だ。飛行する魔術なんて、早々出来る芸当じゃないぞ。そういう超能力でも有しているのか？」

「……いや、アイツの能力は良く知らねえが……俺が知っているのは、ただ能力での強化であれなんであれ、アイツの身体能力は化け物つてことだな。名前は瑛嗶だ」

「ふむ……瑛嗶、ね……魔術的な関係があるのか……？ 漢字はどう書くんだ？」

「え？ えーと……」

ステイルの問いに上条当麻は考える。普通に考えれば桜に夏と書いて桜夏なんかが当たるだろうが、それが当たっているかは分からない。

だが、その問いにはインデックスが答えた。

「瑛に嗶と書いて瑛嗶、だよ」

「お前なんで知ってるんだよ」

インデックスがコンクリートの地面に転がっている石でガリガリと書くと、当麻がそう聞く。すると、インデックスは意外な答えを出した。

「ひよつかの一件が終わった後、とうまを病院に連れて行ったでしょ？ その時受付の名前記入欄におうかの名前が書いてあったんだよ」

そう、インデックスは瑛嗶が垣根帝督を病院に連れて行った後、当麻を連れて同じ病院にやって来ていたのだ。そこで、瑛嗶が受付に書いた名前を見た。そして、持ち前の完全記憶能力でその漢字を一字一句残さず覚えていたのだ。

「ふむ……特に魔術的意味はなさそうだ」

「あ、でもおうかはこの『歩く教会』を直してくれたんだよ」

「何!？」

「本当かは分からないけど、おうかは神の子イエス・キリストと友人関係にあったらしいんだよ。そこでこの『歩く教会』の原点である聖骸布を作ったらしいの。だから正確な魔術的記号までも修復してみたんだ。証拠と言ってはなんだけど……おうかはイエス・キリスト

が処刑された際に被らされていた聖遺物、『いばらの冠』のオリジナルを持ってたんだよ。私の見た限りでは本物だったかも」

インデックスの言葉にステイルは目を見開いて驚く。それが本当ならば、新約聖書に名を残していてもおかしくは無い偉人だ。神の子と友人、ならば神の子と対等な立場であったという事だ。聖人どころでは無い、もっとそれ以上の神話的意味を持っているという事になる。

「よくわかんねーけど、それが本当なら瑛嗶さんは紀元前位から生きてたって事か？」

「いや、それは分からないよ。キリストの誕生と共に紀元が始まったと言われてるが、正確にはキリストの誕生は紀元前4年頃となっている。その時代から現代まで生きているというのなら、それ以上前から生きていてもおかしくは無い。それこそ、恐竜がいた時代から生きているのかもしれないね」

「恐竜……!?!? それって、え？ 魔術には不老不死になれる魔術でもあんのか？」

「とうま、そんな魔術は歴史上一つも存在していないんだよ。過去には何人か不老不死の魔術を研究した人もいたけど、どの研究者も何の結果も残さずに挫折していったんだよ。似た様な魔術として、幾つか魔導書が私の頭の中にあるけれど、歴史上で完全な不老不死は不可能とされているんだよ」

インデックスの言葉に当麻はなるほど、と一応理解した。だが、問題は瑛嗶がどれほどの長生きかではない。瑛嗶は何者で、自分達と同じ人間なのか、そして人間でないのならどういう存在なのか、だ。キリストとの関係、接点など、そういう情報も少しでもあればという状態なのだ。

「でも、神の子との関係があっただけで、特に聖書的な行動を取っていた訳じゃないと思うよ？ 正直、おうかは神を信仰している訳じゃないさそうだったし、神の子をあいつ、とか言ってたから神聖視してた訳では無いかも。純粹に、生きてきた中で神の子と会って、友達になっただけって言う方が正しいのかも」

「なるほど……奴にとっては神の子と出会い、友人関係になったのも別に神への信仰とかではなく、特に深い意味は無い、か……まあそれほどどの怪物なら、その方が逆に納得出来る……か」

ステイルが煙草の煙を吐きながらそう言う。とはいえ、問題は解決していない。瑛嗶が強いのは変わりないのだから。どう対策を練るか、それが問題なのだ。

「？ 上条当麻、そのポケットから出ているのはなんだ？」  
「え？」

当麻はそう指摘されてポケットからそれを取り出す。すると、それは瑛嗶からの手紙だった。

「瑛嗶からの、手紙？」

上条当麻は瑛嗶の手紙を開き、ステイル達にも分かる様に、読み始めた。

やはり、進行上手がかりを残す

瑛嗶からの手紙の内容は、こうだ。

『全略』

A4用紙が丸々白紙で、一番上にぽつんとそう書いてあった。しかも、無駄に綺麗な字だからムカつく。

「ふざけんじゃねーよ!!?」

「さて、上条当麻。その手紙を寄越せ」

ステイルは手紙を破ろうとする当麻を止めて、その手紙を奪い取る。そして、自身の得意とする炎の魔術を行使して、その手紙を炙った。

「炙りだした」

「めんどくさっ!? 　　というかいつ書いたんだよその手の込んだ手紙!!」

「えーと何々——」

ステイルが炙りだして出て来た文字を読み始めた。

『——お前らがわざわざ炙りだしてまで読んてる頃には、俺はその場にはいないだろう』

「そりやそうだろう!」

『どうせお前の事だからそりやそうだろう、とか突っ込んだらうな。上条ちゃん、お前の事だぜ?』

「ぐ……くそ、果てしなくムカつく……!」

『さて、という訳で俺はオルソラちゃんを攫って行った訳だが……ぶっちゃけ、面倒なんで、そこらへんのコンビニかどっかで涼んでる事にするわ。とりあえず……俺らの居場所のヒント1、『ミキサ』』  
『この手紙』『長音の逆音』、とこんなところか? まあヒント与え過ぎな気もするけどね。ま、最近俺もゴリ押しとかやったし、こういうのも悪くないでしょ。じゃ、頑張つて』

瑛嗶の手紙を読み終わると、ステイルはしゅぽつと燃やした。

「……なんだこの馬鹿にした様な文面は……」

「とうま、なんか私のフードの中にもあったんだよ」



「えーと……『手紙を燃やした貴方は、短気で怒りっぽい馬鹿です。だって行動読まれてるもん（笑）』だってさ……」

「おい何してる。さっさと奴を殺しに行くぞー！」

「待てよ短気ー！」

「誰が短気だ上条当麻！」

「ステイル、ステイなんだよ」

「これも奴の影響かああああああ!!!」

ステイルは沈みゆく太陽に向かってそう叫んだ。

そして、しばらくした後。彼らは瑛夏の暗号を解き始める。まず、ヒントは『ミキサー』『瑛夏の手紙』『長音の逆音』だ。これだけでは全然解けない。何を指しているのか、さっぱりだ。しかも、手紙自体がヒントとなっているのなら、燃やしてしまった時点でそれは失われている。

「ミキサー……ふむ……あの手紙がヒントなら……どこかの文面が関わっているのかもしれないな」

「となると……炙りだしとかか？」

「いや、私は全略のトコだと思うんだよ」

「……ありそうで困る……」

そこで、インデックスの言った事を元に、組み立てて行く。全略、それは造語で元々は前略だ。となると、前を略す、ということだ『ミキサー』の前を略してみた。すると、『キサー』になる。

そして最後のヒント『長音の逆音』だが、長音とは『ー』という伸ばしの棒線を示している。これが伸ばす長音では無く、短い単体の音である促音となる訳だ。

そして結果出来上がったのが、『キサツ』

「なんだこれは」

「キサツ！」

「キサツ！」

「おい止めろ。暑さでイライラしてんだから」

「タバコ吸ってっからそうなんだよステイルさんじゅうよんさい」

「嘘っ……14歳なの？ もっとおっさんかと思ってたんだよ」

ステイルはインデックスの何気ない一言に崩れ落ちた。

当麻とインデックスはそんな彼を放つてすくつと立って携帯のG PSを弄りだす。

「じゃ、いくぞ」

「何処へだ」

「瑛嗶達のトコだよ」

「なっ……分かったのか?! この暗号が!」

「ああ」

上条当麻もインデックスも、瑛嗶という人間と関わったのは短い期間だが、それでも彼の人間性は良く分かっていった。

「いいか、『キサツ』は『キツサ』に入れ換えて、『喫茶』になる訳だ。つまり、この辺の喫茶店に居るんだよ。分かったか」

「いやいやいやおかしいだろそれは。力押しにも程があるぞ」

「何言ってるんだよ。言ってるだけ、瑛嗶も手紙で」

ステイルは首を傾げて何を言ってるのか分からないという顔をする。上条当麻はステイルに瑛嗶の真似でゆらりと笑ってこう言った。

「ゴリ押しも、悪くない」

手紙の文末に書かれていた事の要約。つまり『ツ』の位置など、力押しで動かして良いだろ別に、という暗号の理論をぶっ飛ばしたやり方であった。

◇ ◇ ◇

さて、そういう訳で、当麻達の結論通り喫茶店でオルソラと涼んでいた瑛嗶。オルソラはどうしてこんな所に居るのか分からず、結局瑛嗶の勧めるがままに紅茶を飲んでいた。

「あの、いいのでございませうか……こんな所で涼んでいても」

「いーんだよ。どうせ向こうからうじやうじやと来るから。それこそゴキブリの様に」

「ゴキブリは言い過ぎでは？」

「じゃあぼうふらだな」

瑛嘎の言葉にオルソラは苦笑気味だ。瑛嘎はそんなオルソラを放って頼んだパフェをパクパクと口に運んでいた。ちなみに、36個目である。

「ま、あの暗号は普通に解けるし……さて、誰が最初に此処に来るかな？」

瑛嘎はそう言って、スプーンを咥えながらにっと笑った。

## 地獄巡り茶の当たり

上条当麻達がやってきた劇場跡地の周辺には、喫茶店と呼べる店が幾つかある。携帯のGPSで確認した所、瑛嘎が走って行った方向にある喫茶店は、おおよそ三つ。とりあえずその三つの喫茶店にそれぞれ三つのチームを編成して三手に別れて行く事にした。

一つは上条当麻、インデックス、ステイルを始めとした、天草式数名とローマ正教の修道女数名を組み合わせたチーム。

一つはアニーゼIIサンクティスをリーダーとした修道女組

そして天草式の建宮斎字をリーダーとした天草式組の三組だ。それぞれのチームに瑛嘎への恨みを持ったメンバーが入っているようになっていく。ステイルは勿論、空気にされたアニーゼ、地獄巡り茶を喰らった天草式数名等々、様々な恨みをこの数十分の間に作りあげた瑛嘎を褒めるべきか分からないメンバーの多さだ。

とはいっても、オルソラという重要人物が瑛嘎という分類上一般人の手にある以上、干渉しない訳にはいかない。それが魔術の世界の常識であり、状況によってはその命を奪う事も躊躇わない。まあ、殺せるかどうかは、別の話だが。

「つても、あの飄々とした男が何処に居るか把握するのが先ですが……」

という訳で、アニーゼ率いる修道女チームはオルソラを探して一つの喫茶店に向かっていた。といっても、もう視界にその喫茶店を捉えているが。

一応逃げられない様に修道女達に指示を出して密かに包囲陣形を取っているのだ。

「シスターアニーゼ、包囲陣形。完了しました」

「了解です……さて、ここに居てくれやがると嬉しいのですが……」

アニーゼは報告を受けて喫茶店の入り口に立つ。

入るのはアニーゼを含め、髪型を二つのおさげに結った小さな修道女、アンジェレネと金髪を短く揃えた修道女、ルチアの三名だ。そして、仮に瑛嘎とオルソラが中に居た場合、即時確保。逃げた場合は

包囲している修道女達が捉えるという寸法だ。人払いの結界で喫茶店を覆つてあるので、店員や客はいないので、多少荒い方法を取つても迷惑にはならないだろう。備品を壊した場合は賠償金でも払えばいいのだから。

「では、行きましょう」

アニエーゼが先導して中に入る。すると、チリン、という甲高い金属音と共にドアが開く。中には当然人はいなかった。だが、入った扉から一直線に向かった先の壁、そこに設置されたテーブルには、瑛嗶とオルソラが、向かい合う様に座っていた。

「おめでとう、ここに辿り着いたのは君が最初だよ。えーと……アニエーゼちゃんだったっけ？」

「ローマ正教所属、アニエーゼⅡサンクティスです。さて、オルソラⅡアクイナスを引き渡して貰えますか？」

「良いよ」

「え？」

瑛嗶のあつさりとした反応に、アニエーゼやルチア、アンジエレネ、そしてオルソラまでもが呆然とした。ならば何故攫つたのかと問い詰めたい所だ。

「なら——「だけど」……」

「タダで渡すのは、面白くないよね。分かる？」

「……つまり、力づくって事ですか」

アニエーゼは瑛嗶の言葉に銀色の杖を構えて戦闘態勢に入った。ルチアやアンジエレネも各々の武器を手に構えている。

「へえ、俺的にはそれでも問題無いんだけど……それじゃあワンパターン過ぎてつままないでしょ」

「は？」

「だから、俺がなんかする度、戦つてハイ終わり、なんてのはつまらないんだよ。いくら無双好きの読者も飽きるって」

「え、えと……何言ってるか分かんねーですが……つまり、どういう事ですか？」

「ゲームをしよう、簡単かつ明快で、勝敗がハッキリ分かるゲームを」

瑛嗶はそう言って人差し指を立てた。行なうゲームは古来より人間が多くの決め事で行なってきた単純なゲームだ。

「それは……？」

「ジャンケン」

「はっ」

瑛嗶はその手の形をぐーちよきぱーと順に変化させ、そう言った。アニエーゼはそのゲームに対してきよとんと眼を丸くした。

「但し、唯のじゃんけんじゃない。10回俺が勝つ間に、そっちが1回勝てばそっちの勝ちだ。そして、お前らが勝つ場合はオルソラちゃんを引き渡そう。だが、俺が勝つ場合……アニエーゼちゃんには罰ゲームだ。オーケー？」

「……いいでしょう」

「じゃあ、オルソラちゃん。頼んだよ」

「はいっ」

瑛嗶はオルソラの背中を押してアニエーゼの前に出した。それはつまり、瑛嗶がじゃんけんをするのではなく、オルソラがじゃんけんをするという事になる。

「はい？　じゃないんだよ。お前の行く末を決めるんだからお前がやれよ」

「で、でも負けたら私は……！」

「大丈夫大丈夫、今のお前は——俺と同じ位無敵だから」

瑛嗶はそう言って喫茶店を出ていく。アニエーゼ達はオルソラを置いて出て行くという愚行に再度拍子抜けするが、好機とばかりにオルソラを確保に回った。

だが、オルソラの腕を掴もうとして、オルソラに躲かれた。

「な……」

「あら？」

「このー！」

銀の杖を振り回して攻撃するも、やはりオルソラはそれを躲した。元々、オルソラの運動能力は良い方では無い。走れば人並み以下に遅い自信があるし、喧嘩をすれば十中八九負ける。そんな程度の運動

能力しかないのだ。

「なんで……!」

「いえ、私の方こそ聞きたいのですが……何故その様に『ゆっくり』と攻撃なさるのでしょうか?」

「は……!?!」

オルソラは、言った。アニーゼが『ゆっくり』動いていると。いくら運動神経が無かろうが、運動能力が低かろうが、3km先からやってくるトラックを事前に認識出来れば避けられない筈が無い。それと同じで、それがどんな攻撃であろうが、ゆっくりと動いているのならば、躲せない筈が無い。

オルソラは、瑛唄の言った通り、『無敵』の境地に居た。動き出す前に察知出来、当たる前に躲せる。そんな領域に、いた。

「どういうことですか……何故お前が……!?!」

「いえ……良く分からないのですが、どうも先程の劇場跡地から視界が鮮明なのでございますよ」

アニーゼは思いだす。劇場跡地、そこでオルソラの運動能力、というよりは感覚を鋭敏化させる様な出来事があったかどうかを。

そして、思い当たる事がたった一つだけあった。瑛唄とオルソラのボケの応酬の中、彼女はとあるものを口に入れていた。

『コレは?』

『地獄巡り茶』

『それはそれは、御大層な名前の紅茶でございますね。何という葉を使っているのでしょうか? あらあら、これはとても美味しい紅茶でございますね!』

『おお、当たりを引くとは運が良いねー。外れたら死ぬのに』

地獄巡り茶。そう名付けられたあの紅茶。それしか思いつかない。外れれば死ぬ、それは天草式の様子を見れば、理解出来る。ならば、当たったら? 外れた場合のリスクを鑑みれば、当たった時のメリットはそれ相応だと考えられる。

「まさか、あの当たりは………！」

地獄巡り茶。

それは、外れれば死ぬほど辛い苦しみを味わい、当たれば無敵の領域に足を踏み入れる。そういうものなのだ。

『地獄巡り茶』、別名『領域変化の水』

瑛嗶の作った瑛嗶の紅茶だ。その当たりは舌を美味さで刺激し、その延長線上で脳を刺激し、感覚を瑛嗶と同等まで一時的に引き上げる。その効果はおよそ一日。つまり、オルソラは感覚的に言えば瑛嗶とほぼ同等。故に、防御や回避に徹した場合、オルソラに攻撃を当てる事は、全力で回避に回る瑛嗶に攻撃を当てる事とほぼ同義なのだ。

「……成程、今の貴女は確かに厄介な状態の様ですね……では、素直にじゃんけんしてあげましょう。貴女が10回勝つ間に私達が1回でも勝ったら、素直に投降して下さい」

「ええ、分かりました。約束は神に誓って守りましょう」

オルソラが頷くと、アニエーゼは銀の杖をルチアに預けて拳を握った。

「では——」

「はい」

「さいしよはぐー、じゃんけん——」

修道女二人が誰もいない喫茶店の中で、必死の表情を浮かべながらじゃんけんをする。とんでもなくシニールな戦いが、ここにあった。



## オルソラ無双

「ふ、これで私の9連勝でございますね……」

「く……馬鹿な……!」

さて、その後オルソラとアニーゼの勝負は、オルソラの10連勝で決着を見た。元々、この勝負はオルソラの勝利以外の道がほぼ閉ざされてしまっている。何故なら、オルソラは相手の手がじゃんけんにある三つの手の内のどれかに変化するのをスローモーションで見ながら、手を出す事が出来るのだ。所謂、公正な後出し。公平な後出し。

だが、その後アニーゼはシスタールチアとアンジェレネがいた事を思い出し、二人とも勝負させる事を提案したのだ。そしてオルソラはどこか余裕を感じさせる笑みでそれを承諾した。まあ結果は見ての通り、二回戦目で出て来たシスタールチアは、9戦9敗していた。

「もう一度……じゃんけん」

「はい」

そして、10回戦目、結果は――

「く………すみませんシスターアニーゼ……敗北です」

「いえ……アンジェレネ。貴女もやって下さい」

「は、はい。頑張ります」

そして、小さな修道女、アンジェレネがオルソラと勝負を始めた。



その頃、瑛噺は喫茶店の外で包囲陣を汲んでいたシスター達を全員叩きのめしていた。暇だったので、ちよつと遊ぼうぜと声を掛けた所、襲い掛かってきたので返り討ち、というのがこの状況をまとめた形になるのだろう。

また、叩きのめされたシスターは全員死んではない。とりあえず気絶させられたのだ。瑛噺は気絶したシスターを数名積み重ねて簡易的な椅子を作りあげていた。

「……暇だ」

「なら一つ俺らと手合わせ願いたい所なのよな」

「……………はあ……………暇だ」

「今眼合ったよな!? いなかったことにして再度呟くな!」

「……………だってお前地獄巡り茶飲んだ奴だろ? 俺は一回倒した奴には興味ねーの。ジャンプコミックスだつて一巻が二冊あつても困るだろうが。それと一緒にだよ」

「ほお俺はジャンプコミックス一巻、それも余分に手に入れた二冊目と同じ価値しかねーのな?」

「すぐさまブックオフに売りに行くね。まあ、1000円2000円にもならないだろうけどね」

やって来たのは、外れの喫茶店に向かい、その後そのまま此方へやってきた、建宮齋字率いる天草式のチーム。15名程だが、全員が殺気立っていた。服の濡れた者がいるので、そいつは恐らく地獄巡り茶を浴びたか飲んだ奴だろう。ちなみに、地獄巡り茶は最初に来るのが辛さなので、肌に触れた場合、めっちゃ痛い。刺す様な痛みが肌をピリピリと刺激するのだ。まあ2分位すれば収まるが。

「まあいいじゃねーの。1000円あればマックでハンバーガーくれるだろ?」

「残念、俺は毎回Lセットなんで」

「まあいいじゃねーの。1000円足せばLセット分の600円賄えるじゃねーのよ?」

「残念、俺はお釣り出さない派なんで」

「もういいから戦えやコラッツ!!!」

建宮がそう言うのと、天草式15名が一斉に跳び掛かってきた。

「……………俺に対して『跳び』掛かってくるのは失敗だったな」

瑛唄は、『逸らす』能力を使った。跳び掛かってくる天草式のメンバーが一人残らず着地点を瑛唄の下から逸れ、瑛唄を中心として半径2m程の円の外へと着地した。

「な……………どういう事だ……………?」

天草式の一人が漏らすと、瑛唄はゆらりと笑って修道女を使った人間椅子から立ち上がる。その際に掛かった体重でぐえ、と修道女が声

を漏らしたが、無視だ。

「人の手札を知らない内に飛び掛かってくるのは失策以上に愚策だ。さて、お前たちは俺に対して——どこまでやれるかな？」

瑛叟の言葉は、天草式のメンバーに対してかなりの重圧を与えた。ぞわつと背筋が昇る様な感覚と、ぶわつと溢れ出て来た冷や汗、そして身体の芯から振るえていた。

「んだ……これは……！」

建宮は、自分ではあまり恐怖していないつもりなのに、手元が震えているのが不思議だった。カタカタと持っているフランベルジュと呼ばれる波打った刀身の剣が音を立てている事で、自分の本能というか、無意識の部分で瑛叟に恐怖を抱いているのだと理解した。

そしてそれは、自分の仲間も同様だと分かる。見れば、仲間達は全員顔が青褪めていた。恐らく、自分の表情もそうなっているのだろうと、簡単に予想が付いた。

「どうした？」

瑛叟が両手を広げてゆっくりと近づいてくる。すると、自然と自分の身体が一步下がった。驚く位自然に、驚く位無意識に、脚が勝手に動いた。

「く……！」

「——はあ……だから言ったんだよ、お前らなんかに興味はねーよ」

瑛叟は建宮達の恐怖心を正確に読み、ため息を吐いて頭を搔く。それと同時に、建宮達は肩の重りが無くなった様な感覚に陥った。

「あー………暇だ」

緊張感が無くなった後でも、瑛叟の一挙手一投足に反応して動けない天草式を放っておいて、また座り直した瑛叟はそう呟いた。



さて、オルソラとアンジェレネの勝負だが、

「じゃんけんポンー！」

「じゃんけんポン！」  
「じゃんけんポン！」  
「じゃんけんポン！」  
「じゃんけんポン！」  
「じゃんけんポン！」  
「じゃんけんポン！」  
「じゃんけんポン！」  
「じゃんけんポン！」

10回。全てアンジェレネの敗北だった。だが、アンジェレネは何処かキリツとした表情を浮かべ、アニーゼ達の下へ歩み寄る。そして、肩を抑えてあたかも怪我を負ったかのような姿勢を取った。

「く……シスタールチア、シスターアニーゼ……」  
「アンジェレネ？」

「どうかしたのですか……？」

じゃんけんの勢いが良過ぎて肩でも痛めたのかと心配する二人。だが、アンジェレネはそんな二人に対して、こう返した。

「やるだけの事はやりましたよ……！」

「貴女はただ10回瞬殺されただけですよツツ!!」

「どうしてそこまでやりきった感が出せるのか不思議ですよ……」

無駄に達成感を漂わせるアンジェレネは、ルチアに拳骨を落とされ、頭を抑えながら転がる破目になった。

そしてそれを横目にアニーゼはオルソラに向き直る。

「それで、貴女は私達にまとめて勝ったわけですが……どうしますか？ このまま逃げますか？」

「……いえ、どうせ私が逃げ出す前に攻撃してくるのでございませう？」

「まあそうなりますね。私達としても、逃がすわけにはいかねーんですよ」

「……私は暴力を振るう事はしません。なので、私は非暴力不服従の精神に則って此処から逃げようと思えます」

「はっ……やれるもんなら、やってみてくださいよ——なっ!？」

「遅いのでございます」

アニエーゼが銀の杖を振り上げたその瞬間、オルソラは既にアニエーゼの懐に踏み込んでいた。そして、アニエーゼの身体を中心に、回る様にして彼女を抜いた。

「私は今、どういう訳か無敵らしいのでございますよ」

オルソラはそう言うと、入口の扉を開けて、まるで女神の様な微笑みを浮かべた後、店を出て行った。

そして、アニエーゼはその微笑みに恐怖を感じた。そう、まさしく瑛嗶に対して天草式を感じ取った恐怖と同じものを、感じたのだ。

瑛嗶によるドーピングを受けたオルソラは、自身でも知らない内に瑛嗶と同じ威圧感を与えていたのだった。

## キリストの信仰は歪んでしまった

さて、結果的にオルソラはローマ正教の修道女達、言ってしまうえばそのリーダーであるアニーゼーサンクティスの攻撃を全て躲し、堂々と逃げ切つて見せた訳だ。かといって、外で瑛嗶を警戒していた天草式が、彼女を逃がす筈も無い。当然捕らえようとオルソラへ掛かつて行つたのだが、やはりというかなんというか、オルソラのチートな感覚で動きが全て読まれ、全て躲されてしまった。

瑛嗶と同じ威圧感を放つ彼女と、それをゆらりと笑つて見ている瑛嗶。この二人を目の前になると、当麻が危惧していたものとは別の方向性で、組ませるはいけない二人だという事が分かった。

「さて、話し合いと行こうか。天草式のクワガタ頭」

「……何が言いたい」

「簡単な事だよ。俺はただ知りたなんだ、お前がどういう立ち位置で、どういう考えで、どういう行動で、どういう目的で、オルソラちゃんを手中に収めたかつたのか」

「……我らは別に、オルソラアクイナスの持つ解読法や法の書なんかに興味はねーのよ」

瑛嗶の言葉に、建宮齋字は語りだす。天草式がどういう目的で動いているのか、そしてローマ正教がどういう目的に動いているのかを。「そもそも、我ら天草式は本来『隠密』を優先して行動する組織なのよ。法の書とかおおっぴらに目立つものを欲しがる理由は無い。俺達がオルソラアクイナスを助けようと思つたのは、俺らのリーダー……プリエステス女教皇がそういうお人だったからだ」

「へえ」

「救われぬものに救いの手を、それがあの人の信念であり、この天草式の信念だ。だから我らは困っていたオルソラを助けようと動いたし、オルソラが助けを求めて来たから助けようと思つたのよ。故に、オルソラが我らを拒絶しようと、我らは救われなままのオルソラを放つてはおけなかつたのよ」

瑛嗶はその言葉を聞いて、あーそういうことかと拍子抜けした様な

表情で明後日の方向を向いた。

「そうかいそうかい。あーなんだ、そういうことかい。で、ローマ正教はどういう目的でどういうアレな訳？」

「ローマ正教の目的はオルソラ・アクィナスの抹殺だ」

「……へえ」

瑛嗶はその言葉を聞いてそっちの方が断然おもしろそうとばかりにゆらりと笑った。

「いいか、法の書というのは解読されれば十字教の終焉が訪れると言われている。故に強大な力を持った魔導書と呼ばれている訳だ。だが、考えてもみろ。十字教最大魔術組織であるローマ正教が、十字教のトップであるローマ正教が、十字教の終焉を望んでいるとでも思うのか？」

「なるほど、だから解読されちゃ困るって訳かい。保護なんて言つて、あの腹黒ロリはまあ中々面白いモン抱えてんじゃねーか」

瑛嗶は心底楽しそうに笑った。その姿は、主人公とは言えず、悪党とも言えなかった。人を救うにはそれだけの善意も正義感も持ち合わせておらず、人を殺すにはそれだけの悪意も敵愾心も持つていない。そんな人間とも言えない存在に見えた。

傍から見れば、正義である天草式をつまらないと言い、悪であろうローマ正教を面白いと言った。とはいえ、瑛嗶からすれば善悪問わず面白そうだという理由で括れる。

言ってしまうえば、人を救いたいから己の正義を振るう天草式も、自分達のトップである地位を失いたくないから自分達に害を与えるオルソラを排除しようとするローマ正教も、等しく違う正義なのだ。

自分を殺そうとする者を逆に殺した場合、それは完全に悪と言えるだろうか？ 人を救う為に別の人を殺した場合、それは本当に正義なのだろうか？

つまりそういうことだ。瑛嗶にとって、正義という観点から見るとなら天草式もローマ正教も正義なのだ。それが面白い正義感なのか、つまらない正義感なのか重要なことから。

「へえ……この場合俺はどういう行動を取るべきなのかな？ その

十字教とやらを終わらせてみるのも手だと思っただけだけど、ここはオルソラちゃんの意志に則って彼女を助けてみるのも楽しそうだ。いっそ、ローマ正教つてのに全面的な喧嘩を売ってみるのも面白そうだ」

「お前さんならやりそうで怖いな……まだ会って少ししか経っていないものの、会話すらこれが初めてだというものの、お前さんという人柄は中々分かりやすい」

分かりやすいが故に、怖いのだ。単純だからこそ、分かりやすいからこそ、複雑ではないからこそ、変えられない。人生を生きるのなら、シンプルな思想だけで十分なのだから。

「ま、そういうのは色々と面倒だ。魔術サイド各教の相関関係を知っているわけではないのだし、俺が魔術を使えるという訳でもないし、果たして俺の持ちうる手札で魔術サイド上位の実力者を相手取る事が出来るのかすこーしばかり分からないしね。まあ、身体能力じゃ負ける気がしないけれど、何も知らないまま喧嘩を売っても良いのだけれど、まだ時期じゃないかな」

「それで、お前さんはこれからオルソラ嬢をどうするつもりなのよ？」  
「んー……まあローマ正教のロリシスターはオルソラちゃんが直々に叩きのめしたようだし……ぶっちゃけコレってイギリス清教がせかせかと裏で手を回せばいいんじゃないの？ 元々、俺の目的は友達の友達から頼まれた友達の奪還だった訳だし」

「ややこしいなオイー」

友達の友達から頼まれた友達の奪還。元の目的はこれだったのに、どこで捻子曲がったのやら。

「さて、色々遊んで楽しめたし……インデックスちゃんもどうせちゃんと返してくれんだろ？ ならもういいや。オルソラちゃんは此処に置いてくから……好きにしてくれ」

瑛嗶は欠伸を一つ漏らすと、パーカーのフードを被って歩きだす。学園都市に向かって帰るようだ。そして、瑛嗶が進む先には丁度良く上条麻達のチームが見えた。これで三竦みの集団が一挙に集まり、重要人物であるオルソラもいる。後は好き勝手にやってくれるだろ



う。

「それじゃ、オルソラちゃん。戦闘になったら全部躲してどうかし  
といて頂戴」

「あ、はい。お疲れ様でございました」

「バイトかツツ!!!」

こうして、オルソラの一件はなんやかんやあつて瑛嗶は離脱した。

その後、瑛嗶が事情をにごにごによつて説明し、ローマ正教側VS天  
草式&イギリス清教&上条当麻で戦闘が起こったのだが、全陣営の魔  
術攻撃が全て中心にいたオルソラに躲されて、喫茶店を中心にほぼ全  
員が膝から崩れ落ちて自信を失ったのだった。

これが法の書事件の顛末。最終的にオルソラは上条当麻によつて  
イギリス清教の十字架を首に掛けられ、イギリス清教による保護を得  
られる事となり、オルソラの解読法が偽物だと判明した。

「全く、十字教とか……キリストちゃんの信仰も随分と歪んだもんだ」

この一件に対する瑛嗶の感想は、そんなモノだった。

## 大覇星祭 木原幻生編 大覇星祭

### 大覇星祭

学園都市で行われる最大最高の大規模イベントだ。普通の学校で言われる、所謂体育祭なのだが、その規模は大きく異なってくる。

まず、普通の学校の行なう体育祭とは、学校内の生徒をチーム分けして行なうスポーツ勝負の事を言う。だが、学園都市は全く規模が違う。『学校同士』で戦う学園都市という大きなフィールドで行う体育祭なのだ。この場合、参加する学校は学園都市内の全ての学校。そして一番特徴的なのは、一週間という長い期間で行われるイベントという事。

各学校の生徒達は例年優勝候補と言われている学校を調べ、対策を練る。ちなみに、優勝候補の学校は、常盤台中学の様に能力開発に関してかなりの力を持った学校なのだが、その理由は大覇星祭の一つのルールにある。

——つまり、『超能力』の使用制限解禁

このイベントの競技の中であれば、生徒達は普段研鑽してきている能力を使っても良いのだ。つまり、パン喰い競争で吊り下げられたパンを念動力で取っても良いし、徒競走で道を土流操作でぬかるみにしてもいい。あらゆる能力を駆使して短い間の競技を勝ち抜いた学校が、大覇星祭を制すのだ。

今日はその初日。開会式も執り行われ、第一競技までの間、生徒達は今か今かと開始を待っていた。ちなみにこのイベント中は学園都市の外から両親や友人を呼んでも良いことになっている。だからこそ、大規模と言っている訳だ。

さてさて、そんな中瑛噎は賑やかな雑交の中鼻歌交じりに歩いていた。青黒いパーカーと、七分丈のズボン、手に入れた iPhone 8

9sに入れた音楽を付属のイヤホンを使って聞きながら、楽しそうに歩いていた。眼を閉じながら音楽にノッている瑛嘎。普通の人ならば眼を閉じながら音楽を聞いて歩くと、普通に人にぶつかる。しかし、瑛嘎は人の気配を察知して軽快に人を避けながら歩いていた。

「〜♪　〜♪」

だが、そこで瑛嘎は一人の少女と遭遇した。金色の髪を背中まで伸ばし、若干癖のあるふんわりとした髪型にし、服装は大覇星祭らしく体操着。キラキラと大きい瞳が特徴的で、年齢不相応に身体付きも良い。まるでモデルのような容姿をしているが、それに反して彼女は幾分性格が子供っぽいので、雰囲気的には大人びている子供というのが瑛嘎の印象だった。

「あらあ？」

「お、しいたけじゃん」

つまり、学園都市に七人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>の一人、第五位の精神感應系最強の能力者、食蜂操祈だ。キラキラした瞳は生まれつきらしく、瑛嘎を視界に捉えてぱちくりとさせた瞳は、少しびっくりしているようだった。

「こんな所で常盤台をクビになった人に会うなんてねえ」

「こんな所で常盤台のしいたけに会うなんてなあ」

「しいたけじゃないんですけどお!!」

「で、なにしてんの体操着なんて着て」

「見れば分からない？　大覇星祭だから体操着着てるんですー」

拗ねたのかぷくーつと頬を膨らませながらそういう食蜂操祈。だが、瑛嘎はそんな食蜂の頭をガツと掴んで引き寄せた。

急なことで驚く食蜂。文句を言おうと瑛嘎を見て、何も言えなかった。

「な……」

「オイ、俺は怒ってるんだ」

「な、なんでよお……？」

「俺が怒っている理由、分からないのか？」

「な、理由って……そんなの……ええ……？」

訳が分からない。瑛嗶の怒りの表情に食蜂操析は怯えるばかりだ。かつて多くの戦いで生き抜いてきた瑛嗶、その威圧感はこちらよつとの怒りだけでも十分女子中学生を怯えさせることが出来る凄味がある。

「——るか……」

「え?」

「お前にイベントに参加出来ない奴の気持ち分かるか!!」

「……………はい?」

瑛嗶は大きな声でそう言った。

「周りを見やがれしいたけ。見ろ、あの子供の楽しそーな顔と周囲の生徒全員がそれぞれ体操着を着ている光景を。俺は生徒でもねーから競技にも参加出来やしねえよ。音楽を聞いて気を紛らわそうとしたらお前と会っちゃった。全くふざけんじゃねえよ大覇星祭潰すぞ物理的に」

「うんちよつと待ってくれるかしらあ?」

「だが断る」

「少しは余裕持つて会話しなあい!」

つまり、瑛嗶はこんなに大規模なイベントがやってるのに全く参加出来ないこの状況に腹を立てていたのだ。普通の体育祭なら流しているのだが、能力使用有りの大規模な体育祭なんて面白そうないイベント、見逃せる訳が無い。そして、参加出来ないのなら潰してしまえという考えに至った。

「あーもう……仕方ないわねえ。それじゃあ私が大覇星祭を案内してあげるわよお……競技に参加しなくても楽しむ事なんて幾らでも出来るわよ」

「例えば?」

「観客参加型の競技があるの……まあ宝くじみたいなものなんだけどねえ」

食蜂操析は一つの売店を指差した。そこには大量の行列が出来ている。どうやら有名で人気の何かを打っているらしい。

「あれはレベル3以上の能力者だけが購入出来るとある競技の参加券を売っているんだけどお……参加出来るのは買った能力者の内、一人

だけ。抽選で選ばれるの……あれなら能力者であることが条件だから、貴方でも参加できるんじゃない?」

「じゃあ買ってみるか」

瑛嗶と食蜂は行列に1時間近く並んで、その参加券の抽選券を購入したのだった。

◇ ◇ ◇

それからしばらくして、第一競技が開始された。第一競技は『棒倒し』で、上条当麻の学校の面々も参加しており、かなり白熱した勝負が繰り広げられた様だ。

食蜂操析と瑛嗶も、その競技の様子は至る所に設置されている大型液晶で見ている。そんな中、一緒に大覇星祭の露店を見て回っている途中で、ちよつとしたイベントが起きた。その後、現在取り行われている競技、『借り物競走』で指定された物を探している生徒がやってきたのだ。

「あ、そこのお二人! ちよつとよろしいでしょうか!」

「ん?」

「え?」

おそらく小学生だろう。この大覇星祭の競技において、年齢は全く関係無い。中学生と高校生が戦う事もあれば、小学生が高校生と戦う事もある。基本的に能力を見られるのだから。

「どうしたお嬢ちゃん」

「えと、その……借り物競走で指定された条件の人を連れていかないといけない……その、一緒に競技場まで付いて来てくれないでしようか!」

「あらあ、どうするの?」

「よし、行くぞ。掴まれ二人とも」

「え」

「ん?」

瑛嗶は小学生の女の子を肩に座らせるように担ぎ、食蜂を荷物を持

つように抱えた。

「よしお嬢ちゃん、競技場はどっちだ？」

「え、えと……あ、あっちです！」

「よしきた」

瑛嗶は指差された方向へ——跳び上がった。一瞬で地面が遠くなる。少女と食蜂は一瞬で変わった景色と、吹き抜ける風に、しだけ感動を覚えた。空を踏んで駆ける瑛嗶は、二人が気持ち悪くないように進み、競技場の真上まで直ぐに移動した。そして、見れば競技場の上条当麻を連れた御坂美琴が入ってきている。放っておけばゴールテープを切るだろう。

だがしかし、

「一位は俺らだ」

瑛嗶は空を蹴った。猛スピードで急降下する。『逸らす』能力で空気抵抗を逸らし、音速を超えて尚ダメージ無く競技場に落ちていく。

「きゃあああああああああ!!!」

少女と食蜂はジェットコースターで落下する様な感覚に叫び声を上げた。そして、瑛嗶はその叫び声をドップラー効果で空に残しながら、競技場の地面に着地した。

「なあっ!!」

『おーと?! 何やら空から落ちてきました! 御坂美琴選手の足が止まった!』

「走るぞ、お嬢ちゃん！」

「え、あ、はい！」

瑛嗶は食蜂をおぶる体勢に変え、少女を地面に下ろし、手を繋いで走りだす。あくまで少女が瑛嗶を連れてくるという体を取らねばならないのだ。砂煙に立ち止まっている御坂美琴と上条当麻を放置して、少女と瑛嗶は走りだし、見事ゴールテープを切った。

『これは大番狂わせ! ゴール直前で常盤台の超電磁砲、御坂美琴選手を抑え、平菜小学校の長峰美紀ちゃんが勝負を制しました!!』

その実況の言葉に会場が湧いた。大きな歓声上がる。

そして、長峰美紀と紹介された少女は指定カードと持ってきた品が一致するかを確認するべく、大覇星祭実行委員の生徒にそのカードを渡した。

「……………ふむ、『美男美女のカップル』か……………誰だこれ入れたの……………えーと、そちらの二人は恋人同士なのですか？」

「ん？」

瑛嗶達はそういえば指定された品の事を聞いていなかったなあと考え、目配せをした。食蜂が少し照れ臭そうにしながら頷いたので、瑛嗶は答えた。

「そうだよ。もうあんなこともこんなこともしちやった仲だよ」

「なっ……………そ、そんなことまで言わなくても良いです！ とにかく、事件はクリアですね……………はあ、それでは競技が終わるまでしばらくお待ちください」

その言葉に、瑛嗶と食蜂と長峰美紀ちゃんは一緒に待機場所へと移動していった。その際、周囲の眼を紛らわせるために食蜂と瑛嗶が腕を組んでいたのだが、それを映像で食蜂の派閥のメンバーに見られ、後々問い詰められる破目になるのは、別の話。

## 一方通行とラストロリ

さて、続きだが。実の所、この大覇星祭の記念すべき初日には、かなり多くの事件が引き起こっている。それこそ、科学的にも、魔術的にも、だ。

瑛嗶が現在近い方にあるのは、魔術的事件ではなく、科学的事件の方だ。というより、魔術的な事件を解決するには、人材が十分に揃っているのだ。瑛嗶が関わる必要もない。まあ関わっても良いのだけれど、今回に至っては瑛嗶が関わる事件は科学側の方が強い。

何故なら、その事件の主要人物として挙げられる少女、食蜂操祈が隣にいるのだから。

「お前は何か競技には出ないの?」

「まあ私の出場する競技もあるにはあるんだけどねえ……」

あの後、長峰美紀ちゃんにお礼を言われ、表彰もされた瑛嗶達は、普通に観光ルートへと戻っていた。とはいえ、食蜂も生徒という身分にいる訳だから、競技には出なければならぬ。つまり、四六時中瑛嗶と共に居ることは出来ないのだ。

という訳で、食蜂操祈は競技に出る為に戻らなくてはならなくなつた。

「……次の競技が終わったら合流しましよ、1時間後にあの喫茶店に集合☆」

「あいよー……つと、ほらこれ飲んで行きな。ちよつとした感謝の印だよ」

「何コレ? 水? 匂いは紅茶みたいだけどお……?」

食蜂は、渡された紅茶——地獄巡り茶のあたりを飲んだ。滅茶苦茶美味いその味に、瑛嗶の紅茶を入れる腕前を悟った食蜂。女子として少し負けた気がした。この分なら料理も上手いのだろうと思つたのだ。

「う……じゃあ行ってくる……」

「いってらー」

食蜂が雑踏の中に紛れて見えなくなった。そして瑛嗶はゆらりと



笑う。感謝の印と瑛嗶は言った。それがあの地獄巡り茶の当たりな訳だが、その効果は感覚を瑛嗶と同等にするというもの。

今の食蜂は運動神経を取った瑛嗶みたいなものなのだ。これならば食蜂の武器であるリモコンを取りあげられても十分戦えるだろう。今の食蜂は無敵なので。効果はかなり伸びて、今では一週間となつてゐる。つまり、大覇星祭の間……食蜂は感覚的に瑛嗶と同等である。「さて、と……暇になつたな……」

瑛嗶は若干騒がしくなつた雑踏の中で、頭を搔いた。そして、iphone89sを起動させ、電話帳を開いた。少し迷つた後、一つの電話番号に電話を掛けた。

「あ、もしもし？ メルメン？」

『メルメンって何だオイ』

「メルヘンな男って言いにくいじゃん？ 長いし、名前でも無いじゃん？」

『……まあそうだな』

「だから、メルヘンな男、メルヘンなマン、メルメン」

『殺すぞお前マジで！ 妙なあだ名つけんじゃねえよ！』

此処まで来れば分かるだろう。相手は垣根帝督、学園都市の第二位だ。何故暇潰しに第二位に電話を掛けるのか少し問いたいものだが、まあそこは瑛嗶だからで終わるだろう。

「でだよメルメン」

『……なんだよ。なんか用か？』

「と思うじゃん？」

『あ？』

「まあ何も無いんだけど」

『じゃあな』

プツツと電話が切れた。おそらく、垣根帝督も電話切つた後キレた。瑛嗶はそれを想像して笑つた。まあ暇つぶしにはなつたし、特になにかしらのアクションを求めた訳ではないからいいか、と次の電話番号をプツシユした。

「もしもし」

『なんだ?』

「お前さ、いつになったら約束護ってくれんの?」

『はア? 何の話だよ?』

次の相手は一方通行。瑛嗶は打ち止めを救った時の約束がまだ守られていないことを思い出したのだ。

「あのほら、ジエンガ」

『冗談で済ませとけよそれ位!!』

「10秒で此処に來い。ラストロリ連れて。ジエンガも持ってこいよ」

『ラストロリってなんだオイ。最後の幼女か? それに、なんで俺がそんなめんどくせエことを……』

「良いのかな? そんな事言って」

『アン?』

瑛嗶の言葉に、一方通行は少し嫌な予感がした。瑛嗶が本気になれば、確実に人の嫌がることを人の嫌がる方向で実行してくるだろうと確信しているからだ。

この場合、

「なあ一方通行……バックアップって知ってるか?」

『……ソレがなんだよ』

「分からないか? 俺はお前の弱みになりそうなことを写真に撮ったことがある」

『……ま、まさかテメエ……!?!』

そう、瑛嗶は撮ったことがある。一方通行と打ち止めが最初に出会ったあの時のこと、一方通行が打ち止めの身体を隠していたボロ毛布を剥ぎ取って、街中で裸にした瞬間を。

確かにあの時、瑛嗶は写真を消した。だが、バックアップは自動で取られる物なのだよ。

「10秒だ、良いな?」

『ちくしょおおおおおおおおおおお!!!!』

一方通行が叫び、電話の向こうで打ち止めの声が聞こえた。え、何? どうしたの!?! と慌てふためいている。そして、電話は切れた。

瑛暎は一通り聞いた後、携帯を仕舞う。

そして、およそ10分後。一方通行と打ち止めはかなり荒い息を吐いた状態で瑛暎の下へ登場するのだった。

## 食蜂操祈の競技状況

食蜂操祈は地獄巡り茶の当たり、領域変化の水を飲んだことよって感覚が瑗嗶と同等にまで引き上げられている。つまり、今の食蜂操祈には不意打ち、奇襲、罠、攻撃等々、様々なことが通用しないことになる。

まず、感覚という漠然としたものがどういふ部分まで含まれるのか、記載していこう。感覚というのは、知つての通りの五感と一般人には殆ど感じられない第六感がそれに当たる。一般人の場合、地獄巡り茶を飲んで引き上げられる振り幅が一番大きいのは第六感だろう。第六感とは、人の気配や動き、場の雰囲気など、物の本質を見抜く能力である。人が普段到達出来ない領域を察知する直感でもある。これが更に強化されていくと、予知や靈感といった物になると言われている。

だがこの場合、食蜂操祈の様に急激に第六感が研ぎ澄まされると、その振り幅が大きすぎて錯覚を起こす。引き上げられた感覚が大きすぎる故に、慣れるまでその感覚以上のものを知覚してしまうのだ。つまり、地獄巡り茶を飲んでまだ時間が経っていない間は、実質瑗嗶以上の感覚になる訳だ。

そんな状態の食蜂操祈が挑む競技は、複数人のチームで行う銃撃戦だ。ルールは簡単、事前に配布される水鉄砲に水を入れ、敵対チームを全員倒した物の勝ち。所謂サバゲーの様な物だ。

現在、食蜂操祈達のチームはその競技で窮地に追いやられていた。元々、食蜂操祈のチームは食蜂の派閥のメンバーで塗り固められていたのだが、そのメンバーが何故か食蜂を狙った凶弾を、食蜂を庇う様にして当たって行ったのだ。結果、残ったのは食蜂操祈唯一人。対して、相手校のチームは残り4人と来たものだ。絶体絶命とはこのことだろう。

そんな中で希望を持つという方が無理がある。食蜂操祈は心許無い水鉄砲片手に項垂れていた。元々運動自体苦手なので、大覇星祭というイベント自体彼女は否定的だった。

「……………はあ」

といつても、こんな状況下でも彼女の能力さえあれば普通に逆転が可能なのだ。だが、競技内に不要物は持ち込み不可らしく、リモコンは没収されてしまった。この時点で食蜂は既になんの力もない少女である。水鉄砲？ そんなモノが何になるといふのだ。

「それじゃあ適当に流そう——…いや、此処で負けたら……あの男に徹底的に馬鹿にされるんじゃないや……」

食蜂は諦めようとして、思い出した。この戦いを瑗嗶が見ている可能性を。胸中に生まれるこの不安と馬鹿にされた時の悔しさを思い浮かべ、絶対に負けられない戦いが此処にあることを思い知った。

諦めるには、まだ早い。

「負ける訳にはいかないわあ」

「見つけた！ 喰らえ——えっ？」

「『見えてる』わよお？」

食蜂操析が決意した時、敵校の男子生徒が水鉄砲を構えて背後から飛び出してきた。残る生徒は食蜂のみ、その男子生徒はこれで終わりだと思った。あの名門常盤台、それもレベル5を擁する構成チームに勝ったと思った。

だが、それは違った。幾ら残りのメンバーが食蜂一人とはいえ、まだ一人も残っているのだ。そう、レベル5の力を没収されていても、レベル5と言って差し支えない力を授けられている少女が、一人も。

食蜂は飛び出してきた男子生徒の気配を察知していた。飛び出してくる以前から分かっていた。だから、飛び出してきたと同時に、食蜂は男子生徒に水鉄砲を向けていた。そして、引き金を引く。打つ弾は一発だけ、それで十分だ。放たれたごく少量の水は男子生徒の心臓部分に直撃する。食蜂はこれで一人を撃墜した。

だが、異常な事態はこれだけでは留まらない。打たれた男子生徒はまさかの事態に付いていけず、咄嗟に水鉄砲を放っていた。食蜂に向かって放たれた水が、食蜂の胸の部分に迫る。しかし、食蜂はそれすらも見えていた。ゆっくりと、最小限の動きで身体を動かし、男子生徒に対して半身になる。すると、それだけで迫る水は食蜂には当たらず

ずに地面を濡らした。

「なっ……」

「なんだか今の私——何でも出来そうな感じよお？」

食蜂はそう言って、男子生徒の持つていた水鉄砲を回収した。このゲームでは倒した相手の装備は剥ぎ取っても良いのだ。故に、これで食蜂操析の装備は水鉄砲が二丁になった。

そしてそのまま食蜂は一丁を建物の影に、一丁を茂みの影に向けてた。そこには、人の気配があつたからだ。そして、潜む影に息を呑む様子が伝わってきた。間違いなく、そこに居る。

「おおおおー」

だが、その二人は囷。狙いは建物の上に潜んでいた男子生徒の方だ。彼の能力は圧力を操作する能力、レベル3だ。彼はそれを使って水鉄砲内の圧力を操作し、水の勢いを強化した。それにより、より遠距離からの射撃が可能となるのだ。とどのつまり、今の男子生徒はスナイパーという訳だ。

「でも、それも見えてるわあ」

だが、嗚咽の第六感はそれを上回る。食蜂は今この時だけはその第六感を行使出来る。研ぎ澄まされた気配察知能力と動体視力、そして高速で回転する思考がこの状況を打破する。

先ほど言った言葉は何一つ偽りなく、本当だ。今なら、『なんだって』出来る気がした。

食蜂は上から降ってくる水の射撃に対して、一切の焦燥も抱かない。あるのはただ純粹な余裕と、絶対的な勝利への確信。食蜂はその水を同じく水鉄砲で打った。精確に当たったその射撃は水を拡散させる。食蜂は自分に降りかかってくる水滴を全て躲した。そして姿を現した男子生徒を打ち抜いた。

「二人目☆」

瞳を煌めかせ、食蜂は足を動かす。水鉄砲を構える必要すらない。危険は全てこの感覚が教えてくれる。何か能力が発動すれば、それで空気は動く。圧力が働く。音が鳴る。世界に揺らぎを与えず、何かをするというのは、どんな存在であろうと不可能だ。だから、その揺ら

ぎを感知出来る今なら一切の奇襲、攻撃を許さない。

食蜂に向かって囷だった二人の女生徒が駆け出してきた。食蜂はそれを対処すべく両方に水鉄砲を構え、撃った。しかし、

「あらあ？」

両方とも自身に迫る水を自身の能力で対処する。片方は水流操作、片方は身体強化。一人は打たれた水を能力の干渉範囲内に入れた瞬間に操作、地面へと叩き落す。一人は身体強化で普通に躲す。食蜂はそれでも慌てない。まず、身体強化で片方より速く接敵する女生徒の方を対処することを判断し、腰を落とした。

「ハア!!」

「——ふっ——」

近接格闘の経験は無い。が、相手の動きが全て先読み出来るのならそんな経験はいらない。相手の攻撃を躲せばいいのだ。

手を伸ばせば届く距離まで近づいた食蜂と女生徒は、お互いの水鉄砲の銃口を相手に向けた。だが、女生徒の銃口はその弾を外させられる。食蜂は向けられた銃口を自身の水鉄砲で弾いたのだ。そして、反対側の手で持っていた銃で女生徒を打ち抜く。

「ぎゃあっ!?!」

濡れた事のショックで女生徒が悲鳴を上げるが、気にはしてはもられない。敵はまだ居るのだ。

食蜂は瞬時に切替え、視線を水流操作の女生徒に向けた。だが、その視線を向けた先、食蜂に向かって水は打たれていた。

「!」

だが、まだ対処出来ないレベルではない。食蜂はその水を体勢を低くすることで躲した。

「まだよっ!」

忘れてはいけない。この女生徒は水流操作の能力を持っているのだ。故に、躲した水は地面に落ちず、ブーメランの如く戻ってきた。食蜂は向かってくる水に対してギリギリまで逃げた。女生徒がいる、

『前へ』。

「!?!」

「当たる前に打ってしまえばゾンビ行為として無効になるわよねえ？」

食蜂は女生徒の水鉄砲を蹴った。意表を衝かれた女生徒は水鉄砲を放してしまった。カラカラと音を立てて転がっていく水鉄砲へ視線を向けようとして、女生徒は思いとどまる。手放してしまった武器を拾っている時間は無い。ならば、今は手中にある武器を最大限活用すべきだろうと判断したのだ。

打った水を操作して、打たれる前に操作した水を食蜂に当てるべく集中した。

「そう来ると思ってたわあ☆」

「え?」

だが、食蜂は女生徒の目の前でスライディングした。大きく足を開いていた女生徒の股下を通り抜け、背後へ回った。そして、女生徒はその行動に驚愕し、つい食蜂を視線で追ってしまった。

直後、バチャツと音が鳴った。ひんやりとした感覚が女生徒の背中を伝う。

「あ!」

自身の操った水で自身を攻撃してしまったのだ。自殺行為もありませんこの競技では、この場合も失格になる。

「残念だったわねえ、貴方の能力を利用して貰ったわ」

「くっ……………」

食蜂は余裕淡々、とても上品な笑みを浮かべてそう言った。そして、これで相手チームは全滅。食蜂一人で、残った敵を殲滅してしまった。

これがレベル5、常人の辿り着けない境地に立つ最強の天才だ。

「案外、簡単だったわねえ☆」

食蜂はそう言って、髪をふわっと靡かせた。



## 第一位と第五位と

一時間後。瑛嗶は約束の出店の場所で、一方通行と打ち止めと共に食蜂を待っていた。

結局、一方通行と打ち止めは10秒以内という無茶苦茶なルールをこなすことが出来ず、10分という時間を掛けて姿を現した。とはいえ、瑛嗶の iphone89s のバックアップ機能はONにされておらず、元々そんなデータは無いのだ。それを知った一方通行は、膝から崩れ落ちた。

「さて、ほらお嬢ちゃん。たこ焼きをやろう」

「わーい！ ってミサカはミサカは喜んでみたり！」

「あーん」

「あーむッてあつづい!!」

「灼熱のたこ焼きらしいよ?」

「舌が！ 舌が火傷した!! ってみしやはみしやは痛みに悶絶してみはいい!?!」

瑛嗶と打ち止めは、見たことある様な勢いのやり取りをする。瑛嗶が一方的に幼女を攻撃している光景だ。一方通行はその光景を少しだけ懐かしんで、もう少しだけ見ていよう、と止めるのを後回しにする。彼も分かっているのだ。打ち止めが瑛嗶の事を覚えていないことを。普段会話していればそれくらい察する事が出来るのだ。

「どれどれ、見せてみ? あー」

「あー」

「ふむふむ……あー確かにちよつと赤くなってるね、ホイ」

「あツツぢゅい!!? あひっあひっ! あふあふツ!」

瑛嗶は小さな舌を伸ばして 涙目の打ち止めの口の中に更にたこ焼きを放り込んだ。その結果、打ち止めはその場を転げ回る。律儀にたこ焼きを口の外へ出さない所が、彼女の食べ物を無駄にしない精神が垣間見えた。

そして、彼女はしばらくあふあふと口の中をもごもごさせた後、口の中のたこ焼きを丁寧に噛んで、飲みこんだ。顔を真っ赤にさせて、

涙目を隠さず立ち上がる打ち止めは、ひりひりと痛む舌を出して、怒り心頭といわんばかりにぶんすかと地団駄を踏んだ。

「ほうっ！ はひふふほ!! ひひふ！ ひはひへなほんはほほひほんはほほふふはんて！（もう！ なにするの!! 鬼畜！ いたいけな女の子にこんなことするなんて！）」

「ゴメン、何言ってるか分かんね」

「むひよおおおおお!!! つへみはははみはははふんはいひへひふ！（むきよおおおおお!!! ってミサカはミサカは憤慨してみる!）」

「お前らそろそろ大人しくしろよ」

「ごめんねセロリ。構って欲しかったのか」

「ほへんね?」

「お前ら俺の時だけなんでそんな息ピッタリなんだ?」

打ち止めと瑛噎は変な所で息が合っていた。やはり、一方通行を少なからずよく思っている者同士だからだろうか？ 一方通行が如何にぶつきらぼうな対応をしようが、暴行を振りかぎそうが、見捨てないのがこの二人だ。

故に、一方通行も下手に文句を言えない。恐らく、一生頭が上がるにない相手なのだろう。単に、感謝の気持ちの底にあるから。

「さて……そろそろしいたけが……あ、来た」

「はあ……お待たせえ……って何このメンツ!？」

「第一位と第三位のクローンと俺だ」

「意味不明！ 貴方この一時間でなにしているのよお!」

「ちよこつとレベル5勢に電話しただけだ」

「貴方の人間関係力に脱帽だわ!!」

明後日の方向を向いて食蜂操祈は叫んだ。通り過ぎる通行人が一瞬びくつと動きを止めた。そして、食蜂操祈がそれに気付き、少し恥ずかしそうにした後能力で今一瞬の記憶を全て消した。

リモコン一つでこの辺一帯全員の記憶を一瞬で改竄出来るこの能力は、やはりチートと言って差し支えないだろう。だが、瑛噎は能力を『逸らし』、一方通行はベクトル変換で防いだ。打ち止めは一応記憶を消されたのだが、ミサカネットワークの共有機能で結局思い出すこ

とになった。この三人、食蜂の能力を全力で拒否っている。リモコンから出る赤外線に乗せて放たれる能力を防ぐ所を見ると、まるで着信拒否の様だ。

着信拒否されるしいたけ。なんともまあ不憫である。

「レベル5といえ、お前らレベル5つてどれくらい他のレベル5について知ってるの？」

「あん？ そオだな……知ってるの通り第三位の事はある程度知ってっし……他の奴らも序列と能力位なら……」

「私もそんな感じよお？ まあ御坂さんは同じ学校だからよく知ってるけどね☆」

「ミサカもお姉様の事ならよく知ってるよ！ ってミサカはミサカは手を上げて自分の意見を主張してみたり！」

こうしてみると、第三位の御坂美琴のネームバリューがどれ程のものかが良く分かる。第一位や第五位にもよく知られており、おそらく他のレベル5も良く知っているだろう。普通の一般生徒ですら、常盤台の超電磁砲レベルガンという通り名で知られているのだ。言ってしまうえば、彼女こそ学園都市の顔と言われるべきレベル5なのだということだ。

だが、一方通行と妹達、御坂美琴の三人はあの実験————絶対能力進化計画レベル6ソフトに関連で繋がっているからこそその知名度だ。レベル5同士の知名度だけで言えば、単純なネームバリューだけという訳ではないだろう。

「つーかレベル5に関してならテメエの方が良く知ってるだろ」

「そうよ、実際此処に来るまで私第一位に会うなんて思っても無かったわよお？」

「てかテメエ誰だよ」

「第五位のレベル5よ！」

「ああ悪いな、他のレベル5には興味ねエわ」

「え、それじゃあ御坂さんだけ知ってるのって……まさか、好きなの!？」

「違エよ！」

「あれ？ でもそのお隣にいる子って何処となくみこっちゃんに似て

「ません？ まさか好き過ぎて似てる子攫って来たとか……!?」

「え……そういうことだったの!? ってミサカはミサカは驚きを隠せずに戦慄してみたり！」

「お前らホント打ち合わせでもしたのか!? あア!?」

一方通行を弄る時に限って何故か他のキャラクターの息がぴたりと合う。一方通行は自分が弄られキャラとして定着しそうなこの状況に対して、少しだけ焦燥を感じていたのだった。

## 集まるレベル5

大覇星祭の競技が進む中、常盤台と他の学校が頭に付けた紙風船を割り合うというチーム戦競技を行っている最中の事だった。街中に設置された極大電光掲示板に、その競技の様子が映っていた。

最初にそれを見て、違和感を感じたのは食蜂操祈だった。続いて一方通行、瑛嘎もその違和感に気が付く。画面に映っていたのは、御坂美琴。どうやらレベル5という事もあって、映像的にもおいしい人材の様だ。よく映る。

「あれは……クローンの方じゃねエか」

「ホントだ。みこっちゃん二世じゃないか」

二人の呟きを証拠付けるのは、一万体以上いる御坂美琴のクローンを統括する上位個体、打ち止めの言葉だった。

「うん……10032号だね。ってミサカはミサカは自身の言葉で証拠付けてみる」

食蜂もレベル5、それなりに裏の組織や学園都市の闇にも足を踏み入れている。勿論、あの一方通行達が行なっていた実験に付いてもそれなりに知っている。クローンの実在も、勿論知っている。解決したのが瑛嘎だというのは知らない様だが。

「どうするの？ ってミサカはミサカは問いかけてみたり」

「楽しそオにやってる様だが……相手校、あのデブはクセエな。眼の色が他の奴とは違エ……」

「嘘、あのデブこんな遠くにまで体臭届かせてんの？ そりゃ違うな、眼だって腐りきってる訳だ」

「そういう意味じゃないと思うわよお？」

一見普通に競技を楽しんでいるミサカが映っているが、一方通行はその映像に映る敵校の生徒に眼を付けた。どうやらキナ臭い匂いがしたらしく、少しだけ不機嫌になっている。彼はあの実験以降、自身の犯した罪を一生背負って生きていくと決めている。故に、クローンがこれ以上殺される事や、利用される事を良しとしない。

瑛嘎はそんな一方通行を見て、こいつは重畳、と笑みを浮かべた。

「それじゃあ応援に行こうぜ？」

「さんせー！　ってミサカはミサカは元気よく同意してみる！」

「御坂さんの醜態が見られるかもしれないし、私も行こうかしら☆」

「そんじやまア行くか……：たく手間掛けやがる」

「その割には顔が嬉しそうだぞセロリ。やっぱリアレか、みこっちゃんが好きなのか？」

「違エよ！」

四人がそう話していると、そこへ一つの声が掛かった。

「あら？　琺瑯じゃない、何してるの？」

「やあ麦野ちゃん。随分とまあ久しぶりの登場だな」

「いやまあそんなメタ発言はスルーするとして、第一位と一緒にいりや嫌でも目立つでしよ」

「第一位？　そんなの何処にいるんだ？」

「オイ」

「なんだセロリ、今俺は学園都市最強（笑）の第一位を探してんだ邪魔すんなボケ」

「……………」

「お、落ち付いて！　さっきまでのやり取りと何ら変わらないよ！　ってミサカはミサカは宥めてみたり！」

琺瑯の言葉に青筋を立てる一方通行。それを宥める打ち止めはあわあわと焦っていた。そして、そんな光景を見て食蜂操析は思う。何この状況、と。

見れば、レベル5の第一位、第四位、そして第五位が揃っている。そして今から向かう先には第三位の御坂美琴がいるかもしれない。そうなると、七人しかいないレベル5が四人も一同に会する事になる。能力開発の研究者達が見れば顔を青褪める光景だろう。

だが、そんなメンバーだからこそ思う。このメンバーがチームを組んだら何でも出来そうだと。防御力と言えば一方通行の反射、もつと言えば琺瑯の『触れる』能力や『逸らす』能力があるし、攻撃で言えば麦野の原子崩しマルチダウナーを筆頭に、近接格闘の琺瑯や反射の一方通行もある。それ以前に敵の戦意を喪失させることや寝返りさせる事も出来

る自分がいるのだ。数で言っても一万近くいるクローンを動かせる打ち止めがいる。

これこそ人材のフル装備だ。もつと言えば第三位の超電磁砲レベルガンも加えればオーバーキルにも程がある。

「で、何してんの?」

「ああ、これからちよつとレベル5二人連れて悪の組織をフルボッコにしに行こうと思って。一緒に来る?」

「マジで? 行く行く」

「結構悲惨なことしに行く誘いをそんな簡単に引き受けちゃうんだ!? サザエさんに出てくるカツオ君と中島君の野球の誘い文句みたいだよ!?! ってミサカはミサカは突っ込んでみたり!」

「あ、じゃあ第二位も誘う?」

「流石にオーバーキル過ぎるわよお!!」

流石の過剰な戦力にしいたけストップが入った。

「あ、そう? じゃあ行こうか。みこっちゃん二世を拾って喫茶店でも行こうぜ」

「アア」

「まったく、世話が焼けるわあ」

「あれ? 悪の組織は?」

「何言ってるんだ麦米、そんな都合よくいる訳ないだろ」

「麦米って何? ねえ、おちよくってんの?」

「麦米と麦ゴミで悩んだんだけど、やっぱり米かなって」

「よし打つわよく、私の能力が火を噴くわよく? ちよつとそこでの的になれこの野郎」

そんな軽快な会話をしながら、瑛噎達は過剰戦力を率いてミサカの下へと足を進めるのだった。

## 話し合い

さて瑛嗶達はその後、無事にミサカ妹を回収した。競技場に辿り着いた時には既に競技も終わっており、何者かに何かしらの攻撃を受けたらしく、倒れていたミサカ妹を回収したのだ。今は食蜂の伝手で別の場所へ保護されている。後々御坂美琴に眼を付けられそうだが、まあそこは力づくでどうにか出来るだろう。何せ、御坂美琴が勝てなかった一方通行に加えて瑛嗶、麦野、食蜂までもがいるのだ。まあ勝てないだろう。ちなみに、あだ名で言うところのセロリ、麦米、しいたけとなり、全て食品という奇跡のメンバーなのだが、読者の言うバーベキューをするには肉が足りない。この先出てくるのかは分からない。それはさておき、だ。瑛嗶達はその後、なんか食べに行こうという話になった。そこで入ったのは、一つのファミレス的な場所。周囲は込み合っており、随分と周囲の喧騒がうざかった。

だが、そこである意味一番煩い少女に出会った。そう、御坂美琴だ。瑛嗶達を見て、何故かつまらなそうに、というか寂しそうにしていたその表情を驚きに染めている。

まあ寂しそうにしていた理由は、瑛嗶達と擦れ違いで出て行った上条当麻がいなくなったことが原因なのだが、そんなことは瑛嗶の知ったことではない。先程まで上条当麻やインデックス、上条夫妻が座っていた席に全員が席に付いた。

「あ、アンタ達!?! なんて、その、意味分かんない!」

「俺的にはお前の語彙力の無さが意味分かんない」

「うっさい! なんでアンタ達みたいなのが集まってんのよ!」

「あら、美琴ちゃん。お友達?」

「んん? そちらみこっちゃんのお母様で? これはどうも、そちらのお子さんにはいつも挨拶代わりに殺人電流叩き込まれる程仲良くさせていただけます」

「美琴ちゃん、ちよつと話があるんだけど」

瑛嗶は美琴の前に座っていた御坂美琴の母親、御坂美鈴を見てそう話しかけた。外堀から潰して行く様だ。一方通行達はそのやり取り



を見ながら各々注文を始めていた。御坂美琴とかどうでもいいわーとばかりに無反応だ。食蜂は美琴に話し掛けられたら対応しようと思視を決め込んでいた。

「待ってママー。そいつの言うことを信じないでよ!？」

「見て下さいこの痕……みこつちゃんの電流で焼け焦げたんです」

「美琴ちゃん……」

「嘘吐くなアンタ！ 私の電流なんてそもそも効かないでしょ!？」

「……は？ 何言ってるの？ 人が電流流されて効かないとか……それはもうファンタジーの世界だよ?」

「この野郎!!」

瑛瓊のきよとんとしたシラ切り顔に美琴は苛立ち、バチツと電流を生み出し、威嚇する。だが、この状況において、その行動が美鈴に瑛瓊の話の信憑性を与える。

「美琴ちゃん……貴女そんなことしてたのね……」

「ママ!？」

「美琴ちゃんがこの学園都市でもトップクラスの能力者だっけって知って、ママ嬉しかったんだけどな……その能力で人を傷つけてたなんて……」

「……それは……!」

御坂美琴は思い当たる節が幾つもあった。瑛瓊だけでは無い、まず最初に思い浮かんだのは散々電気をぶつけて来た上条当麻、次に白井黒子、効かないが瑛瓊や一方通行にも向けたし、突っかかって来る不良も黒焦げに焼いた。更に言えば、能力を使って脅しや脅迫染み込めとも行なったことだっけである。

否定材料が全くないことに気がついた。というか、超電磁砲バカバカ撃っていたので、結局否定できる筈が無い。

「……ママ……ごめんなさい」

「……」

「はーいしいたけ、面倒になってきたから記憶改竄よろしく」

「……貴方って本当外道よねえ……全く」

ぽちつとりモコンのボタンを押して美鈴の記憶を改竄する食蜂操

祈。瑛嗶は美琴を放置しながら席に付いた。そして、丁度やってきた店員にまとめて注文をする。

「それにしても、みこっちゃん二世はどんな訳？ 正直な所」

「まあそこまで重い状態ではないようだけどお……まあ良い医者に見せれば何とかなるんじゃない？」

「つうと、あのカエル顔の医者とかか……」

瑛嗶の問いから、レベル5は話し合う。御坂妹の件は医者任せれば良いとして、それから先を話し合う。まず、御坂妹を襲った奴は誰なのか？ どんな組織なのか、それを知らなければならぬ。そうなる、一番この件に関わりがありそうな学園都市の闇を暴かなければならない。

「つーか私あの第三位のクローンに付いて全く知らないまま付いて行ったけどさあ……正直状況掴めてないんだけど」

「第四位さんは途中参加だったしねえ？」

「うるせえしいたけ」

「貴方まで私をしいたけ呼ばわりするの？ ねえ麦米さん」

「やるかコラ？ その年不相応な胸に風穴空けてやろうか？」

「なんなら脳みそいじくり回してあげるけどお☆」

何故か対立している二人のレベル5がうるさいが、瑛嗶は特に気にしない。というより、大体の見当は付いているのだ。

御坂妹はそもそも、御坂美琴と遺伝子レベルで同一の容姿をしている。つまり、御坂美琴の敵が御坂妹の敵になる可能性は十分にある。御坂美琴という最高の実験素材の情報を手に入れようと迫る科学者やそれが依頼した組織等々、御坂美琴が襲われる理由がそのまま御坂妹が襲われる理由となる。

また他の可能性としては、御坂妹を、ひいてはクローンの存在を知っている者の犯行。つまりはあの実験を行っていた科学者か、それに近い場所にいた科学者や能力者達。だが麦野がこの犯行に付いて知らない、ということとは少なくとも実験に関わる所で依頼を受けた組織は、この件に関わっていない、ということになる。つまり、クローンを作った者、実験を提案した者、実験を進めていた者が可能性とし

てはあり得るだろう。

此処まで来れば、かなり絞られてくる。可能性として一番大きいのは、あの実験を行っていた科学者の上層部にいた人物、またはクロールンか御坂美琴の実験価値を見出した科学者だ。

そして、この場にはその当事者である御坂美琴、暗部の瑛喰、麦野、そして実験の最重要人物、一方通行がいる。更に言えば情報収集において最も確実かつ幅広い手を持つ食蜂操祈がいるのだ。組んで動けばこれ以上なくあつさりと、圧倒的に、黒幕を潰すことが可能だ。能力を封じられたとしても、瑛喰には原石としての能力があるし、身体的にみても敗北要素は皆無なのだから。

「あれ？ ミサカは？ ってミサカはミサカはここで初めて口を挟んでみたり」

「お前なんかの役に立つの？」

「ミサカネットワークを使えば人海戦術でどうこう出来ると思うよ！

ってミサカはミサカは自分の有用性を提示してみたり！」

「……てか襲われたみこっちゃん二世の記憶共有しろよ。手っ取り早いだろその方が」

「……………あ！」

「役に立たねエな……クソガキ」

「orz」

一方通行の言葉で、打ち止めは机に突っ伏したのだった。

## 瑛嘎達の始動

瑛嘎のせい、もとい瑛嘎のおかげでこの一件には多くのレベル5が関与することになった訳だが、麦野沈利に関しては暗部ということもあって協力は得られなかった。というか、仕事があるらしく一旦帰ってしまった。協力が必要なアイテムの仲間ということで手伝ってやらないでもないと言って帰って行ったので、実質戦力は減っていないだろう。

そこで、瑛嘎達は一旦解散することにした。レベル5同士が集まって組めば、それはそれは強力なチームに見えるのだろうが、実はそれは違う。元々、彼らは個々が一騎当千の強大な力を持っている。それはつまり、力を合わせるという行為が難しいということになる。個人で戦った方がやりやすいのだ。

という訳で、それぞれに別れてこの一件の解決に務めることにする。お互いのフォローは必要最低限で行えばいいのだ。そこで少し変わったのは、瑛嘎と打ち止めをペアにするということだ。一方通行も自身が動けばまず間違いなく打ち止めも危険に晒すことになることを理解している。故に、瑛嘎の下に預けていればとりあえずは大丈夫だろうという訳だ。そして、ミサカネットワークをフル活用出来るような食蜂もこのペアに組み込まれた。

状況を説明すると、瑛嘎と打ち止めと食蜂のチーム、一方通行、お助けということまで麦野がそれぞれ三者三様のやり方で解決に動くという訳だ。この一件の解決の為にレベル5が三人動く、という事実は黒幕にとっても非常に辛いものになるだろう。

そして、それが決まった後、全員はそれぞれ店を出た。一方通行は原作とは違って完全な能力を保有している。時間制限など無い故に、その能力を使ってその場を離れて行った。麦野は普通に歩いて去って行き、残ったのは瑛嘎達のチーム。

「それにしても、ぶっちゃけ面倒臭くなってきたんだけど」

「さっきまでの雰囲気ぶち壊しなだけとお？」

「つつてもなあ……しいたけ、お前はなんか当てあんの？」

「まああると言えばあるって所かしらあ☆」

「じゃあさつさと吐けよこの野郎」

「いたたたたた！ ごめんなさいごめんなさい！ 思わせぶりの方が雰囲気出るかなってええ！」

食蜂の言葉に、瑛嗶はアイアンクローで答えた。化け物染みた握力によるアイアンクロー（弱）は、常人なら普通に痛い。頭が潰れるんじゃないかと思う程だ。

「全く、そういうの良いから」

「はあ……調子が狂うわあ……」

「大丈夫？ ってミサカはミサカは心配してみたり」

「御坂さんとは違って純粹ねえ……」

打ち止めが食蜂を心配していると、食蜂はその子供特有の純粹さに少しだけ感動した。特に普段のがさつで大雑把で何でもかんでも能力による力押しな所がある御坂美琴を見ていると、それがやけに大きな印象を受けた。

だが、そう言う本人が黙っていない。

「誰が純粹じゃないってえ……？」

そう、御坂美琴だ。どうやら母親とは別れたようで、一人店から出て来た。そして丁度そこにいた瑛嗶達に近寄って来た、という訳だろう。

食蜂の何気ない言葉に苛立ちを覚える所はかなり子供っぽい。

「あら御坂さん、もう母親への言い訳は良いの？」

「おかげさまでね！ 全く、変なホラ吹かれて困ったじゃないの!!」

御坂美琴はそう言って地団駄を踏んだ。だが、その言葉に対して食蜂たちは首を捻り、真剣な表情で疑問を抱いた。

「ホラ……？」

「つまり嘘……？」

「それは違うよ、ってミサカはミサカは反論してみたり！」

「なっ……!?!」

そう、ホラでは無い。

「今、お姉様はホラって言ったけど、それならそれでお母さんに反論出

来た筈だよ！ ソレが出来なかったという事は、少なくともお姉様の中に心当たりがあつたつてこと！ つまり、この人がお姉様のお母さんに言つた事は嘘じゃないんだよ！ ってミサカはミサカのダンガンロンパ！」

「うぐつ……………!?!」

「どうなんだみこつちゃん。本当に嘘か？」

「どうなのよお？」

「……………う……………ぐ……………はあ……………すみませんでした……………嘘じゃないです」

美琴はそう言つて、肩を落として項垂れた。瑛嘎達はその姿を見て三人でハイタッチする。

さて、茶番は此処まで。御坂美琴が出て来たのはこんなやり取りをしたくでは無い。瑛嘎達が何故全てのレベル5の半数を揃えて話していたのかを聞きたいのだ。

それに、会話の端に出て来た御坂妹。それは自分の妹だ。彼女が何か変な事件に巻き込まれているのなら、姉として、見過ごすわけにはいかない。とかいう無駄に小奇麗な責任感で動いているのだろうか。瑛嘎はそれをしっかりと理解している。人の気持ちに対して異様に鋭くなったのは、めだかボックスでスタイルを習得してからだろう。「とはいっても、みこつちゃん二世がどんな輩にどんな目的でどんなことをされたのかは知らないんだけどね」

「あの子、襲われたの!?!」

「まあそういうことになる。俺らは暇潰しにその一件を解決しようかなというスタンスで動いてる」

「暇潰し……………また?」

「そう、お前が無駄に命を掛けようとしたあの実験と同じように、暇潰しでこの一件を解決しようとして動いているんだよ。おk?」

「……………まあいいわ。私は私で解決に動くから……………ああ、それとアンタ」

御坂美琴が指差したのは、食蜂操祈。彼女はその指を見て、無表情に次の言葉を待った。

「この件、アンタが黒幕ってわけじゃないのよね？」

「……ハツ……そんな訳無いじゃないの。それに、私が黒幕ならこの時点で貴方達の記憶を改竄してるわよ。まして、こうして自分自身を矢面に出す筈が無いわよ☆」

「……まあいいわ。それじゃあ私はもう行くから」

御坂美琴はそうして去ろうとする。だが、瑛唄は話はまだ終わっていないとばかりに美琴の足を掛けた。

「ぎゃふん!?!」

「何勝手にシリアスモードで去ろうとしてんだみこっちゃん」

「なにすんのよ!」

「喧しい。俺は今お前に聞きたいことがあるんだ」

「何よ!?!」

「……………それは」

「っ……………?」

瑛唄が珍しく真剣な表情を浮かべていた。美琴はそれを見て、息を呑む。いつだつてふざけて軽快な雰囲気を持つ瑛唄が、ここまで重く、真剣な雰囲気を放っている。そこから吐き出される疑問とは、何処までの物なのか。

「今までしいたけ、セロリ、麦米と食べ物関係であだ名つけて来たんだけど、お前は何か良い?」

「どーでもいいわあああああ!!!」

美琴はそう叫んで、走り去って行った。

「アイツ、絶対学園都市の闇を甘く見てるよな」

「まあ……今までずっと小さな揉め事で悩んでいた様な子だし」

瑛唄と食蜂はそう言って、少しだけ御坂美琴に嘲笑した。

しいたけフラグ

「木原幻生？」

その後、瑛嘎達は歩きながら食蜂の知る情報を聞いていた。その中に出て来たのが、木原幻生という名前の科学者だ。

「そう、木原幻生という科学者が、私の心当たり。年齢的にはもう年寄りなんだけれど、腹に何を抱えてるかその知れない奴よ。そして、妹達の実験を発案した人物でもあるわ」

「へえ……怪しいね」

「そして、その木原幻生は私を中心に行なわれている実験の当事者でもあるの」

「実験？」

『『エクステリア』……私の大脳新皮質の一部を切り取って、培養した強大な脳を使った実験よお。簡単に言えば私の能力を誰にでも使えるようにするっていう実験』

食蜂操析は幼少の頃からレベル5の力を行使できた。その精神干涉の力は絶大で、多くの研究者から期待と試験価値を見出されていた。故に、彼女に寄って来る科学者は多い。それが良い科学者であろうと、悪い科学者であろうと、なんでもかんでも寄って来るのだ。

その寄って来た科学者の中で今現在も食蜂に絡みついているのが、『エクステリア』という大層素敵な玩具を作った科学者達。

元々は『才人工房』<sup>クロインドリ</sup>という名前で『偉人を造る』のを目的としていたのだが、食蜂の能力を誰でも使えるようにすれば『偉人を造る』より簡単な、『偉人を洗脳する』という方向性を築いたのだ。

「成程、しいたけはしいたけで面倒な実験に巻き込まれてんだねえ……でもさ、一つ気になることがあるんだよねえ」

「何？」

「お前、どうしてそこまで俺に情報を漏らすんだ？」  
「!？」

食蜂操析は精神感応系最強の能力者であり、人の心を読み取ることなど呼吸をするように簡単に行うことが出来る。だが、それはつまり



幼いころから人の心の中を覗いて生きて来たという事だ。

今までずっと見えていたものが、突然見えなくなったら——人は恐怖する。

瑛嗶は今まで食蜂に心の中を覗かせた覚えは無い。食蜂の能力は全て届く前に『逸らし』て来たからだ。だから、食蜂には瑛嗶の心の中は分からない。心を覗ける他人とは違い、何を考えているのか分からない瑛嗶に、どうしてそこまで情報を公開するのか。瑛嗶はそれを聞いている。

「それは……分からないわ……ただ、貴方は強い……あの第一位よりも、強い。だから、貴方に情報を集めれば、どうにかしちゃうんじゃないかと思っただのは確かよ……」

「へえ……それで、お前は何考えてんだか分からない俺を、どう思う？」

「……正直、貴方が私を敵に売るとか、裏切るとか、そういう事を考えてはいるわねえ」

食蜂は全てを疑って生きている。能力者、科学者、赤の他人、自分に関わる人間は、全て心を覗いてきた彼女は、全ての思惑を把握していないと不安なのだ。

協力、信頼、友情、正義、そんな安っぽい言葉より、その人間そのものを覗いた方が何百倍も安心できる。

「ふーん……よし、なら此処で少しばかり覗いてみるか？」  
「え？」

だから、瑛嗶はこう提案した。

「俺の——頭の中を」

覗いてみると。覗いても良いと。瑛嗶はそう言った。瑛嗶が能力による抵抗をしなかった場合、食蜂操析は瑛嗶の頭の中を覗くどころか、瑛嗶を操ることだって出来る。洗脳、記憶改竄、感情操作、敵意

や善意の方向性、なんでも操作する事が出来る。

それを分かった上で、瑛嗶は言った。俺の頭の中を覗いてみると。俺の過去、全てを覗いてみると。そして思い知るといい、俺が、瑛嗶という人間が、どういう過去を歩いて来て、どういう人間で、どういう存在なのかを。

「さあ、覗け」

食蜂操祈は、瑛嗶の瞳に吸い込まれる様な感覚を覚えた。今まで、自分の心の中を読んでみると言った人間はただ一人としていない。自分の能力を忌諱しなかったのは、自分の能力を防ぐ術を持っている能力者や、科学者だけ。それにしても、御坂美琴の様に防ぐ術を持っているながら自分の能力を下種なものと吐き捨てた者だっている。

瑛嗶の様に、自分の能力を防ぐ術を捨ててまで、食蜂の能力を受け入れようとする者はいなかった。これまでも、これからも、その筈だった——今この、瞬間までは。

「な、何……言ってるの？ 私がその気になれば、貴方の記憶を覗くどころか、洗脳だつて……できるのよ……？」

「それも、また面白い……お前が俺をどの位操って見せるのか、見物だな」

「怖くないの!?! 私の能力が！ 大事な記憶を消す事も、大事な感情を消す事も、大事な人を傷つけさせることだつて出来るのよ!?!」

「俺の大事なものは、お前の能力程度じゃ壊せねーよ」

瑛嗶は両手を広げて、能力を解除した。

「それに……」

「？」

「俺はお前がそんな事をするとは思ってないからね」

「!?!」

食蜂操祈はその言葉に、今まで中身が無く、信じられないと吐き捨てていた『信頼』という言葉を思い出す。これが本物の信頼。自分の武器や護る物を全て投げ捨てて、生身一つでぶつかってくる。心の底から他人を信じた人間の、本物の『信頼』。

食蜂は、心の内から何か温かいモノが湧き上がるのを感じた。じわ

じわと身体に染みわたる様に、どんどん溢れてくるこの感情を感じた。久しぶりの感情だった。

食蜂操析はエクステリア計画以前、『才人工房』計画の時期に一人の少女に出会った。名前はドリーといい、身体に機械を埋め込んでいないと生きていけない中学生位の少女。当時の食蜂は小学生だったが、ドリーは食蜂にとって最初の『友達』だった。

自身の凶悪な能力を、『大好き』と言ってくれた。その上で、食蜂自身も『大好き』と言ってくれた。そして、彼女自身もドリーが大好きだった。研究所という狭く堅苦しい環境の中で、食蜂とドリーは仲良く過ごしていた。

だが、それは幻想だった。ある日、ドリーは倒れた。彼女は人間の手で造られた製造人間だったのだ。肉体は直ぐに寿命を迎える。結果、彼女は死んだ——いや、処分された。食蜂操析は、唯一信じられる友達を失った。処分された。殺された。馬鹿な科学者たちの手の上で、ドリーの命は弄ばれた。

その日から、彼女の心は閉ざされた。誰も信用しない。誰も信頼しない。そんな彼女が出来上がった。そして、彼女はその日からエクステリア計画、ひいては『才人工房』を乗っ取った。ドリーが『大好きだ』と言ったその能力で、実験を乗っ取った。

ドリーと楽しく遊んで、心の底から笑顔を浮かべていた食蜂操析という少女は、ここで姿を消した。心のずっと奥、暗い闇の中に、消えて行った。

「……良いの?」

「何が?」

「私は……貴方を信じても……良いの?」

だが、瑛嗶はその少女を引き摺りあげた。邪魔な盾や武器を投げ捨てて、悠々と、飄々と。本当の彼女に迫った。彼の能力がそうであるように、瑛嗶は食蜂の心に『触れた』。そして彼女の凍て付いた心の壁を壊して、ぶつかったのだ。

だから、食蜂操析はもう一度歩み寄る。ドリーがそうだったように、瑛嗶の差し伸ばした手に向かって歩み寄る。瑛嗶はその問いに對

して、ゆらりと笑ってこう返した。

「ごちやぶごちやうるせえ——俺を信じろ！」

力強いその言葉が、トリガーだった。食蜂操析は、瑛嗶を信じてみることにした。

「じゃあ、覗かせて貰おうじゃないの……貴方の心を！」

差し出されたその手を取った。リモコンを向けて、ボタンを押した。能力は瑛嗶に届き、瑛嗶の過去を食蜂操析に開示する。

差し出すのなら、受け取ろう。それが信頼の証なら、こちらも信頼で返そう。

「！」

食蜂は見た。瑛嗶の過去全てを。

——俺と一緒に、世界を見て回ろうぜ。面白そうだろう？ ピ

トー

——ああ……待ってるヴィヴィオ、すぐに助けに行く——

——お前の父親は最強だからな

——俺もお前を愛してる。世界の誰より、大好きだ

——ふう、さて休憩は此処までだ。さあ続きを始めよう。B

メロの部分とサビの部分、少し動きが合っていないから練習しようか。ほれ、ポジションン付いて

——次の世界では俺が与えた力の他に、もう一つ別の力が手に入るかもね

「これは……!? これって……!?」

食蜂操析は知った。瑛嗶の過去と、瑛嗶の存在の意味、そして瑛嗶

が一度死んで、転生した者だということ。

「貴方は……神に出会ったっていうの!?!」

「そうだよ、俺は神様に会った」

「そんなの……! この学園都市が目指しているSYSTEM研究の到達点みたいなものじゃない……!」

SYSTEM研究。それは、『神ならぬ身で天上の意思に辿り着く者』、レベル6を生み出し、世界の真理に辿り着こうという研究の事だ。

それはつまり、瑛嗶が出会った神の考えを読み解き、世界の真理を知ろうということであり、瑛嗶は現時点で最もその目的の達成に近い場所にいるのだ。いや、もう辿り着いているかもしれない。『神ならぬ身で天上の意思に辿り着く者』、瑛嗶は神では無いが、神の下に辿り着いている。学園都市も吃驚仰天な事実だろう。

「まあそうだね」

「そんな呑気な……! つはあ……まあいいわあ……どちらにせよ、貴方が私を信頼してくれてるのは分かったから」

食蜂は瑛嗶の過去を知っても、その程度だった。実際、転生したからと言って、別段何か変わっている訳じゃない。瑛嗶の強さの原因が明らかになった程度の事だ。正直、他の世界の事は少し驚きだったけれど、此方から干渉出来ないのであれば、知った所で意味は無い。

「わはは、そいつはどうも」

瑛嗶は食蜂の頭をぽふぽふと撫でた。食蜂は年不相応に成熟したスタイルを持つているが、瑛嗶的に言えばまだまだ子供だ。年齢的にも、見た目的にも。

「な、撫でるんじゃないわよお……!」

瑛嗶を信じたからか、少しだけ態度が緩和した様な気がする。頭を撫でるなどという割には振り払おうとしない。どころか、若干頬が紅潮している気もする。

「ねえねえ、ところでミサカはいつまで空気なのかな? ってミサカ

はミサカは口を挟んでみたり」

「うわきやああ!?!」

「うおつと……」

若干良い雰囲気醸し出していた所に、打ち止めの介入が入ったので、頭を撫でられているという状況が恥ずかしくなったのか、高速で瑛喰から離れた食蜂操祈。そして照れ隠しに咳払いをしながら、話を逸らそうと饒舌に話し始めた。

「そ、それじゃあ木原幻生がいる場所へ行きましょうか！ 私の情報収集力によると、神出鬼没な木原幻生がとある研究施設を訪れることが分かってるわ！ さあ行きましょう！ 今すぐに！」

すたすたと歩き始める食蜂に対して、打ち止めと瑛喰はにやにやと生温かい瞳で彼女を見た。

「素直じゃない所はお姉様と一緒にだね〜ってミサカはミサカは内心ウキウキしてみたり！」

「まあまだ中学生なんだし、仕方ないよ。ミニミサカ」

「その呼び方なんか気に入らないんだけど!? ってミサカはミサカは反論してみる!!」

このチームは、なんだかんだでやっていけそうだ。

## 瑛嗶への難題

「まあそう気を落とすなよ」

「……」

瑛嗶達は現在、道に設置されたベンチで落ち込む食蜂を慰めていた。その理由は、木原幻生がやってくると言っていた施設に木原が来るのは、今日では無く明日であることが分かったのだ。よって、気合を入れて歩きだした食蜂は出鼻をくじかれたという訳だ。

とはいえ、何の手かがりも得られなかったという訳ではないのだから、食蜂は落ち込むより誇るべきなのだが、瑛嗶が信頼を寄せると言ってからというもの、どうも調子が狂いっぱなしだった。

瑛嗶が話し掛ければ挙動不審になり、しいたけと呼ばれても反抗的ではなくなった。また、何処か瑛嗶と若干距離を取っている節があるし、かといえ瑛嗶の近くに寄ろうとする事もある。瑛嗶と会話する時はなんとなく頬を紅潮させているし、瑛嗶が打ち止めと話し始めると寂しそうに眉をハの字に歪める。

どうみても好きな人に対する乙女の状態だが、食蜂自身、それがどういふ感情なのか分かっていなかった。過去で本当に友達だったドリーに感じていた感情と似通っているものの、少し違う違和感。かつて安心院なじみが感じていた様なもどかしさを、食蜂操祈もまた感じていた。

とはいえ、この場合は両者別の原因だ。

安心院なじみは恋愛という概念がない時代から生きていたから恋愛を良く分かっていなかったのに対し、食蜂操祈は人を信じられなかった状態からいきなり恋愛感情が生まれてしまった故に、戸惑っているのだ。

まあ、どちらにせよ結果は同じことなのだが。

「しいたけ？」

「えっ!？」

「どうしたよ」

「な、なんでもないわあ!　木原幻生が来るのは明日みたいだし最初

に言った通り大覇星祭でも案内しましょうかしらですよ!？」

「落ち付け」

おどおどと慌てる食蜂は、わたわたと身振り手振りで捲くし立てる。だが、まったく正しい言語になっていない言葉だった。

そして、それに対して瑛嗶が嗜めながらデコピンを一撃放つ。

「あたっ!？」

「全く、お前俺の記憶覗いた割には能天気だな」

「き、記憶を読んだって言ってもかなり端折ったのよ? 記憶の量が

膨大過ぎなのよお」

「3兆年あるからね」

「だから貴方の中に強く印象に残っている記憶だけ読んだの………あ!？」

食蜂操析は思い出した。瑛嗶の記憶の中、覗いた記憶の中、つまり瑛嗶が歩んできた過去には、食蜂の恋心を確実に阻む強大な壁があった。それも、幾つか。

瑛嗶の恋人——安心院なじみ

瑛嗶の義娘——泉ヶ仙ヴィヴィオ、帯刀鞆負

瑛嗶の義妹——八神はやて

瑛嗶の愛猫——ネフェルピトー

大きな壁を挙げればこの5人。この全員が瑛嗶に対して少なからず恋愛や親愛以上の好意を抱いており、その全員が瑛嗶の家族という立ち位置を獲得している。もつと言えば、『恋人』のポジションが埋まっている。これはとんでもなく不味い事態だった。

「……………何この無理ゲー……………」

「何が?」

食蜂は、瑛嗶を手に入れるということが如何に難しいかを思い知っ



た。しかも、上記のメンバー以外にも、瑛嗶が作ったアイドルグループや、親友等、おそらく現時点で自分以上の絆で繋がる存在は多く存在していた。瑛嗶の『妻』というポジションは安心院なじみが法的に手に入れられず、未だ空き枠となっている。つまり、食蜂は少なくとも安心院なじみ以上に瑛嗶を魅了してみせなければならぬことになる。

そう、たった十幾つの年齢しか生きていない自分が、約3兆の時間を生きて来た人外の男を惚れさせなければならぬのだ。手にするには条件が鬼畜すぎる賞品だった。

「ま、明日まで暇になったんだし……祭を楽しもうぜ？」

「ねえねえ！ あっちにたこ焼きあったよ！ 食べようよ！ ってミサカはミサカは提案してみる！」

肩を落とした食蜂にそう言う瑛嗶。そこへ屋台を見に行っていた打ち止めが駆けて来た。瑛嗶はそんな打ち止めを見てゆらりと笑う。少しまでにしたこ焼きで痛い目みたいのにまだ懲りていないと見た。

「わはは、また舌を焼くぞ？」

「それは嫌だ!!」

瑛嗶の言葉に、打ち止めは語尾を忘れて全力で拒否の体勢を取った。

「ぷっ……ふふふ……」

「おや何笑ってんだしいたけ？」

「いや……さっきのたこ焼きの時のこと思い出して……ふふふ……！」

食蜂は笑う。道のりは厳しいが、挑戦するにはもってこいの難題じゃないか。

立ち上がり、瑛嗶の手を取った。

「ん？」

「さあ行きましょう☆ 大覇星祭を案内してあげるわあ！」

そう言った食蜂の顔は、本当に楽しそうな笑みを浮かべていた。

## 一方通行の推理

さて、その頃一方通行はというと、瑛嘎達とは別の方向でミサカ妹が襲撃された件について調べていた。瑛嘎達との会話から、調べるべきなのは『実験を行っていた研究者』という事は分かっている。彼が情報源として選んだのは当時実験に協力していた研究者……芳川桔梗だ。

あの実験以来、彼は打ち止めの件を経て、芳川の連絡先を手に入れていた。故に、簡単に辿り着くことが出来た。瑛嘎達が辿り着いた結論であり、元凶、

木原幻生に

芳川が持てる限りの情報を語ってくれた。実験の提唱者が木原幻生であること、木原幻生の人となり、彼がどのような目的の下、どのようなことをしてきたのかを。

「……芳川の言ったことを考慮すと……やっぱ木原幻生ってクソジジイが怪しいなア」

一方通行は、とりあえず黒幕を木原幻生と仮定して考えてみることにした。

もしも彼が黒幕だとするのなら、その目的は『SYSTEMの達成』……一番思い当たる事項としては『レベル6を造ること』だろう。だが、一度失敗した一方通行を再利用しようとは思っていない筈だ。一方通行はあの実験以降、バックにあった研究施設とのつながりが切れている。それなりに暗部に顔見知りはあるが、打ち止めが瑛嘎と共にある限り一方通行をどうこう出来るとは思えないからだ。

まして、今回襲われたのは御坂妹。つまりは御坂美琴のクローンだ。もしも黒幕の目的がクローンではなく、御坂美琴にあったとして、黒幕がレベル6を造ろうとしていると仮定すると、その素体は御坂美琴ということになる。

具体的な方法は一方通行の頭脳を持ってしても想像は付かないが、

この襲撃が御坂美琴をレベル6にする為にクローンを攫ったものだと考えれば、彼女達が抱えている他人にはないもので、一番利用されそうなものは『ミサカネットワーク』しかない。少なくとも、最悪散り散りになっている1万近くのクローン全てを巻き込む事態となるだろう。

だが、そうなるとクローンである御坂妹を回収していない所が気になった。ミサカネットワークを利用するのだとしても、御坂美琴をどうこうするにしても、自分達が襲撃した存在を放置しておくなど愚の骨頂。

状態を見た所、御坂妹は薬によって無力化されていた。調べれば証拠にすらなってしまう。どうしてそのようなことになったのか考えてみればおかしな話だ。

「襲撃した奴らにとつて予想外の出来事が起こったってトコか？  
例えば……俺らがクローンを保護しちまったこと……とか」

御坂妹が敵によって回収される前に、瑛唄達がやってきてしまった。と考えるのなら、回収されていない理由としては理に合っている。だとすれば、その組織は今も御坂美琴かそのクローンを回収しようとして動いているかもしれない。

まあ他の可能性が無い訳ではないが、最も最悪かつ高い可能性のケースを考えれば、この推理は一番妥当なところだろう。

「さて、そうなるとミサカネットワークに干渉する手段がある筈……考えられるのは高位の精神感应系能力か、クソガキの時と同様の専用の機材を使った……ウイルスか？」

一方通行は考える。今のままではまだ情報が少なすぎると。

現段階で、何かしらの大きな被害が起きたというわけではない。御坂妹だって、それなりの治療を施せば元の状態に戻すことは可能だろう。敵を手繰り寄せるには襲撃と敵組織の繋がりが細すぎる。

「……まあ木原幻生の情報が手に入っただけマシとするか……別段何かでけエことが起こった訳でもねエし……一旦瑛唄の奴と情報を共有するか」

一方通行はそう呟いて、瑛唄に電話を掛けた。

◇ ◇ ◇

瑛嘎達と一方通行はその後、一つのファミレスのテーブル席に集合していた。この場にいるのは、瑛嘎、打ち止め、一方通行、食蜂の4人だ。

そして、各々手に入れた情報を共有していた。

「やっぱり、木原幻生が怪しいな」

「少なくとも、木原幻生が裏で手を引いてる組織が第三位かそのクローンを狙ってるのは明らかだなア……俺としては、ミサカネットワークが狙いだと思う」

「しいたけ、ミニミサカを通して精神防壁的なモノを張れないか？」

「出来るわよお」

食蜂は瑛嘎に言われて張り切って能力を発動した。打ち止めに向かってリモコンを向けて、ボタンを押す。すると、ミサカネットワークを通して全てのミサカの精神にウイルス対策の能力防壁が張られた。とりあえずは大丈夫だろうと結論付ける。

「でも、この防壁だって『エクステリア』を使われたら簡単に突破されるわあ……木原の目的がミサカネットワークだとすれば、確実にエクステリアを狙ってくる筈よお」

「でも場所は分かってんだろ？」

「ええ、あれは持ち出せる様な代物でもないし、利用するとしてもエクステリアに登録するには数日掛かるもの……幾ら木原が周到な奴だとしても……それは変えられないわあ」

食蜂は大丈夫だろうと思いい、そう言ったが、一方通行はミサカネットワークの性質を考えて、その登録作業を効率的にする方法を思い付いた。

自身の脳波をエクステリアという大きな脳に登録するのに時間が掛かるというのなら、その逆はどうだろうか？ ミサカネットワークの様に、全ての脳波を同じものにしてしまえば……つまり、エクステリアの脳波を木原幻生と同じものに調律出来れば、登録など必要ない

のではないだろうか？

「エクステリアの脳波を木原のものに調律しちまえば登録なんて必要ねエンじやねエか？」

「なっ……!?! まさか……でも、確かに……」

此処に来て不味い事態が発覚した。そんな調律をされたらエクステリアは食蜂を除いて木原幻生しか使えなくなる。が、木原幻生ならばやるだろう。目的の為なら手段を選ばない人間なのだから。

「んー……つまり何？ その木原幻生とかいうおじいちゃんをぶっ殺せば良いの？」

「考え方がバイオレンスだよ!! ってミサカはミサカは突っ込んでみたりー!」

「それが駄目ならエクステリア自体を破壊してしまえば良い」

「……アレは私の能力を強化するブースターの使い方もあるのよお……だからエクステリアの破壊は最後の手段にしてほしいわねえ」

食蜂たちは、そこに来て行き詰まった。正直、今日この時何か出来るというわけではない。木原が現れるのは明日なのだから。

「ま、とりあえずは明日俺としたいだけでその木原の訪れる施設に行こう。アセロラはミニミサカ連れてみこっちゃんの方を見張っててくれ」

「ああ……そんじやまア……解散と行きますか」

「ん、そうしよう。明日の昼頃ここに集合な」

瑛嗶達は取り敢えずの方針を決めて、解散となった。

## 御坂美琴は？

翌日、御坂美琴は未だなんの情報も手に入らず、調査は難航していた。瑛噎達のチームに食蜂がいた事もあり、黒幕が食蜂ではない可能性の方が大きいので、他の黒幕の影がまったく掴めないのだ。

そうしている内に、一時的にタッグを組んだ婚后光子は敵に満身創痍になるまで半殺しにされ、白井黒子や初春飾利、佐天涙子らの記憶もおそらく食蜂によって消された。

頼れるものは誰もおらず、情報も少ないこの状況は、彼女にとってどこまでも最悪だった。誰が婚后光子を襲ったのか、何故瑛噎達の仲間だった筈の食蜂が白井黒子達の御坂美琴に関する記憶を消したのか、分からない事だらけだ。

「どうすればいいの……!」

既に御坂妹は襲撃され、瑛噎達の手によって保護されている。彼女自身、その居所は分からない。元々、食蜂も一方通行も瑛噎も、彼女にとっては信用ならない相手だ。食蜂とは反りが合わないし、一方通行は実験関係で許せない相手だし、瑛噎に至っては暗部と来たものだ。いざという時放置している友人も奪われ、護ると決めた妹は病に伏せられ、迷った末に頼った友人は半殺しにされた。怒りも感じているが、それ以上に自分自身の無力さが悔しかった。

学園都市の闇。それは何も彼女が知っているあの実験が最も深い闇というわけではない。あんなもの、どす黒い闇の極表面的な部分ではないのだ。それに触れて、闇を知った気である御坂美琴は、やはり幸福な頭をしているのだろうか

故に、あの実験を踏まえてのこの事件に翻弄される。今度は本当に暗部が関わってきているのだ。

「……そもそも、あの子が襲撃された理由ってなんなの……?」

御坂美琴は考える。そして、事態は動きだした。

「チヨチヨチョーつといいかな? お姉さん」

あからさまに怪しいフード付きの衣をまとった少女が現れた。そして、その手にはナイフを、その傍らには御坂美琴の友人であり、仲間である、正義感溢れる少女——初春飾利が気を失った状態にいた。

「初春さん!?!」

「聞きたいことがあるの。話、付き合ってくれるよね?」

圧倒的に不利な状況とまではいかないが、やはり人質がいる時点で御坂美琴は不利だった。原作の様に白井黒子達が助けてくれる訳もない。彼女達はまだ御坂美琴の事を思い出していないし、なにより病院に運ばれた婚后光子の様子を見に行っている。期待は出来ない。

「……初春さん一人だけなら、アンタを倒して助ける事は出来るわよ……」

「アハハ、マアそうだね。でもね、保険を掛けておくことに越したことは無いよね?」

少女がナイフで指した方向、そこにはもう一人フードを纏った少女がいた。そして、その傍らには——もう一人の人質、御坂美琴の母である御坂美鈴が気絶していた。

「ママ!?!」

「流石の御坂美琴でも、二人いっぺんには助けられないでしょ?」  
「くっ……!」

絶体絶命。どちらかを助ければ、どちらかが死ぬ。このままでは何の尻尾も掴めずに終わってしまうと思った。

「さあて、それじゃあ大人しく——」

刹那だった。

御坂美琴の上空を一つの影が通る。彼女はまず、鳥か何かだろうと気にも留めなかった。そしてそれは相手の少女も同じこと。だが、それは全くの思い違いだ。

彼女達の頭上を飛び越え、御坂美琴の母親の場所まで影は移動し——その前に影を押し潰す様に何かが着地する。割れる地面、超

重量級の物体が落ちて来たかのような衝撃が地面を走った。

砂煙が舞う。母親の近くにいたフードの少女も、母親も、その物体も、その砂煙に隠れた。そしてその中で、唯一着地したものだけが精確に動いていた。白く色素の薄い腕がフードの少女を掴んだ。

「!？」

「悪いな——邪魔だから死んでろ」

そんな言葉と共に、フードの中にいた少女が内側から弾け跳んだ。いや、少女というよりは金属の様な色の何かが弾け跳んだ。だが、それを気にせず白い腕は少女だった物を放し、晴れていく砂煙の中で立ち上がった。

「よオ第三位。ちよつとばかり助けに来たぞオ」

御坂美琴の窮地に現れたのは、一方通行。

学園都市が誇る、七人しかいない最強のレベル5の頂点。第一位『アクセラレータ一方通行』だった。



## 瑛嗶の罖

「でも良かったのお?」

「何が?」

食蜂操析は瑛嗶に問う。つい先ほど、午前中に瑛嗶と食蜂は早めに合流してあることを行なった。それは、御坂美琴の友人である白井黒子らの記憶を改竄する、ということだ。食蜂としては瑛嗶の指示だったが、今でも何故そんな事をしたのか理由を知りたかった。

「ああ、まあ大した理由じゃないんだ。昨日会った第四位の事覚えてるか?」

「ああ……あの」

「俺は訳あつてアイツとチームメイトなんだけどな、アイツに言われてんだよ。一般人を暗部に関わらせるのは控えてくれってさ」

「ああ……なるほどねえ」

本当の理由は特にないのだが、瑛嗶は取ってつけた様にそれらしい理由を述べた。

まあ言われているのは本当だし、一般人を暗部に関わらせると後々厄介なものも知っている。御坂美琴が白井達を頼ってあれこれ無駄に動きまわると非常に面倒なのだ。

だから記憶を消したという意味もある。

「つっても、どうやら敵さんはみこっちゃんにご執心のようだからね。みこっちゃんを味方を付けずにフリーで放置しとけばホラ……一氣に芋づる式で釣れるかもよ?」

瑛嗶はゆらりと笑った。御坂美琴が欲しいなら、御坂美琴を餌にすればいい。ミサカネットワークが欲しいなら、ミサカネットワークを餌にすればいい。つまり、そういうことなのだ。

敵の情報が少ないから、強制的に敵の方を釣り上げる。

「それに、みこっちゃんにはアセロラを付けてる……今頃、敵さんとよろしくやってんじやねえか?」

食蜂は瑛嗶の考えがどこまで本場で、どこまで嘘か分からなかった。瑛嗶は行き当たりばったりで辿り着いた展開に、それらしい理屈

と理由を後付けする。自分の行動にはこんな理由と意味がある、と辿り着いてから考えて話す。だから瑛喰がどんな行動をとるのかは予測出来ないのだ。

今まで心と呼んで全てを知って来た食蜂としては、信頼しているとはいえその瑛喰の不明さが少しだけ、怖かった。

◇◇◇

一方通行が現れて、意表を衝かれた御坂美琴だったが、すぐに我に返って行動を開始する。目の前で同じ様に呆気に取られているフードの少女の近くにいる初春が座っているベンチを、磁力で手繰り寄せ、それによって我に返って初春を攻撃しようとした少女のナイフは、一方通行が小石を蹴ってぶつけることで阻止した。第一位と第三位の連携は、実験でお互いの情報を知ったからこそ出来たものだった。

「おつとつと？ これは不味いカナ？ 流石に第一位とはやり合いたくないしねっ」

少女はそう言うと、元々そういう物で出来ていたのか、金属の様な色になったあと、どろどろと溶けて消えた。どうやら、能力で操っていた液体金属だった様だ。

「初春さん！ ……はあ、とりあえずは大丈夫みたいね」

御坂は初春の脈拍や呼吸が正常であることを確認し、ひとまず胸を撫で下ろした。そして、次に自身の母親の近くにいる一方通行を見た。彼は御坂美鈴の首元に触れ、同じ様に身体に異常が無いことを視線で伝えて来た。

その事は一旦安心したが、何故一方通行が助けに来たのか分からなかった。あの実験以来、自分は彼を許していないし、助けて貰う程の何かをした訳でもない。

「よオ、とりあえずお前の抱いてる疑問やらなにやらに答えてる暇はねエ……今は誰かに連絡してこの二人を安全な場所に移動させるこつた」

「……分かったわ……でも、後でちゃんと教えて貰うから」

御坂美琴はそう言うと、とりあえず疑問を置いておいて白井達へ電話を掛けた。今現在において自分の記憶を失っている白井黒子達だが、初春が絡んでいるのだ、言えば力になってくれる筈だ。

「さて……こっちは言われた通りに第三位を助けたが……瑛嗶の奴、何考えてやがんだア？」

一方通行は、瑛嗶に言われて御坂を見張り、場合によっては助けに入ってくれと言われたから一応助けた、が……その後どうすればいいのかは聞いていない。周囲には誰もいないようだし、一旦合流した方が良いのかと考え、瑛嗶に電話を掛けた。

◇ ◇ ◇

電話が鳴る。瑛嗶はポケットから電話を取り出して、応答する。

「もしもし？ ……へえ、そうか。うん、ありがとう一旦戻って良いよ」

瑛嗶はそう言って、思惑が成功したらしい笑みを浮かべた。

「じゃあね、滝壺ちゃん」

電話が切れる。

実は、瑛嗶は昨日の麦野が言っていた、協力が必要なら言え、という言葉を思い出して、一方通行とは別に滝壺を御坂に付けていた。そして、敵を釣るといふ思惑通りに、敵が現れてくれた訳だ。しかも都合よく『能力者』が。

そうなれば後は簡単。滝壺の『AIMAIM追跡』AIMストーリーカーを使ってAIM拡散力場を記憶、敵のトップでなくとも、敵の一員を追跡する事が出来るのだ。

「さて、多分此処で襲撃掛けてくるようなのは敵の中でも下つ端だろうけど……何かしらの情報があればいいなあ」

瑛嗶はそう言って、ゆらりと笑った。敵は少しずつ、瑛嗶の手中へと手練り寄せられていた。

## 瑛嗶の追撃

「やあ、初めまして小娘——アイテムの瑛嗶さんだよ」

「なっ……あ……!?!」

瑛嗶は壁を背に座り込んでいる少女の顔の、ギリギリ横を通る様に壁を蹴って追い詰めていた。

少女の名前は、警策看取<sup>こうさくみどり</sup>。予測変換では全く出てこない面倒な名前の少女である。

何故瑛嗶が彼女をこうして追い詰めているのかというと、御坂美琴を襲撃し、一方通行の救援によって撃退された液体金属の操縦者が、彼女だからである。瑛嗶が頼んで協力してくれた滝壺の能力によって、AIM拡散力場を追った結果、彼女に行きついたのだ。

そして、ここで敢えてアイテムの名前を出したのは、自分自身が暗部に関わっていることを証明するため。アイテムに所属しているのが嘘であったとしても、秘匿組織であるアイテムの名前を知っている時点で、暗部になにかしらの関わりがあるのは理解出来るだろう。

「滝壺ちゃん、もういいよ。協力ありがとう」

「うん……じゃあ私は帰るね。何を追っているのかは分からないけど、気を付けて」

「あいよ」

少女を追う為に一緒に連れて来た滝壺を、瑛嗶はそう言って返した。

ちなみに、現在一方通行と食蜂操析は共に『エクステリア』の下へと向かっている。情報操作や渋滞で邪魔されそうな電車や車などの交通機関は使用しない。それより一方通行の『ベクトル変換』を使った跳躍移動の方が速いのだ。だから、一方通行には食蜂をおんぶさせて移動してもらっている。

まあ、運動音痴の食蜂が跳躍中に悲鳴を上げているだろうことは、簡単に予想出来るが。

「やっ」

瑛嗶は振り返って、再度少女を見た。瑛嗶の視線を浴びた少女は、

びくつと肩を震わせる。

「お前の能力、どういうものかは知らないけど……液体金属を使った分身作成能力、と見ておくでしょう。まあ俺には通用しないからよろしく」

「な、何が目的……?」

「お前らの目的を知りたい。もつと言えば、お前の依頼者クライアントについて」

「警策看取はその言葉にぐ、と言葉を呑んだ。暗部にとって、依頼者の情報を漏らす事は、自分自身の未来を潰すことになる。情報を漏らし、殺されればそれまで。情報を漏らし、生かされたとしても、信用を失い、後々他組織から潰されることになる。たった一回のミスが死を招く、それが暗部にいるリスクなのだ。」

「……それは……言えない」

「ま、そうだろうね……それじゃあこうしよう?」

「市街地を一人、全裸で歩くか……首輪を付け、尚且つ全裸眼隠しで四つん這いに市街地を徘徊するか……それとも情報を吐いて生き残れるように足掻くか……どれがいい?」

「吐きます」

「曖昧の瞳の中に本気の文字が垣間見えた彼女は、即座に土下座して情報を吐くことにした。社会的、精神的、肉体的にも殺されるより、僅かな可能性で足掻いた方がまだマシだと判断したのだ。」

「で、お前は何処と繋がってるのかな?」

「木原幻生ですっ」

「お前の素性は?」

「依頼者の依頼を仲介する人ですっ」

「今回は何してた?」

「木原さんの依頼を『スクール』って組織を仲介人って立ち場を利用して使役してましたっ」

「なんでクローンを襲った?」

「御坂美琴を動けなくしようとしたらクローンでしたっ」

「じゃあ目的は?」

「多分ミサカネットワークですっ！」

瑛夏の質問に即答していく少女。よっぽど切羽詰まった状況に置かれていたようだ。まあその状況を作ったのは瑛夏だが。レベル5に人脈を持つている瑛夏からすれば、この程度のことなど容易に出来る。人探しも、情報操作も、戦闘も、簡単だ。瑛夏を相手にするのなら、世界規模での事件を起こすしかない。

なにせ、この男は世界そのものを敵に回しても単騎で戦える人外なのだから。

瑛夏は情報を纏める。

『スクール』というのは『アイテム』と同じ様な暗部の組織だろう。つまり、学園都市の上層部からの依頼を、彼女の様な仲介人を通して受理する組織。

だが、この場合木原幻生という外部の依頼者が警策看取という仲介人を通して、スクールに依頼した。故に、学園都市上層部は関係ないのだろう。そして依頼内容は『御坂美琴の排除と妹達シスターズの確保』。

つまり、あの競技の中で御坂美琴と入れ替わっていた御坂妹は、『御坂美琴として襲撃された』のだ。何故御坂美琴を襲撃したのか？ それは恐らく、ミサカネットワークを目的としている故に、レベル5である彼女の邪魔が入ることを阻止するためだろう。

一方通行が救援に入ったことで無事に終わったあの襲撃は、失敗した御坂美琴の排除のリベンジと言ったところか。また、御坂美琴からある種の情報を得ようとしたのだろうが、それも瑛夏の指示によって潰えてしまった。

要約すれば、木原幻生達の策は全て瑛夏によって潰されているのだ。最初に御坂美琴と勘違いして襲撃し、折角無力化したクローンのみサカは、瑛夏達によって保護され、レベル5の人脈から黒幕が木原幻生と露見し、ミサカネットワークが目的と露見し、上位個体ラストオーダーを通して全ての妹達シスターズに精神多重プロテクトを掛けられ、御坂美琴をもう一度襲撃しようとするれば瑛夏の指示で待機していた第一位に阻まれ、挙句アイテムの仲間の能力で仲介人も追い詰められた。そして、ミサカ達に掛けられたプロテクトを解くことが出来る手段であるエクステ

リアには、現在第一位と第五位のレベル5が向かっている。

これらすべては瑛叟の指示だ。完封にも程がある。

しかも、何故木原幻生を捉えずにエクステリアに二人を向かわせたのかというと、それも瑛叟の指示。木原幻生自体は何の力も持たない唯の腹黒爺だ。ならば、その爺を捉えるよりもその爺の武器を全て剥ぐのがより決定的だ。

その武器というのが、つまりエクステリア。ミサカネットワークを目的とするなら、こちらはミサカネットワークを全力で防御すればいい。簡単なことだ。

「……ま、いいか……唯一懸念すべきことがあるとすれば……みこつちちゃん二世を確保されることかな……ぶつちやけ、昨日の内に脳波を調律してエクステリアを木原が使えるようになっていたら、みこつちちゃん二世かミニミサカを確保されただけで一気にひっくり返る……」

瑛叟は顎に手を当てながら考える。そして、次にどういう手を打つべきなのかを思考する。今やるべきなのは、木原幻生の動きを止めることと、エクステリアの確保、そして妹<sup>シスターズ</sup>達の保護だ。

エクステリアは一方通行達が向かっているから大丈夫として、クローンの防御は心許無い上に、木原幻生は何処にいるかも分からない。状況的には敵の逆転もまだありえるのだ。

「じゃあ、もう少し人員を増やすとしよう」

だが、そんな状況下でも、瑛叟はそう言い、ゆらりと笑った。

## ツツコミ人員増加

エクステリアに辿り着いた食蜂達は、そこで保護していた御坂妹をとりあえず確保。

食蜂操祈の脳新皮質を切り取って培養、肥大化させた大きな大脳を目の前に、二人はそこそこ凄いモノを見た様な反応をした。食蜂操祈は馬鹿馬鹿しいと嘲笑した様な冷たい瞳を、一方通行は実験で見たクローンと同じものかと機嫌悪そうに舌打ちした。

見てみる限り、そのエクステリアには特に何も外傷がなく、人気も無いので何かされた様子もない。だが、その内側がどうなっているかはまだ分からない。既に木原幻生による脳波の調律が行なわれているのかもしれないのだ。

そこで、瑛噎が一方通行に言い渡した『頼み』が生きてくる。

この培養・肥大化された巨大な脳は確かに凄まじいものだ。が、しかし。しかしだ、結局の所、これは脳なのだ。一方通行にとっては、最早眼を背けるようなものでもない、ちよつと大きな脳みそでしかないのだ。

さて、ここで思い出してほしいのは、一方通行が打ち止めを救った時のこと。彼が取った『救出方法』のことだ。彼はそのおそるべき学園都市第一位の能力、『ベクトル変換』を用いて『打ち止めの脳の中の電気信号のベクトルを操作、脳の情報を変竄した』。

と、いうことは？

『そのでっかい脳も脳の情報弄れば再調律可能じゃね？』

これが、瑛噎の出した結論だった。

また、この施設はエクステリアという『脳』を管理する施設であり、そういった脳の情報を管理する為の設備が充実している。

それを使い、まず二人は食蜂操祈の脳の中の情報を解析し、何から何まで脳波、電気信号、脳の活動の隅々に至るまで調べ上げた。



「なんだか妙な気分ねえ……」

食蜂はそう言つて、苦い顔をした。普段脳の中を覗くのは自分だったので、記憶や感情では無いとはいえ、こうして脳の中身を覗かれるというのは、中々気分が良いとは言えなかった。

一方通行もそれをなんとなく理解出来たので、作業はささつと済ませる。かなり専門的な機材だったが、一方通行もそれなりに実験関連に関わってきた存在、なんとなく感覚で使い方は理解出来た。

「まあ、これも必要なことだ、我慢しやがれ」

「分かっているわよう……はあ、脳の中を弄るのに脳を覗かれるなんて……皮肉よねえ」

そう言いながら、二人は黙々と作業をこなす。そして、約一時間後、二人は食蜂の全ての脳データを調べ上げ、そして一方通行はさらつと丸暗記した。

「さて、それじゃあ始めるとするかア……さくつと改竄してやんよ」

一方通行はそう言うと、培養液を放出するチューブからケースの中に入り込む。一応酸素マスクを付けて入ったので、とりあえず窒息という意味では大丈夫だ。そして、そのまま剥き出しの手で大脳に触れた。

（……まずはデフォルトの反射を……解除……さて、今度は邪魔天井もいねエし……余裕だつつの）

一方通行は覚えた食蜂操析のデータと、エクステリアの中のデータを照合。すると

（ハッ……瑛嗶の思った通りだなア。ちゃっかり調律されてやがる……木原つてのは余程手の早エ野郎みてエだな……だが、相手が悪かった）

一方通行は木原幻生の運の悪さに同情する。瑛嗶を相手にしてしまえば、最早彼自身も勝てる気がしない。第一位が勝てる気がしないと太鼓判を押すのだ。ただの腹が黒いだけの爺に勝てるわけがないだろう。

（……データを照合し、木原のデータになっている部分を……第五位のデータに書き換える……！）

食蜂はエクステリアの脳情報を管理しているモニターを眺めながら、瑛嗶程とは言わないが、一方通行の出鱈目な能力に冷や汗を掻いた。見れば、次々と脳のデータが書き換えられていくのが分かる。脳の電気信号が、脳波が、活動量が、彼の能力によって変化する。そして、その変動が止まった時。そのデータは食蜂操析の脳と同様のものへ、変わっていた。

「凄い……」

「っハアッ……どオだ、第五位。ちゃんと編集はされたか？」

培養液の流れのベクトルを操作し、元のチューブから出て来た一方通行が聞く。食蜂はその問いに対して、引き攣った笑みで成功を示したのだった。

◇ ◇ ◇

「で、何の用だよ……!」

「そうカリカリするなよメルメン。たこ焼き、食う?」

その頃、瑛嗶は垣根帝督を呼びだしていた。どうやってかという、彼に電話して、一回頼みを聞いてやるという条件を出したのだ。垣根は瑛嗶の強さを知っている。故に、その条件は破格なものだと判断したのだ。

「いらねえよ……それで、本当に何の用だよ?」

「いやね、ちよつと妙な実験やってる爺がいるらしいからさ……暇潰しに潰してやろうと思って」

「へえ……」

「それでどうも腹の黒い爺みたいだね……それならこっちもレベル5使ってやろうと思って」

「……オイ待て? お前まさか俺以外にも……?」

「ああ、今ントコ第一位と第五位を使って動いてる。別行動だけど第三位も同じ目的で動いてるから……お前も含めてレベル5は今4人かな? で、呼べば第四位も来る」

「お前どんだけ過剰な戦力で爺虐めてんの!? 老人愛護もたじたじだ

わ！」

垣根が不機嫌通り越して驚愕の表情で突っ込んだ。一人の爺の実験を潰す為に、レベル5を4，5人投入する奴が何処にいるというのだ。しかも、結構上位陣を起用している。第一位から第五位まで、フル装備じゃねえか。

「今んとこ向こうの思惑完封中」

「だろうな!! 最早俺に何をさせたいのかも分からねーよ!？」

「お前には張本人の爺を軽く拘束してほしい」

「いきなりクライマックスじゃねーか! まだ来たばかりの客にメンテナンスシユぶち込むなよ! まずはお前菜だろうが!!」

「わはは、例えが秀逸だな。残念だが俺のフルコースはメインディツシユしかねーよ!」

「それは最早コースじゃなくね!？」

瑛嗶と垣根の掛け合い。垣根は瑛嗶の行動のアグレッシブさに最早呆れかえる程だ。

そして、瑛嗶はひとしきり笑った後、垣根に手を差し伸べてゆらりと笑いながら聞く。

「で、手伝うの? 爺から逃げるの?」

「……そんな言い方されちゃあ断れねーな」

垣根はそう言っつて、瑛嗶の手を取った。

## 木原幻生と泉ヶ仙瑛嗶の格の差

あらすじ

瑛嗶の策略により、腹黒爺木原幻生の思惑が全て完封。爺の武器と盾であるエクステリアと御坂妹は第一位と五位が警護中、そして瑛嗶は打ち止め、第二位と共に爺を確保しに動きだした！

◇

瑛嗶と打ち止め、そして第二位である垣根帝督は車で移動していた。何故飛ばないのか、何故跳躍で移動しないのか、そういった疑問は当然だろうが、これは一種の余裕だ。ほぼ全ての思惑を全て完封し、思い付く限りでは手の返しように無い状態である木原に対して、急ぐこともないのだ。

ということで、タクシーの狭い空間の中、瑛嗶達は余裕淡々と談笑していた。

「で、今どういう状況なんだ？」

「今から捕まえに行く爺……木原幻生は、どうやら御坂美琴を素体にレベル6を創るつもりだったらしくてな……とりあえずそれを暇潰しに阻止してたんだ。で、思ったより根深い闇に浸ってるイカれた奴みたいだから捕獲しに行こうぜ、って事になった訳」

「なるほど……これ絶対俺じゃないよな」

「でも人数がいれば変に逃げられた時の逃げ道を防げるだろう？」

「なるほど、お前徹底してその爺を捕まえるつもりなんだな……恨みでもあんのか？」

「いや、会った事も関わった事もないけど？」

「あ、同情心が沸々と湧いてきた」

垣根と瑛嗶の会話は、他人が聞けばとりあえずどこぞの爺さんをこの不良共が虐めようとしているんだと判断するだろう。パーカーの男の膝を枕に寝ている少女が少し場違いだが。

とはいえ、その爺は前代未聞の極悪かつ腹黒爺だ。正義の反対はまた別の正義、瑛嘎達だけが正しいとは決して言えないだろうが、それでも大多数の……少なくとも学園都市に存在する230万の生徒達にとっては、瑛嘎達が正義なのだろう。

「それで、何処に向かってんだ？」

「さあね……第五位のしいたけによれば、どうやらこの先にある研究施設に木原幻生は現れるらしいけど？」

「ふーん……で、その携帯はなんだ？」

「あ、今から電話するから待って」  
「……」

瑛嘎はそう言って携帯番号をアドレス帳から引き出し、電話を掛ける。その相手先は、麦野だ。

「あ、麦米ちゃん？ 悪いんだけど、〇〇〇〇って施設に至急向かってくれない？ 爺確保です」

『あー……今仕事なんだけど』

「すつぽかすか手っ取り早く潰すかしてさっさと来い」

『私一応アイテムのリーダーなんだけど……』

「頼んだよ」

瑛嘎はそう言って電話を切った。そして次に、電話に出ないだろうと予想して御坂美琴にも同じ内容のメールを送った。同じく一方通行、食蜂操祈にも同様に同じメールを送る。

エクステリアや御坂妹の警備も必要なので、ここは新しい人員を増やすことにする。アイテムの絹旗、滝壺、フレンドアの三人である。

「メール送信、と……あ、フレنداちゃんから返信来た……母親が危篤？ 知るか、トドメ差してとつと来い」

「いやそれは酷くね？」

「あの子に両親はいない。嘘吹いても無駄だ」

「………馬鹿なんだな……そのフレنداってやつ」

「基本アホの子なんだ。容姿は整ってるし、きっとその筋の人には大人気だぜ」

アイテムのメンバーは基本的に容姿は整っている美少女揃いだ。

しかも、個性的かつ被りがないというのも魅力だろう。しかしまあ、それでも到着まで時間的にも余裕がある。

瑛噺と垣根は、差し当たってどんな女の子が可愛いのかを口論することにしたのだった。

◇ ◇ ◇

一方その頃、木原幻生はというと、瑛噺達が向かっている施設に向かっていた。

勿論、彼自身現状をちゃんと把握している。自分の思惑が何者かによつて全て封じられたという現実を。それでもなお、敵地へ赴く様な真似をしているのは、そうしなければ自分のやっている闇の部分が露見する可能性があるからだ。

予定していた視察施設に赴かない、となればそれなりの理由が必要になる。それ位なら簡単に見繕って誤魔化せるだろう。だがしかし、それでもやましいことをしている以上穴は必ず生まれる。

それを、ここまで自分を完封する相手が見逃す筈が無いのだ。故に、ここは向かうしかない。向かつて、正々堂々逃げ果せるしかないのだ。

故に、彼は車の中——歯噛みしていた。追い詰められていた。「く…………困ったねえ…………」

膝の上に肘をおいて、顔の前で手を組む。焦った表情には汗が一筋流れ、そして貧乏揺すりも激しさを増していた。どう考えても現状を打破する方法が思い浮かばない。どうしたものかと考えていく内に、少しづつ瑛噺達と木原幻生の距離は少しづつ狭まって行く。出会うまでは、もう数時間と掛からないだろう。

「どこの誰が邪魔しているのかも分からないし…………エクステリアとの接続も…………仲介人も連絡が取れない…………手札が全部持っていかれた気分だよ…………全く、どうすればいいのやら」

最後の最後、木原の武器は最早対能力者の音響武器——能力無効化音声であるキャパシティダウンの強化改造バージョン位のものだ。

「……………」

最早言葉は出なかった。黙して、ただ対面の時を待つのみ。

黒幕と人外。両者の対面はすぐそこまで迫っていた。

## 木原幻生の終わり

「君が……私の思惑を悉く打ち砕いてくれた人物……かな？」

「そうだよ。初めまして耄碌爺、年貢の納め時って知ってるよね？」  
「言葉の意味なら知ってるよ」

とある研究施設の大広間で、マッドサイエンティストと人外が初めて顔を合わせていた。

此処に辿り着いたのは瑛嗶がタクシーで向かってから二時間後。既にこの研究所の出入り口は五人のレベル5達によって封鎖されている。見つかりにくい場所であるほど、順位の高いレベル5が配置されている故に、最早逃げ場は何処にもない。

木原幻生という名の『兎』は、化け物達『狼』によって包囲されたのだ。そして、向かい合ったのは瑛嗶と木原幻生の二人だけ。打ち止めは既に一方通行の下へと戻っているし、垣根帝督はぶつくさ言いながらも包囲陣形に加わってくれた。故に、大きな広間に立った二人の存在だけが残ったのだ。

「で、これからお前がどうなるのか……分からない訳ではないだろう？」

「私としては……見逃して欲しいというのが本音だけどねえ……」  
「嫌だね」

瑛嗶の言葉に、木原は眉を潜め、少しだけ苛立ったような雰囲気を醸し出した。

見逃してもらわなければ困るんだよ。とでも言わんばかりにどのようなにして目の前の瑛嗶を言いくるめるかを考えだす。目の前にいるのは自分の半分も生きていない子供だ、とでも思ったのだろう。それならば一日の長が自分にはある、とも思ったのだろう。学園都市の闇に浸って生きて来た経験は、瑛嗶よりもずっと多いのだから、騙し合い化かし合いならば勝てるのだ。

「思い違いにも、程がある。」



瑛暁は幻生よりもうん千億倍は生きているし、学園都市の闇なんて（笑）を付けて鼻で笑い飛ばせる位には、命の重さが紙より軽い世界で生きていた事もある。しかも、相手の情報は一切ない状態で戦ってきたのだ。甘く見られたものだ。

「まあそう言わずに……私の話を聞いて貰いたい」

「なんだよ」

「私のやって来た事は、君達から見れば確かに極悪非道だったのかも知れない……許せないと思うのも仕方が無いだろう……しかし、これは全ては完璧な人間……それこそ、神の意思をも手中に収める人間を創るための実験……そんな人間が大量に生産出来たらどうかね……素晴らしいとは思わないかい？」

見逃して貰う。つまり、退いて貰うというからには、目の前のこの男を言いくるめて納得してもらおう必要がある。となれば、相手の思惑を理解し、そこから突き崩さねばならない。

目を逸らさず

言葉でこの男の心を揺さぶり

最終的には有耶無耶にして

結果的には生き延びる。これは、その最初の一手……悪足掻きの第一歩。だがしかし、その足掻きは一番最初に間違えていた。

実験が極悪非道、許せないと思つて止めに来た。バカじゃないかこの爺は。全く分かっていない——まあ分かれていても困るのだが。

瑛暁は最初から言っている。暇潰しだと。故に、

「何言つてんだお前？ そんな面倒な話なら興味ないから、お疲れー」

爺の耳には、絶望と敗北の音が響いたのだった。そして、背筋に

走った寒気と闇の世界で培われた本能が、それを取りださせた。キャパシティダウンの強化版、その起動スイッチ。

しかし、瑛唄はそれをいつのまにか近づいて、蹴り飛ばし、腕を捻って間接を極めながら取り押さえた。

「いづつ……!? は、速すぎないかな……?」

「悪いね、こちらら神様の意思に触れた其方さんの言う……完璧な人間らしいので」

「?!?!」

「ただ、どこその生徒会長の言葉を借りるとするならば、『完璧な人間などいない、不完全さが欠けている以上、完璧とは言い難いものだから』———それじゃ、どう処分されるかは知らないけれど……順当に行

けば豚箱行きかな? どうやらその老いた身体に似合わぬ聡明な頭脳を持っているようだし、下手に行けば脳味噌位は再利用されるんじゃないかな? 昔そんな姿になってまで生き延びていた奴を見たことがある。もう死んじゃったけどね」

瑛唄はそう言うと、幻生の首筋をトンツと叩き、意識を奪い去る。終わってみれば簡単なことだった。結果から見れば、エクステリアは無事であり、御坂妹及びクロン達も無事、負傷者は誰一人存在せず、ただ黒幕のみがこうして静かに敗北した。

完全な勝利ほど、静かで盛り上がらない。完璧な勝利程、つまらないものはない。

やはり、人は不完全さを兼ね備えてこそ、面白い。

「とはいえ、思ったよりも簡単に終わったね……つと、そうそう終わったなら終わったで報告しないとね」

瑛唄は適当に事の顛末を文章にして、協力者多数に同じメールを一斉送信した。これを受け取ったメンバーは瑛唄に会いに来る、もしくはそのまま解散の二つの選択肢を各々選んで行動するだろう。

「ふー……案外、あつけないものだな。ちよろいね、学園都市の闇」

瑛唄はそう言って、何も無い空間にゆらりと笑い掛ける。その先、窓の無いビルからその様子を覗いていたアレイスターⅡクロウリーが、僅かに身じろぎしたのだった。

## 大覇星祭 恋人繋ぎ編 恋人繋ぎ

あの後、瑛嗶達によって徹底的に潰された木原幻生は、半ば放置気味にその研究施設に置いていかれ、後々御坂美琴がよこした警備員アシナスキルによって拘束された。証拠データは幾らでもあったし、暗部としても木原幻生を切り捨てることを選んだようで、何の邪魔も無く、極速やかに彼は逮捕された。

そして、レベル5の五人はそれぞれ瑛嗶に色々言ってから各々の反応を浮かべながら帰って行った。

「じゃあな、二度と呼ぶんじゃないぞ」

「また困った時は呼んでって言ってるんだよ！　ってミサカはミサカは通訳してみる！」

「余計なことやってんじゃないぞクソガキ！！」

そんな風に第一位と打ち止めは騒ぎながら雑踏に混じってその姿を消した。

「アイテムを超使いっぱしりですか、良い身分ですね」

「そうよ！　結局、私達を呼ぶような大した用事でも無かった訳よ！」

「帰っていいかな？　眠い」

「お疲れ、悪かったよ。埋め合わせはちゃんとするさ」

「じゃあ今度映画鑑賞に超付き合ってください」

「鯖缶とぬいぐるみを買に行くのにも付き合ってください！」

「はいはい、映画館破壊と鯖缶のぬいぐるみな」

「超破壊してどうすんですか!?!」

「鯖缶のぬいぐるみって何よ!?!」

「あーはいはい、行くわよ三人共。ああ瑛嗶、この借りは今後の仕事で払いなさいよ?。」

「あいよ」

アイテムメンバーはそう言って、麦野の引き摺られて行った。

「俺……必要だったか?。」

「ぶつちやけいらなかつたね」

「てんめええええ!!」

「ほら、参加賞」

「あん? ……なんだこりや」

「こんなにやくだ」

「絶望的にいらねえもん渡すんじゃねえよ!! しかも生身!」

「いいから懐に入れとけて」

「入れんな入れんな! これ結構高い服なんだぞオイやめ、うあああ  
あ!! ぬるぬるで気持ち悪い!」

「じゃ、もう帰って良いよ」

「……………ああ、帰るよ……………もう二度と関わるなこの野郎……………!!」

垣根提督はそう言つて、とぼとぼと肩を落としながら胸元をぬめぬめにして歩いて行つた。

「で、お前らはどうすんの?」

「……………どうしようかしらあ」

「帰るわよそりや……………その前にあの子はどこにいるのよ」

「ああ、みこつちちゃん二世なら病院だ。カエル顔のトコ」

「……………ならいいわ……………それと、今回の事は別にお礼は言わないから」

「別に良いよ。暇潰しだったし」

瑛嗶がそう言つと、御坂美琴はふん、と鼻を鳴らして踵を返し、帰つて行つた。残つたのは、瑛嗶と未だに横に佇んでいる食蜂操祈の二人だけ。瑛嗶はとりあえずこれからどうしようかなと考えつつぽーつと突つ立っており、食蜂は両手の指を身体の前で絡ませながらチラチラと瑛嗶を見ていた。

「さて、と……………どうしようかね」

「あ、あのね、最初に言つてたでしょ? 大覇星祭を案内するって、だから……………一緒に回らない?」

「……………ふむ、まあいいか。それなら案内してくれ、この競技の参加券も確か今日発表だったしね」

食蜂の提案に、瑛嗶は少し考えた後頷いた。ちなみに、競技の参加券とは瑛嗶が食蜂と一緒に購入した抽選券のことだ。覚えていない

人は大覇星祭編最初の方を見直そう。

瑛嗶がそう言うと、食蜂は眼に見えて目をキラキラと輝かせた。元々キラキラしていたから余計に眩しい。

「じゃ、じゃあ行きましょー！ この私に掛かれば大覇星祭を楽しむなんて余裕よお！」

瑛嗶の腕をぐいぐい引つ張って、食蜂は歩きだす。その白い手袋で包まれた指が指すのは、大覇星祭の雑踏の中。彼女は今、ようやく闇の世界の重荷を少しだけ、下ろすことが出来た様だ。



で、やってきたのはあの抽選券を購入した売り場。そこでは当選者の能力者が電光掲示板によって表示されていた。抽選券を持った男女二人組がさながら、受験の合格発表を待っている緊張感を放っている。瑛嗶と食蜂は周囲を見渡すと、何故か男女ペアの二人組が数多くその場にいた。何故だろうと思いつつも、その競技の当選者の番号を覗いてみる。瑛嗶と食蜂の買った抽選券の番号は『009182』、何故か二人とも同じ番号だ。

「あー、と……あ、あつたあつた」

「本当？ 良かったわねえ」

「というか、これってどういう競技？」

「さあ……えーと……」

瑛嗶の問いに、食蜂は大覇星祭のパンフレットを取り出し、情報を得ようとする。瑛嗶もそれを覗きこみ、二人でパンフレットを見る形になった。

「！」

食蜂はページを捲りながら、隣にある瑛嗶の顔にドギマギする。緊張で身体が強張りながらも、ようやくその競技に付いて載っているページに辿り着く。そして、それを二人して黙読する。

そして、読み終わった時、瑛嗶は成程と身体を放し、食蜂は顔を真っ赤にしながら眼を見開いた。そこには、こう書いてあったのだ。

『抽選競技：恋人繋ぎ』

これは、男女一組で参加する競技であり、とある筋では有名な恋愛イベントだ。この競技で優勝した男女は、生涯幸せに付き合っていく事が出来るというジンクスがあるのだ。故に、競技名はそのまんま恋人繋ぎ。

内容は、三つの試練を男女の絆でクリアしていくものである。そして、大覇星祭に参加する学校の代表者が、数多くのペアの中から一組、この組が優勝するだろうと予想し、競馬の様にして点数を賭け合う。そして、見事正解した学校にはそれぞれ点数が入るシステムだ。

そして、参加したペアには参加賞として簡単な金券が与えられ、優勝したペアには大覇星祭運営委員会から、何かしらのプレゼントが用意されている。例年では、遊園地を貸し切って一日デートを決行したこともある。

つまり、これは恋人達の為の競技なのだ。

「……………な、ななな！」

「なすび？」

「違う！ どうするの!?! だって！ これ！ 歩3お8s2え！」

「落ち付け、何言ってるのか分からない」

「恋人って！」

「ああ、うん……………まあ仕方ないだろう。それに、俺としては一つでもいいから競技に参加したい所なんだけど」

「あ……………う……………う……………分かったわよお……………！」

うーうー唸りながら、食蜂は赤く染まった顔で上目づかいに瑛唄を睨む。よっぽど恥ずかしいのだろう。何故なら、この競技に出た、というだけでペアの相手が恋人だと周囲に知られることになるから。それが事実であろうとなかろうと、周囲の認識は恋人で確定してしまうのだ。

だから、事実ではない上に片思いな食蜂としては、それがとても恥ずかしかった。

「じゃ、頑張ろうぜ？ 『操祈ちゃん』？」

「ツツツ……！」

瑛嗶は恋人として、食蜂を名前で呼ぶ。大覇星祭の内は、恋人を装う必要があるだろう。だからこそ、途中で競技から降ろされないように、偽物であろうと本物のように振る舞う。

食蜂は名前を呼ばれて、赤かった顔に更に熱がこもるのを感じた。最早熱でもあるのではないかと思う位、身体がふらふらと蒸気しているのが分かる。そして、またうーうーと唸りながら、瑛嗶をバツと見上げる。

「行くわよお！ お、おお、おおお瑛嗶さん!!」

瑛嗶の腕に自分の腕を絡ませ、歩きだしながら勢いだけでそう言った食蜂。瑛嗶はそんな彼女に対して、苦笑を浮かべながらただ引っ張られてあげた。

## 人間関係

さて、大覇星祭三日目。抽選結果が発表された後、瑛嗶と食蜂はとりあえず競技は四日目ということで、勝ち抜く為にお互いの事を知っておくことにした。理由としては、恋愛……というより恋人との絆を競う競技な訳で、おそらくは恋人のことをどれだけ知っているか、などを競うことがあるかもしれないからだ。

好きな食べ物、嫌いな食べ物、誕生日、年齢、スリーサイズ、出身地、初デートの場所、出会った場所、お互いの呼び名、どれくらい相手が好きか、等々、おおよそ必要になるであろう知識は全て教え合う。とはいえ、いまや地獄巡り茶によって大覇星祭の間、瑛嗶と同等の感覚を手に入れている食蜂。勘で答えても大体当たるようになってる。瑛嗶の勘は、アレイスターへ繋がるコール番号を引き当てる位なのだから。

「呼び名は『しいたけ』と『貴方』でいいのかね？」

「それは恋人とは言い難いんじゃないかしらあ……」

「斬新でいいんじゃないかね？」

「私が嫌なの！」

ということと、現在瑛嗶と食蜂はちよつと小奇麗で洒落た喫茶店で、お茶しながらそんな話をしていた。周囲には本や新聞を読んでいる教師達大人や、所謂お嬢様学校と呼ばれる常盤台の様な学校の生徒達がお茶会をしていた。

しかし、物静かでも落ち付く雰囲気のレストランでは、食蜂と瑛嗶の様な存在は少しだけ目立つようだ。

「まあ、無難に名前がいいか」

「う、うんまあ……そうねえ」

「……こんなもんか、とはいえ『恋人繋ぎ』でどんな競技をするのかねえ……」

恋人繋ぎ、は例年違った競技種目が行われる。例えば、男が女をお姫様抱つこで400m競争、とか……まあどことなくハズレ競技もあつたりするけれど、基本的には男女の絆を試す競技が行われる。



だが、今年の恋人繋ぎ担当である大覇星祭運営委員は、生徒にもかなり有名な強引で我儘な人物らしく、競技もかなり強引なものになる可能性があるとの噂だ。普通の発想では予想が付かない可能性大だ。「普通に恋人の事をどれだけ知ってるかとか……じゃないの？」

「いや、強引な運営委員らしいし、恋人の為に参加者全員倒せとかありそうじゃね？ ラブバトルロイヤル、みたいなの？」

「凄まじい発想ねえ……そんなことになったら私の能力で一発じゃない？」

「そうだな。まさか120人程の参加者の中にレベル5が混ざってるとは誰も思わないよな」

「どうか御坂さん以外のレベル5にそういった話は一切聞かないもの。大体が暗部に関わってるのもあるんでしようけどお」

食蜂はずーっと音を立てながらメロンソーダをストローで飲み切る。カラン、と氷が音を立てた。瑛唄も注文したコーヒーをぐいと飲み干す。

一息ついた所で、二人は椅子の背もたれに身を任せた。話すことは全て話したし、これからどうしようという段階に行きついたからだ。

「大覇星祭も佳境に差しかかったわけだし……出店や出展物にはあまり興味ないからなあ……」

「競技は明日だしねえ、競技に参加しない親類や貴方みたいな人からすれば、七日間の大覇星祭は途中で飽きちゃうものなのかしらあ」

「俺は応援するべき子供もないし、競技を開催し、進行するべき教師でも無いし、かといって能力や最先端の科学を物珍しく物色するにはこの環境には慣れてしまっている。出店や出展物が楽しめないとなれば、最早大人しくこうしてコーヒーを飲んでのんびりしているのが、ある意味正解なのかもしれないな」

瑛唄はもう一杯、店員を呼んでコーヒーを頼んだ。食蜂も同様に紅茶を頼み、ついでにエクレアを数個注文した。どうやら、食蜂はエクレアが好物らしい。これも、先程の話し合いの中で恋人として、ちゃんと把握している。

といっても、何もやることが無い二人は最早有り余る金を使って、

この日何十杯ものドリンクを飲みながらこうして喫茶店に屯する以外の過ごし方が思い付かない。瑛嗶は基本的にイベントが起ころのを待つタイプのスタンスを持っており、自分から何かするようなことは案外稀である。木原幻生の件だって、食蜂や御坂妹が引っ張ってきたようなものであり、瑛嗶はそれを利用して暇潰しをしただけのことなのだ。

「じ、女王?」

「え?」

と、そこに少女の声が聞こえた。瑛嗶の背後、つまり食蜂からは正面に配置する所に、食蜂と同じ体操服を着た少女達が二名ほど佇んでいた。その表情は驚愕、そして困惑だ。

それもそのはず、彼女達は食蜂の創った派閥に所属する生徒であり、食蜂を女王と崇め、慕う生徒だ。それなのに、その女王が物憂げな表情で瑛嗶男性と二人、お茶をしているというのは、中々少女達に衝撃を与えた。

食蜂はその少女達を見ながら、焦った様な様子で瑛嗶と少女達を交互に見る。瑛嗶はそんな食蜂にやりと笑った。どうやら、少女達が近づいて来ているのは察知していた様だ。それを敢えて黙っていたのは、きつと食蜂が焦る姿を見て楽しむ為だろう。

食蜂は瑛嗶と同等の感覚を手にはしているものの、それを使いこなせる訳ではない。周囲の人の気配を感じることは出来るが、漠然といると感じるだけで、その距離感は掴めないのだ。とはいってもそれだけ分かれば奇襲云々だって余裕で対処出来るのだが。

「そ、そちらの殿方は……?」

「いや、あの、違うのよー!」

食蜂は焦っていて能力を使うことを忘れていた。これが瑛嗶ではなく、別の男性であれば落ち付いて対処出来たであろうが、生憎と目の前にいるのは自分の片思いの相手……かつ現在偽物の恋人である。動揺するのは無理は無いだろう。

「どういふこと、でしょうか……?」

「う……だから……」

翌日の競技を目の前にして、食蜂には違った難問が立ちはだかった  
ようだ。

## 言い訳失敗

瑛嗶と食蜂が対面して座っていたテーブルには現在、食蜂操祈の派閥のメンバーである少女達が二人、同席していた。ちなみに、運ばれてきた食蜂のエクレアは太ってしまったわけですわ！ という意見の下、少女達に没収された。動揺し、言い訳をその優れた頭脳をフル回転させながら考えている間に、エクレアまで没収された食蜂は、肩を落として項垂れた。

瑛嗶はそんな少女達を一瞥しながら、コーヒーを口に含む。どうやら食蜂がどんな悪あがきをするのか見物だ、とでも考えているようだ。ちなみに、食蜂が能力を発動させようとしたら『逸らす』能力で邪魔するつもりである。

「それで、この殿方は何処のどなたなのですか？ 女王」

「う……この人は……えーと、友達！ そう、私の友人なのよ」

「へえ、そうなんですか？ で、どちらでお知り合いに？」

「何時お知り合いに？」

「えーと……どこでって……常盤台中学で……あつ」

食蜂は言ってみて気が付いた。瑛嗶は以前、常盤台中学で講師をしていた時期がある。となれば、瑛嗶の顔を知っている常盤台の生徒は多からずいる筈。しかし、目の前の彼女達は瑛嗶を知らないらしい。これは非常に説明が面倒臭くなる。何故なら、学び舎の園は『男子禁制』の聖域だからだ。なのに、『男である瑛嗶と男子禁制である学び舎の園で出会った』。問題として受け取られることこの上ない。

所謂、秘密の逢瀬と取られてもおかしくは無いだろう。

「そ、それは……私達に隠れて逢瀬を……!？」

ほら見た事か。

「ち、ちちち違うわよお！ そうじゃなくて、この人は以前常盤台で教師として赴任してきた人で、サボろうとしたら会ったの!!」

「あ、ああ……確か以前殿方の教師が短期間でしたか赴任してきましたね……で、女王？ サボろうとしたとはどういうことですか？」

「あー……違うのよー!」

「何が違うんですか？　もしかして、今までも私達に能力を使って授業をサボっていたんですか？」

派閥の少女の背後にオーラが見えた気がした。別に何もしていない、ただ笑顔を浮かべているだけなのに、ズゴゴゴ……と威圧音が聞こえてきた。食蜂はそんな少女に怯え、ひっ、と短く悲鳴を上げた。

「そ、そうだ……能力……えい！」

「女王……？」

「あーれー？　効いてない？」

リモコンから発せられた能力は、瑛唄によつて逸らされた。どうやら最近能力の効果範囲が向上したようで、瑛唄を中心に半径5m以内の空間にあるものなら手が離れていても好きな方向へ逸らせるようになったらしい。とはいっても微々たる成長なので、レベルは4のままだが。

「サボってはいけません……よ……？」

「はい、すいませんもうしません」

「ならよろしいです。では、えーと……幾つか質問してもよろしいでしょうか？　女王は生憎と下手な誤魔化しで真実をお喋りにならないので」

「ん、ああいいよ」

瑛唄はその少女の丁寧な問いに首を縦に振って出来るだけ優しく微笑んだ。少女はその頬笑みに顔をぼーっと紅潮させたものの、ハツと我に返って首をぶんぶん振って口を開いた。

「ごほんっ……えー、貴方は女王とどのような御関係で？」

「今は恋人だよ」

「そうでしたか、恋人……ええい！」

「女王、今のは本当ですか!？」

「え？　え、ええ今は恋人だけど……？」

食蜂はてんぱって自分で自分が何を言ったのか、何を肯定したのか分かっていない。というより、話の流れに付いていけて無かった。

「明日の恋人繋ぎにも出るんだ」

「あの大恋愛祭とも呼ばれるラブイイベントにですか!？」

「出場して優勝したら一生幸せになれるというジンクスがあるあの大会イベントにですか!？」

やはりというか、恋愛沙汰には敏感なお年頃の様だ。お嬢様でも、それは変わらないらしい。瑛嗶はそれを聞いてらんらんと眼を輝かせて騒ぐ少女達に、苦笑しながら食蜂に眼を向けた。

彼女はというと、先程から頭を抱えてどう言い訳するべきかを考えていた。

「どうしよう……記憶改竄は邪魔されてるっぽいし……そもそも、お、瑛嗶さんと恋人っていうのは悪い噂ではないけど……でも私のプライドが……うーうー……」

どうやらしばらく戻ってきそうにない。

「で、では私達はこれで……お邪魔しました」

「ごきげんよう!」

少女達はそう言って、食蜂の気付かぬうちに帰って行った。瑛嗶は手を軽く振ってそれに応える。食蜂は未だに悩んでいた。最早言い訳する相手もないというのに、不憫なことだ。

結局、その日は食蜂がうーうー唸っているのを眺めながら、コーヒーを飲んでまったりと過ごしたのだった。

## 長峰美紀

翌日、瑛嗶と食蜂は、最も大きく優秀な小学校である平へいらい菜小学校の校庭に集まっていた。

恋人繋ぎという競技は、一日では終わらない。三つの競技を四日目から七日目に掛けて一つずつ取り行っていくのだ。場所は各競技毎、一日毎に変わるが、その最初の開催場所がこの小学校である。ちなみに、この平菜小学校というのは、校舎の広大さにおいて学園都市に存在する学校群の中でも上位に位置する学校だ。

大覇星祭において、学校同士は交流しながらも競い合う関係にある。その競い合いの中で、例年成績上位にその名を連ねる五校のことを『五本指』と称し、その五本指の学校には能力開発の領分でトップを誇る『長点上機学園』や、レベル5の三位と五位を生徒に持つ『常盤台中学』がその名を不動のものにしている。そして残る三本の指の一つに、この会場である『平菜小学校』も入っている。

学校の広大さと幼少期からエキスパート教育を施すことによってレベルアップを図る英才教育は、学園都市内でも脅威の実力を誇る。よってその学校の児童達は学園都市の生徒達に『ロリコン殺し幼き覇者』と呼ばれ、畏れられている。由来は、その学校の児童に性的暴行を働こうとした男が、襲われた児童によって半殺しにあつたからである。以来、少年少女が暴行に遭う事例が激減した。

その理由は、平菜小学校には小学校故に制服が無いから。つまり、少年少女を襲って好きにしたい欲を持った者は、どの小学生もが畏怖の対象になったのだ。襲おうとした相手が平菜小学校の生徒だったら？ と考えただけで、襲う気は無くなるだろう。

とまあ、平菜小学校のこんな説明は特に覚える必要は無い。

この会場で行われる恋人繋ぎの競技名は『子守り』。子は宝、故に護るべしという平菜小学校の校長が掲げる理念を元に創られた競技だ。平菜小学校の校長は、入学式の演説で、「どんなに強力な能力を持った児童であろうと子供であり、子供の危機には真っ先に対峙するのが大人の役目だ」と説いているのだ。

ルール説明をしよう。

まず、この恋人繋ぎに参加する男女ペアは60組。前提として、平菜小学校の三年生の児童が一人ずつ付くことになっている。

そして、広大な学校で決められたコースにある障害物を越えて走るのだ。所謂、障害物競争である。但し、ペアに付いている児童は『無傷』でゴールしなければならぬ。

用意されている障害物には全て、ペイント弾にも使われる液体が使われている。もしも児童にその液体が一定以上付いていれば、そのペアは失格。恋人繋ぎ第一競技での得点は無しだ。そして、無傷でゴールしたペアには順位ごとに得点が加算されるのだ。

まあ説明はこんな所である。

という訳で、瑛嗶達のペアにも児童が一人付く。やって来たのは、二人共見覚えのある児童だった。

「あー！ お兄さん達！」

「！ え、貴方確か……借り物競走の時の！」

「確か長峰美紀ちゃんだったっけ？」

「はい！ あの時はありがとうございました！」

そうやってきたのは、長峰美紀——大覇星祭初日の借り物競走で瑛嗶と食蜂に協力を求めた少女である。そういえば、彼女は平菜小学校の児童であることを実況が言っていた。と瑛嗶は密かに思い出していた。

そんな瑛嗶を余所に、食蜂は長峰美紀と軽い握手を交わしている。

「さて、と……お嬢ちゃん、お前はどんな能力を持つてるんだ？ これから一緒に走る以上、戦力の確認は必要だ」

「えと、はい。私の能力はレベル3の『光イルミネーション力セイジャー掌グリップ』です。周囲の光

を歪めて姿を消したり、逆に収束して光線や目眩ましをすることも出来ます。といっても、大きな効果は望めませんけど」

「十分だよ。中々面白い能力だ」

瑛嗶はそう言っ、美紀の小さい頭にぼんと手を置いた。自分の能力が褒められたことが嬉しいのか、美紀はえへへと笑って頭を瑛嗶の手の平に擦り付けた。まるで猫みたいだ。



反対に、それを見た食蜂は少しだけ微妙な顔をしていた。構って貰える美紀を羨む気持ちと、子供に嫉妬する自分に呆れるような気持ちが混じり合って、なんとも奇妙な気分になっていたのだ。

「あ、そうだ！ お兄さんとお姉さんの名前を教えて貰っても良いですか？」

そんな食蜂はさておいて、美紀はそう言う。そういえば、お互いに自己紹介もしていなかったなと思い、瑛噺と食蜂は苦笑した。そして、此方を見上げる美紀に対して出来るだけ優しく、自己紹介を始める。

「私の名前は食蜂操祈よお、しっかり覚えておきなさい？」

「俺の名前は泉ヶ仙瑛噺だ。好きなように呼んでくれ」

簡潔な自己紹介。美紀は二人の名前を何度か口の中でブツブツとつぶやいて、にぱつと笑った。

「はい、覚えました！ 瑛噺お兄さんに、操祈お姉さんですね！ 私は長峰美紀といいます、よろしくおねがいします！」

「はいよ」

「よろしくねえ」

そして、自己紹介が終わったその時

「では、恋人繋ぎ——第一種目を始めます！」

『リア充は死ねえええええええええ!!!』

アナウンスの声と、観客の煽り声が会場を包み込んだ。

## 第一種目『子守り』

アナウンスが鳴り響き、そして観衆の恋人がいる参加者に対する怒声が会場を包みこんだ中で、瑛嗶達参加者はスタートラインに立っていた。スタートの合図を待ち、各々の参加者が能力をどのように使って駆け引きするかを試行錯誤している。

とはいえ、瑛嗶達には作戦があつた。ほぼ確実、かつ絶対的勝利を得られる最高の作戦が。

それは、食蜂操析の能力『心理掌握』メンタルアウトによる、参加者のコントロールだ。ぶっちゃけ、レベル5だからとかいう理由で後々いちやもんを付けられそうだが、この能力は外見からは能力が発動しているかなど分からないので、万事解決だ。

「さて……と、それじゃ操析ちゃん、よろしく」  
「任せてえ☆」

ぴっ、とりモコンのボタンを押した食蜂。すると、周囲の参加者が一瞬身体をビクツと振るわせ、そして無言になる。そしてその瞳には、食蜂と同じ様な煌めきが刻まれていた。洗脳完了である。

だが、  
「チツ……瑛嗶さん、どうやら数组ほど私の支配力から逃れた組がいるわあ」  
「それまた何故だ?」

「どうやら、御坂さんと同じで発電系能力を持っているか、瑛嗶さんみたく能力を防御する能力を持っているみたい。それも——」

食蜂は視線をある方向に送った。そこには、小さな能力者が同じくこちらを見てニコリと笑っていた。そう、平菜小学校の子供役の児童の一人。小学三年生の少女だ。小学生らしく染めていない黒髪を、それでもお洒落になりたいのか、可愛らしいシユシユで括っている。生意気そうな瞳は、どう考えても瑛嗶や食蜂を馬鹿にした感情が込められている。

「ムカつくわねえ……あの子」

「なあ美紀ちゃん、あの子知ってる?」

「え？ ……ああ、あの子は同じクラスの島風沙耶ちゃんです。結構悪戯好きですけど、能力は凄いですよ？」

「能力は分かるか？」

「すいません、それは言っちゃいけないルールなんです……」

瑛嗶は、とりあえず美紀から彼女のことを聞いて、出来る限り情報を引き出す。瑛嗶の能力上、特に気に掛ける必要は無いのだが、知っておくにこしたことは無いだろう。とりあえず名前と正確、能力のレベルが高いことは分かった。

それに、

子供役の『幼き覇者』達が、『手を出しても良い』ということも分かった。つまり、長峰美紀らは全員、その能力を十全に発揮して競技参加者を潰してくる。ならば、子供役というのは名ばかりで、実際には情報に隠れた『敵』ということになる。本来なら説明があっても良い筈だが――

――これは意図的に隠蔽された情報である。

不意打ち結構。彼女達は油断した参加者を攻撃することが許されている。しかも、能力開発の過程で使用する能力の応用や不審者や襲撃者に対する撃退術も習得している故に、その強さは折り紙付きだ。まさしく、幼き覇者。

「能力は完全に秘密か……まあ、いいか。特に支障は無い」

「そうねえ……それに、私の能力を防げた時点で能力はかなり絞り込まれるしね。おそらく、電子操作系の能力者か……瑛嗶さん達みたいな唯一無二オンリーワンの能力。可能性としては前者の方が高いわねえ」

「……」

「うん、美紀ちゃんの表情からして正解みたいだ」  
「!?」

瑛嗶はめだかボックスの世界で、人の感情や思考をトレースして理解する技術を習得している。嘘か真か程度の読心術など朝飯前だ。「となると……まあ気にするまでもない雑魚か……操祈ちゃん、気に

しなくていいよ。ほっといて」

「了解」

瑛嗶の指示で、食蜂は生意気な少女から視線を切った。すると、気に食わなかったのか少女はむっと表情を歪めた。どうやら、無駄にプライドの高い少女の様だ。まあ、この二人の敵ではないけれど。

『それでは、スタートします。参加者の皆様、位置に付いて、よい……』

参加者全員が身構える。スタートの合図と共に、能力による攻撃が来てもおかしくないからだ。とはいえ、参加者の大部分は食蜂の支配下にある。瑛嗶達はなんの警戒も、心配もいらず、ただただ開始の合図を待った。

『スタート！』

その合図と共に、瑛嗶は食蜂と美紀を抱えて前へと前進した。それも、一瞬で100mという距離を突き放す形で。身体強化、といえは誤魔化せる様になり手加減した速度だが、それでも他の参加者の意表を衝くには十分だった。食蜂が支配した参加者47組は指定したペースを乱さずに、時たま能力でお互いを邪魔しあいながら進んでいる。何の違和感もない。

そして、瑛嗶達の目の前には既に最初の障害物が近づいていた。

最初の障害物は、『ペイント液の雨』。広い道約10mに及んで設置されたシャワーから流れ出るペイント液を擦り抜けていかねばならない。勿論、通り道は見れば分かる位道として用意されている。だが、ペイント液に触れないようにするにはスピードを落とさなければならぬのは必至。ここで参加者と参加者達の距離が大きく開く事もあれば、順位の変動もあり得る。

「なら、逸らしてしまえばいい」

瑛嗶は食蜂と美紀を抱えたままそのシャワーを直進する。無論、直進すればシャワーに直撃し、ペイント液に塗れることになるだろう。しかし、瑛嗶の『逸らす』能力はそれを許さない。

直進し、ペイント液に突っ込む瑛嗶達を、落ちるペイント液は全てその軌道を逸らし——瑛嗶達を避けた。そうなれば最早こつちの

もの。瑛嗶は勝手に避けてくれるペイント液をスルーし、速度を落とすことなくその障害を乗り越えた。

「サクサク行こうぜ」

瑛嗶は楽しそうにそう言う。すると、食蜂と美紀は勝手に避けていくペイント液を不思議そうに見ながら、それでも同じように楽しそうに、こくりと頷いた。

## 一步先んじて

さて、全参加者の中で先んじた瑛嗶達は、ペイント液の雨を瑛嗶の能力で通り抜けた後、抱えられた食蜂と美紀を下ろし、三人で走っていた。三人の速度は基本的に一番足が遅く、体力の無い食蜂の速度に合わせられており、その速度は走っているというよりは最早早歩きだった。といつても、食蜂は既に荒々しい息遣いで、へろへろと前のめりにゾンビの様だった。

とはいえ、その精神力と鋭敏化された感覚は健在であり、支配した参加者の大多数は全てペイント液の雨によって脱落させられたようだ。残ったのは、結局食蜂の支配を抵抗出来た十数組のみ。その中にはあの島風沙耶もいた。

順位で言えば、瑛嗶達はぶつちぎりの一位であり、島風沙耶が付いているペアは九位となっている。差は歴然だ。

そして、続いての障害物に瑛嗶達は辿り着く。この競技内では、全部で5つの障害物があり、その全てをクリア出来れば基本的には走力の勝負である。よって、障害物を如何に利用しつつ、相手より速くゴールするかが重要になって来るのだ。

ちなみに、この競技中でペイント液に当たり、汚れてしまった服は運営委員会の方で同じものが買い与えられることになっている。

「次の障害物は……あれか」

「ぜえ……ぜえ……つ、次は……何？」

「大丈夫？ 操祈お姉さん……」

「だ、大丈夫よお……！」

どう見ても大丈夫では無い様子だが、とりあえず強がりをつけている間はなんとかなるだろう。瑛嗶はそう考えて、障害物を確認する。そこにあつたのは、ランダムにペイントボールが飛び交う空間。ボールの射出機が至る所に配置され、発射されたペイントボールは学校側が用意した念力能力者によってランダムに空中を飛び交っていた。どうやら、今度は機械的な障害物では無く、人の意思が介入した、人による妨害らしい。

名付けて『スーパーカラーボール雑踏色災』

瑛嗶はまた逸らす能力を使えばいいかと思ったのだが、その前に長峰美紀が一步前に出た。

そういえば、小学生達も競技に手を出していいのだったな、と瑛嗶は思い直す。そして、一步前に出たということは、何か手段があるということなのだろう。

「瑛嗶お兄さん、私を肩車してくれますか？」

「ん、いいよ」

瑛嗶は大きく足を開いた美紀の股の間に頭を入れ、そのまま立ち上がる。美紀は少しふらついたものの、なんとかバランスを取って丁度座りやすい位置にその腰を下ろした。瑛嗶と美紀の肩車はなんとうか、危ない絵面だった。

食蜂もぴしっと固まってしまっている。

「操祈お姉さん、瑛嗶お兄ちゃんの後ろをぴったりくっついてきた下さいね？」

「え、あ、うん」

「では進んでください。瑛嗶お兄さん」

「あいよー」

瑛嗶は指示に従って歩く。瑛嗶の服を掴んで文字通りぴったりとくっついて歩く食蜂は、少しだけ顔が赤くなっていたが、しかしそれを瑛嗶は見る事が出来なかった。

そして、そのまま三人がペイントボールの飛び交う空間に入った瞬間、念動力者は一斉に瑛嗶達へペイントボールを殺到させる。その数は時間が経つごとに増えていく――が、

しゅぼっ！

ライターで火を付けた様な音が響いた。そして、その瞬間瑛嗶は見た。自分達に迫っていた全てのペイントボールが、

光と共に消滅したのを

「迫って来るペイントボールは全て私が撃ち落とします。なので、瑛  
嗶お兄さんは気にせず進んでください」

美紀はそう言って、小学生とは思えない真剣な瞳で未だ目の前で飛  
び交うペイントボールを見据える。どうやら、彼女の能力『光力掌握』  
によって生成された『光線』<sup>レイザー</sup>によって、ペイントボールが全て消し飛  
ばされたらしい。簡単に言えば、虫眼鏡で日光を集めて一点を焼く実  
験の凄い版だ。見た目的にはレベル5の第四位『原子崩し』<sup>マルチタウナー</sup>に似てい  
るが、その光はまさしく純白であり、一切の影も色の存在も許さない。  
そして、その光に触れたものは容赦なく焼き、消滅させる。文字通  
り光を掌握した能力と言えよう。

ただ、凄まじい能力ではあるものの、それには多大な集中力が必要  
になる。未だ小学生である彼女は、この能力を発動している間一歩も  
動けないのだ。更に言えば、未だ身体も脳も未発達である彼女は、あ  
まり長い間能力を発動出来ない。ぶっ続けなら5分と持たない。休  
み休みならば30分は持つが、それ故にレベル4。

現存する学園都市に存在するレベル4の中で、レベル5に達する可  
能性を持った者の一人である。

とはいえ、能力の操作性、威力、物量、どれにおいてもレベル5級  
の効果を発揮する彼女は、今の肩車のように移動を手助けしてくれる  
パートナーがいれば、文句なしにレベル5と同等の実力を発揮出来  
る。

「凄い能力だな……それに、綺麗だ」

瑛嗶は進みながら、目の前をキラキラと走る光のラインが綺麗に残  
光を残している光景に、そう感想を漏らした。まるでイルミネーショ  
ンの芸術みたいで、眼を離せない程に美しく、景色を幻想的に彩って  
いる。

「私の光は全てを焼きつくします。あまり胸を張って自慢出来る様な  
能力ではないんですけどね」



美紀はそう言って、少し辛そうに苦笑する。どうやら、この能力のせいで何かしらのトラブルがあつた様だ。いや、未だにそのトラブルに苦しんでいる最中なのかもしれないが。

「さ、進みましょうー！ このまま一気にゴールです！」

「……はいよ、じゃあペイントボールは頼んだよ」

だが、ここで指摘することでも、ましてや深入りするようなことでもない。今は祭の最中だ、存分に楽しもうじゃないか。

## V S 初瀬遊里

ペイントボールの飛び交う空間を半分ほど進んだ時、それは現れた。瑛嗶達の上空に一瞬で現れたかと思えば、一瞬で消えて瑛嗶達の目の前に着地した。そこはペイントボールの空間を越えた道。彼らは瑛嗶達は一瞬で追い抜いたのだ。

恐らく、男女ペアの片方——男の方の能力『瞬間移動』テレポルトが原因だろう。風紀委員の白井黒子と同じ能力であり、彼もまた人を連れて転移出来る実力者だ。故に、彼女と子供役を連れて跳べた。

とはいえここまで追い付けなかったことを考慮すれば、白井程の飛距離はないのだろう。精々、30m程くらいだろうか。

男の方は瑛嗶を見て、にやりと笑うと彼女と子供役を連れて走りだす。どうやら能力発動には数回ごとにインターバルが必要らしい。

但し、そんな事が分かったところで関係無い。瑛嗶的には、あの男のにやりとした表情がなんとなく、癩に触った。

「美紀ちゃん」

「はい」

瑛嗶の言葉に頷いた美紀は、光のレーザーを彼らに向かって一発撃った。それと同時に、瑛嗶達はペイントボールの空間を抜ける。そして、そのまま男達の下へと走った。

だが、男とは別——平菜小学校の『幼き覇者』の一人、彼らに付く子供役の少女が、美紀のレーザーを『逸らした』。いや、『逸らした』というよりは『曲げた』というべきかもしれない。

「！俺と同じ能力……ではなさそうだな」

「はい、この学校では私と最も相性の悪い相手です。名前は初瀬遊里はせゆうりちゃんです」

「光を曲げたって事は、同系統の能力か……それとも他の能力かねえ……」

「ふむ、ってことはあの男の彼女であるあの女が、操祈ちゃんの能力を防いだって事になるのかね？」

瑛嗶達はとりあえず、大まかに敵の能力の解析を終える。瞬間移

動、精神干渉を防げる能力、そして光を曲げられる能力、中々に脅威的だ。それも、レベル5の精神干渉を防げる、レベル5級の光線を曲げられる、となれば……彼女達は全員レベル4。非常にバランスの良いチームと言えよう。

「どうするのお?」

「どうやらあちらさんは戦闘を行う気満々なようだし、ここで厄介なチームは潰しておこうか」

「上等よお☆」

瑛嗶達と初瀬遊里らは対峙する。こちらが能力を大体把握出来ているのに対して、彼女達は瑛嗶達の能力を把握出来ていない。食蜂の事を知っていたとしても、瑛嗶の能力は分からないだろう。

「お前らは一番厄介そうなペアだからな……ここで潰れてもらうぜ！」

「随分とまあやる気満々だな、うっとおしくらいだ」

「ゴメン、普通そこまで言う? 俺なんかした?」

瑛嗶に宣戦布告をした男に、瑛嗶は毒を吐いた。すると、彼は普通に頭を抱えて落ち込んだ。メンタル弱過ぎて逆に吃驚した位だ。とりあえず彼女の方が慰めて気を取り直したようだ。初瀬遊里が溜め息を付いている。これではどちらが大人なのか分からないな。

「とりあえず自己紹介だ。俺の名前は野崎太郎だ!」

「アタシはコレの彼女の美谷志保よ」

「コレって何? 俺一応彼氏だよな?」

「ウチは初瀬遊里です! よろしゅう頼みます!」

自己紹介してきたが、どうやら上下関係的には野崎太郎が一番下の様だ。

「じゃ、いくぜ」

「え、お前らは自己紹介しないの?」

「いくぜ!」

「話聞けよお!!」

瑛嗶がそう言うと、美紀がタイミングよく、空気を読んでレーザーを発射。初瀬遊里がそれをまた曲げた。光の光線は地面を高熱で溶

かし、蒸気を上げるだけに終わった。

だが、初瀬遊里の能力は光を曲げるだけに留まらない。瑛嗶はその能力による変化に気が付いていた。

「なんや、あつない？」

「成程……そういう能力か」

彼女の周囲……恐らく瑛嗶達のいる場所までの空間の気温が上がっている。まるで真夏の猛暑日の様だ。

つまり、彼女の能力は『温度操作』。空間、物体、生物、様々なモノの温度を操作する事が出来るのだ。上げるも下げるも彼女の匙加減次第。人の体温を上げれば人は熱死するし、下げれば下げたで凍死する。物の温度を上げれば融解するだろうし、大気のを温度を上げれば生物を干乾びさせる事も出来る。

そして、光線を捻子曲げたのは蜃気楼の原理だ。

蜃気楼というのは、異なる空間で大気のを温度が違うことで光が曲がることで起こる現象だ。

光というのは、異なる空間で大気のを温度が違えば、より冷たい方へと光は進む。直線移動である光を曲げることが出来るのだ。故に、彼女は自分の目の前と瑛嗶達側の大気のを温度を操作し、光の方向を操作した。彼女が大気を冷たくした方向へと光線は屈折したのだ。

「二つの場所を同時に操作出来るとはな、流星は『幼き覇者』」

「その呼び名は勝手に周囲が呼んでいるだけです！」

「どうした、美紀ちゃん」

「その呼び名、あまり気にいっていませんよ……」

美紀が肩を落とした。瑛嗶は苦笑する。

とはいえ、これは不味いことになった。瑛嗶の能力的に言えば、初瀬遊里の温度操作は天敵といってもいい。何故なら、空間全体に対する干渉故に、逸らせない上に、触っても意味が無いからだ。

精神干渉は向こうの美谷志保とかいう彼女に妨害され、光線は初瀬遊里によって曲げられ、瑛嗶の能力も初瀬とは相性が悪い。さらには瞬間移動を持つ野崎太郎という男までいる。

全体的に、相性が悪い

とはいえ、瑛嗶の身体能力までは防げない。能力の大元である能力者の方をどうにかすれば、相性の悪い能力はどうにでも出来るのだ。だが、瞬間移動は文字通り一瞬の間に移動する。近づくには少しばかり難儀しそうだ。

「どうするかな……」

瑛嗶は尚樂しそうに、ゆらりとわらってそう漏らした。

## ペイントボール

さて、ここで両陣営の戦いの主導権を握ったのは、意外なことにも全体的に有効な攻撃を持つ初瀬遊里ではなく、この場において恐らく全くと言って良いほど役に立たない食蜂操祈であった。能力は封じられ、頼れるものと言えば瑛喰印の超感覚位のモノだが、彼女にとつてその超感覚こそが重要なパワーアップ要素だった。

食蜂操祈の能力は、精神干渉系最強の能力にして、唯一演算力以外に『己の精神』を使う能力の類だ。何故なら、相手の精神を演算だけで掌握する事は出来ないからだ。そこには確実に、相手をどう操るのかを能力に付け加える『自意識』が無ければならない。例えるのなら、能力は相手の意識に介入し、改竄する為に『自意識』が渡る橋の役割なのだ。

故に、食蜂操祈の能力がレベル5という称号を得ているのは、相手へ繋ぐ能力という橋が巨大で、長く、強固なものであることとは他に、自分の介入意識の強さが評価された結果だと言える。

だがそれでも限界はある。例えば、御坂美琴のやるような電磁力によるバリアーなどは突破出来ないという例がある。元々、精神干渉系の能力は発電系能力と元を同じとする能力。電子を収束し電撃を生み出すか、電子を細かく操って電磁波として扱い、相手の脳信号に干渉するかの違いなのだ。故に、電子を乱される電磁バリアーは、精神干渉能力に対して無類の強さを発揮する。

だが、その電子を攪乱するバリアーの中でも正確に電子を操り、『自意識』を運ぶ為の橋を作りあげられたとしたら、どうだろうか？ 無論、そう簡単なことではない。レベル5である食蜂でさえ出来ないのだから、実質不可能だろう。しかし、ソレが出来れば精神系能力者は——人心支配において、何者をも寄せ付けぬ強制力を手に入れとも同然である。

そして、それを可能にしたのが——食蜂操祈の培ってきた演算能力と、その演算能力を支える瑛喰の超感覚である。

食蜂操祈は、リモコンをカバンの中へと仕舞い、その両の腕を広げ

る。そして、御坂美琴の様にこめかみからバチツと火花を散らす。それと同時に、彼女の能力は電子を掌握し、速攻で『橋』を組み立てる。

「——ッ！」

無論、その橋の先にいた少女——美谷志保はその能力を察知し、周囲に電磁バリアーを敷く。しかし、食蜂操祈は今………無敵の領域に片足を踏みこんでいる。

「ガッ……ア……あ………!?!」

作りあげられた橋は、電磁バリアーの邪魔を容易に突き破る。そして、強引に美谷志保の精神へとその橋の先を繋げて見せた。これならば精神干渉は可能、食蜂操祈はそのまま美谷志保の意識を強制的に遮断した。どさつと倒れる美谷志保を、野崎太郎は慌てて抱えた。

そして、食蜂は深い息を吐いて少しだけふらつきながらもキラキラとした瞳で敵を見据えて笑う。精神干渉能力に対して無類の効果を発揮するバリアー？ だからどうした、私はそれを越えていく。レベル5の第五位、精神干渉系最強の能力、

『メンタルアウト  
心理掌握』

これが化け物だ。無敵の人外の力を得た化け物は、無敵の片鱗を体感した。

「坂嗶さん……彼女は無力化したわあ……でも、ちよつと本気力出し過ぎたかもお……」

「ああ……なるほど、地獄巡り茶の効果か……確かに俺の感覚があれば攪乱なんて察知して対処出来るか」

「てゆーか、私ちよつと走ったから疲れた……！ 休ませて貰うわあ………！」

未だに息が荒い食蜂は、とりあえず一人倒したのでその場にへたり込んでそう言った。

坂嗶はそんな彼女の頭をぽんと撫でて、手首をぷらぷらと揺らす。調子を確かめる様に首をコキツと鳴らし、トントンと爪先で地面を叩いた。残るは瞬間移動と温度操作の能力を持つ最強に近い者が二人。

相手にするには丁度良い。

「美紀ちゃん、とりあえず瞬間移動の方よろしく。光の速さより速く移動は出来ないだろ」

「はいー」

「俺は……あの方言娘をやる」

見据えた先そこでは余裕そうに佇む少女が瑛嗶を見ていた。そして、その両手を前に突き出し温度を操作する。

温度操作は、分子の振動によって生み出される温度の上昇と分子の停止によって生み出される温度の低下を操作する能力。つまりは分子を操作する能力な訳だ。この世界を形作る、最も小さい極小の粒を操作する能力。脅威的かつ、最強とも言える能力だ。

故に、彼女は分子振動によって高熱を生み出し、炎を生み出す。その炎は彼女と彼女の付き組である野崎と気絶中の美谷を避けて、瑛嗶達の下へと迫った。瑛嗶はそれを逸らす。

「！やるやん、おにいはん」

「小娘が何言ってるんだ、子供が大人に勝てると思うなよ？」

「子供舐めたら痛い目みるえ？」

初瀬遊里はそう言いながら気温を上昇させる。陽炎が出来るほど、高温の空間が出来上がる。初瀬遊里の周囲だけは涼しいままに保たれている故に、若干の蜃気楼が疑似再現されて現象化する。最早視覚では彼女との距離感が図れなかった。

「だが、そんなのは関係無い」

食蜂操祈がそうだったように、瑛嗶にはそのオリジナルである超感覚がある。その視覚は遠方にいる敵を正確に捉え、その聴覚は数km離れた場所であっても音を拾い、その触角は空気の流れ、音の振動によって気配や周囲にいる存在の全てを察知する。そして戦場で培われたその第六感、気配だけでなく、自分に迫る危険や攻撃、災害を事前に察知する。

つまり、幾ら距離感が掴め無かろうが——その位置は手に取る様に分かるのだ。

「さ、お遊戯はお終いだ」



「え!?!」

瑛嗶はその場から姿を消し、初瀬遊里が気が付いた時には背後に瑛嗶がいた。やったことは単純。ジャンプして、背後に着地しただけ。それだけの動きなのに、少女の動体視力は何も捉えられなかった。

「残念、でも中々脅威的な能力だった」

「ぶふっ!?!」

瑛嗶はそう言って、初瀬遊里の顔面に、こっそりと回収していたペイントボールを叩き付けた。

## 美紀の視点

私の名前は長峰美紀。平菜小学校三年生、9歳、女。身長129cm、体重は恥ずかしいから秘密。好きな食べ物はチーズケーキ、嫌いな食べ物は特に思い付かないかな。

私が学園都市っていう超能力の開発をしている街に来たのは、小学一年の最初から。平菜小学校が私の学園都市最初の学校生活の舞台。私は小学二年の頭、此処で『光力掌握』っていう能力を手に入れた。光を操る能力で、最初の判定はレベル2。最初は周囲を照らす位の光の球を作るのがやっとだったけど、時間が経つに連れて身体が成長するとそれも目に見えて成長していった。

そして今、小学三年生になった私の能力は、レベル4。今では光を収束して光線を打つ事も出来る。先生には危険だから人に向けて撃つっちゃ駄目だよ、って言われてるからあまり日常で使う様な機会は無いけれど、ちよつと前に私を誘拐しようとした男の人が怖くて、やたらめつたら光線で攻撃しちゃったことがある。気が付いたらその男の人は私の足元で倒れてて、助けに来てくれた風紀委員のお姉さんが保護してくれた。

その時に気が付いた。私の能力は、とっても危険なモノなんだって。人に光線を撃てば人の身体を簡単に貫けるのだから。しばらくはその能力が怖くて、能力を使うのが怖くなったけれど、先生と友達のおましの言葉のおかげで、今はこの能力と上手くやっていけていると思う。

で、最近大覇星祭が始まった。私はあまり運動が得意じゃないから、少しだけ憂鬱だった。出場する競技もあまり体力を使わないで済む競技を選んだ位だ。だつて疲れるんだもん。

私が出たのは、借り物競走。学園都市中から指定された物を借りて来て、ゴールするのがルール。これなら無理に走らなくても良いし、最悪ビリでも責められない。私が引いたのは『男女のカップル』だった。楽な物を選んだからってこんな仕打ちしなくてもいいじゃないですか、神様。

でも、運が良いことに私は美男美女の恋人らしき人達を見つけてくることが出来た。片方は金髪で、あの常盤台の体操服、お嬢様っていう存在、片方は青黒いクセのある髪で、とても背の高いお兄さん。どこことなく見た目以上の大人っぽい雰囲気纏っていて、少しだけカッコいいなあって思っちゃった。

幸い、お兄さんたちは一緒に来てくれることになった。ほっと一息付いていると――

――そこが私の大覇星祭が劇的に変わった瞬間だった。

気が付いたら私は空を飛んでいた。いや、金髪のお姉さんと一緒にお兄さんに抱えられて、空を駆けていたのです。

広い広い学園都市が、一望出来る空を散歩のように駆けるお兄さん。貴方は一体何者ですか？

でも、吹き抜ける風は気持ちよくて、お兄さんが楽しそうに笑っているから、私もついつい楽しくなって、競技の会場に向かって落ちていく時にはなんだか分からない内に笑ってしまっていた。

お兄さんと手を繋ぎ、ぐったりしたお姉さんはお兄さんが背負って、一緒にゴールした。常盤台の超電磁砲と呼ばれている有名なレベル5、御坂美琴さんに勝ってしまいました。お兄さんのおかげとはいえ、とても嬉しかった。

競技の後、お兄さん達と別れ、初日、二日目と大覇星祭は終わっていった。そして三日目、何気なくお兄さんを探している自分に気が付いた。つまらない大覇星祭で、お兄さんといったあの時だけがすごく楽しかったから、またお兄さんに会いたくなっただけだと思う。

そして、私は本当に運が良い。お兄さんはまた金髪のお姉さんを連れて私の前に現れた。あの時と同じ、楽しそうに笑みを浮かべて。私は嬉しくてつい、速くも無いのに駆け出して近寄って行った。お兄さんは私のことを覚えてくれていた。

お兄さんの名前は瑛嗶さん、そして金髪のお姉さんの名前は操祈さ

ん。大覇星祭の特別競技、恋人繋ぎに抽選で当たって、参加しているらしい。

平菜小学校はその広さから、会場に選ばれたのだろう。私は初めて平菜小学校に入って良かったと思った。

そして、そこからの競技はやっぱり楽しかった。お兄さんが私とお姉さんを抱えて、一気に参加者の皆さんを突き放す。空中を駆けた時みたいに、地面を蹴る度に空気を切り裂いて進む感覚が、とても心地良かった。お兄さんの楽しそうな横顔と、広い背中に背負われている安心感が、とても心地良かったのだ。

最初の障害物、ペイント液の雨だって、お兄さんの能力なのか私達の方を液が避けていく。邪魔するものなんて何もないかの様に、お兄さんは一直線に最初の障害物を突破した。その後、お姉さんと一緒に地面に降ろされた時、お兄さんの温もりが離れていくのが少しさびしい気がした。

次の障害物、私と同じ平菜小学校の子達がペイントボールを投げてくる空間に辿り着いた。ここは私の力の見せどころ。光線を使えばペイントボール程度全部撃ち落としてやるんだから！

でも、その間は私は動けない。でも、今はお兄さんがいる。私はお兄さんの肩車を要求した。お兄さんの役に立ちたくて、お兄さんに私の能力を見て欲しくて、お兄さんに笑って欲しくて、少しせつかちになっっていたかもしれない。

——— 恥ずかしい……

そう思ったのは、肩車をされ終えてから。自分の足の間にお兄さんの頭が挟まれている。しかも、この状況は中継で放送されているのだ。どうしよう、凄く恥ずかしい。少し前は男の先生に肩車されても恥ずかしいなんて思わなかったのに、お兄さんだと何故か恥ずかしくかった。

でも、今更降ろしてなんて言えない。それに、お兄さんはもう進み

始めている。私は羞恥心を我慢をしながらも、光線で迫りくるペイントボールを全て撃ち落として行く。お兄さんが褒めてくれた。胸の内が暖かくなった。ぽかぽかした気持ちかどんどん胸の中を満たして行つて、いつもより集中して光線を操作出来た気がする。

そして、もう少しでこのペイントボールの空間を突破出来そうという所で、一組のペアに抜かれた。瞬間移動の使い手がいるみたい。こっちに振り向いて、とてもムカつく笑顔を浮かべて来た。お兄さんとは大違い。お兄さんが私の名前を呼ぶ。返事をすると同時に光線を撃つてしまった。人に向かって撃つたので、大分焦つたけれど、向こうにいた私の同級生の初瀬遊里ちゃんが防いでくれた。

彼女は私達の世代の中でもかなりの実力を持つ少女だ。実は風紀委員の子でもあったりする。ああ、こっちを睨んで……後で説教されそうだなあ……。

でも、お兄さんは遊里ちゃん的能力を見て面白そうに笑っている。少しだけでもやめた気持ちになった。私の能力よりも遊里ちゃんの方が興味を引いたから、ちよつとだけ嫉妬しちゃった。

でも、

「美紀ちゃん、とりあえず瞬間移動の方よろしく。光の速さより速く移動は出来ないだろ」

お兄さんがそう言ってくれた。私の能力を頼ってくれた。私を頼ってくれた。だからちよつとやめた気持ちなんて一瞬で消えて、またぽかぽかした気持ちが胸を満たした。元気よく返事をして、私は瞬間移動のお兄さんに対峙する。

「あー……悪い、お嬢ちゃん。こりや勝てねーわ……次の瞬間移動までにはまだインターバルが必要だし、流石に光より速く移動は出来ない……降参だ」

「む……そうですか……」

ちよつとだけ拍子抜け。やる気満々だったのに不戦勝だった。少し不満気味。

でも、お兄さんの方を見たらそんな気持ちは吹き飛んだ。だってお兄さんは何時の間に隠し取ってたのか、ペイントボールを遊里ちゃん

の顔に叩きつけていたから。蛍光ピンクに染まった遊里ちゃんの顔は、おかしくて笑っちゃった。

お兄さんといると、やっぱり楽しい。胸がぽかぽかする。お兄さんと一緒なら、憂鬱だった大覇星祭も、悪くないかな。

## V S 島風沙耶

それから、脱落した初瀬遊里達を置いて進む瑛嗶達を、自意識を持って追い掛けているペアは4組。ペイント液の雨、ペイントボールの空間は、思いの外多くの参加者を脱落へと追い込んだ。能力の相性というのもある訳で、やはりペイント液の雨はまさしくペイントボールを対処出来るペアはそう多くなかったようだ。

とはいえ、順位としては瑛嗶達が一位を不動のものにしている。二番手にはなんと、追い上げて来た島風沙耶らのチームがいる。レベル3の身体強化能力を持つ男が、瑛嗶と同様にペアの女子と島風沙耶を抱きかかえて走っているのだ。その速度は、瑛嗶を除けば参加者中トップを誇る。そして、その速度でギリギリ追い付ける程度の速度を保って走っている瑛嗶からすれば、直に追い付こうとしている彼らのチームは、中々に期待の出来るチームであった。

そして先んじて辿り着く、第三の障害物。『○?通り抜け』。

設置された○と?の壁のある道があり、そのどちらかを通り抜けていくのだ。○と?の壁は障子紙であり体当たりすれば破れる脆さだ。当たりの道はそのまま進む事が出来、外れの道はペイント液の沼が用意されている。無論、外れを選んでも能力や何かしらの方法で沼を回避するのはアリだ。

「どっちに行く?」

「○ですかね?」

「いや、?よお☆」

走りながら問う瑛嗶に、背負われている二人は対照的な答えを出す。瑛嗶はそれを聞いて、?へと突っ込んだ。理由は簡単、食蜂の言葉には確信があったからだ。周囲に判定員として配置されていた監視員の心を読んで、どちらが当たりなのかを知った訳だ。瑛嗶的にも、勘で?を選んでいたので迷うことは無い。

突っ込んで、抜けた先には普通の道が続いていた。となりに○を抜けた際に用意されていたペイント液の沼が見える。だが、外れではないので、関係無い。

「なんで分かったんですか？」

「操祈ちゃんが監視員の心を読んだんだよ」

「ああ……なるほど……」

美紀が納得した様子で頷いたのを一瞥しながら、瑛嗶は更に先へと走る。

だが、そこで危険を察知。瑛嗶はバックステップでその場を後退する。刹那、先程まで居た場所を炎の弾が攻撃し、辺りに熱風を撒き散らした。

「……………追いついてきたなあ……………お嬢ちゃん達」

「はあ？ アンタすつごく弱そうね！ 跪いて私の靴でも舐めてるのがお似合いよー」

「その発言は不特定多数の大きなお友達が歓喜の悲鳴を上げるから止めておいた方が良い」

「意味分かんないし……………ほんつと見た目通りの貧弱男ね、はっ倒されたくなければそこを退きなさい！」

さて、追いついてきたのは島風沙耶のいるチーム。瑛嗶に向かってこんなドSな言葉を吐いているのは弱冠9歳の小学三年生、島風沙耶その人である。シユシユで黒髪を括った彼女は、縞々の白黒ハイニーソックスで包まれた細くもしなやかな足を大きく開いて仁王立ちだ。小馬鹿にした吊り目の瞳は生意気に此方を見ており、にやりと吊り上げられた口元はとてもイラツとくる。

だが、彼女はそれ以上に女王様気質だった。気に入らない相手は須らく平伏させると考えている。そして、自分こそが最強なのだと言わんばかりの自信が漏れ出ていた。

「なあ美紀ちゃん、あの子何なの？ 社会でやってけないタイプの子だよアレ」

「と、言われましても……………沙耶ちゃんはいつもあんな子なので……………」  
「こつちにはマジもんの女王がいるけど……………あつちはなんというか、真性の女王様タイプだな。足蹴にして泣かせてやろうか」  
「止めてあげてえ!？」

瑛嗶は食蜂のツツコミを無視して島風を見る。男女ペアは彼女に



口を挟めない様で、力のヒエラルキーは完全に彼女が頂点らしい。能力的に言っても、彼女が一番強いのだろう。

「はあ……面倒な子だな。よーし各個撃破な、操祈ちゃんはその男、美紀ちゃんはその女を、俺が島風沙耶とかいう小生意気な小娘をやる」

「まあ身体強化なら私の敵じゃないしねえ」

「女の人は分かりませんが……頑張ります！」

瑛嗶の言葉に、向こう側の意図を理解したのかそれぞれ散開して各自対峙する。瑛嗶の目の前に佇む仁王立ちの少女、島風沙耶は意地の悪そうな笑みを浮かべて闘志を瞳に燃やす。対して瑛嗶はゆらりと馬鹿にした笑みを浮かべて、嗜虐心を滾らせながら少女を見下した。

人外は、良く人を弄る。からかって、時にやり過ぎる時もあるけれど、悪びれない。だが極稀に、意図的にやり過ぎる様に弄る時がある。相手をマジで泣かせようとしている時だ。その理由は様々だが、気まぐれや思い付きがほとんどの理由を占める。

今回の理由は、生意気で女王様気質な少女を、跪かせて見下しながら、泣かせてやりたくなったから。

戦闘とは違う。ただ弄る為に、瑛嗶はその嗜虐心を持って、老若男女関係無い平等で平等な鬼畜の所業を開始する。

## V S 島風沙耶 2

瑛嗶は基本的には無害、自分から何かしらのイベントを起こすことがあまりない故に、人畜無害で他人をむやみやたらに傷付けたり、意味も無く殺したりなんかしない。自分の力を良く理解し、自分の為に、自分の主義主張に沿って、正しく振るっている。たまに酷い位鬼畜な所業で他人を弄ったり、からかったりするけれど、それだって基本誰かが傷付いたり、禍根を残す訳ではない。

だからこそ、瑛嗶がかなりのドSだということを把握している者はそういない。瑛嗶は基本通常時は一般人程度、もつと言えば一般人以下の気配しか発していない。瑛嗶が普段から気配を隠していなければ、その化け物染みた威圧感から多くの人を気絶させてしまうのだ。故に、初見で瑛嗶を見て、弱そうと思うのは仕方が無いことである。とはいえ、その第一印象は大抵直ぐに覆されるので意味は無いのだが。

初見で瑛嗶を只者ではないと察せる者は、戦闘に通じている者や、そこそこ裏の世界にその身を置いている者だけだ。

さて、ここで話を現実に戻そう。現在、瑛嗶の前には平菜小学校の三年生、島風沙耶が対峙していた。生意気に吊り上がった瞳と、相手を見下したように歪んだ口元、そして何より自信たっぷりと言いたげな仁王立ち、どう見ても女王様系の女子だ。そしてその言葉遣いも、相手を思いやらない罵倒がほとんど。徹底したドSロリだった。

でだ、

ここで、瑛嗶というドSと、島風沙耶というドSが対峙し、対決する訳だが虐める側と虐める側が対立した時、果たして勝つのはどちらなのか。それは、やはり力と力の大ききさで決まる。その性質で対立し、純粹に力の大ききさが勝負を決める。

そして、その力が大きいのはどう考えても、どう考慮しても、どう譲歩してみても、どう鼻負しても、瑛嗶だ。どんな能力だろうが、如

何様な戦い方をしようが、覆らない力の差がある。

故に、此処から先は瑛嗶の一方的な虐めでしかない。虐める側が、いつも通り虐め、虐める側だった者がいつもと違って虐められる。それだけのことだ。

「アンタ、名前は？」

「瑛嗶さんだよ。様付けで呼べちんちくりん」

「馬鹿じゃないの？ アンタこそ頭を垂れて島風様と呼びなさいよ、ソレが礼儀でしょ？ 分かる？ この豚が」

にやりと笑ってそう言う島風と、それを飄々と受け流す瑛嗶。

「人間と豚の違いも分からないのかあー……随分と頭の悪い子供だな。幼稚園からやり直せば？」

「なっ……言うに事欠いて失礼な……炭にしてやろうかしら？」

「なるほど、お前の能力は火を扱うんだ？ コレは良いことを教えて貰ったなあ」

「……！ つくづく腹の立つ豚ね……！ アンタなんて私の足元にも及ばない!!」

島風はそう言って、その手に炎を生み出し凄まじく巨大な業火の塊へと変貌させていく。その大きさから推測するに、その威力はおそらく小規模な範囲を焦土に変えるだろう。

「それをどうするの？ 花火でもしたいの？ ごめんね、俺の常識が正しければ花火は夜にやった方が良いと思うなあ……あ、ごめんごめん君は女王様（笑）だもんね、常人とは違うんだよね、昼間に花火をして虚しい気分を存分に味わうと良いよ。但しそれは一人でやってね、俺は君と違って忙しいからさあ……？」

「誰がこんな所で花火なんかやるかあああッ!!」

島風を煽る瑛嗶。完全にキレた島風はその業火を瑛嗶に向かって投げ付けた。その速度はけして遅くない。放った時には既に避けられるかどうか分からない距離に近づいている程だ。

だが、

「線香花火にしては大きな玉だな。でもハイ落ちましたあ〜」

瑛嗶はその業火の弾を『掴んで』、地面に叩き落とした。線香花火が

地面に落ちる様に、巨大な業火の塊は儂く地面に落ちて行った。

「え？ 嘘……？」

「次は俺の番だよな？ えーと、なんだっけ最初にお前が言ってたなあ……『跪いて足を舐めろ』だっけ？」

「っ……………」

「そのまま返してやるよ……俺の前に跪いて、足を、舐めてみる」

オウム返し。瑛嗶の言葉に島風は一步足を引いて歯を食いしぼる。抵抗とばかりに瑛嗶に向かって火弾を連撃するが、全て地面に叩き落としながら一步一步、近づいていく。

島風にはその足音が、終わりへのカウントダウンのようにも思えた。しかし、許しを乞うような態度はプライドが許さない。私が最強で、私が頂上に立っているのだ。私が一番上で、それ以外は足蹴にするべき下等な存在。

「負けるわけには、行かないわ……………」

「へえ？」

「アタシの前に跪いて、平伏せこの豚がツツ!!」

炎を生み出し、全力で瑛嗶へと接近する。零距离ならば、躲せはしまい。この一撃で、目の前の豚を地に墜としてやる。そう意気込んで、その小さな手に纏った火炎は、瑛嗶の胸へと一直線に突き進む。

だが、最初に言った。最初に決まっている。

「無駄だ、小娘が」

瑛嗶と島風では、力の差があり過ぎる。

「……………!?!」

瑛嗶はその手を掴み、島風の足を払う。そして、彼女の身体は宙に浮き、くるりと回る。何が何だか分からない内に、彼女は地面にうつ伏せで倒されていた。目の前には、自分を見下ろす瑛嗶の足下が見える。その光景は、自分にとって凄まじく屈辱的。

「さて、俺の足でも舐めるか？ 小学生？」

「くっ……………」

「どんな気持ち？ ねえどんな気持ち？ 豚とか貧弱とか罵ってた相手に平伏してるけど、今どんな気持ち？」

「く……うううう……！」

ぐぐぐ、と顔を真つ赤にして悔しさに齒噛みする島風。その表情は、とんでもなく悔しそうだ。瑛嗶はそんな彼女に満足したのか、パーカーのポケットからペイントボールを5個取り出す。まだ持っていたのか。

「顔真つ赤だよ？ でもちよつと色が足りないな、ほらぐしやー」  
「ぶふっ!？」

瑛嗶はペイントボールを島風の顔面にべしやつと叩き込む。真つ赤な顔は蛍光ピンクに染まった。

「もう一発」  
「ふぎゅ!？」

更に顔面にペイントボールを叩き込む。髪の毛までペイントボールで蛍光ピンクに染まった。

「さて、続いて……」  
「え？ え？」

瑛嗶は島風を持ちあげて、服の襟から体操服のお腹側に三つのペイントボールを入れる。そして、そのまま地面へと落とす。

「ぎゃふん!？」

うつ伏せに地面に落ちると同時に、彼女の身体の下から何かを潰した様な音が響く。勿論ペイントボールだ。すると、彼女の身体の下から蛍光ピンクの液体がどろどろと流れ出て来た。上から見るとまるで自殺した人の様だ。

そして、瑛嗶はそんな彼女を見下しながら言いはなつ。

「女王になるには速すぎたな、お嬢ちゃん？」

その言葉が最後、島風はうつ伏せのまま、ぽろぽろと涙を流した。但し、放送されているのでそれがバレないように、顔はずつと地面を向いたままだ。それはまるで、地面を舐めさせられている様で、より涙が溢れるのだった。

## 間違い

それから、光の光線にビビって敗北を受け入れた男が、またもチート洗脳によって気絶させられた女と静かに泣きじやくっている島風を抱えてリタイアしていった。完膚なきまでに庇護対象の島風がペイント液塗れにされたので、失格は失格だ。

そして、瑛嘎達は更に先へ進む。そして、勝負は終盤に差し掛かる。続いて現れたのは、第四の障害物――

### 『ダンシングペイント』

地面に見える小さな無数の穴から、不規則、ランダムに噴き出すペイント液の噴水の上を走り抜けなければならない。その距離、100m。数秒間のランダム噴水は、容赦なく参加者を追い詰める。障害物としては、おあつらえ向けの難関だろう。

だが、それは一般人にとっては、だ。相手はこの世界最強の存在。人間を外れた男、瑛嘎だ。100mなど一瞬で走り抜けられる上に、飛び越えれば最早関係無い。故に、

「あらよっと」

そんな軽快な言葉と共に、瑛嘎達はその100mの障害をなんなく飛び越えた。第四の障害、終了。追い掛けてくる参加者達も、残るは後一組のみ。やはり、○?の壁は運の要素が強かったのか、残る一組を残して他の参加者は全て脱落してしまった。

恋人繋ぎ、初戦競技はクライマックスに達していた。観客の学校代表達は、瑛嘎に賭けていた者達や、既に脱落した者に掛けた者達で、テンションが違う。まるで競馬のように会場のボルテージは鰻登りだった。

「お兄さん！ 後ろ！」

「避けて！」

「！」

不意に、二人が注意を促してきた。瑛嗶は咄嗟にその場から横に跳んで、先程まで自分がいた場所に視線を向けた。そこには大量のペイント液が滝のように降り注いでいた。それも、物凄い勢いだ。少なくとも、自然落下などではありえない勢い。明らかに、故意的な意図が秘められていた。

「水流操作……いや、これは液体操作か」

「その通り」

瑛嗶の言葉に、心地良い低音の声の返答が返ってきた。声の聞こえた方向を見ると、そこには長身で細身の男が立っていた。おそらく、瑛嗶よりも背が高い。もしかしたら2mはあるかもしれない。そして、その隣に佇むのは恋人であろう、対象的に背の低い小さな女生徒。彼女の隣にいる『幼き覇者』の一人であろう少女と比べても、あまり歳の差は感じられないくらいだ。

「やあ、やつと追い付いたよ。いやはや、最初からそうだけれど君達の強さには目を向く者があるね……それに、誰にも無い華がある！」

「それはどうも……」

「そちらのレディは常盤台のレベル5……食蜂操祈嬢だろう？ それに、そちらの小さいレディも……一部では有名な『幼き覇者』の先駆者にして平菜小学校最強の能力者、長峰美紀嬢ときた。そして、その二人に負けない實力を見せてくれた君……確か名前は泉ヶ仙瑛嗶君……だったな？」

男は気障つたらしくも、不快な気分にはさせない妙に似合う笑みを浮かべながら、瑛嗶達の情報をつらつらと述べていく。というか、長峰美紀が平菜小学校のトップとか今知った。そして幼き覇者と呼ばれる由来である、ロリコン男に襲撃された少女というのは彼女のことだったのか。

新事実にも、驚く瑛嗶。だが、男は気にせずに前口上を述べていく。

「だが、それでも僕らは負けない。勝算はある———今までの戦いを見て、君達に勝つ策を練ったからこそ、こうして此処に来たのだから」「へえ、なるほど……面白いじゃないか」

瑛嘎に対する策を練った。瑛嘎達を倒す策を練った、ならばそれは間違いなく面白いものなのだろう。なにせ、この人外を追い詰めようというのだから。

「君達の能力との相性が良い面子で良かった……故に、泉ヶ仙瑛嘎——僕は君と二対一の勝負を仕掛けよう。食蜂操祈嬢と長峰美紀嬢は……僕の愛しの彼女と、今は僕の護るべき対象である『汐見栞』嬢がお相手しよう」

「へえ……二対一でいいのか？」

「いいのさ……僕達にとって一番脅威なのは——レベル5の食蜂操祈嬢だ。洗脳とは最も強い能力の一つだ。抗う術が無い限り、覆しよ  
うのない能力の差が顕著に出る凶悪性を持っている。だから、僕達は食蜂操祈嬢を潰す。レベル5とはいえ、彼女は今までの行動で能力だ  
よりの能力者だということを確信している。自分自身の肉体では戦  
うことは出来ない。そこが衝くべき弱点だ」

気障な顔して良く見ている。正直、瑛嘎はそう思った。

そう、彼らが一番危険視しなければならないのは食蜂操祈だ。瑛嘎ではなく、彼女なのだ。何故なら、瑛嘎は無敵ではあるがその攻撃手段は『肉体による物理攻撃のみ』なのだから。その点、食蜂操祈はその能力が一步発動すれば致命的な大打撃となる。故に、本当に危険視すべきなのは、食蜂操祈。

「上等よお……やってやろうじゃないの」

「でも、一つ良いですかお兄さん」

「どうした美紀ちゃん」

「汐見栞ちゃん、ですが……私は先程、平菜最強と言われましたが、それは圧倒的に強い訳ではないんです。本当に微々たる力の差で私が上回っているというだけで、他の子だってその気になれば私に勝つ可能性が無い訳じゃないんです」

「つまり……汐見栞ちゃんは美紀ちゃんに追隨する実力を持つてるってことか？」

「追隨する……というより、私みたいな一対多数の戦術を得意とするのとは反対で、多数を一で作り上げる実力を持つてるんです」



瑛嗶は美紀の言葉に、首を傾げる。それはどういうことなのか、と問おうとしても美紀は彼女の能力を教えるはくれないだろう。何故なら、そういうルールだから。

「まあ、やってみれば分かるか——ああ、いや……そういうことか」

瑛嗶は視線を男達に向けて、ゆらりと笑ってそう言った。先程まで無かった筈の『異常な』強者の雰囲気、相手三人が三人とも纏っている。これではまるで瑛嗶が増えた様ではないか。そう思わせるほどに、彼らの雰囲気は凄まじく強かった。

「………公平配分」  
オールディヴィジョン

汐見栞はそう呟いた。

その能力は、『指定範囲内の人間の実力を均等に調整する能力』。具体的に言えばこれは念動力の類の能力であり、彼女自身が設定した身体レベルまで身体能力を引き下げる枷を付けるわけだ。一定以上の速度を出そうとすれば、枷がその速度を抑制し、一定以上の威力を出そうとすれば、枷がその威力を一定まで分散させる。

そして逆に、一定の速度が出せる様に枷は対象の能力を補助し、一定の威力になる様に補助する補助具にもなるのだ。本当に一定、一定になり、一定になって、一定にしかならない、そんな能力。

瑛嗶が増えたのではない、これは瑛嗶が一定になり、相手が一定になった結果。これならば、確かに瑛嗶に勝てる可能性はある。

だが、考えてみよう。現在、彼女——危険視すべき彼女、食蜂操祈は瑛嗶と同じ感覚を持っている。そして、この汐見栞の能力は『感覚にまでは影響しない』。

つまり？

今、その能力で——全員と同等にまで身体能力が向上した彼女は、その上で瑛嗶と同じ感覚を持っている彼女は、今この時において、

——『もう一人の瑛嗶』といえるのではないだろうか？

彼らは、決定的な間違いを犯したのかもしれない。

## V S 汐見栞

正直に言えば、気障<sup>キザ</sup>な彼は食蜂と同じ位……いやそれ以上に瑛喰を危険視していた。速すぎる速度と、強過ぎる威力、縦横無尽変幻自在に動きまわり、能力どころか、攻撃どころか、視界に収めることすら許してくれないそんな理不尽な存在を、危険視していた。

言葉ではああ言った物の、結局のところ汐見栞の能力は『瑛喰の弱体化』の為に使われたのだ。気障な彼が、瑛喰と一対一で戦えるように使われたのだ。その結果、同等に危険視していた食蜂を強化してしまったのは、ある意味誤算だ。

彼らは食蜂操祈の身体能力の低さを甘く見ていた。

そしてもう一つの誤算は、そんな食蜂操祈が既に、瑛喰によって超感覚を得ているということ。今となつては食蜂操祈は瑛喰と同等のステータスを保有する存在へ大幅レベルアップを果たしてしまっている。

結果的には、彼らは瑛喰をもう一人作りあげてしまったのだ。正確には、能力によって弱体化した瑛喰をもう一人、だが。

「うーん、うんうん……どうやらあの子の能力は私にとつてはプラスに働くみたいねえ。いつもと違って、体力の回復も早いようだし、心なしか全体的に身体能力が上がった気がするしい……とはいえ、瑛喰さんの恩恵を受けていない私であれば、この向上した身体能力は使いこなせなかったでしょうけど、ね☆」

「お姉さん？」

「大丈夫よお美紀ちゃん。言つてなかったけど、私は今無敵なの」「そうなん、ですか」

「だから、差し当たってはあの二人を倒しましょう。大丈夫、私がいれば百人力よ、レベル5は伊達じゃないの」

食蜂操祈と長峰美紀は、瑛喰達とは距離を取って二対二、ダブルスでの勝負を始めようとしていた。敵も二人、こちらも二人、食蜂操祈

の能力を最初の時点で阻害したのは、消去法で対峙している女の方だろう。発電系能力や防御系能力という訳でなく、彼女の能力はそれ以外のものであり、かつ食蜂の能力を意図的に妨害出来る。

滝壺理后という少女は、A I M 拡散力場に干渉出来る能力を持つ。つまり、A I M 拡散力場に干渉する能力はあるという証明になるのだ。故に、彼女もその能力を持つ能力者。A I M 拡散力場を感じ取ることが出来、A I M 拡散力場を乱すことが出来るだけの、レベル3。

上条当麻の持つ、『異能の力を例外なく』無効化する『幻想殺し』ではなく

『超能力であれば例外なく』妨害出来る『A I M 妨害』。超能力限定の——『幻想殺し』。

故に、彼女は食蜂の洗脳能力に対して、自身らに干渉しようとするA I M 拡散力場を掻き消すことで無効化出来たのだ。

能力者でありながら、能力を否定する能力を持つ者。レベル3であることから、レベル4やレベル5などの高い演算能力を持つ能力者の能力を妨害するのは中々骨が折れるし、出来ないこともあるのだが、それでも脅威的な能力だ。

「美紀ちゃん、とりあえず貴方はあの汐見栞って子を相手して頂戴。勘だけど、あの女と貴方は相性が悪い気がするわぁ」

「……分かりました」

「さて……」

話が付いた所で、食蜂たちは相手に向き直る。相手もそれに対して若干身構えた。

「楽勝よ☆」

食蜂はそう言っつて、瞳を煌めかせた。



対して、気障な男の方は瑛喰に対して、多少善戦していた。

瑛喰の拳は、蹴りは、動きは汐見栞の能力によって一定まで落ちて  
いる。故に、どんなに無駄のない変幻自在な動きで攻撃出来ようと、  
距離を取っていけば十分躲すことが出来るのだ。しかも、彼は瑛喰と  
は反対に遠距離から攻撃出来るタイプの人間だ。

故に、

善戦、というより——瑛喰の方が苦戦を強いられていた。

「チツ」

舌打ちを一つ。近づこうにも、出せる速さが一緒ならば、近づくの  
と同じ速さで距離を取られてしまう。ある意味、やり辛い。

「君の強みはその化け物染みた身体能力による近接戦闘の強さだ。だ  
からこそ、こうして僕が距離を取れば負けることは無い」

「……なるほど、理に適ってるじゃないか」

「そして、僕は君に対して遠距離から攻撃出来る」

気障な彼が両手を広げたと同時、大量のペイント液がふよふよと空  
中に浮いた。液体操作の能力、水だけではなく、液体であれば操作出  
来る能力。血液も、ペイント液も、毒も、液体であるならば操作出来  
る能力。使い方によれば、危険な能力だ。なにせ、人に触れた状態で  
あれば体内の血液を操作する事も出来るのだから。

レベル3故に、触れた瞬間にとはいかないが、それでも5秒もあれ  
ば簡単に人を血液逆流で破裂させられる。

「とりあえず、今までペイント液塗れにしてきた子達の間まで、真っピ  
ンクになるといい！」

ひゅんひゅんと、ペイント液の塊が連続して瑛喰に襲い掛かる。だ  
が、

「生憎と防御は完璧なんだよ」

「なっ!？」

逸らす能力の前では、そんなものは通用しない。迫りくるペイント  
液はどう操っても瑛喰に当たらない。磁石の同極同士を近づけた時  
のように、反発している。これでは、勝負は堂々巡りだ。

「……まあ、中々面白い策ではあったよ。この俺の身体能力を下げる

ことで対等にやりあえるまでになつたんだから」

「……………くっ……………」

「でもな、お前が強くなった訳じゃないんなら——俺の勝ち揺るがない」

瞬間、瑛嗶の拳が彼の顔面を捉えた。威力は通常時の何百分の一にまで引き下げられているが、それでも瑛嗶の拳は確かに、彼の顔面を捉えていた。

吹き飛び、地面に背中を叩きつけながら呆然とする彼。何故、いつのまに近づいたというのか？ 汐見葉の能力はまだ有効な筈だ、おかしい、何故、何故？ 疑問が頭をぐるぐると駆けまわり、結論も、答えも出せない。

「お前と俺じゃ、経験の差が違う。幾ら身体能力が下がってもな、体幹をぶれさせず、スムーズに身体を動かし、正しい場所、タイミングで全力の力を出すことが出来ればこうして一瞬で近づくことは訳無いんだ。武術の応用だな」

「ぐっ……………だからといって……………このダメージはありえない……………！ 幾ら速く近づけようが……………っ……………その威力は高が知れてる筈だ……………！」

「ああ、これも武術の応用——っっていうか親友から学んだんだだけだな？ 『衝撃透し』って技術があるんだよ、説明は……………いいか、別に」

瑛嗶はダメージが全身に行き渡っていて、動けない彼に歩み寄り、未だ能力によって浮いているペイント液を『触れる』能力で掴んだ。ペイントボールは生憎弾切れた。故に、代用させて貰おう。

「とりあえず、俺がペイント液塗れにしてきた子供達と同じように、真っピンクになるといい」

先程の彼の言葉を使ってそう言い返すと、瑛嗶は掴んだピンクのペイント液を彼の顔面に叩き付けた。大量のペイント液は、彼の顔面だけでなく全身を真っピンクへと染め上げたのだった。

## 第一競技終了

瑛嗶が気障な彼を倒したことで、向こう側の作戦は完全に瓦解した。

とはいえ、諦める訳にはいかない。こちらが如何にペイント液塗れになろうが、子供役である汐見葉さえ無事であるのならゴール出来るのだ。故に、敗北したとはいえまだ動ける彼らが取った行動は、即時退却だった。

彼は立ち上がり、瑛嗶から距離をとりながら彼女と汐見葉の下へと駆けた。撤退し、瑛嗶達より早くゴールすることを目指したのだ。だが、それは失敗に終わる。走り出した先、彼女達は食蜂操祈によって敗北していたからだ。捻り上げられ、地面に組み倒され、その上に女王として君臨する食蜂が座っている。完全に、余裕淡々と、勝利をもぎ取られた光景だ。

失敗は、食蜂に身体能力を与えてしまったことだろう。気障な彼は食蜂の身体能力が低いと踏んで、能力の障害が出来るのならば女子二人でも何とでも出来ると思ったのだが、運が悪かった。跳び掛かった二人は、食蜂にゆらりゆらりと攻撃を躲され、簡単に捻子伏せられたのだ。それはもう、美紀が呆然とするほど鮮やかに、綺麗に組み伏せられた。

そしてトドメとばかりに、美紀はペイントボールで葉の体操着を汚した。顔面や身体を汚さなかったのはやはり、瑛嗶とは違って純粹かつ思いやりの深い子だからだろう。

「ああ、妖怪蛍光。ピンク男の登場よお？ 美紀ちゃん、とりあえずあのピンクで汚されないように離れてなさい」

「あ、はい」

「っ……っはあ……負けたよ。完敗だ、流石はレベル5、能力だよりで終わる訳は無いか」

「と、当然よお……」

食蜂は目を逸らしながら冷や汗交じりにそう言って、肯定する。ぶっっちゃけ大覇星祭のみでのこのスペックなのだが、敢えて言うべき

ことでも無いだろう。

「ふう、それじゃあ僕らは大人しく脱落だ。もう君達しか残っていない訳だし、最後の障害物で躓くなよ?」

「当然だよ。こっちは楽しむ為に来てんだよ。負けるのは面白くない」

気障な彼の背後から、瑛嗶が近寄ってそう言う。すると、彼は食蜂の下の彼女やむーっと不満気な表情の汐見葉を連れて去って行った。

こうして、瑛嗶達はこの競技において全ての参加者を脱落させたのだった。



そして、最後の障害物は『高速ペイント』。ガラスによって囲われトンネルを通り抜けるのだが、そこに一定の間隔で隙間なく高速でペイント液が飛来するのだ。そして、中でも一番酷い仕掛けが『AIMジャマー』。能力を使えなくする仕掛けだ。このトンネル内では能力は一切使えない。

身体一つで少女達を守らなければならないのだ。

「こういうのってアリ? ぶっちゃけ能力の有無関係無くね?」

「うーん、多分能力を使えなくなった能力者っていうのが良いんじゃないかしら?」

瑛嗶の問いに答える食蜂。とはいえ、此処を越えなければならぬのだから仕方ない。

「このAIMジャマーの中じゃ逸らす能力は使えないからなあ……触れる方は使えるけど」

ぼそつと言う瑛嗶。原石故に、AIM拡散力場による能力では無い『触れる』能力は使えるのだ。とはいえ、触れるだけでは意味が無い。この能力ではこの状況を切り抜けられないだろう。

「と、いうわけで……」

「どうするんですか?」

「どうするのお?」



「俺らが護らなきゃいけないのは美紀ちゃんであって、俺らはペイント液塗れでもオーケーってことだ。だから、こうしてつと……」

瑛嗶はそう言いながら、自分のパーカーを美紀に着せる。サイズが大きいので、美紀の頭から足首までをすっぽり収まってしまった。フードによって頭まで隠せるのは、幸運だっただろう。そして、そのまま上半身裸の瑛嗶は引き締まった無駄のない肉体を晒しながら、その腕で美紀を抱きかかえた。

美紀は今までと違って、全身を瑛嗶に包まれている様な感覚に陥り、少しだけ顔を紅潮させ、何も言えなくなる。

「さて、行こうか」

瑛嗶は向かってくるペイント液に対して背を向けて、バック走の体勢を取る。食蜂は汚れるのを嫌ったが、仕方ないと諦めてせめて瑛嗶を盾にしようと、瑛嗶の前に立った。すると、目の前に瑛嗶の剥き出しの身体が視界を占めて、逆に集中が乱れるのだった。

「じゃ、スタート」

瑛嗶はそう言つて、後ろ向きで走りだす。トンネルに入ると、早速ペイント液の隙間の無い散弾が高速で飛んできた。それは瑛嗶の背中を、足を、頭に当たり、容赦なくペイント液でピンク色に染めていく。それは食蜂も同じで、金髪は所々ピンク色になり、体操服もピンク糸に染まっていく。美紀だけがパーカーに守られて、ペイント液から逃れる。

「——ふっつー！」

弾が切れ、一旦ペイント液が止まった瞬間に瑛嗶は食蜂の腕を掴んで全力でバックステップ。トンネルを一気に抜けた。そして、第二射が発射される前に跳躍、第二射を躲しながらその先にあるゴールへと、着地した。

「つと……ふう、美紀ちゃんもういいよ」

「ぶはっ……ありがとうございます！」

「ねえ、私いきなり引つ張られた上に第二射躲せてないんだけど。何

コレ？ 虐め？」

「ははは、真っピンクじゃん。操祈ちゃん」

「瑛嗶さんだつてっ……あれ？　なんでペイント液付いてないの？」

「ああ、全部落とした」

「どうやってよ!？」

実際には、瑛嗶は触れる能力でペイント液を全て受け止めていた。故に、勢いを失ったペイント液は全て瑛嗶の身体に付着する前に地面に落ちていたのだ。結局の所、この障害物でピンク色になったのは食蜂だけだった。

「なにはともあれ——俺らの勝ちだ」

『ゴーゴーゴール!!! この恋人繋ぎ第一競技、唯一ゴールしたのは、泉ヶ仙瑛嗶・食蜂操祈ペアだああああああ!!』

歓声が巻き起こり、瑛嗶は楽しそうにゆらりと笑った。

## 一時終了

その後、一旦恋人繋ぎの競技は終了した。次の競技は翌日の同時刻に行われる。食蜂達は翌日も同じ様に第二競技に出る——筈だった。そこで瑛嗶達は競技から外されてしまったのだ。何故かという、強すぎたから。

今回の結果で、殆どの学校が瑛嗶達に賭ける様になったのだ。それ故に、競技が競技として成り立たなくなってしまった。結果、統括理事会が……つまりアレイスター・クロウリーが介入したのだ。こいつら参加させたら駄目だろ常識的に考えて、と言って。何せ学園都市に七人しかいないレベル5の一人と、彼をもつてして無敵と評される瑛嗶のペアだ。勝てと言う方が無理がある。

「あーあ、降ろされたなあ」

「まあ大暴れし過ぎたものねえ……」

とはいえ、瑛嗶達もそう簡単に納得した訳ではない。当然反対した……が、最後には土下座で頼まれるという結末に至り、とりあえず平菜小学校が後日なにかしらの謝礼をするということで、瑛嗶達は退く事となった。

とはいえ、こうなると大覇星祭での予定がなくなってしまった。結局のところ、瑛嗶は瑛嗶であるが故に、普通のイベントには中々参加する事が出来ないようだ。強過ぎる力は、常識の範疇から疎外され、切り離される。

「さて、どうしたものかな」

「とりあえず、私は常盤台の競技があるから心苦しくはあるけれど、そろそろ行くわねえ?」

「はいよ。じゃあな、また何かあればちよつかい出すよ、しいたけ」

「あ、またしいたけって呼ぶの!?!」

「恋人繋ぎ終わったし」

「そ、それはそうだけどお………むう、もういいわよお!」

食蜂は、不服そうに、不満気に、唇を尖らせながら、長い金髪を揺らして去って行った。瑛嗶はその後ろ姿を見送りながら、ふむと後頭

部を搔いた。

「やる事がなくなっちゃってしまっただなあ……」

◇ ◇ ◇

瑛 嗶 side

さてさて、やる事が無い。しいたけも去って行ってしまったし、恋人繋ぎも降ろされてしまった。レベル5の面々をしつちやかめっちゃやかに弄り倒すのも悪くは無だけれど、木原幻生の一件でもう色々やってしまったからなあ……仕方ない。被ってしまうネタは総じて好まれないものだ。止めておこう。

という訳で何をしようか。

いや別に何かしなきゃいけないとかそういう訳ではないけどさ。何かしてないと物語として成り立たないんだよね。メタ発言は止めておこうかな。ここはアレかな、困った時の学園長……はいないんだ。理事長だよね。

という訳で、電話を掛けてみた。方法はやはりというか、勘。

「もしもし?」

『………君はどうやら私の電話番号をどこからか入手しているようだな?』

「あ、ピザの宅配頼んで良いっすか?」

『ピザを頼むなら私へ電話を掛けるのは——間違っている!!』

ぶつつん……ああ、切られてしまった。まあいいや、とりあえず奴のアドレス名は『役立たずのアレ?胃?スター? 黒売り☆死ね』で登録しておこう。いつかあのクソ長い髪の毛消失させてやろう。睡眠とかは必要ないそうなので、起きている時に抵抗空しく引き抜かれる感じがいいな、そうしよう。いつかね。

それはさておき、またやる事が無くなってしまった。どうしようかな。ヒソカとかクロゼとかがいた時は暇しなかったんだけどなあ。仕方ない、ここはぶらぶらと大覇星祭の人混みの中を散策するとしよ

う。さてきて、何処へ行こうかねー。

「あ、お兄さん！」

「んあ？」

と、思ったら聞き覚えのある声に呼び止められた。なんだなんだ、結局イベント起こるんじゃないか、いつもいつも遅いんだよ。

とまあそう思いつつも、俺はその声の主——長峰美紀ちゃんへ向き返る。美紀ちゃん一人かと思っただらなんだ、島風沙耶の嬢ちゃんもいるじゃないか。美紀ちゃんが手を引いている所を見ると、彼女を連れて来た、ということなのだろう。ペイント液が綺麗に落とされていて、服も新しい服に変わっている……いや違うな、選択して能力で乾かしたのか。炎使って便利だなあ……お日様の香りはしないんだろうけど。大きなお友達達はそれでも幼女の匂いだけで云々かんぬんつと……。

「おお美紀ちゃん達、何の用だ？」

「はい……ほら、沙耶ちゃん」

「うう……わ、分かっているわようるさいわね……なんで私がこんな豚に……」

「あ、沙耶ちゃんじゃないか。全国放送で泣きべそ掻いた、沙耶ちゃんじゃないか！」

「うっさいわ!! 蹴り飛ばすわよ!」

「はいはい、出来ないことは言わないの。何の用なんだ？」

相変わらず気丈な娘だ。まあ、弱冠10歳でここまでDSだと、将来有望かね? まあまだまだ弱っちいけどさ。

「……ばーかばーか」

「沙耶ちゃん？」

「う、わ、分かったから……そ、そんな怖い顔しないで……ごめんなさい」

「その言葉は私に言うことじゃないよね？」

「ひっ……さ、さつきはごめんなさい! 年上の人に言いすぎました……!」

おやまあ……なんというか、この子が謝るとは思わなかった。とい

うかこの怯えよう、美紀ちゃんは何をしたんだ。ちよつとしたことじゃ此処までの変化は無いと思うんだけどなあ。

という思いを込めて、美紀ちゃんを見てみた。すると、美紀ちゃんは俺の視線に気付いた。そして、悪戯っ子のように、それでいて小学生とは思えない妖艶さを醸し出しながら口端を吊り上げながら、口元に人差し指を立てた。

「ちよつとオシオキしただけですよ」

「ああそう、良くやった」

「えへへ」

「なんなの……なんなのこの二人……！ 意味分かんない、意味分かんない……！」

俺と美紀ちゃんが話していると、沙耶ちゃんは頭を抱えながらぶつぶつそんなことを呟いていた。なんだこの状況は。マジ何をしたのか気になってきた……けどまあいいや。

「謝りに来たんなら別に良いよ。どうやら美紀ちゃんが色々やってくれたようだし」

「えへっ☆」

「ひっ……」

美紀ちゃんがニコツと笑うと、恥も外聞も捨てたのか沙耶ちゃんは俺の背後に隠れた。でもまあ俺は盾になるのはいいけど、盾にされるのは嫌いなので、沙耶ちゃんの両肩を掴んで美紀ちゃんに差し出した。沙耶ちゃんの絶望に染まった瞳は、凄く気に入った。

「ところでお兄さん、暇なら私達と一緒に遊びませんか？」

「——ッ！——ッ!!」

すると、美紀ちゃんがそんな事を言う。というか、美紀ちゃんに掴まれた沙耶ちゃんが自分で口を抑えて声を出さないようにしている。何をしてんだ美紀ちゃん、その沙耶ちゃんの股間に伸びた手はなんだ？

「いいよ、お兄さんが面倒見てあげよう」

面白そうなので、今日はこの子達のやり取りを眺めながら楽しむとしよう。ああ、面白い。

## 休憩

美紀 side

それからしばらく、私は沙耶ちゃんとお兄さんと一緒に、大覇星祭を回った。沙耶ちゃんと私、というか平菜小学校の子供達の両親は、普段学園都市の外で暮らしていて、私達は平菜の寮にて生活している。起床や就寝は寮監が、料理は食堂で一斉に取り、登校や下校も寮監が送り出してくれる。

つまり私達は両親と穏やかに生活している筈の年頃である筈なのに、その温かさを殆ど知らない。そのせいか、お兄さんと共に遊んでいるというこの状況と、お兄さんの持つ温かさが合わさって、まるでお父さんと遊んでいる様な気分になれた。やっぱり楽しい。

「そういうえば、美紀ちゃん達競技は出なくていいのか?」

ふと、歩いているとお兄さんがそう聞いてきた。確かに、私達は平菜小学校の児童であるから、競技には出なくてはならないけど、今日はもう出場競技はない。恋人繋ぎの子供役としてボランティアをした児童は、その分出場する競技を減らされるから、沙耶ちゃんはともかく私は5日目まで出場する競技はない。

「はい、今日はもう出場競技は無いんです」

「別にアンタに話す義理は無いわ」

「沙耶ちゃん?」

「あんっ……!?!」

お兄さんに私が言うと、沙耶ちゃんがまた失礼なことを言った。あれほど言い聞かせたのに、まだこんな口が聞けるなんて、沙耶ちゃんって本当に反省してるのかな?

とりあえずお兄さんに見えないように沙耶ちゃんのパンツの中に仕掛けた『とある物体』を振動させて、黙らせる。学校の理科の授業で『ミニカー』を作った時に手に入れたモーターとか基盤とかを使っで作った、振動するだけの物体だけど、先生に協力してもらって結果、ソーラー発電が出来る優れ物になった。

私の能力を使えば半永久的に使える、とかなんとか先生が言っていたけど、良く分からなかったなあ。

ともかく、最近誤って沙耶ちゃんのパンツの中に入っちゃって、その際慌てて振動させちゃった時があった。その時、沙耶ちゃんが口を閉じて黙ったので、それから良く使わせて貰ってる。なんで黙るのかは知らないけど、多分振動に吃驚してるんだと思う。

「言うことがあるよね？」

「わ、私もっ……んっ……きよ、今日はひやつ……出場する競技はない……で、すっ……んんっ……！」

「はい、良く出来ました」

「っはあ……はあ……もう……なんなのよ」

とりあえずオシオキが終わったので、お兄さんの方を向き直ると、お兄さんは少し苦笑気味な反応をしていた。

「それならいいけど……で、ここはなんの店だ？」

「あ、はい。これはですね、学校を公開していない常盤台中学が代理で出展してる露店ですね。高位能力者を数多く育成している常盤台の能力と、周知のお嬢様性を生かした、お洒落な喫茶店ですよ！ 少してお金が高いですが、お嬢様の生活を少しでも味わえるそうです！」

「へえ……常盤台の、ねー」

お兄さんはじとつとした眼で、胡散臭そうに目の前にある常盤台出展の喫茶店を眺めていた。ああそうか、そういうえば操祈お姉さんも常盤台だったなあ……だから常盤台の内面にも少しは通じてるのかも、私達の知ってる完璧なお嬢様像の裏には何かあったりするのかもしれない。

「ま、いいか。入ろう」

「はいー」

「むう……お嬢様なんて、ばっかみたい」

沙耶ちゃんが何か言ってるけど、聞こえない聞こえない。





やって来たのは、常盤台主催の喫茶店。というか、最近喫茶店の使用頻度多過ぎな気がする。まあここは常盤台主催だからきつと高級なモノが出てくるんだろうな。というか、さつき店外メニューを見たけどコーヒー一杯1200円は行き過ぎじゃないかね？ まあ、レベル4の俺の口座にはそこそお金振り込まれているみたいだし、お金には困らないけどさ。

とはいえ、どうやら美紀ちゃんはお嬢様というものに一種の尊敬と  
いうか、アイドルに向ける様な憧れを持っているらしい。島風ちゃん  
は違うみたいだけど、一応興味はあるようだね。

「いらつしやいませ、何名様でございますか？」

「3名でございます」

「かしこまりました、こちらへどうぞ」

店の中は案外空いていた。店の外には多くのギャラリーがいたの  
の中にはいないのか、多分この店のメニューの値段が高いことが原因  
だろうな。学生が手を出すには少し気が引けるのだろう。

「ご注文は如何でしょうか？」

「何が良い？」

「えーとえーと……それじゃあ私はこのチョコレートパフェをお願い  
しますー！」

「私はシーザーサラダで」

「随分対照的だな。何？ 島風ちゃんはあれか、お菓子は嫌いなのか  
？」

「沙耶ちゃんはシーザーサラダが好物なんですよ」

「珍しいな、シーザーサラダが好物って」

俺はとりあえず紅茶を頼んだ。高級な割には庶民的なメニューを  
準備してるな、ここ。

ま、しばらくはここで休憩するのでしょうか。

## 新たな伝説の始まり

瑛 嘎 s i d e

常盤台の喫茶店というだけあって、出されるメニューは庶民的であろうが最高質の一級品だった。チョコレートパフェなのに、高級感あふれるデザインとそれを裏付ける味が兼ね備えられており、1000円という値段を出しても食べる価値はあると思わせるようだ。その証拠に、美紀ちゃんが夢中になってパフェに喰らい付いている。流石はお嬢様学校、徹底してるな。

とはいえ、紅茶一つとってもこの質だ。お嬢様つてのはいつもこんなものを食べているのか、さぞ窮屈だろうな。いや、慣れてしまえば関係無いか。

そういえば、島風ちゃんはシーザーサラダをもくもくと食べているが、本当に好きなんだな。今までピンと張り詰めていた表情が、シーザーサラダを食べた途端に綻んだ。というか、ずっと食べてるけど今食べてるのもう五皿目なんだが。一皿ごとにドレッシングを変えてるから楽しみながら食べてるんだろうけどさ。サラダとはいえ、此処まで食べるなんてなあ。常盤台の生徒達も少し驚いてるぞ。

まあ、喫茶店というだけで落ち付ける場所であることには変わりない。まして、客が入るのを尻ごみしてしまいう程の店だ、客入りは乏しいから静かだ。入る客も上品なマナーを習得しているお偉いさんっぽい人とかだしな。——ん？

「……………ふう……………ふう……………こくつ……………はあはあ……………ふひひ」

なんか変なのいた。喫茶店の隅の席に一人で座っている男だが、サングラスを掛けて、注文したコーヒーを飲みながら挙動不審に周囲を見ている。というか、常盤台のウェイトレスを見ているようだ。まあ、メイド服を着た女子中学生、それも上品、美麗、清楚と、三拍子整ったお嬢様というトップクラスの属性を兼ね備えた女の子達だ。多少のお金が掛かるとしても、近くで眺めたい気持ちは分かるよ。気持ち悪いけど。

あ、こつち見た。とりあえず視線を切って、その男から意識を外した。面倒な事には関わりたくないからな。

「ごちそうさまですっ」

「お、食べ終わったのか。どうだったよ美紀ちゃん」

「美味しかったです！ ああ……幸せです……」

「もきゅもきゅ……」

「島風ちゃんは……まだシーザーサラダに夢中だな」

普段の好戦的な性格と振る舞いとは打って変わって、食べている時は小動物みたいだ。ギャップ萌え要素を持つとは、DS幼女の癖に属性多いな。

まあ、歩きまわるよりもこうして静かに時間が過ぎるのを楽しむ方がいいから、幾らでも食べてくれて良いけどさ。

「まあ、こんな時間も……悪くない」

呟いて、紅茶をぐいっと飲みほした。



?side

常盤台中学が出演している喫茶店に入った。中はまさに楽園だった。黒いニーソックスとメイド服との間の絶対領域、少し羞恥の滲む女の子の表情、たどたどしいけれど、一生懸命ウエイトレスとして振る舞う少女達、最高だっ……！

それにお嬢様だからこそ、世間知らずなあどけなさで男を知らない清纯さがあった、まるでメイド服を着た天使みたいだ。うふひひ……おっと、思わず涎が。少々高い出費だったけれど、この楽園に居られるのなら野口や福沢の一枚や二枚、安いものだ。なんてハイクオリティなメイド喫茶！ しかもその自覚がないウエイトレス！ 天然で出来上がったこの楽園！ まさしくパラダイスにしてユートピア！

あの綺麗で小さい顔に、僕の愛情をたつぷりと掛けてあげたい……

綺麗だからこそ、汚してやりたい衝動がむくむくと湧いてくる。

こんな汚い感情で欲情している僕に向かって、ウエイトレスとして無邪気に微笑む天使達……その羽をむしり取って、僕だけのものにしてあげたい……！ うふふひひ……！

気がついたらもう2時間も滞在していた。お金もかなり出費してしまっているが、気にならない。大覇星祭様々だなあ。

「いらっしやいませ」

すると、喫茶店の入り口から新しい客が入ってきた。どうやら男みたいだ、チツ……僕だけの樂園なのに、汚物が……。だが、まあ僕の邪魔をしないなら別に良い。僕の妄想力を持ってすれば、人一人視界から排除する事くらい簡単だ。

が、

そうしようとしたその瞬間、電撃が僕の身体を貫いた様な感覚に陥った。入ってきた男の後ろ、そこには女神がいた。二人の少女がいた。

一人は穏やかな顔立ちと、どこか大人っぽさを滲みだしている少女。亜麻色でふわふわしているような髪の毛が、優しそうな雰囲気更に柔らかくしている。

一人は逆に張り詰めた雰囲気を持っている。黒髪と吊り目が刺々しさを醸し出していて、短パンから伸びた細く、縞々ニーソに包まれた足は、思わず踏んで貰いたいと思ってしまう位魅力的。

僕はSでもMでもないけど、穏やかな少女には優しく膝枕でもして貰えば昇天モノだろうし、女王気質な少女には踏んで、罵って欲しい位だ。しかも、二人ともかなりの美少女。将来は多くの男子にモテるだろう素材だ。

天使、以上に女神だ。視線が離せない。だが、ずっと見ていると怪しく見られてしまう……自分を強く持つてなんとかコーヒーを飲みながら視線をあちらこちらへと彷徨させた。

「……ふう……ふう……こくっ……はあはあ……ふひひ」

へんな笑みが漏れたけど、関係無い。ここは天国だ……！

さっきの男が此方を見ていた気がするけど、関係無い。僕の視線はゆっくりと二人の女神へと誘われていく。チョコレートパフェを美味しそうに食べている彼女は、まさしく無邪気な可愛らしさを持っていた。理性がぐらつく。今すぐにでも襲い掛かってしまいたい。そして、あの無邪気な表情を恐怖と快楽で染め上げてあげたい。でも、僕はそれを必死で抑える。

だが、駄目だった。

女王気質な少女のサラダを食べている姿が、トドメだった。

張り詰めた表情は、綻んで、女王様が思わず見せた小動物の様な一面。ぞくぞくぞく！ と身体が震えて、我慢が利かない。駄目だ、これは——耐えられない！ うひ。うひひひひ!!

気がついたら、僕は椅子を倒しながら勢いよく立ちあがり、女神達の下へと

駆け出していた。

## 二人目の伝説の少女

沙耶 side

シーザーサラダ。それは至高の料理。サラダ料理だけでなく、全ての料理において頂点を取る究極の料理。だからこそ、私がこの料理を食べている間邪魔する奴は許さない。邪魔する奴は全員豚だ。踏んでやることすらも、値しない。

私は小さい頃から、こんな性格だった。周囲の大人は総じて罵つたし、近寄ってくる変な気持ち悪いおっさんは全員蹴り飛ばしてやった。からかってくる男子は能力で叩きのめしたし、平菜に入ってから女子ばかりだったから安心したけど、それでも高い実力を持った私に嫉妬する女の虐めは、予想外。まあ全員叩きのめして配下にしてやったけどね。

だからこそ、この瞬間、私の怒りは頂点に達した。

「僕の女神いいいいいい!!!  
!!!」 可愛がってあげるよおおおおお

テーブルを吹き飛ばして、客を押しつけて、静かなで穏やかな空間を破壊して、私達のいるテーブルへと接近してきた豚は、そう大声を上げながら、

——私のシーザーサラダをテーブルごと台無しにした

「あ……………」

一瞬で、幸せだった気分は悲しみに包まれた。シーザーサラダが、床に落ちた。そして、豚はそれを汚い足で踏み躪った。悲しみは怒りへと変換され、怒りは精神を暴走させ、暴走した精神は——能力を発動させた。

「死ぬ、この汚物があぁッッ!!」

気が付けば、信じられない位速く、信じられない位の威力で、豚を丸焼きにしていた。死んだかもしれない、でも今の私には豚が死のうと死ぬまいと関係無かった。シーザーサラダの敵は、私の敵だ。一片の塵も残さず燃やし尽くしてやっても、足りない重罪だ。

「きゃあああ!!?」

常盤台のウェイトレスが悲鳴を上げた。先程まで居た客も慌てて店を飛び出した。食器が地面に落ちて、ガシヤンガシヤンと割れたり、飛び散ったりして、店内は阿鼻叫喚な音で埋め尽くされた。

「う……………うう……………め、女神……………」

「うるさいわよ、この豚。私の食事を邪魔する罪の重さを知らないの？ 頭が著しく悪いのね、正直視界に入れたくも無い汚さだけど、今この一瞬だけは私の視界に入ること許してあげる。だからここで私に殺されなさい、DNAの一片も残さずこの世から消滅させてあげる」

燃えた筈の豚は、何故かその身体から炎を消していた。横を見ると、あの男……………いや、瑛噯……………さんがその手で私の炎を弄んでいた。どうやら、瑛噯……………さんがこの豚から炎を回収したらしい。

「うふひひひ……………もつと、もつと罵って下さい……………女神さまあ……………！」

うひひひひー」

「!」

ぞわぞわと、鳥肌が立つような声音で、気持ち悪いこという満身創痍の豚が、此方にずりずりと這いずって来る。とてもじゃないけど、気持ち悪かった。

「うるさいわね、この豚がつー！」

だから、私は豚の頭を踏んだ。思いつき踏みつけてやった。だどいうのに、

「うふふひひひひ、ありがとうございます！ ……ありがとうございます！ ……！」

豚は屈辱を感じるどころか、感謝感激で喜色の色を見せる始末。気持ち悪い気持ち悪い。何だこの生き物は、踏まれて喜ぶなんて、変態だ。死んでしまえばいいのに。

なんでこんな奴が生きてるんだろう。意味が分からない。世界にはこんなに気持ち悪い奴がいていいの？

「島風ちゃん」

「っ！」

肩にふと手がおかれた。一瞬驚いてびくつと身体を震わせたけど、その手の主は瑛嗶……さんだった。出会った時から浮かべている楽しそうな笑みは、少しムカつくけど、それでもこの目の前の豚よりは幾分もマシだった。

「下がってな。この汚物はね、消毒しても無駄なレベルの変態だから」  
「う、うん……」

何を言っているのか、少し理解出来なかったけど、それでもこの汚物から離れられるのなら不満は無かった。瑛嗶……さんは、豚に近づいてしゃがむと、汚物の顔面を掴んで持ちあげた。凄い腕力だ。

「ウェイトレスさーん」

「あ、は、はい！」

「警備員は呼んだ？」

「は、はい……も、もうすぐ来ると思います」

「うん、ありがとう。さて、変態君」

「は、放せよ……！ 僕と女神たちの逢瀬を邪魔するな……！」

救いようなない変態だと思った。女神っていうのは、きつと私達の事を言っているんだろうけど……気持ち悪過ぎてその呼び方は嫌いになった。すると、瑛嗶……さんは変態にむかってにっこり笑うと、店の外へと出て行った。その背中から、なんともいえない威圧感が放たれていて、なんとなく付いていくのが気が引けた。

「……………」

——ぎやあああああああああああつっつ！！！！



「!？」

外から聞こえて来た悲鳴。それは、あの豚のものだった。瑛嘎……  
さんは何をしたんだらうか、知りたい半面……知りたくない感じも  
した。

## こんな大覇星祭

瑛 叡 s i d e

あの後、変態をコロコロして喫茶店に戻った所、感謝の品として今回のお代を全額無料にしてくれた。どうやら、この喫茶店は利益を求め物ではなく、ただのお楽しみとしてやっているらしい。まあ、お嬢様達は普段の毎月振り込まれる奨学金で十分潤った生活を送っているのだ、今更お金を必要とはしていないのだろう。女子中学生にそこまで贅沢させるのはどうかと思うけれど。

さて、そういうわけで無料となった食事代の件を知った島風沙耶ちゃんは、これでもかとはかりにシーザーサラダを喰らった。喰らい尽くした。お嬢様達がせかせかとシーザーサラダを運んでいるなか、味わいつつも早々とサラダを口に放り込む彼女の姿は、中々危機迫るモノがあった。

結果的にはもう材料がありませんと言われて、ようやくストップが掛かったくらいだ。

まあ、中々満足したようで、島風ちゃんは上機嫌で席を立ったのだった。喫茶店を出る時、改めて頭を上品に下げて来たので、常盤台の女生徒達には苦笑しつつも手を軽くふっておいた。

「で、これからどうするんだ？ あんなごちやごちやがあったからもう日も暮れるけど」

「あ……はい、門限があるので私達はこれで帰りますね」

「今何時だったけ？」

「16時45分だよ、沙耶ちゃん」

「や、やばっ、門限まであと15分じゃないっ!? 早く帰ろ、美紀ちやっ………長峰え!!」

島風ちゃんのメッキが剥がれて来ている。慌てて美紀ちゃんの事を美紀ちゃんと呼ぼうとして、俺をチラ見しながら言い直した。にっこり笑っている美紀ちゃんが手の中で何かやった。

「ひゃうんっ……!!」

「うん、そうだね沙耶ちゃん。帰ろっか」

「う……うんっ……!! か、かえるう……」

「それではお兄さん、また」

「おー程々にな」

そう言つて、ニコニコ笑う美紀ちゃんと足をプルプルと振るわせている島風ちゃんは、夕焼けの中去つて行つた。完全に上下関係が定まってしまうているな、アレは。女王様（笑）はやっぱり本物の女王には勝てなかつたようだ。

「さて……俺もそろそろ帰るか。久々にアイテムの拠点に行こうかな？」

俺はそう呟いて、あの幼き覇者達とは反対方向へと踵を返し、帰路に着くのだつた。



アイテムの拠点に戻つてきた時、そこにはフレンドちゃんだけが居た。ベッドの上でうつ伏せに寝っ転がり、黒いストッキングに包まれた自称脚線美である両足を、パタパタと動かしながら雑誌を読んでいる。服装は普段着より大分ラフな格好で、結構暇しているみたいだ。

俺が入ってきた時、ちらつと此方を一瞥したが、直ぐに雑誌に視線を戻した。

「フレンドちゃんだけか？」

「そうよー……麦野は鮭弁買いに行つたし、絹旗と滝壺は簡単な任務に行つたからね……結局、私はこうして暇を持って余してゐるって訳よ」

「へえ……大覇星祭でも回ってくればいいのに」

「それでもいいんだけど……結局、動くのはかつたるい訳よ」

「わはは、自慢の脚線美の崩壊は近いな」

「うぐっ……!!」

フレンドちゃんは俺の言葉に言葉を詰まらせていた。

確かに、フレンドちゃんは外人の血を引いているのか小柄ながらも

整ったスタイルをしている。サラサラで金糸の様な金髪や外人特有の白い肌、小柄であるからか胸はそう大きくは無いけれど、ささやかな膨らみが確かにある。ウエストが細いので、数字よりも大分大きく見えるだろう。そして、自慢するだけあるすらつと伸びた脚は綺麗なラインを描いている。容姿だけでいえば、同年代でも上位に位置する美少女といえるかもしれないな。

でもまあ、それも怠惰な生活を送ってれば直ぐに崩れる。女性のボディスタイルというのは崩れやすく、戻しにくい。呼吸一つとってもエネルギー消費の激しい男性に対して、エネルギーを体内に蓄えておける女性は食べ過ぎるだけで過分にエネルギーを溜めこんでしまふからね。

太りにくい体質の女性っていうのはきつと、エネルギー消費が男性寄りな体質ということなのかもしれないね。

「そうそうフレンドちゃん、はいコレお土産」

「何それ？」

「たこ焼き、焼きそば、わたあめ、りんご飴、焼きとうもろこし、イカ焼き、フランクフルト、等々です」

「太らせる気満々じゃない!?」というかどっから取りだした訳よ!」

とりあえず、島風ちゃん達と共に買いまわった商品をテーブルの上に置いた。結構時間が経っているが温度は買った時のままだ。都合主義って奴だね。

「食べないのか？」

「……………食べる」

フレンドちゃんはソースやかつお節の匂いに負けて、ぐぐぐと唸りながらたこ焼きに手を伸ばすのだった。

## 次への布石

それから、大覇星祭は何も無いままに終わった。四日目、五日目、六日目、そして七日目、一週間の大騒ぎは、何者かの暗躍や魔術サイドの介入、学園都市の闇等の行動もあつたが、無事に終わった。

何かあつたかと言われれば、特に何も無い。島風ちゃんらと一緒に回ったり、レベル5勢とちよいちよい会ったり、弄ったり、此処まで大覇星祭でやった事の焼き直しの様な日々を過ごした訳だ。アイテムの仕事とある研究施設をぶっ潰したり、ファミレスで久々に五人一緒にテーブルを囲んでグダグダしたり、上条ちゃんの家に乗り込んで大量に買い込んだたこ焼きを振る舞ったり、常盤台中学の競技に出ているみこっちゃんを見て鼻で笑ったり、屋台の品物を打ち止めにせがまれているセロリを見かけたり、とまあほんの日常を楽しんだ訳だ。

魔術サイドの暗躍については、たこ焼きパーティーの際に上条ちゃんやインデックスちゃんに聞いた。どうやら大覇星祭初日の話らしく、木原幻生とあれこれやりあつてる最中に終わつたようだ。残念だけど、過ぎたことを気にしても仕方が無い。

とはいえ、今日は大覇星祭最終日の翌日。時間が跳んだ、と言われればまあその通りだけでも、何のイベントも無いんじゃないや仕方が無い。でだ、そんな訳で大覇星祭も終わったこの日に、俺はというと特に何もしていなかった。場所は何処か知らないけど窓も何も無いただ長方形に伸びた黒いコンクリートの塊の様な建物の屋上で、ぐでーつと寝っ転がっているだけだ。

この窓の無いビルの中に統括理事長であるアレイスタークロウリーが引き籠つてそう、とか思つたりして。まあ確証も何も無いし、いた所で用も無い。

「暇だ……」

ぼけーつと空を眺めていると、白い雲が一つ二つと流れていくのが見えた。ついでとばかりに飛行機が上を飛行している。見た限り、アレはイタリア行きの飛行機らしい。鍛え上げられたというか、特典と

して与えられたこの信じられない視力は、遙か上空を飛んでいる飛行機の便や柄までもをはつきりと認識してしまう。改めてチートだなあと思いき直すことこの上ないな。

「イタリアか……」

イタリア。女性に優しいイタリア紳士なんか蔓延っている芸術にも深く浸透している国だ。水の都とも呼ばれるヴェネツィアや、本場のイタリアンなんかはきつと飽きることなく楽しめるだろう。多少スリなんかの危険性があるが、それでもきちんとした対策を取っていれば日本と大差ない。というか、そもそも俺からスリで財布を取ろうとしたものなら、無意識か反射的にその場で捻りあげてしまうだろうな。

つつても、今の季節じやイタリアもかなりの猛暑だろう。言語の壁なんかもありそうだし、どうしても行きたいかと問われれば否だ。

ただ、魔術サイドに関わる可能性は学園都市より高いだろうなあ。イタリアといえばローマ正教の本拠地である可能性大だし、そうでなくとも何とか大聖堂とか魔術っぽい建造物も多い。魔術サイドが全く関与していないとは言えない国だ。ちなみに一番魔術っぽいのは世界最小の国、バチカンだな。

「……どうしようかな」

今も上空で俺の視界を横切ろうとしているあのイタリア行きの飛行機。ぶっちゃけアレにひつついていけばイタリアに旅行に行く事など簡単だ。金も使わないし、手頃な旅行だろう。

と、そんな考えを浮かばせていた時。携帯の着信音が鳴り響いた。画面には『あんぶっ♪』との表示。アイテムに入ってから、麦野ちゃんらが暗部用と私用で携帯を使い分けている事は知っていたのだが、それだつて情報管理がしっかりしていて、プライベートに関わつて欲しくないというだけだ。俺的にはプライベートに掛かつて来ようがやりたくなければぶつちぎるからそんな必要はさらさらないわけだ。

学園都市のやみーとか言つて生活出来ないように人生お先真つ暗と言われても、正直力づくでなんでも出来てしまうようになってしまったので、全然怖くない。玩具のナイフを突き付けられている様な

ものだ。

「はいもしもしー」

『泉ヶ仙瑛、だな?』

「そうですけど? どちらさまでしょうか」

『ふ、やはり噂に聞く通りだな。情報管理も疎らで隙だらけとは』

「あ、そうっすか。それはどうも、んじゃ」

電話を切った。どうやら間違い電話だったらしい。俺の名前を知っていたけど、多分同姓同名の誰かだろうな。つっても、俺の名乗っているこの名前っつーか名字? 泉ヶ仙なんて名字は存在しないだけどさ。ハンターハンターの世界の時に作ったからなあ……やっぱもう少し名字について知ってから作った方が良かったかもしれないなあ。まあ、もう慣れたからいいけど。

すると、また着信が鳴った。今日は良く電話の鳴る日だな。

「はいもしもしー」

『電話を切るな。次切ったらお前を監視している者がお前を殺す』

「また間違い電話だよ……つたく、この携帯どうなってるんだよ……」

『待て待て、間違っていない! 今日はお前に依頼があるんだ!』

「依頼? ああ、すみませんねえ撮影はNGなんですよ。事務所通して貰えます?」

『何処だよ事務所』

「統括理事長室に決まってるんだろ何言ってるんだお前」

『統括理事長室って暗部を学校みたいに言うな!』

「学園都市だから学校でいいだろうが!」

『お前暗部舐めてんのか!』

電話を切った。どうやら悪戯電話だったらしい。

このご時世、こんな電話もあるもんなんだな。さて、そんな電話をしている間に上空を飛行していたイタリア行きの飛行機は通り過ぎってしまった。仕方ない、イタリア旅行は諦めるか。

また電話が鳴った。今度は悪戯じゃなければいいけど。

「はいもしもしー」

『……………あのn—————』

電話を切った。どうやら無言電話だったらしい。

間違い、悪戯、無言、とバリエーションに尽きない連中だな。もしかして俺の電話番号って結構有名？ インターネットとかに貼られてたらどうしよう。そうなったら携帯自体解約して今度から臍便を使うかな。やっぱりこの時代携帯なんて時代遅れなのかもしれない。最先端は手紙だよ手紙。一周回ってやっぱり最初に戻るんだよ。すぐろくみみたいに。

電話が鳴った。今度はなんだ？

「はいもしもしー」

『これで通算四度目だな、こっちの話聞いてるかお前？』

「通算四度目なのに監視しているって人達が遊びに来ないんだけどどういうこと？」

『聞いてんじやねえか』

「で、依頼って何？」

『やっこの話に入れる……依頼というのはだな、実はお前個人に統括理事会から指令が下っているんだ』

「へえ、ってことはアレイスターからの指令って事か。事務所通ってんじやん」

『イタリヤに行け。日帰りで旅行して来いとのことだ』

「はあ？ 具体的に何かする事は無い訳？」

『詳しくは知らない、が……とにかくイタリヤに行けとの指令だ』

イタリヤに行け、ねえ……アレイスターからの指令なら上条ちゃん  
が関わってそうだけど、多分魔術サイドも関わってるんだろうなあ  
……もしかしてさっきの飛行機に上条ちゃんが乗ってたりして、なん  
てね。

「はいはい了解。それで、どちら様？」

『お前は知らなくても良いことだ』

「はいはい了解。イタリヤ旅行は無しつと……理由は……そうだな、  
仲介人がうざかったからで」

『お、オイ待て！ そんな理由だと俺が殺される！ 分かった！ 俺  
は城井最中だ！』



「白いモナカ？　なんだ美味そうな名前だな(笑)」

『括弧笑いって口で言う奴初めてだよッ!!』

電話を切った。付き合ってられないわ、何だアイツは。ボイスチェンジャーも使わずに野太い声でキンキン喚きやがって。一体何にイライラしてるんだろうか。カルシウム足りてないんじゃないかな。

「よつと……さて、それじゃイタリア行きますか……」

そういえば、イタリアへはどうやって行くんだろうか？　飛行機用意してんのかな？　というわけで、再度電話を試してみる。

「あ、もしもしアレイスター？　ちよつと俺イタリア行くんだけどさ、飛行機持つてる？」

『ちよつと金貸してくれない？　みたいな言い方で言うんだな、イレギュラー。心配せずとも此方で超音速旅客機を用意している。学園都市から一時間ほどでイタリアに辿り着く事が出来るだろう』

「あ、そう」

『飛行時に少し苦しむ羽目になるだろうが、頑張りたまえ』

「重力なら逸らせば問題ないけど」

『……なら大丈夫だろう。イタリア旅行、楽しみたまえ』

「悔しかったんだ？　ごめんね空気読まなくて」

『………君は私を馬鹿に——』

電話を切った。さて、それじゃ空港に向かうとしよう。

## 女王艦隊編

### お引越

イタリア、瑛嗶が現在足を踏み入れているのはこの国だ。アレイスターの依頼ということもあり、イタリアへと訪れた瑛嗶だが、その際乗った超音速航空機では能力を使わなかった。ぶっちゃけると使わなくても瑛嗶の肉体なら耐えられるのだ、あの程度の重力は。それを知ったアレイスターは逆さまのまま納得いかないといった表情を浮かべたらしいが、瑛嗶の知るところではない。

さて、瑛嗶がこのイタリアにやってきたのは特に目的が無い。何かをしるとも言われていないし、日帰り旅行的なものと考えて良いと言われているので、のんびりと街を歩いていた。

「何もする事が無い、学園都市じゃないから知り合いもないしねえ……」

瑛嗶はそんな感じで暇そうに、つまらなそうにしている。実はここまでに瑛嗶からスリをしようとやってきた者が数名いたのだが、全員漏れなく捻りあげられている。やはり着物だとスリしやすいのだろうか。

「イタリアっていえばローマ正教だったっけ……どこかにいないかなー、ローマ正教の魔術師」

「あ」

「ん？」

「どうやら瑛嗶は随分と運が良い様だ。歩いていたら出会った、魔術師に。ローマ正教の者ではないが、瑛嗶も知っている魔術師だ。名前は確か、」

「クワガタじゃん、久しぶりだねクワガタ」

「建宮齋字なのよな！ 文字数しか合ってねえ!!」

天草式十字清教のトップ代理、建宮齋字。何故此処にいるのだろうか、ローマ正教の本拠地イタリアなのに。瑛嗶はそう思いながらもまあいいかと思いを切り捨てた。

とはいえ、ここで見つけた知り合いにして騒動の中心である魔術師。逃がすわけにはいかないなあと思いつつ、口を開く。

「何してんだお前」

「お前さんほんとマイペースよな……オルソラがイギリス清教に入ることになったから、イタリアの住居から引越すお手伝いってなわけよ」

「ああ……引越しねえ、しかし魔術師ってのは暇なんだな……引越し屋使えよ」

「魔術師の拠点を引越し屋経由でばらしちまった日には目もあてらんねえよ」

「そんなの使わなくても俺拠点分かるけどね」

勘で。瑛嗶の言葉だと嘘だと言えない所が恐ろしい、つくづく敵に回したくないなあと思う建宮、背筋に走った悪寒はきつと気のせいでは無いだろう。

「今もやってんの？」

「ああ」

「俺も行くわ、案内しろ」

「お前さん、俺に対してちよつと冷たくねえか？」

「案内して下さい、お願いします」

「止めてくれ！ お前さんに敬語で丁寧に頼まれるとすげえ怖えのよ！！」

建宮は今度こそ背筋だけでは飽き足りない程の悪寒に襲われた。瑛嗶はゆらり笑った。

とりあえず、瑛嗶の頼みもあってオルソラの住まうイタリアの家へと向かうことになった。

◇ ◇ ◇

「あれ？ お、瑛嗶さん？」

「やあ上条ちゃん、やっぱりいたか」

建宮の案内で、オルソラの元住まいとなる場所へとやってきた瑛嗶

は予想通り上条当麻と出会った。アレイスターがなんの考えも無くイタリア旅行をプレゼントするとは思っていなかったが、こうも予想通りに上条当麻がいるとは、なんの面白みも無いなあと思った。

正直な所、瑛嗶はもう少し捻りのある展開を期待していたのだが、やはりアレイスターにはもう何も期待しない方が良さそうだと思うた。

「その様子だとオルソラちゃんとインデックスちゃんのシャワーシーンでも覗いたか」

くつくつと含み笑いをする瑛嗶に、上条当麻はうぐつと息を詰まらせた。身体中に菌型を付けた所をみれば一目瞭然、よくまあこれだけラッキースケベが出来るものだなと感心するほどだ。

とはいえ、上条当麻は所謂主人公の気質を持った存在だと瑛嗶は思っている。元々、瑛嗶は転生する際この世界が漫画、アニメの世界だと知っているのだから、主人公がいるのは当たり前なのだが、これほどまでに主人公然とした存在も珍しい。

「それで？　オルソラちゃんは？」

「ん、ああ……今荷物を纏めてるとこなんだ。もう後少ししかないから……もう終わる所だけ」

「あ、そう……じゃまあ手伝ってやるよ」

「え、瑛嗶さんが？　手伝ってくれる!?　嘘だろ!?　瑛嗶さんが親切だ!?!」

「ハハツ☆　ぶん殴るぞお前、瑛嗶さんはやる事が無くて暇なんだよ。暇潰しだ」

「はいすみません、ありがとうございます!」

瑛嗶が上条当麻の横を良い笑顔で通り抜けると、上条当麻は直角に頭を下げて謝罪と感謝の意を示したのだった。

瑛嗶が中へ入ると、そこは既に大分片付いている。空家状態になっている部屋も幾つかあって、残った荷物は一つの部屋に纏められていた。これならばもう終わると言った上条の言葉もあながち嘘ではないのだろう。そしてそこには既に服を着たインデックスとオルソラがいた。

インデックスの服は瑛嗶によって修復されたので、空港でも金属探知器に引つかかったりはしなかったのだろうが、上条当麻が触れれば即座に壊れるのがネックだ。このままではいつ壊されるのかも分からない。瑛嗶はふと、そう思った。

「なあ上条ちゃん」

「ん、なんだ瑛嗶さん」

「お前コレ付けとけよ右手に」

「え？」

瑛嗶が渡したのは、黒い手袋だった。此処に着いた際空港で買った物だ。アレイスターにお土産で買っていこうと思って買ったのだが、ぶっちゃけアレイスターはこんなもの付けないなあと思ったので、上条当麻に渡すことにした。

「で、でも俺の右手は異能の力は打ち消しちゃうんだけど……」

「馬鹿、これはただの手袋だ。これが異能の力で打ち消せるならお前を隔離しなくちゃならなくなるな」

「あ……はい」

上条当麻は右手でそれを受け取って、素直に嵌めた。まあ右手を常時空気に触れさせておくのは魔術師や超能力者からしたら邪魔以外の何物でもない。迷惑行為と同じだ。こうして直接触れないようにしておけば多少は何とかなるだろう。

「さて……それじゃ残りの荷物を運び出そうか」

「ああ」

ほんの少しの暇潰しの為に、瑛嗶はその辺に置いてある荷物に手を伸ばしたのだった。

## 女王艦隊（イージーモード）

荷物の整理が終わり、色々と手続きも終わった時、空はもう暗くなっていった。瑛嗶はイタリア旅行に来ただけでは無く、イタリアに行けと言われたから来ただけで、その場の宿は全く考えていない。どこに宿泊するかを考えつつ、上条当麻達が止まるホテルに空気が無いかなーと期待しながら彼らについて来ている。

オルソラと上条当麻、インデックスの三人が前を歩いている中、瑛嗶はその後ろを歩いている。すぐ横には水路があつて、瑛嗶はその中を見ていた。水面を揺れる自分の虚像と眼が合う。何かを感じているのか、それともただ水を見ているのかは分からないが、ふと瑛嗶はその視線を水路の向こうにあつた建物の上に移した。

「はあ……」

すると、歩くペースを速めてオルソラに並ぶ。

「瑛嗶さん？ どうしたんだ？」

「？」

### 瞬間

「よつと」

瑛嗶が空気を掴む様な素振りをした。それと同時に、何かを潰した様な音が瑛嗶の手の中から聞こえた。

瑛嗶がその手を開くと、上条当麻達はその手の中を覗き込む。そこには、小さな弾丸の様な塊があった。

それが意味するものは、誰かが狙撃してきたということ。自然と上条当麻達に警戒と緊張が走った。誰かが自分達を狙って来ているという事実。

「瑛嗶さん……これは……」

「まあ十中八九魔術師絡みだろ。てか狙撃手あそこにいるし」

「はあ!？」

瑛嗶はそう言って、一つの建物の屋上を指差した。そこには慌てて隠れる狙撃手の姿。

「やるならもつとスマートにやれよ!!」

「隠れる姿もたどたどしいんだよ!!」

「まあとりあえず逃げた方が良いのかな? つと……よつ」

「ぐぶあ!」

とてもプロとは思えない狙撃手の姿に呆れていたら、今度は直接剣で攻撃してくる者がいた。取り敢えず瑛嗶はその剣を躲し、膝蹴りで襲撃者の腹を叩く。人間とは思えない様な呻き声を上げながら襲撃者は倒れた。上条当麻達は瑛嗶の容赦ないカウンターに若干引き気味だ。

瑛嗶は地面に倒れる前に襲撃者の襟首を掴んで持ち上げた。見れば修道服を着ている、前に一度見た修道服だ。確かこれは、ローマ正教の物。

「瑛嗶、護って貰った手前言い辛いんだけどさ……もう少し手加減ていうか……な?」

「これでも随分手加減してるんだけどなあ……まあいいや」

瑛嗶は襲撃者をその辺に投げ捨てる。ぐしゃつという音がしたが、上条当麻達はもう聞こえないふりをした。ああ、聞こえない。

上条当麻達が眼を逸らして引き攣った笑みを浮かべていた、その時

——水路が爆発した

盛り上がる水と、水中から飛び出してきた巨大なものか。それは水路を破壊する様に広げ、瑛嗶達を巻き込んで空高くその姿を地上へと現した。

瑛嗶達はその大きな何かの上に打ち上げられていた。だが、瑛嗶は上条当麻達を抱えてそのの上に着地する。

それは、大きな氷の船だった。透き通るような船体で、その辺の建物より一回りも二回りも巨大。しかもその材質は氷だというのだからあり得ない。明らかに、これは魔術による代物だった。

「これは……!?!」

「魔術だろうな」

「にしたってこのサイズ……ありえねえだろ!?!」

「なんなら壊しても良いけど……この船には効果はないだろうなあ、そんな気配がする」

驚愕する当麻に、瑛嗶は淡々とそう述べた。拳で破壊することは可能だろう、だがしかし瑛嗶にはそれが大した効果を及ぼさないと聞いた気配が感じられた。勘で分かる、これは物理ではどうにも出来ない代物だと。

それもその通り、この船は破壊した端から再生していく機能を持っている。破壊しようとした所で意味はないのだ。それこそ、『幻想殺し』でも使わない限りは拳で破壊することは不可能。

「探せ！ 奴らはまだこの船の中にいる筈だ!!」

イタリア語で、そんな声が聞こえてくる。瑛嗶はなんとなくニュアンスで敵意を感じ取る。返り討ちにするのは簡単だが、正直イタリア観光をしたいなーというのが瑛嗶の感想。派手に雑魚と戦う位なら普通に夜のイタリアの街をふらふらと歩きたい気分である。

何言ってるかも分からないし、言語の壁はやはり高く聳え立っているらしい。

「どうする?」

「どうする?」

問いかけると、当麻がそういう判断をしたのでインデックスとオルソラを含む四人で船の中へと飛び込んでいく。

どうやら船は動いているようで、運河を伝って海へと出ようとしているのが分かるが、その為には街の幾つかの建造物や橋を破壊していくことになるだろう。

「なんだってんだクソ！ 折角イタリアに来たと思っただけだこれだ！ あーもう不幸だ!」

「案外余裕あるな、上条ちゃん」

「だって……瑛嗶さんがいたらなんというか……インパクト薄くて……」



「わはは、それもそうか」

だが、どうやら見た所上条当麻達に緊張感はないようだ。それもそうだろう、上条当麻は魔術に対して絶対の防御力を持っているし、インデックスだって『歩く教会』は万全、オルソラは元々ぼやぼやした人格者だ、それに加えて瑛唄という存在が味方にいればこれほどぬるゲーな状況はないだろう。

向こうがどうあがいても死ぬことはないだろうという確信と安心が、四人にはあった。

「で、何処に隠れるよ?」

「あー……取り敢えずあそこの部屋」

「オーケー」

瑛唄が先行して、手近にあった部屋の扉を開ける。そこに上条当麻達も出来るだけ急いで駆けこんだ。周囲に敵がないことを確認して、瑛唄が扉を閉めた。

「それで、隠れたは良いけどこれからどうするんだ?」

「うーん……とりあえず見つかるまで隠れとこうぜ」

上条当麻の問いに対して、瑛唄がそう答えると、無かった緊張感が更に薄れるのを感じた上条当麻達だった。

## 氷の部屋の中で

「で、どうするんだ？ 瑛嘎さん」

「どうするって……俺明日の昼位には日本に帰らないといけないし、日帰り旅行だから」

「日帰り旅行でこんな状況に陥るなんて、瑛嘎さんも大概だな……」

「お前の不幸が原因じゃね？ うん、絶対そうだよ」

「絶対なの!?!」

氷の巨大船の一部屋に隠れた上条当麻達は、呑気にそんな会話をしていた。正直、この船がなんなのか良く分かってはいないけれど、正直敵がどういうものなのかも分かっていないし、とりあえず寛いでいれば良いかなーという雰囲気になっている。

瑛嘎はもともとイタリアに来た時、海中に何か妙は気配を感じていたから正直あまり驚いていない。気配察知能力は正常に働いているようだ。とはいえ、その気配は一つではない。怪訝に思う瑛嘎だったが……それはすぐに分かった。

外から爆発する様な轟音が轟いたからだ。

部屋に付いていた窓から外を見る。すると、そこから見えた外は海になっており、連続して同じ巨大な船が海中から現れてきていた。

上条達は驚いていたが、瑛嘎はあーやっぱり？ 的な表情で窓から離れた。

「インパクトに欠けるよなあ……魔術ってのはエンターテイメント性を持つべきだよ。もっとこう……人類が滅亡する的な衝撃が欲しいよなあ……」

「そんな魔術がほいほい発動したら世界は終わったも同然なんだよ……」

「良いよ別に、世界が滅んでも俺は生きるから」

「凄い自分勝手なんだよ!?!」

「ごめんねインデックスちゃん、ほら俺って自分が良ければ他は死ん

でも良いと思ってる所あるじゃん?」

「知らないんだよ!」

「分かりやすく言うとなあれ……お菓子が一個あって、10人の子供がいるとすんじゃん? 俺はその子供達からお菓子を奪い取って食べるんだ、ほらこれでみんな平等だろう?」

「ただの大人げない奴かも!! そんな平等からは不平不満しか生まれないんだよ!!」

「上手い」

「何が!」

インデックスをあらかた弄ってゆらゆら笑う瑛。多少気が紛れたようだ。

とはいえ、此処からどうしたものかと考える。この船の中にいる人間の気配は全て把握している。此処に近づいている気配が一つあるのもちゃんと把握している。そこまで強い気配ではないから一撃でカタが付くだろうが、見つければ他の奴らも集まってくる可能性がある。

それは面倒臭い。

「オルソラ、これどういう状況分かるか?」

「さあ……私は魔導書や魔術の解析読解が専門なので……」

「インデックスは?」

「……多分この船と他の多くの船は『女王艦隊』、ローマ正教の保有する大規模魔術『聖霊十式』の一つで、同名の旗艦内で発動されるもの。ヴェネツィア、及びそこより齎された文明を破壊する大規模な魔術で、対ヴェネツィア用の切り札の霊装——『アドリア海の女王』を護る護衛艦……どちらかといえば敵の本拠船は別にあるんだよ」

「ヴェネツィア用の兵器ってことか……でもなんでそんなものをローマ正教の奴らが使うんだ? ヴェネツィアはローマ正教の領土だろう?」

流星は10万3000冊の魔導書を記憶している禁書目録、当然のようにこの状況を作り出している魔術を悠々と看破した。

だが、看破した所でまた新たな疑問が出てくる。ローマ正教の保有

する自分の領地専用の大規模な魔術霊装を、なぜローマ正教が自分の領地で発動しているのか。訳が分からない。

「そんなこと考えても仕方ねーだろ。どっちにせよ、俺らはその圧倒的な兵器の銃口が向いた領土において、実際その兵器が起動してんだ、止めないと俺のイタリア旅行がおじやんになるだろう。流石に荒廃したイタリアを観光したいとは思わないぞ俺」

「そういう問題？」

「まあ……そうなのかもしれないんだよ」

「であれば、必ず止めないといけませんね」

「さし当たって……」

瑛嗶は立ち上がり、入口の扉に歩み寄る。どうした？　と思う上条当麻達だが、その理由はすぐに分かった。扉のドアノブががちゃつと音を立てて回ったのだ。

「「っ!？」」

扉が開く。だが、瑛嗶は開き掛けた扉を強引に開けて、入ろうとした人物の頭を掴み、壁に叩き付けた。

「ふぎゅっ!？」

そしてそのまま動かなくなったその人物、いや少女を瑛嗶はアイアリンクローのまま持ち上げた。ぶらーんと空中で足が揺れる少女の服装は、ローマ正教の修道服というよりはドレスのようになんかなり露出が多い。見てみると、その少女の顔は見たことがあった。

「あ、見たことあるぞこの顔。なんだっけ、赤毛のアン？」

「結構掠ってる……アニーゼだよアニーゼ!!」

「あー……あのジャンケン選挙の」

「AKO48!？」

「なんでこの子が？　……まあいいか、上条ちゃんちよつとこの服に触れてみて」

「ん？　ああ」

空中にぶら下げたまま瑛嗶はアニーゼを上条の方へと向ける。すると、瑛嗶の言う通り上条当麻は黒い手袋を外してそのアニーゼの服に触れた。

——甲高い砕けるような音がした。

次の瞬間、アニエーゼの服は頭のフード以外がずりりとバラバラの布と化した。インデックスの歩く教会を破壊した時と同じだ、彼女の服は霊装だった。だから幻想殺しによって破壊されたのだ。アイアンクローで宙に身体がぶら下がっている彼女の身体は、一糸纏わぬ裸である。

「うん、このままその窓から海に捨てよう」

「待って!? それは死ぬ、死んじゃうから!!」

「とうまは早く眼を塞ぐんだよ!! がぶっがぶっ!!」

「うぎゃああああ!!」

「静かにしろよ、敵に居場所がばれるだろ」

「お前のせいだよね!? 限りなくお前が悪いよね!?!」

裸のアニエーゼを部屋に放り投げながら、瑛嗶は責めるような眼で上条当麻を見て、インデックスはそんな上条当麻の頭に噛みつき、上条当麻はひたすら不幸だと内心で叫んでいた。

それからアニエーゼが起きるまで、再度部屋の中で待機することになったのだった。

## 女王艦隊

アニーゼーIIサンクティスが眼を覚ますまで、瑛嗶達も大人しく待つわけにはいかなかった。此処は敵地のど真ん中、いつ見つかったもおかしくはないのだ。

ということ、上条当麻はアニーゼの頬をぺちぺちと叩いて起こすことにした。ちなみに服だが、インデックスやオルソラが怒ったので、オルソラの鞆の中に入れていたソーイングセットで瑛嗶が直した。霊装の効果までしつかり直した上でアニーゼに着せたので、当麻は右手にちゃんと黒い手袋を嵌めているのだが。

「起きろ、アニーゼ、おい」

「ん……んう……はっ……ここは……!? なんでお前が!?」

「それはこっちの台詞だ」

「えっ…………いやこっちの台詞でしょ!?」

「此処は俺の部屋だ、不法侵入者が」

「魔術の船を宿泊所にしないでくれませんか!?」

起きたアニーゼに瑛嗶は容赦ないボケをかますが、アニーゼは困惑しながらツツコんだ。

「つう……なんか頭が痛いんですが、なにかしたんですか?」

「この船の一部でかき氷作って食わせた」

「何してんですか!!」

「悪戯」

「馬鹿ですか!?!」

「わはは、お、お前が言うなよ……くく……はははははっ!」

「何処に笑う要素があったんですか!?!」

最早瑛嗶のペースに流されているアニーゼ。笑う瑛嗶に地団駄を踏むが、上条当麻が溜め息をつきながら前に出た。このままでは話が進まないと思ったからだ。

インデックスとオルソラなんて後ろでトラランプを始めている。ここはもう上条当麻が率先して動かねばならないだろう。

「えーと……アニーゼ、お前なんで此処にいるんだ?」

「は？ それは本当にこっちの台詞なんですか？」

「俺達も良く分からねえんだよ。いきなりこんな船が現れて困惑してんだ」

「そうだよ、もうめんどくさいから一個一個ぶっ壊して行こうかと思  
い始めてんだぞー」

「ああんもうやっちまえよ」

「よーし、乗客員は皆殺しだ」

「やっば待て!!」

肩を慣らすようにぐるぐると腕を回す瑛嗶、皆殺しと聞いて焦った上条当麻は引きとめようとしたが、遅かった。瑛嗶は既に窓から出ていつてしまった。慌てて窓から外を覗けば、そこには一つの艦船が轟音を立てて破壊される光景があった。まだ百近い数があるが、その内の一つが数秒で撃沈されたのだ。

上条当麻はあーあ、と思ひながらガクツと肩を落とした。

「なんですかあれは!? どんだけですか!？」

「瑛嗶さんはスゴイカラネー」

「遠い眼してねーで説明しやがってください！ 女王艦隊は破壊されないよう構成されているのに、何故あんなに簡単に破壊してくれてんですか!!」

「分からないよ、俺はもう何も分からない」

「現実逃避!？」

上条当麻はもう疲れたようだ。瑛嗶の無茶苦茶な行動には最早付いていけないらしい。とはいえ、現在その無茶苦茶の最中にあるということで無関係でいることは不可能。とりあえずはもうやけくそになつてやろうかなーと考え始めていた。

「よし、インデックス、オルソラ」

「なに?」

「なんでございましょう?」

「とりあえずアニエーゼから話を聞いて、それから立て直そう。此処から逃げ出した所で、瑛嗶が何とかしてくれるよ、うん」

「そうだね／＼それでございますね」

上条当麻含め、三人が遠いまなざしでアニエーゼを見た。うっと、一歩下がるアニエーゼ、逃げ出すことは敵わないようだ。

◇ ◇ ◇

一方その頃、瑛噎は暴れ回っていた。

手当たり次第に飛びまわり、破壊の限りを尽くしている。その拳で海を割り、蹴りで船を砕き、浸水した水によって船を沈めているのだ。これならば再生しようが戻っては来れない。水の重さの分だけ、沈んでいく。浸水量が足りなければ更に壊す、壊して浸水させて、壊して浸水させて、三度やれば直ぐに船は沈んでいった。

——船なんて、少し壊せば沈んでいく。不安定な乗り物だぜ！

楽しそうに笑いながら、もぐら叩きのように船を壊す。壊して壊して、壊す。

そんな事を繰り返していると、ふと何か違う一隻を見つけた。母艦だろうか？ それとも、あれがアドリア海の女王？ そう思った瑛噎は、破壊することなくその船に着地した。

「……なるほど、中々面白いものがあるみたいじゃないか」

瑛噎は、その船の中に一際大きな気配を発する物を見つけた。それがなんなのか、魔術の知識に疎い瑛噎には全く分からないが、そこには一人——そのへんのシスター達よりも少しだけ大きな気配を持った存在もいる。

戦って勝てないような化け物では無いし、寧ろ凡百の有象無象の一つでしかないような存在だが、この大きな船の中心には、瑛噎にすら届き得る力が感じ取れた。もしもこの力の大元が瑛噎に牙を剥いたとしたら、その時は瑛噎もどうなるか分からない。それほど危険な力だ。

「普通じゃない、それだけで面白い」

瑛噎はそう呟きながら、船の中へと足を踏み入れた。外に浮かぶ女



王艦隊は、最初の約半分にまで数を減らしていた。復活までは、まだ時間が掛かるだろう。

## 年齢を考えて

瑛嗶が忍びこんだ一際大きな船は、実際の所女王艦隊の守護する『アドリア海の女王』で合っていた。そこにはビアージオ・ブゾーニというローマ正教お抱えの司教が乗り合わせており、以前法の書の件で失態を犯したアニエーゼ率いるシスター達が乗務員として働いているのだ。女王艦隊にもそのシスター達が労働員として働かされている。

そして、この女王艦隊の守護する『アドリア海の女王』とは、以前もインデックスが説明した通りイタリアのヴェネツィアに対してしか機能しない大規模魔術だ。だが、今回ビアージオという男が狙っているのはヴェネツィアではない。その『アドリア海の女王』の脅威的な力を『ヴェネツィア以外』に向けられる様に改造すること。

その為に、ローマ正教はある種一枚の切り札を切った。

それが、『神の右席』

ローマ正教の抱える四人の魔術師であり、神を支える四方向の天使に大きな適性を持つ者達だ。人間が生まれてから必ず持っている『原罪』を限りなく薄めることで、人知を越えた神や天使と同等の魔術を行使する事が出来る。ローマ正教曰く、『世界を動かす為に存在する』禁断の組織である。

その内の一人、『前方』の位置で座する四大天使、『神の火』<sup>ウリエル</sup>の力を使う者、

——前方のヴェント

彼女の助力により、人間を越えた力が今回の『アドリア海の女王』に組み込まれている。それが『ヴェネツィア以外』にその猛威を振るう為の一つの大きな要素、である。

その組み込まれた力というのが、『刻限のロザリオ』という特殊な術式である。

だが、それを発動する為には普通の人間の普通の魔力では無理だった。特殊な魔術には特殊な魔力が必要だったのだ。故に、ローマ正教は普通でない人間を作り出し、その普通でない人間の普通でない魔力で実行することにしたのだ。

その為の生贄が、アニーゼーサンクティス。

方法はいたって簡単、彼女の脳を意図的に破壊し、廃人にして魔力を絞り上げるのだ。そうすることで、普通でない魔力を作りだすことが出来る。ビアージオはその計画の担当責任者の様なものだ。

瑛嗶は自分の歩いているこの船が、人体実験の会場とは思っていないだろう。

「うーん……人っ子一人巡り合わないなあ」

瑛嗶はそんな危険な場所を悠々と歩いてきた。シスター達にも会わず、さくさくとビアージオのいる中心部へと侵入している。こんなにも簡単に侵入を許す様な温い相手ではないと思うのだが、瑛嗶は眉をひそめながら進んでいた。

「正直な所、こんなに簡単だとは思わなかった」

そして、本当に誰とも会わずにその中心部へと辿り着いてしまった。気配察知で船の内部構造を大体予測出来る瑛嗶、最短ルートで此処まで来たというのに、そのルートを誰も見ていない。馬鹿なのか、それとも船の行動を知らないのか分からないが、元々は敵のいない場所でやる予定であったのだし、瑛嗶達の存在が気取られていないのならこの無警戒さは分かる気がする。

「つと……っ？」

大きな扉に手を触れると、バチツと拒絶される様な音と共に瑛嗶の手が弾かれた。魔術的な防御結界が展開しているらしい。

「なるほど、まあ結界位は張るか」

瑛嗶はそう言いながら、扉の横の壁の前に立つ。

「おらっー」

腰を入れて、壁を殴った。すると、流石に扉では無い壁、結界も無いように音を立てて壊れた。

「おっじゃまー」

そう言いながら瑛嗶は瓦礫を踏み越えて、中に入る。すると、中にはなんだか遠い眼をした中年の男性が立っていた。白い司教の服を着て、変なものを見た様な顔をしている。

瑛嗶は首を傾げて話しかけた。

「どうした？」

「……いや、結界をどうこうではなく壁を破壊するなんて方法を取るなんて思わなかったものでな」

「いやー扉には結界があるみたいだったから」

「というより、扉に触れた者は氷に引きずり込まれる術式だったのがな……何故だ？」

「触れる能力が無効化したんじゃないかね？」

「意味が分からん」

中にいたのはビアージオ||ブゾーニ。首にはじやらじやらと十字架を十数個ほど提げている。アクセサリーにしてはやりすぎだなと瑛嗶は判断する。まるで一昔前のギャルの携帯ストラップの様な男だ。

「まあいい、貴様……何者だ？」

「俺は通りすがりの一般人だ。道に迷ってて……」

「海を徒歩で歩いてきたのか貴様は」

「いやあ船に迷い込むなんて俺もびっくりした」

「何をしに来たのだ？」

「観光？」

「馬鹿にしてるのか貴様！」

なんだか分からないが怒っている敵に、瑛嗶は首を傾げるばかり。聞かれたことに素直に答えているだけだというのに何故怒っているのか分からない。カルシウムが足りていない。

「ところで、此処何するトコ？」

「知らずに来たのか？」

「大きな船だなあとは思ってた」

「ふん、まあ見られたからには殺すのだ……ここは刻限のロザリオを作る場所だ」

「……………」

瑛暁は考える。刻限のロザリオ……吸血鬼の様な存在が持っているような名前だと。その上で、目の前にいるビアージオがどういう存在なのかを確信した。

目を見開き、驚愕した表情を浮かべて口に出す。

「ま、まさか……………ち、中二病…………その歳で!？」

ビアージオはまた遠い目をした。

## D T S

ビアージオと瑛嗶は、相変わらず対峙していた。瑛嗶の中二病発言が元で、ビアージオは遠い眼をしている。

「なんだ中二病とは」

「えーと、いい年こいて痛い発言している人のこと？」

「私は中二病では無い」

「いやいや、中二病だよきつと、刻限のロザリオとかまさにそうじゃん」

「ふざけるな、私は真剣に祈りをささげる司教だ」

ビアージオはそこだけは譲れないのか、首に下げた幾つもの十字架を見せながら瑛嗶に言う。だが、瑛嗶はそれを嘲笑して切り捨てた。

そんなこんなしている内に、瑛嗶の入ってきた壁の大穴は塞がってしまったが、未だに戦闘は開始されていなかった。

寧ろなんだか分からない言い争いが始まっている。わーわーと言いつつ瑛嗶とビアージオ、中二病では無い、いや中二病だ、と言いつつ、話が段々と脱線してきている。

そうしていると、なんだか中二病ってなんだという感じにゲシュタルト崩壊が起こり始め、神妙な表情で二人は中二病について語りだした。

「中二病とはおそろく、敬虔なる信徒が欲に駆られて届かぬ頂きに手を伸ばそうとする病ではないだろうか、私のように司教になる訳でもなく、ただ己の欲望に吞まれ、蠟で出来た翼で太陽に手を伸ばすかのような愚行を犯す者」

「いや、もしかしたら中二病っていう名前自体に意味があるのかもしれない。今でこそ漢字で表記された名前だけど、学名的な正式名称がある筈だ。多分、中二病っていうのは略称なんだよ」

「なるほど……深いな……だがどうだ、学名も正式名称も分からぬ今、この病の真実を見出すことは不可能になるのではないか？」

「いや、だとしても中二病っていう名前自体はヒントとして成り立つ筈だ……一回英語にしてみるか……」

「ふむ、英語だとするならば……During two sickn  
essか？」

「そこから何か、ヒントはないか探すんだ……DTS……」

「……DTSか……英語から略してみた訳だな」

「ああ……これをもう一度日本語にすると……童貞少年……か」  
DotEiSyouneen

「つまり、中二病とは性交渉をしたことのない男、ということかね？」

「あくまで可能性の一つだ……とすれば、お前は司教だったか。経験  
は？」

「……むう……私はこの身を神に捧げた身、そんな行為をするわ  
けには……」

「やっぱ中二病じゃねえか!! DTS! DTS!」

「煩い! あくまで可能性だと言ったのはお前の方だろう! DTS  
というな!!」

議論の結果、DTSという新たな言葉を生み出した瑛叟とピアージ  
オ。その光景はどうにもこうにも、高校の修学旅行就寝時の会話のよ  
うだった。

結論を言えば、男は皆、坊やである内はDTSということさ。

「じゃあお前は経験があると言うのか？」

「当然だろうが、とつくの昔に卒業したわ」

「おおよそ3兆年程昔に、とは言わない瑛叟である。」

「つまりこの場においてDTSはお前だけだよDTS」

「くっ……認めるしかないというのか……!!」

「だが、恥じることじゃねえよ。お前はその年まで自分の大切なもの  
を護り抜いてきたんだろう? だったら誇れよ! それは……誰に  
でも出来る事じゃねえんだぜ?」

膝を付き、項垂れるピアージオに、瑛叟は手を指し伸ばす。ピア  
ジオにはそれが救いの手に見えた。

お前は間違っていない、お前の人生においてDTSであり続けたこ  
とは誇っても良いのだと。その時、彼は瑛叟の背中に光差す後光を見  
た気がした。

自然と、涙が出た。

「……良いのか……私は、DTSでも、いいのか？」

「良いに決まってるだろ、世の中にはそういう奴がいっぱいいる……お前が変えてやれよ、切り開いてやれよ、そいつらに教えてやれよ——  
——DTSを誇れと」

ビアーゾは、瑛嗶の手を取って涙を拭く事も無く立ち上がる。これから、自分にはやらねばならないことが一つ、増えたようだと思いつながら、しかし口端は笑みを浮かべている。

晴れ晴れとした気分だった。自分は神以外に、新たな光を見つけた気がした。これからは、神と同様に、この男の示した言葉を信じてみようと思った。

「ああ……私はやり遂げて見せる……この世の全てのDTSにこの光を届けて見せる！」

「……良い顔になったじゃないか、応援してるぜ」

「ありがとう、もしもそれが出来た時は……必ず報告しよう」

「ああ、その時は俺の奢りで美味しい酒でも飲もうぜ」

「ふっ……私は神に仕える身……ワインならば付き合おう」

瑛嗶とビアーゾは笑みを浮かべて、固い握手をする。そこには、二人にしか分からない奇妙な絆があった、二人にしか分からない光があった。

そして、刻限のロザリオや女王艦隊のことは、すっかり忘れてしまっていた。



解決？

「さて、ところでだD T Sビアージオ」

「なんだ？」

「刻限のロザリオ云々はどうするんだ？」

「……これも神の使命、私がやらねばならないことだ」

「ちなみに具体的に何をするのか教えてくれよ」

瑛嗶とビアージオはD T SとD T Sでない者でありながら、何か奇妙な絆で繋がった。故に、敵でありながら戦闘を起す気は両者の中には無かった。

故に、D T Sの話が終わった今、瑛嗶達は本題に戻ることにした。刻限のロザリオの作り方を瑛嗶はビアージオから聞き、そして腕を組んだ。そして言う。

「お前、いたいけな少女を廃人にして、D T Sを誇れるのか？」

ビアージオは頭をがっんと殴られた様な気分だった。確かにそうだ、D T Sとはある意味、女と接点がありませんともいえる。なのに、その少しの接点まで失ってしまう行動を取っては、D T Sは誇れないだろう。

まして、存在すれば自分の孫か娘程の年齢のアニエーゼの脳味噌を掻き回すなどと、まずは人間としてありえない。普通なら狂気の沙汰で警察に入り、死刑にされるような所業であり、男としては全世界的に失格な話だ。

私は、こんな私を目指したのではない……!!

「悪い、目が覚めたぞ。お前の言う通り、D T Sを誇る為にはこんなことをしていけない……私は敬虔なる神の信徒ではあるが、D T Sも同じ位信じている……どちらも筋を通すには、ここで神に背いたとしても……致し方ない!!」

「うむ、それでこそD T Sだ」

なんだこいつら、バカなのかと思う会話ではあるが、大丈夫、瑛嗶もそう思っている。正直、D T Sってなんだよと思いつつながらビアージオを見ていた。でも、なんか話が進むに連れて目の前の男の価値観を

変化させてしまったらしいということは理解している。

正直、このままDTSで押し切れるのならそれでいいか、という感じだ。

「貴様……名前は何と聞いたか」

「琰嗶さんです」

「琰嗶……良い名前だな……貴様に頼みがある……このアドリア海の女王を……破壊してくれ」

「魔術を解けばいいじゃないか」

押し切れちゃった！

琰嗶は内心苦笑しながら、言うところ、ビアージオは確かにそうだな……となんだか妙にすつきりした表情で笑う。コイツの中では何が起こっているんだ。ある意味奇跡の現象が起こっているのではないだろうか？

すると、ビアージオは魔術を解除し、女王艦隊及びアドリア海の女王を自壊させる。

アニエーゼやアニエーゼの率いていたシスターたちは全員海へと落ちたが、全員海面に顔を出し、無事だ。琰嗶がビアージオを含めて全員を助けたからだ。岸へと引き上げると、そこには啞然とした顔でいざ戦陣を切ろうとしていた天草式や上条当麻達がいたが、琰嗶はシスターたちを全員彼らに押し付けた。

「お前、何をしたんだ？」

「DTSを誇らせた」

「あつは、全然分かんねえ！」

代表して建宮齋字が聞いてくるものの、琰嗶はそう言うしかなかつた。それ以外、やったことはないからだ。DTSを誇らせたらなんか丸く収まった、というのが今回の琰嗶の感想だ。女王艦隊は自壊し、アドリア海の女王もその強大な形を消した。広い海には静かな波と風の音だけが、響いていた。

「えーと……そいつが黒幕か？」

「ああ、DTS……ビアージオだ」

「ビアージオ＝ブゾーニ、DTSを誇る者である」

「こいつも何言ってるかわからねえ……」

「まあとにかく何とかなつたって事で良いじゃん？ アニエーゼ無事、その他シスター達も無事、ね？」

「結果だけ見ればそうなつてやがる……なんだこれ……すっげえ納得いかねえのよ……！」

建宮齋字、及び天草式の面々は全員同じような微妙な表情を浮かべていた。必死になんとかしようと思気込んでいた所で、勝手に事態が解決したのだ、それもそうだろう。しかもその解決方法がなんだ？

D T Sを誇らせた。

アホかと思う。D T Sとはなんだと思うし、分かった所で大した事のない単語なのだろうという想像もつく、一種の洗脳術でも施したのかと思つた方がよっぽど納得がいく。というか、そうであつてほしいと思つていた。

「とにかく、これで一件落着。ビアージオはローマ正教に送り返せばいいし、アニエーゼ達はイギリス清教で匿つてやりや良いだろ。ぐちやぐちや言うなよ」

「……はあ分かつた、とりあえずはそういうことにしといてやるよ……解決したのはアンタだしな」

「ありがとう、建宮君。今度段ボールで段ボール送るよ」

「いらねえよ!! 果てしなくいらねえもんでいらねえもん包んで送つてくんじゃねえよ!!」

建宮はそう言いながらビアージオ達を連れてどこかへ去つて行く。

「……瑛嗶、ありがとう」

「ああ、頑張れよ……D T Sを誇れ」

「ああ、D T Sを誇れ、私の座右の銘にするよ」

ビアージオはそう言つて瑛嗶に背を向け、去つて行つた。瑛嗶はその背中を見て、無表情で遠い眼をした。なにがどうなつてこうなつたんだろうと考えていた。

後に残つたのは、オルソラ、インデックス、上条当麻、瑛嗶の四人のみ。およそ30分程前まで一緒に歩いていたメンバーであるが、30分程前までの和氣藹々とした空気は、そこにはなかった。

## 動き出すローマ正教

イタリアで起こったことは、魔術サイドに大きな衝撃を与えた。魔術国でも列強に並ぶ大国ヴェネツィアを一撃で葬り去る事の出来る大規模魔術霊装、『アドリア海の女王』が起動して30分で壊滅させられたというのだから、それもそうだろう。

故に、ローマ正教の上層部では二つの危険因子が話に挙がっていた。

上条当麻と泉ヶ仙瑛嗶だ。

上条当麻は禁書目録の傍にいることに加え、『幻想殺し』なる魔術師殺しの右手を持っており、尚且つこれまで多くの魔術的事件を解決している。最も大きな物で言えば、大覇星祭の時に学園都市を襲った魔術師、オリアナ・トムソンやリドヴィア・ロレンツエツティによる、突き立てた土地をローマ正教の物に出来る霊装、『使徒十字』クローチエティエトロを使った学園都市侵略事件なんかがそれにあたる。

良くも悪くも、上条当麻の回りには禁書目録を含む大きな力を持つ者が多く存在するのだ。聖人の神裂火織や、魔導書解読のエキスパートのオルソラ、必要悪の教会ネセサリウスのステイル・マグヌスや、多角スパイの土御門元春等々、天草式十字清教、言ってしまうえば一つの勢力として成り立つ戦力だ。

そして泉ヶ仙瑛嗶、彼は異常だ。たった一人で一勢力として成り立つ戦力として最も危険な存在だ。『アドリア海の女王』を始め、『法の書事件』でもイギリス清教やローマ正教、天草式といった全勢力を相手に状況をしつつやかめつつやかに掻き回した男。対峙した魔術師は全員漏れなく叩きのめされており、そもそも彼に一撃入れた魔術師はただの一人も存在しない。

故に、彼を倒せそうとするならばローマ正教側も本腰を入れて切り札を切らねばならないだろうと考えている程、彼はとんでもない危険因子として捉えられていた。

さらに、上条当麻と泉ヶ仙瑛噺は繋がっている。それぞれが単体の勢力なのではなく、下手を打てば両陣が組むこともあり得るのだ。実際、上条当麻と泉ヶ仙瑛噺は親しい仲であり、敵対しているわけではない。それに、両者ともローマ正教の目論見を打ち破って来たのだ、どっちにせよローマ正教の敵である事には変わりない。

「ビアージオの奴、失敗したんだって？ あーあ、刻限のロザリオを組んでやったのは誰だと思ってんだか、まあ中枢部分は残ってて再構成は可能なようだけど、あいつイギリス清教に捕まってんでしょ？ 全く、ふざけんじやないわよ！ このストレスは何処へぶつけければ良いの!？」

「まあビアージオもお前も早急過ぎた、どちらにせよ奴は失敗していたよ。その責任を負わせるにも値する価値も無い」

「アイツ、なんだっけ？ DTSを誇るのだとかなんだか言ってるんでしょ？ 何よDTSって」

「さあ……………私にも全く分からない。DTSとは何なのか…………」

そんなローマ正教のサンピエトロ大聖堂の中、一人の女と老けた男が向かい合っていた。話の内容はビアージオもブゾーニのこと。刻限のロザリオを組んだのは、言葉の内容からしてこの女のような。黄色い修道服を着て、ベロつと出した舌にはピアスが付いている。そのピアスにはジャラつとチェーンが付いており、先には唾液に濡れた十字架があった。

「まあいいわ、とりあえず……………アンタにはこの書類にサインしてくれば良いから」

「私が誰だか分かっているのか？」

「ローマ教皇でしょ？ それは何？ いろいろ理由を述べて言いくるめてやってもいいけど、そんな細かいこと考えている余裕はないんじゃない？ あの危険因子をアンタ風情がどうにか出来るっていうんなら別だけど」

「……………神の右席……………なるほど、ローマ教皇程度では揺るがぬ、か」

「その名前を知ってるだけでアンタの立場ってのはそこそこ上なんだろうけどね。私達にとっては関係ないわ。それに、私には否定形は存

在しない。やれつつたらヤンのよ」

黄色い女がそう言うと、重々しく俯いた老人は溜め息を吐き、その書類を受け取る。内容は見ずとも分かった。だがその内容故に、サインするのは気が引かれる。

しかしそうしない限り、あの二つの危険因子は排除出来ないだろう。

それも理解していた。

「……分かった」

「よろしい♪」

ローマ教皇と呼ばれた男は、その書類にサインした。瞬間、黄色い女は笑った。じゃらじゃらと十字架の付いたチェーンが揺れる。

老人はその書類にサインし、再度重々しい溜め息を吐いた。そして、書類を受け取った黄色い女は用は済んだとばかりに踵を返し、その場を去っていく。

彼女の名前は、前方のヴェント

ローマ正教の秘匿している、禁断の切り札『神の右席』の一人にして、刻限のロザリオを組んだ張本人。あの瑛嗶が、自分にも届き得る力かもしれないと感じた力を持った、強力な魔術師である。

そして、その彼女が手にする書類にはこう書いてあった。

——上条当麻、泉ヶ仙瑛嗶

上記二名を観察し、主の敵となり得ると認められし場合は、確実に殺害せよ。

二つの危険因子と認められた二人を殺すべく、神の右席が動き出した。

## 原作12巻で瑛嗶がやってた事 日常編 睡魔の罨

さて、イタリアから上条当麻達と共に帰ってきた瑛嗶は、時差ボケもあつてアイテムの拠点にて寝ていた。

今の瑛嗶の肉体は、神様が手を加えたのか知らないが睡眠や食事を必要とし、疲労もしつかり感じるようになっていた。故に、人間を越えた体力を持つ瑛嗶ではあるが、『アドリア海の女王』を壊滅させた時の疲労は結構身体に負担を掛けていた様だ。

「あーつつかれたー……つて、あれ？」

とそこへ、アイテムの仕事を終えて一人帰ってきたフレンドダが入ってきた。どうやらかなり疲労しているようで、気だるそうな雰囲気と共に大きな溜め息を吐いている。そして備え付けのベッドへと飛び込もうとしたところ、瑛嗶が先に寝ているのを見つけた。

瑛嗶は基本的にアイテムの仕事をぶつちぎっているのに、何故か第一位を倒したりレベル5に数多くの知り合いがいたりアイテムの名を向上させる要因となっているので、アイテムのメンバーはそんな瑛嗶に何も言えなかつたりする。実際、アイテムの名前を出しただけで仕事がスムーズに進んだこともしばしばだ。

だが、今のフレンドダはベッドが使われていることに対して苛立ちを覚えていた。折角寝っ転がってダラダラしようと思ったのに、と瑛嗶を恨めしそうに見ている。そしてそうしている内に、うつらうつらと眠くなつてきて、睡魔がすぐそこまで迫っているのを感じた。

意識が朦朧としてくると判断力が鈍るとはよく言った物で、花の乙女である彼女は、男である瑛嗶が居るにもかかわらず、ベッドで寝る瑛嗶の隣に潜り込んだ。瑛嗶は掛け布団を使っていなかったのも、もぞもぞと自分に掛け布団を掛け、丸まって規則正しい寝音を立て始める。

傍から見れば男女が一つのベッドで眠っている光景。誰かが見れば勘違いしそうだった。

「んー……むにゅ……」

すると、フレンドは身動きして更に勘違いされそうな体勢にもつれ込む。近くに人肌があったからか、瑛嗶の身体に抱き着き、黒いタイツに包まれた自称脚線美を絡み付かせる。

普段ぬいぐるみを抱いて寝ていたからか、抱き癖が付いていたようだ。

「はあ……ただいま超戻りました……って……い、一体何が……!?!」

とそこへ、これまた疲れた様子の絹旗最愛が帰ってきた。当然、ベッドで眠るフレンドと、彼女に抱きしめられながら眠る瑛嗶を見つめる。先程までの疲れなど吹き飛んだ様に衝撃が走った顔をする。気が付けばアイテム内で恋人関係が出来ていたなど、驚愕のニュースだ。

「な、何故瑛嗶さんとフレンドが超抱き合いながら寝てるんですか……!?!」

「んー……す、好きい……」

「好きって……フレンド……!?! まさかもう大人の階段を超登ったんですか……!?!」

驚愕に驚愕を重ねる絹旗。同年代のフレンドが自分よりも先に大人になったという事実(勘違い)が、彼女の心を打ちのめした。がくつと膝を着く絹旗。

と同時に、彼女の心の内に嫉妬と悔恨の思いが生まれる。ぐぬぬぬと拳を握り、恨めしそうにフレンドを睨みつける。この悔しさをはらさしておくべきか、と。

「こうなったら……わ、私もおと、大人の階段を……今ここで!」

顔を真っ赤にして、フレンドとは反対側の瑛嗶の隣へと寝っ転がり、瑛嗶に抱き付く。フレンドへの嫉妬と暗部にいることによっては諦めている恋愛への羨望が、絹旗を動かした。

ドキドキと激しく動く心臓の鼓動と、顔に立ちこめる熱が頬を赤く紅潮させる。瑛嗶の身体は逞しく、自分とは違ってがっしりした感触と匂いに『男』を実感した。

そして、ぎゅつと目を瞑り、心臓の音を聞いている内に――



——彼女もまた、フレンダ同様眠ってしまった。

それからしばらくして、三人が眠る部屋にやってきたのは滝壺理后。普段通りのぼやぼやした雰囲気を纏いながら、部屋に入ってきた彼女は、瑛嗶を挟んで眠るフレンダと絹旗を見て、くすりと笑った。仕事ではかなり残酷なことを平気でやってのける彼女達だが、背の高い瑛嗶を挟んで小柄な二人が瑛嗶を抱きしめながら寝ているのを見ると、まるで父親に甘える娘達のように見えたからだ。

元々瑛嗶の放つ大人っぽさや、二人との体格の違いもあるのだろうが、滝壺にとってその光景は中々に微笑ましい物に見えたのだ。

そして、彼女もまた、暗部にいるからかそんな平穏で温かい光景に少しだけ焦がれた。

「私も」

故に、その温かい光景に自分も入りたくて、ベッドの上にかかる。三人が寝ているからかなりスペースは占められてしまっていたが、滝壺は瑛嗶の頭を自分の太ももの上に乗せて、壁に寄り掛かった。

このベットは部屋の隅に寄せられており、片面が壁にくっついている。そしてフレンダと絹旗の頭は瑛嗶の肩の横になっていた。瑛嗶の頭周辺には人一人が座れるスペースがあっただのだ。滝壺はそこに足を伸ばすようにして座り、壁に身体を寄り掛かせて、瑛嗶の頭は自分の太ももに乗せたのだ。

「おやすみなさい」

滝壺はそう言つて、自分も温かなまどろみの中へと身を任せていった。



「なんじゃこりゃあああああああ!!!」

「うわわっ!?!」

「なんですか!?!」

「んー……?」

そして二時間後、最後に戻ってきた麦野の叫び声によって、全員が眼を覚ます。瑛唄を除いて。

「え? え? 何? 麦野?」

「アンタ達何やってんのよ! アイテムの拠点で酒池肉林ってかア!」

「あア!」

「え? 何言って……あっ」

フレンドは自分が瑛唄を抱きしめていることに気付いて赤面する。

「超違うんです、私はフレンドが大人の階段を……!」

「その割には手を離さねえな?」

「ち、違うんですよ? 別に遅いとか落ちつくとか超そういう訳で

は……!」

絹旗は言い訳しようとしたが、瑛唄に引つ付いたままなのを指摘され、赤面し、慌てて瑛唄の身体から離れる。

「あ、お帰り麦野」

「お前が一番謎だよ滝壺オ!!」

「なんか良いなあって」

「意味不明!!」

滝壺は眠気眼を擦りながらのほほんと返す。

そして、そんな騒ぎをしていると、一番最初に寝ていた瑛唄が眼を覚ました。

「ふあ……何、どうしたの麦野ちゃんそんな騒いで」

「てめえが一番どうしたんだよ!! なんで私以外のメンバーといちやいちや寝てんだコラア!」

「……ああ」

瑛唄は状況を悟った。そして悟った上でゆらりと笑う。

「麦野ちゃんも入りたかった?」

「ぶち殺すぞテメエエエエエエエ!!!」

今日もアイテムは平和だった。

## 日常編 変革

その日はアイテムとしての仕事も無く、暇だったから四人はどこかへ暇潰しに遊びに行こうと画策していたのだ。瑛嗶も含めていつものファミレスの一角を占領し、窓際で頬杖を付きながら寝る瑛嗶を余所に四人が話し合っていた。瑛嗶が寝ているのは、退屈だからだ。

持ち込み禁止なのも分かっていたいながら、注文はドリンクバーのみで、麦野沈利は鮭弁を、その隣でフレンダは鯖缶を食べている。所謂お誕生日席に座って映画のパンフレットを開く絹旗は、靴を脱いで椅子の上に体育座りをしており、麦野の対面に座る滝壺はふらふらと今にも眠ってしまいそうに船を漕いでいた。ちなみに瑛嗶はその隣、フレンダの正面だ。

話し合いと言っても、出た案は絹旗の映画館しかなく、他のメンバーは特に案を出したわけではない。といっても絹旗以外は映画館で見たい映画は特になく、あまり気乗りしない様子だ。

「暇ねえ……」

「そうだね……花の乙女がこんなファミレスで駄弁ってるだけだなんて……結局退屈は敵な訳よ」

「だから超映画行きましょうよ、今ならC級映画で超気になる作品があるんですけど」

「やあよ、絹旗……アンタがそう言って面白かったことなんてないんだから……」

「……………ふみゆ……」

つくづく退屈そうに話す三人だが、滝壺はついに限界が来たのか横にいた瑛嗶の肩に頭を乗せる形で眠ってしまった。その拍子に瑛嗶が起きる。

「ん……ああ、滝壺ちゃんか……よつと……ふあ……」

瑛嗶は肩に乗ってきたのが滝壺だと分かって、頬杖を解いてその背を背もたれに寄り掛からせた。そして滝壺を膝に乗せてぐいーつと伸びをする。ちなみに膝枕にしたのは座っている以上そつちの方が楽であることと、前回枕になっていたことのお返しみたいなものであ

る。

それを見たフレンドが若干羨ましそうにしていたが、すぐに鯖缶に喰らい付いて意識を逸らしたようだった。麦野はそんなフレンドを見ながら嘆息する。

「琰嗶、貴方もなにか案出しなさいよ。このままじゃ暇すぎてそこらへんに一発ぶちかましそうだわー」

「ふーん……アレイスターに悪戯電話するのも飽きたし……そうだなあ、いつそレベル5何人か呼ぶ？」

「いまサラツととんでもないこと言ったわね。統括理事長と連絡取る伝手があるっての?」

「ほら、番号交換してるし?」

「友達か!」

琰嗶に聞いた私が馬鹿だった、と麦野は溜め息を吐いた。規格外な琰嗶にかかれれば少しは面白いことになるんじゃないかと思っただけで、出て来たのは暗部の自分でもちよつと勇気がいる遊びばかりだったからだ。

このままじゃいつも通りファミレスで駄弁って終わりそうだ。それも少し遠慮したい。

「じゃ、ちよつとしたゲームをしようぜ」

「ゲーム?」

「俺が今からこの第七学区の何処かに隠れるから、一番に見つけた人の勝ち。勝者にはご褒美を、てね」

ゲームと聞いて身構えた物の、以外に面白そうなものを出してきた琰嗶。麦野は少しだけ感心した様な声をあげた。そして、フレンドと絹旗も鯖缶やパンフレットから顔を上げて興味津々といった表情を浮かべた。

「ルールは簡単、俺は第七学区の中の何処かにいて、そこからは決して動かない。今が……10時42分だから11時までには隠れるよ、11時になったらゲーム開始、全員俺を探して第七学区内を探してくれ」  
「ちゃんと第七学区内よね?」

「ああ、ただなんの手がかりもないってのはフェアじゃない。だから

俺の居場所のヒントを持つてる奴を数名用意しておく、誰かは教えな  
いけど俺の知り合いっぽいのを探せば分かるよ。皆大体特徴的な容  
姿してるから。制限時間は13時までの2時間、それまでに見つけら  
れなかったら俺の勝ち、俺の言うことをなんでも一つ聞いて貰う」  
瑛嘎の説明を聞いて、うんうんと頷く麦野達。参加する気は満々の  
ようだ。

「その代わり、超見つけられたらその人は瑛嘎さんになんでも言うこ  
とを一つ、超聞いて貰えるってことですか？」

「まあそれでいいならそれでもいいけど、欲しい物があれば用意して  
あげても良い」

「そ、それって結局勝ったら瑛嘎になんでも要求していいってこと!？」  
「その通り、世界が欲しいと言えば世界征服のお手伝いをしよう、恋人  
が欲しけりやそれなりに出会いの場を設けてあげよう、俗物的な物が  
欲しければ買ってあげよう」

それは、彼女達にとつてとても豪華な報酬だった。瑛嘎を見つけた  
場合、自分の欲しい物を四つ葉のクローバーから世界まで用意してく  
れるというのだ、乗らない理由は無かった。

いつのまにか瑛嘎の膝を枕にしていた滝壺も眼を覚まし、膝を枕に  
しながら瑛嘎を見上げている。その眼はぼーっとしているように見  
えて、やる気に満ち溢れていた。

「良いわ、やりましょ」

「超負けません」

「結局、私が一番最初にみつける訳よ!」

「……頑張る」

四人がやる気になった所で、瑛嘎は苦笑し立ち上がる。滝壺はその  
拍子に上体を起こして席を立った。

瑛嘎はテーブルから離れて、隠れ場所に行くべく動き始める。

「それじゃ、11時までゆっくり作戦でも練ると良い」

瑛嘎はそう言って、ファミレスから出て行った。



そして11時になったその頃、アイテムの四人が動き出すと同時に……数名の人間にゲームの内容が伝達された。

「ああ？　なんだこりや……へエ、おもしれエこととしてンじゃねエか」

白髪赤眼の少年はメールの内容ににやりと笑った。

「はいはい……瑛嗶さんか、嫌な予感がしますよー……なにになに……って案の定か……不幸だ……えーと……なっ、まさかそんな……よーし！　やる気が出て来た！」

ツンツン頭の少年はメールを読みながらガッツポーズを一つ。

「なによお……メール……お、瑛嗶さん!?　ど、どぞどうしよう……えーと……えっ、これって本当？　だとしたら……やらない理由はないわあ☆」

金髪をたなびかせ、瞳をキラキラと輝かせる少女はメールを読んで一考し、その瞳に燃えるようなやる気を見せた。

「はて……誰ですのこのメール……迷惑メールでしょうか……何々……私の名前を知ってる？　ただの迷惑メールでは無いようですね……なっ……これは……！　これが本当だとすれば……お姉様が……!!」

ツインテールの風紀委員は見知らぬ誰かからのメールを読み、戦々恐々と身体を戦慄させた。

暗部、アイテムを発端としたゲームは、あらゆる人間を巻き込んで……始まろうとしていた。

## 先生の問題

ゲームが始まり、アイテムのメンバーはそれぞれ動き出した。

その内の一人、フレンダⅡセイヴェルンは外に出てまずヒントを持つ人間を探すことにした。

瑛嗶と違って、そのヒントをくれる人間は隠れてはいない。それに、瑛嗶の知り合いならば見れば分かるほど変な人に違いない。すぐに見つかるだろう、という考えに従った結果だ。

第七学区の道すがら、色んな人を見るのだが、どうも平々凡々。奇異な雰囲気の人はいなく見当たらない。さしあたり麦野以外のレベル5なんか該当しそうだが、レベル5だって230万人の内の7人。しかもその内のほとんどが暗部に関わる人間だ。探そうと思つて見つけられる存在ではない。

となれば、手当たりしだいに探すしかない訳だが、

「あー……全然見つからない訳よ……」

フレンダは右も左も分からない状態で動くには、少し根性が足りなかった。

「……んー、レールガンでも見つければいいんだけど」

「あたしがなによ?」

「……あ! アンタ!」

「え、な、なに!?!」

ふとつぶやいたフレンダだったが、意外にもその呟きに返答があった。項垂れる顔を上げるとそこには、レベル5の第三位……御坂美琴が立っていた。

「アンタ! 瑛嗶さんの居場所知ってるでしょ! とつと吐きなきさい!」

「ハア? 瑛嗶さんの居場所って……知らないわよそんなの……」

「え? 知らないの? ヒントとか……」

「知らないけど……ヒント? どういうこと?」

フレンダは悟った。こいつは外れ、ハブられてる子だと。

そして悟った途端にとてもし温かい眼を浮かべてにつこり笑う。

「ううん、なんでもないわ。大丈夫、ごめんね急に」

フレンドはそう言うと、すぐに美琴の隣を通り過ぎてその場を去る。ハブられた事を知れば彼女はきつと悲しむだろうと考えての行動だ。

御坂美琴はささつと去っていくフレンドに、首を傾げて怪訝な表情を浮かべる。騒動毎には必ずと言って良いほど首を突っ込む彼女だが、今回は意図的に参加させてもらえないということに、まだ気が付かないでいるのだった。

ハブられ美琴、 琰嗷大爆笑である。

◇ ◇ ◇

そしてまた別の場所では、絹旗最愛が琰嗷の居場所のヒントを持つ人を見つけていた。

「……琰嗷さんの居場所のヒント、超持ってますよね？」

「……なんでそう思っただんです？」

「……見た目が……その……」

「そうですか、見た目ですか、私の見た目が何処かおかしかったですかー？」

彼女の前にいるのは、小柄な彼女よりも頭一つ分位小さい少女。ピンク色のボブカットに、くりくりとした瞳で睨んで来ている。そう、月詠小萌だ。

彼女を見つけた絹旗最愛は、最初はただの小学生かと思って見逃した。

しかし、

彼女と擦れ違った後、彼女の事を先生と呼ぶ生徒が現れたのだ。小学生ではなく、『先生』。

となれば、この学園都市広しといえどもこんなに奇妙な人物はいないだろう。絹旗はすぐに彼女を捕まえた。

「その……超若い大人だなあと」

「ほほお、まあ良いでしょう……確かに私は琰嗷ちゃんの居場所のヒ



ントを知っています。でも、ただで教えるわけにはいきません！」  
「なっ……」

「あれ？ 瑛嘎ちゃんのメールではこう言ったら『超なっ……！』って返って来るって書いてありましたね、違いましたね」

「何でもかんでも超超付けるわけじゃないです!!」

「超ややこしいですねーふふふっ」

クスクス笑う小萌に、絹旗はぐぬぬと唸る。見た目は子供にしか見えのないのに、こうも言い負けるとは、少しだけ悔しかった。小萌は子供の様な容姿だが、それでも大人なのだ。まだ十代である絹旗とは生きて来た年月が違う。

「で、どうすれば超教えてくれるんですか？」

「うふふ、先生の出す問題を3問答えられたら教えてあげますよー」

「問題……ですか？」

「はいー、私が出す問題に答えるまでの制限時間はありません。そして、私の出した問題の答えを誰かに聞きに行くのもおっけーです。ただし、私はこの場に留まってはいませんので、答えが分かったらもう一度探して下さいねー、先生も忙しいのですよー。あ、もちろんこの場で分かればすぐに答えてもらって構いませんよー」

絹旗は思った。なんだこの鬼畜ゲー、と。

先生、ということとは専攻の教科についてはスペシャリストであるわけだし、専門分野のコアな部分を問題に出してくる可能性もある。となれば、自分がこの場で解答出来るかどうかは分からない。いや、恐らく出来ないだろう。つまり、答えを知りに、分かる人間を探しに行つて、解答を持つて彼女をまた探しに行く。それを三回繰り返しなればならないのだ。

非常に時間のかかるヒント保持者である。

「……じゃあ問題超お願いします」

「はいー、それじゃあ一問目いきますよー。先生の専攻は発火能力パイロキネシスですから、それに関する問題です。発火能力者は『AIM拡散力場』に似通った共通点があることが最近の研究で分かっているのですが、その共通点とは何でしょうか？」

「……ちなみに他の問題は？」

「一問目が解けたら出してあげますよー？」

舌打ちする絹旗。その場から踵を返し、何処かの研究施設を当てることにする。答えの分からない自分からすれば、解答を用意しなければいけない。瑛嗶を探すに当たってヒントは必須なのだから。

「ちつくしよおおお!!」

「頑張ってくださいねー」

走り出す絹旗に、手を振って見送る小萌。

瑛嗶の仕掛けたゲーム、簡単な訳はなかった。

## 小萌の意地悪

月詠小萌は、自分の下へやってきた瑛嘎からのメールを見て、少しだけ目を丸くした。何故なら、自分は瑛嘎にメールアドレスを教えていないし、またその内容も驚くべきことだったからだ。

メールにはこう書いてあった。

『小萌ちゃん小萌ちゃん、今俺が面倒見ている4人の子供がいるんだけど、その子達とゲームする事になったんだよねー、ちよつと協力者になってくれ』

最初にそう始まり、ゲームの説明を読んでいく。どうやら瑛嘎は自分に瑛嘎の居場所のヒントを持つ人物になって欲しいらしい事を理解すると、小萌はそのヒントがどういうものなのかも読んだ。どうやら拒否するとは微塵も思っていないらしいところが、瑛嘎らしいなあと思う小萌だった。

そして、アイテムの4人の容姿や特徴を把握すると、最後にこう書いてあった。

『この4人が参加者で、多分小萌ちゃんのことをすぐに見つけると思う。ヒントは何の対価も無く渡さないでね、なにかしらの試練を用意して欲しい。そこはまあ小萌ちゃんに任せるよ。行動に制限は付けないし、よろしくね。第七学区は出ないで欲しいんだけど、用事があるならそっち優先して貰って構わないよ。ああ、そうだ茶髪のちんちくりんの子は試練があるって言ったら『超なっ……!』って言うと思う(笑)』

なんでこんなゲームをしているんだと思ったけれど、行動に制限が付かないというのなら構わないかと思った。

正直教師として色々仕事はあるけれど、自分を見つけて来た時だけ相手すればいいのなら別に良いだろうと思う。

「ん?」

と、小萌はメールにまだ続きがあると分かって下にスクロールしていく。すると、

『ちなみに、協力してくれたら報酬として願いを何でも一つ叶えてあ

げよう。生徒の成績向上から不良更生、欲しい物があれば買ってあげてもいいし、仕事を手伝えというなら手伝おう。何でも叶えてあげるよ。まあ強制じゃないから、協力してくれるなら空メール送ってくれる?』

小萌は無言で空メールを送り返した。

◇ ◇ ◇

それからしばらくして、本当に茶髪で小柄な子がやってきた。名前は確か絹旗最愛、瑛嘎のメールに書いてあったことだ。どうやら先生なのに小学生みみたいな容姿だからすぐに分かったらしい。少しだけむっとした。

だから試練はちよつと意地悪にしてやろうと思った。

「ほほお、まあ良いでしょう……確かに私は瑛嘎ちゃんの居場所のヒントを知っています。でも、ただで教えるわけにはいきません!」  
「なっ……」

「あれ? 瑛嘎ちゃんのメールではこう言ったら『超なっ……!』って返って来るって書いてありましたが、違いましたね」

「何でもかんでも超超付けるわけじゃないです!!」

「超ややこしいですねーふふふっ」

生意気ではあるけれどやはり子供、言い負かして少しすかつとした。大人げない? どうせ私は小学生ですよ。なんて思っていた。

そして、試練はなんだと問われて、内容を説明する。

「うふふ、先生の出す問題を3問答えられたら教えてあげますよー」

「問題……ですか?」

「はいー、私が出す問題に答えるまでの制限時間はありません。そして、私の出した問題の答えを誰かに聞きに行くのもおつけーです。ただし、私はこの場に留まってはいませんので、答えが分かったらもう一度探して下さいねー、先生も忙しいのですよー。あ、もちろんこの場で分かればすぐに答えてもらって構いませんよ?」

3問、問題に答えるだけでいい。

但し、ここで少し意地の悪い言い方をした小萌。答えを探しに行っても良い、でも自分は此処には留まらない、答えが分かったら言いに来る、これだけ言うと、絹旗最愛はどう思うだろうか？

当然、答えを探しに行くゲームだと思うだろう。そう、『正解』を探しに行くゲームだと。

でも小萌は別に『正解』を答えろとは言っていない。問題に対して間違えても良いから『答えられれば』このゲームはクリアなのだ。

しかし、小萌の言い回しと『問題に対する答えは正解である』という先入観から、絹旗最愛はまんまと引っ掛かってしまっていた。

結果、問題を出した小萌に対して、彼女は背を向けて駆け出して行ったのだから。走り去っていく絹旗の背中をニッコリ笑顔で見送る小萌。

「ふふふ、ちよつと意地悪でしたかねー」

クスクスと笑う小萌。このゲームは別にクリアさせてもさせなくてもいい、小萌にとつてなんの損得はないからだ。ならば、ちよつと戯れてみるのもいいだろうと思っただ。自分の生徒でなくとも、この学園都市の生徒ならば教師として真摯に立ち向かう彼女だが、別に生徒に優しく接するばかりではない。

ちよつと意地悪な性格で、暗部で過ごしている絹旗最愛を煙に巻いた教師、月詠小萌だった。

「あのーちよつと良い？」

「はい？」

「もしかして瑛嘎さんのヒント持っていたりする？」

そう言っただけで話し掛けて来たのは、金髪にベレー帽の少女。フレンドだ。

「えっと、なんでそう思ったんですか？」

「いやー知らないんだっただけなら良いんだけど……正直誰がヒント持っているかなんてわからないから……結局手当たり次第に聞いている訳よ」

絹旗と違って、フレンドはバカだった。もうレベル5とか探しても

見つからないし、いつそ数打てば当たる作戦に出たのだ。行きかう人全てに瑛嗶の居所のヒントを持つているかを聞いて回っているらしい。

「……はい、持ってますよー」

「ホント!？」

「ええ、でも先生の出す問題に3問答えられたら教えてあげますー」

「よーし! 頑張って答えちゃうんだから!」

やる気満々で身構えるフレンド。小萌はこういうちよつとお馬鹿な子は嫌いではない、故に絹旗の様な言い回しはせず、素直に問題を出してあげた。

「第1問、私の名前はなんでしよう?」

「えつ……えーと……分かんない」

「うふふ、じゃあ第2問、この学園都市にはレベル5はどれだけいるでしょう?」

「あつ! 知ってるよ! 7人!」

「正解です、それじゃあ第3問、瑛嗶ちゃんの居所は屋外でしょうか? 屋内でしょうか?」

「え……つと……屋外?」

小萌は第3問で瑛嗶の居所のヒントを教えてあげた。

「正解ですー」

瑛嗶の居所は、『屋外』。これが彼女の持っている瑛嗶の居所のヒントだった。

「……あつ! 屋外ってこと?」

「はい、そうですよ。瑛嗶ちゃんの居所は第七学区の屋外です」

「で、でも……私3問正解してないよ?」

「私は3問答えたら教えると言ったんですよ? 分からない、も立派な回答ですよー」

「……あつ! ずるい!」

「うふふ、それでは頑張ってくださいねー」

小萌はそう言うと、その場を去る。フレンドは意地の悪い子供だなあと思いながら、手に入れたヒントを携帯にメモして、その場を駆

けていく。次のヒント保持者を探しに行ったのだろう。

小萌は久々に面白い子に会えたなあと思いつつ、機嫌良さそうに歩いて行った。

## 第一位と滝壺

一方その頃、瑛嗶はとある場所で寛いでいた。周囲には誰もおらず、紅茶を飲みながら少し考え事をしていた。その内容は、自身の肉体について。

最近、というよりこの世界に来てからだ、瑛嗶は疲労の所為なのか寝ることが多くなった。まあ以前に比べてという話だが、確実に睡眠時間が増えている。瑛嗶としてはそれでも全然構わないのだが、これまでずっと転生してきて、能力は多種多様に変化したのに対し、衰えを見せなかった身体能力が段々と落ちていく気がするのだ。

何故なのかと問われれば、神様がそういう風にも弱体化した、としか思いつかないのだが、果たしてそうなのかと思いはじめた。

神様が手を加えたとすれば転生する直前の時のみで、今までもそれ以降は問題児の世界でのスキル没収以外は何の干渉もして来なかった筈だ。なのに、今の自分は日に日に身体能力が落ちていく気がする。これはどういう訳か、神様の干渉以外にも何か要因がある気がしてならない。

「……もしかして、そういうことなのか……？」

だが、瑛嗶には一つ思い浮かんだことがあった。それは至極当然で、少し考えればすぐに分かる当然の結論。

だが、もしもそれがそうだったとしたら、瑛嗶はきつと――

「……まあそれはそれで、面白い」

瑛嗶は呟き、その可能性を頭の隅に追いやりながらも享受する。もしも、もしもの話なのだ。そして例えそれが本当にそうなるとしても、瑛嗶としては本望。そうだったとしても寧ろ歓迎するべきことだと思っただ。

「さーて……誰が来るのかねえ、俺の所に」

瑛嗶はそう呟いて、ゆらりと笑った。





滝壺理後は、瑛嗶を探す上で能力を使うことにした。瑛嗶もまた能力者、『逸らす能力』に関してはAIM拡散力場をしっかりと放っているのだ。それを捉える事が出来れば、瑛嗶を見つけると判断する事など簡単だ。

しかし、こんな場面で『体晶』を使わないと判断する位には、滝壺も無謀では無い。あれは身体に多大な負荷を掛けるのだ。

故に、滝壺はふらふらと歩きながら、普段漂っているAIM拡散力場の流れの中から、瑛嗶のAIM拡散力場を探すことにしたのだ。『体晶』を使わずとも彼女はAIM拡散力場を感知する能力者、学園都市に数多く存在するAIM拡散力場を感じ取って、意識的に探る事も出来る。まあ干渉する事や正確な位置まで分かる訳ではないが、大体こつちの方角？ といったふうには、なんとなく感知する程度のこと出来るのだ。

「……………こつち……………」

瑛嗶の能力がオンリーワンの能力であることが幸いした。今の滝壺は、あまり感じた事のないAIM拡散力場の方へと足を向けている。少しづつ、けれど確実に彼女は瑛嗶へと近づいていた。

「あ」

「ああ？」

だがそこで、路地裏へと入った滝壺は、真つ白い少年に出会った。

学園都市第一位、最強のレベル5——『アクセラレータ一方通行』である。彼も

また、オンリーワンの能力者故に、滝壺の感知に引掛かった様だ。

しかし流石は路地裏に入ればなにかしら起こることで定評のある学園都市、一方通行は絡んできた不良達をシメている最中だった。

「オマエ……………ああ、オマエがアイツの言ってたこつち側の奴か」

「……………第一位……………瑛嗶さんの居場所のヒント、持ってる？」

「ああ持ってるんぜ、一応アイツからメールが届いたからなあ……………まあ俺にも得があることだし、付き合ってるやんよ」

「教えてくれる？」

「良いぜ、俺の出す試練を乗り越えたらな」

月詠小萌同様、彼もまた試練を出すことを瑛嗶から指示されていた。

滝壺は彼の言葉に首を傾げ、次の言葉を待つ。

「そう身構えんなよ……簡単なことだ。さっきまで居たクソガキがどっか行きやがってなア、そいつを連れて来てくれりや教えてやる」  
「……クソガキ？」

「第三位のレベル5をちっさくした様な奴だ……つと、写真がある、赤外線を送ってやんよ」

「うん……分かった」

試練は打ち止めの搜索だった。本当に先程まで一緒に居たのだが、気が付いたら何処かへ行っていたのだ。故に、彼はこの際だから手伝わせてやろうと思っっている訳だ。

とはいえ、本来なら何処の誰とも知れない人間に打ち止めの搜索を頼むのは学園都市の闇に関わる意味でも気が引けるのだが、人手はあつて困る物ではないし、打ち止めの搜索に使つても良いと思う程には瑛叟の事を信用している証でもあつた。

「この子、本当にレールガンに似てるね」

「まあ色々あつて俺が面倒見てんだよ」

「ロリコン？」

「違エよ！」

「大丈夫、例え第一位がロリコンでも私はそんな第一位を応援してる」  
「ぶっ殺すぞテメエ」

「それじゃ私はこの子を探す、それじゃ」

滝壺は、ギロリと睨んでくる第一位の視線から逃げる様にその場を去る。流石は第一位、殺気も尋常ではない程に濃かった。暗部に居る自分でもあまりお目にかかれなような迫力だった。

「……ハア……やっぱアイツの知り合いだな、めんどくせエ……」

そして去っていく滝壺の背中を見送りながら、第一位はそう呟いた。

## ヒント集め

瑛嘎探しが始まってから1時間、制限時間も折り返しを迎えた所である。

アイテムの面々は瑛嘎の放ったヒント持ちから色々とおちよくられながらも、なんとかそれぞれヒントを手に入れていた。

最初にヒントを手に入れたのは小萌の関門を突破したフレнда。屋外にいるというヒントを得た彼女は、第七学区を駆け回ってとにかく瑛嘎を探している。

次にヒントを手に入れたのは滝壺。

一方通行の関門である打ち止め探しを、彼女は自身の持っている能力を最大限生かして難なくこなしたのだ。体晶は使っていないが、御坂美琴のAIM拡散力場を記憶したことのある彼女なら難しい話ではない。

そうして得たヒントは、”瑛嘎は何処かの店にはいない”というものだった。

フレндаのヒントと合わせれば、瑛嘎は屋外にいて、尚且つ店のテラスや外に設置してあるテーブルなんかにはいないということになる。

そう考えれば、瑛嘎は基本的に高い場所にいる可能性が高いと言えた。

そして次にヒントを手に入れたのは麦野である。

彼女が見つけたヒント持ちは、意外にも上条当麻だった。出会いは単純、曲がり角でぶつかって押し倒されたのだ。彼は買い物途中だったので、ぶつかった拍子に買い物袋を落とした。卵粉碎である。

不幸だと呟いた彼であったが、勿論、当然の様に押し倒した拍子に麦野の胸を揉んでおり、呟いたその言葉が麦野のプライドを大きく傷つけた。

「ぶち殺す」

「のわあ!?!」

「!? 私の”マルチタウナー原子崩し”を打ち消した……?」

「いつそ殺す勢いで放たれた光線だったが、”イマジンプレイカー幻想殺し” はやはり無敵の防御である。右手で触れた結果、その光線は呆気なく打ち消された。」

驚愕する麦野、戦慄する上条は見つめ合い、しばし無言の緊張感の中動けない。しかし数秒の後、はあとため息を吐いた麦野が頭を掻くことでその緊張感は霧散する。

「……アンタ、瑛噺のこと何か知ってる?」

レベル5の攻撃を打ち消すなんて能力は聞いたことがないし、ましてそんな能力者が瑛噺と関わりのない人物だとは思えなかったのだ。「え、瑛噺さん? もしかして、あんたが瑛噺さんを探しているっていう?」

「知ってるのね……ならさっさとヒントを渡しなさい」

「いやちよい待ち、ヒントを渡すには俺の出す試練を——」

「胸、揉んだだろ」

「御教え致します!!」

上条当麻に逃げ場はなかった。胸を揉んだ事実、それを盾に取られては試練も関門もあったものではない。結局彼女はなんの苦労もせず、社会の法を盾に上条からヒントをもぎ取ったのである。

そうして手に入れたヒントは、”瑛噺は広く、目に見える場所にいる” というものであった。

それをフレンダと滝壺の手に入れたヒントと合わせて考えれば、瑛噺は屋外で、店関係の場所にはいなくて、広く目に見える場所にいるということになる。

つまり、これで店舗、路地裏などの狭い場所、屋内の可能性がなくなっただけということになる。ますます高い場所や公園や広場などの広い場所の可能性が高くなった。

「ありがと、それじゃ」

「あ、ああ……」

麦野はそう言って上条にはもう用はないとばかりに搜索を再開した。

そして最後にヒントを手に入れたのは、やはり絹旗最愛である。

小萌に騙された後、一方通行に会ったものの打ち止めが見つかった後なのでヒントを貰えず、そのあと上条当麻とすれ違い、絶望の果てに出会ったのが御坂美琴——と一緒にいた白井黒子である。

白井黒子は前から走って来た絹旗に気付くと、最早何もかも終わったとばかりの表情をしていたので気付かってハンカチを渡したのだ。

「も、もし? 大丈夫ですか?」

「はあ……はあ……超大丈夫じゃないですが……ありがとうございます  
す」

「はあ……そうなんです」

「瑛嘎さん……超どこいったんですか」

そしてその際に絹旗が呟いた一言が、決定打だった。白井黒子もまた、ヒント保持者なのだ。

瑛嘎が適当にばらまいたヒントを受け取った一人、それが白井である。故に絹旗のその呟きを聞いて、白井は思い至ったようにこう口にした。

「えーと、私その方の場所のヒントを持っていますの」

「マジですか!? 超教えてください!」

「は、はい……えーと、確かメールでは”何処かの屋上”とありましたよ?」

「超、ありがとうございます!!」

本当なら白井も何かしらの試練を与えるように指示があったのだが、あまりに絹旗が落ち込んでいたので、そんな気にもなれず正直に教えてあげた。元来、白井黒子は良い子なのである。

そしてヒントを得た絹旗はまるで水を得た魚の様に元気を取り戻し、再度搜索を開始する。ドップラー効果を残しながら走り去った絹旗を、白井は目を丸くして見送った。

その様子からは、流石の御坂美琴も一切口を挟めない勢いがあったという事実が感じられたのである。



かくしてアイテム全員がヒントを得たわけだが——ここで1人、他の3人よりも一歩リードした者がいた。それは、一等最初にヒントを手に入れたフレンドである。

彼女は小萌からヒントを得て探し回っている内に、”もう1人”。ヒントを持つている人物を探し出していたのだ。

そう、彼女こそ瑛嗶のばら撒いたヒントを持つている最後の人物にして、フレンドも初めて会話する麦野とは全く別のレベル5。

”心理掌握”メンタルアウト——食蜂操祈である。

彼女の出す試練は、おそらくフレンドだからこそ突破出来たといえるだろう。そう、アイテムの中での共通認識でアホの子とされている彼女だからこそ、天才の裏を掻けた。

「じゃあ試練よ、私の質問に答えなさい」

「よし来た！ 何でも来い！」

「貴方は瑛嗶さんのこと、どう思ってるのお？」

「え？ 瑛嗶さん？」

この質問の意図としては、食蜂操祈にとってフレンドがライバルであるかが問題だ。ライバルであるのなら、ヒントを渡すわけにはいかないという外道っぷりである。

しかも彼女は心を読める。この質問をすれば相手はその答えを頭の中に思い浮かべてしまうもので、彼女はそれを読むことが出来るわけだ。

そしてその思惑通り彼女はフレンドの思考を暴く——！！

——瑛嗶さん？ なんでここで瑛嗶さん？ でもまあよく分からないけど質問だから答えるべきなのかなあ……瑛嗶さんか、瑛嗶さんってなんだろう。あんまり考えたことはないけど、私としてはそんなに嫌いじゃないわけよね。背も高いし、気も利くし、強いし、気さくだし、絹旗が前に優良物件って言ってたけど、なんで瑛嗶さんが物件なのかしら？ あの時ばかりは流石に絹旗が馬鹿なんじゃないかと思っただわねー……っと瑛嗶さんだった。そういえば瑛嗶さんって何者なんだろ……いきなり現れたし、能力もよく分かんないし、レベ

ル5いっぱい知ってるし、なんか無茶苦茶だし、んー、どう思ってるかって言われたらまあアレだよ。無茶苦茶な人だけど、頼れる人っていうか、なんか味方にいると負ける気しない感じ？ 絶対的な無敵感があるよね。

食蜂は思った、この子アホの子だと。

「あー……分かったもう良いわあ……ヒントあげる」

「え？ ホント!?!」

「瑛嗶さんは第七学区にあるセブンスミスト付近の高い場所にいるわよお」

「分かった！ ありがとう！」

ライバルだと思うこともなくヒントを教えた食蜂。

フレンドは暗部の人間とは思えない純粹な笑顔でお礼を言っ去っていく。食蜂はなんだか、フレンドが暗部の人間とは思えなかった。

「学園都市の暗部ってこんな感じだったかしらあ……」

そして残り時間40分程——瑛嗶の下へ辿り着くのは誰になるのか、食蜂も気になった。

## 決着

瑛嗶の居場所を突き止めるゲーム。

このゲームにおいて、瑛嗶の居場所を最初に突き止めたのはフレンドだった。

「無理じゃんコレ……」

但し、居場所が分かっただけで辿り着くことは出来てはいないのである。

アイテムのメンバー達は、各々の手に入れたヒントだけでは勝てないと思った。故に、タイムリミット残り約30分というところで、ヒントの共有に踏み切ったのだ。

彼女達が得たヒントは以下の通り。

- 1、どこかの屋上
- 2、屋外
- 3、セブンスミスト周辺の高い場所
- 4、広く、目に見える場所
- 5、店の中には居ない

こうなると、搜索範囲はかなり狭くなってくるのだが——如何せん、フレンドの見つけたその場所は明らかに辿り着けない場所だった。

「その場所こそ、通称”窓のないビル”である。

窓もなく、取っ掛かりのない見事な四角柱型の建物。破壊することはおろか、傷付けることさえ至難な素材で作られた建物だ。瑛嗶はこの建物の屋上にいた。

瞬間移動か浮遊能力でもない以上、辿り着くことは不可能な場所である。瑛嗶のことだ。おそらく身体能力にもものを言わせたか、空気を足場にして登ったのだろう。

「どーしょよ……んっ？」

「チツ……瑛嗶の奴、一体何の用で呼んだんだったウの……」

すると、そこへ学園都市の第一位が現れた。

このタイミングの良さにフレンドはまさかと顔を青ざめた。瑛嗶



はこう言ってるのだ。

——その白髪使って登ってこい、と。

フレンドはもう無理だと思った。こんなゲーム早々に降りるに限る。

だが、現実はそうもいかないらしい。

「オイ、その金髪」

「ひゃい!? な、なに!?!」

一方通行がフレンドに話しかけてきたのだ。ナンパ的なのだったらしいなと思いつながら、そんな希望的観測を呑み込んで振り返る。

すると、目付きの悪い紅い瞳がフレンドを睨んでいた。これが素であるから恐ろしい。蛇に睨まれた蛙の様に、フレンドは涙目で縮こまり、ふるふる震えている。

見た目幼げなフレンドに怯えられて、一方通行はちよつとだけ言葉に詰まったものの、ため息交じりに告げた。

「オマエ、琺瑯の関係者だよなア? この上に連れてきやいいンだろ?」

「え、あ……はい」

「とりあえず乗れ、連れてってやる。乗りかかった船だしな」  
「???」

フレンドは何が何だか分からないといった顔で、言われるがままに一方通行の背におぶさる。すると彼女自慢の脚線美とやらを知ってか知らずか、一方通行はフレンドの黒タイツに包まれた太ももをしっかりと抱えた。

不意に地面の感覚がなくなつて、持ち上げられた衝撃に身体を揺らすフレンドだったが、なんとか一方通行の肩につかまってバランスを取る。

感触としては、最強の能力者とは思えない程華奢であつた。

だがそう思ったのも一瞬。フレンドを抱えた一方通行は地面を蹴って空を舞う。背中に接続された竜巻状の風が彼らの身体を上へ上へと押し上げ、一方通行の能力がその方向を淀みなく操作する。

「わわわわわ……!!?」

「黙ってる、舌噛むぞ」

不思議な浮遊感にフレンドは鳥肌が立つほど動揺し、一方通行の声も聞こえてない。

だがそれも一瞬のこと。フレンドを乗せた一方通行は、ふわりと羽の様に窓のないビルの屋上へと辿り着いた。

フレンドを下ろすと、ぺたんと座り込んでフレンドは目を回している。

「うへえく……」

「オイ瑛唄、なんなんだよコイツは。面倒くせエ仕事させんじやねえよ」

「わはは、案外早かったね。お疲れアセロラ」

「ツたく……俺は帰る。ガキの面倒も見なきやなんねエしな」

「ロリコンめ」

「言ってる」

そう言うと、一方通行は面倒くさそうな表情で飛び下りていった。光景としては最悪の自殺シーンだが、彼の能力を持ってすれば無事に着地したことだろう。

「さて、と……フレンドちゃん？」

「あああう……ハッ、お、瑛唄!?!」

「おめでとうフレンドちゃん、君が一番乗りだ」

「えっ? あっ、や、やった!!」

なんとか我に返ったフレンドに、瑛唄がそっと勝利したことを告げる。

するとフレンドは一瞬呆けたものの、その意味を理解するとぱっと表情に花を咲かせた。純粹に勝ったのがうれしいのか、それとも瑛唄の出す賞品が目当てなのかは定かではないが。

とはいえ勝利したことは事実。瑛唄はゲームセットの連絡を参加していたプレイヤー全員に送信すると、座り込んでいるフレンドの目の前にしゃがんだ。

「さてフレンドちゃん、君は勝利した賞品に何を求めるのかな?」

剣道で言う蹲踞の足を閉じたバージョンとでもいうべきだろうか。

そんなしやがみ方のまま、瑛嗶はそう問いかける。

すると、フレンドはそうだったとばかりに佇まいを直し、瑛嗶に向き合った。

どうやらフレンドの求める賞品——というより、瑛嗶へのお願いごととは中々真剣な話の様だ。瑛嗶もこんなゲームの賞品にフレンドがここまで執着するとは思っていなかったので、ちよつと予想外である。

何故なら麦野や絹旗は勿論、人探しにはうってつけの能力を持った滝壺をも相手にしなければならぬ状況なのだ。

フレンドの性格なら、そもそもこの勝負に乗り気ではないだろうし、早々に勝負を投げて居た筈だ。

それでも彼女が勝利に手を伸ばした理由は、この瑛嗶への依頼権にあった。そして、彼女は告げる。信頼に足る実力者である瑛嗶だからこそ、その願いをする相手に相応しい。

「あのね、瑛嗶……私——」

◇ ◇ ◇

結局、フレンドの勝利で収まったこのゲーム。終わってみればヒントをより多く獲得出来たフレンドが一步先んじていたと言っているだろう。

情報収集能力というよりは、今回必要だったのはコミュニケーション能力。如何に普段の瑛嗶を見ているか、そして瑛嗶と関わりのあるような人物を見つけるか、更にその人物からどのように情報を引き出すか。そういう勝負だ。

故に此処に能力の有無は関係ないし、レベルもまったく意味をなさない。

単純にフレンドの運が良かったという結果である。

「ぐぬぬ、フレンドに負けるとは……超不愉快です」

「ふふーん♪ 私だってやるときはやるわけよー」

瑛嗶に映画巡りを付き合ってもらおうと考えていた絹旗としては、中々面白くない。

「ま、いいじゃない。暇つぶしにはなったんだし」

「……はあ、それは超そうですけど……はあ、幾ら潰しても超暇は暇ですぬー」

いつものファミレスの席で駄弁るアイテムの面々。

暇潰しとはいったものの、湧いて出てくる暇の量に辟易する絹旗たちである。案外、暗部というのも仕事が無ければ暇な仕事なのかもしれない。

今回フレンドが頼んだ願いは、瑛嗶以外知らない。何を願ったのか、何を要求したのかは分からないが、下手に踏み込むこともしないということなのだろう。

だが、彼女の願いはこの先の未来をほんのわずかに変える。

そのわずかな違いが最終的に大きくなっていき、大きな変化が訪れるのである。

## 学園都市襲撃

ある日、瑛嗶はほんのささやかな違和感を感じ、目を覚ました。彼がいるのはアイテムの仮拠点住宅。

彼はベッドから起き上がり、外の光が差し込む窓から空を見た。空は薄暗い曇り模様で、今にも雨が降り出しそうな程、どんよりと鬱屈な空気を漂わせている。

時計を見れば、既に夕刻を過ぎていた。赤みの差した曇天模様には、寝すぎたと若干苦笑した。

そんな空に瑛嗶は軽く溜息をしながら、ベッドから足を下ろした。立ち上がれば、眠っている間に凝り固まった体を伸ばすことが出来る。ぐいぐいと身体の筋肉を解しながら、瑛嗶は大きく一つ、息を吐いた。

「さ——つてとお……ふう、今日は何か起こりそうな予感がするな。首筋の辺りがなんだかチリチリするね。もう夜になりそうだけどさ」  
一室を見渡すと、アイテムのメンバーはもういない。フロアリングの床にある、おそらく絹旗のものとと思われるショートパンツや、フレンドの黒タイツ。これらは、彼女らが着替えに立ち寄ったことを示している。

寝ている瑛嗶の目の前で着替えていたのだろうか。そう考えると、瑛嗶が起きないかそわそわしながら着替えたのだろうか。想像力猛々しければ、素晴らしいシチュエーションだ。

とはいえ瑛嗶は過去既に心に決めた相手もいれば、彼女らの様な若い少女の着替えに興奮するほど、けて若くもない。

手早く脱ぎ散らかされたソレを洗濯籠に放り込むと、外へ通じる扉から外へと繰り出した。

「今日は何処へ行くのかな」



——その頃、学園都市の某所に黄色い修道服を着た女が立っ

た。

ジャラジャラと、先にロザリオの付いた鎖を舌にぶら下げた、顔に入れ墨かペイントか模様も書かれている女。風貌だけでなく、舌をだらんとだらしなく出しているのも人の目を引く。

鎖を伝う唾液が、ロザリオを濡らし、地面にぽたぽたと落ちている。献身的な宗教徒であれば、大凡しないような立ち居振る舞いだった。

その瞳は曇った空模様をそのまま映したようで、視界に映る光景よりもずっと遠く、どこか違う何かを見つめている。表情は狂気にも似た笑顔であったが、その実その瞳に宿る怨嗟の念が、周囲の人々に気味の悪い恐怖を抱かせた。

「あー……ウザったいわねえ、こんなクソみたいな場所にいるだけでも身の毛がよだつてのに……」

ぽつり、呟いた言葉は誰の耳にも届かなかった。

けれど言葉の内容から、彼女はこの学園都市を良くは思っていない事が分かる。寧ろ、何が大きな憎悪すら感じさせる声色は、地獄の底から唸り声を上げる獣のようでもあった。

ぽつり、ぽつりと、曇天の空から雫が落ちてくる。

「あん？……雨、か……ハッ、神様でも泣いていらつしやるのかしら？　なんちやってね……さて、始めましょうか——」

次第にそれは乾いた地面を濡らしていく程に、連続した雨音を響かせるようになる。

黄色い修道服がじわじわと雨によって色を変え、鎖を伝う唾液が雨によって押し流された。

彼女はまるで狂ったようにキヒツ、と引き攣ったような笑い声を漏らすと、両の腕をまるで空に掲げるように広げる。空を仰ぐように顔を降り注ぐ雨に向けて、冷たい空気を弾くようにその瞳は熱く、ドロドロの憎悪を光らせた。

そして彼女の舌から伸びるロザリオが、誰にも分からない程に鈍く光った瞬間、彼女の仕掛けた術式がこの学園都市を襲った。

「——」天罰術式……墜ちろ、科学の罪人達よ。お前らの罪は全て、

私がこの手で裁いてやる」

曇り空の間から覗く、一筋の鉄槌。一際大きな強風が、彼女を中心として学園都市全域へと駆け抜けた。

これから始まるのは、科学と魔術の戦争  
舞台は学園都市。世界に許された科学の最高峰にして、人間の英知の詰まった街。

牙を剥く魔術師は、この黄色い修道服に身を包んだ彼女一人——その名は、

「ローマ正教が禁断の切り札、神の右席が一角——前方のヴェントがね」

彼女は一枚の紙を取り出し、その内容を読む。この紙に書かれた内容こそが、彼女がこの学園都市にやってきた理由。仕事であり、復讐であり、戦争である、その内容は、ローマ正教による依頼。

”——ローマ教皇の名において、神の右席に命を下す。

上条当麻、泉ヶ仙瑛瓊

上記二名を観察し、主の敵となり得ると認められし場合は、確実に殺害せよ”

禁書目録、法の書事件、刻限のロザリオ、数々の事件においてその力を振るってきた、瑛瓊と上条当麻。この二人の殺害を依頼する書類であった。

ローマ正教にとって、この二人は既に見過ごせない脅威になりつつあるのだ。

特に、上条当麻。

彼の周りには既に一個勢力と言っているほどの人材と組織がいる。

十万三千冊の魔導書を記憶し管理する禁書目録、イギリス清教『必要悪の教会』、聖人の神裂火織、天草式十字清教。

更に言えば、件の法の書事件でイギリス清教に保護されたオルソラ  
IIアクイナスは、魔導書読解の専門家だ。スペンチャリスト禁書目録と組めば、解き明  
かされずに残っている魔導書の数冊は解き明かされてもおかしくは  
ない。

危険。最早上条勢力という、世界そのものを歪めかねない程の強大  
勢力になりつつある。

彼は此処で潰しておかなければ、やがて確実にローマ正教に牙を剥  
く龍となる。

「……それに、この泉ヶ仙瑛嘎」

そしてローマ正教が上条当麻と同等に危険と感じた男——瑛嘎。

上条当麻の周りに集まった人材の一人として数えるには、その力の  
大きさが見過ごせない実力者。

法の書事件でも、刻限のロザリオでも、事件を引つ掻き回すだけ  
引つ掻き回した男。何を考えているのか、何が目的なのかも分から  
ず、単騎にして勢力と呼べる男。

「ハンツ、ぶっ殺してやんよ。イマジンプレイカー幻想殺しも、この意味不明野郎も！」  
天罰術式は発動された。

周囲で彼女を見ていた一般人は全員昏倒し、彼女に道を上げるよう  
に頭を垂れている。これはそういう術式なのだ。

彼女に敵意を少しでも抱いた者は、例外なく天罰術式によってその  
意識を狩り取られる。

「クハッ……ハハッ、ハハハハッ……！　アハハハハハハ！！」

笑う彼女はまるで狂人の様で、倒れていく人々を踏み越えながら、  
学園都市を悠々と浸食していく。





「だからね、今日は下位個体と追いかけてこしてたのって、ミサカはミサカは説明してみる！」

「へー、君迷子なんじゃないの?」

「違うもん! って、ミサカはミサカは否定してみたり!」

「だって、一緒に家を出て、セロリが飲み物買ってる間にちようちよ追いかけてたらはぐれたんでしょ?」

「違うよ!? 幾らなんでも私そこまで幼くないよ!! これでもミサカ ネットワークは常に進化してるよ!! って、ミサカはミサカは反論するよ!」

「じゃあなんだ、前回りしたらセロリを轢いちやって、転んだセロリを放ってコロコロ転がってきたのか?」

「どんなはぐれ方!? まず私が路上で前回りし始める様な子に見えるの!?! って、ミサカはミサカは憤慨してみる!!」

「うん」

「即答だよこんにゃろう!!」

ヴェントが侵入して天罰術式を発動してからしばらく、瑛嗶は一方通行と別行動して彷徨っていた打ち止めに遭遇していた。首に掛けている軍事用ゴーグルを見るに、どうやら彼女は誰かクローンの一人からゴーグルを奪って逃げているらしい。

雨も降っているのに、その途中でバス停の椅子に座っている彼女と遭遇して、現状付き纏われている訳だ。

彼女を押し付ける先である一方通行を探すも、どうやら膝を擦りむいた彼女の為に薬局に行っているらしい。故に帰ってくるまで相も変わらず彼は打ち止めを弄っている。

小気味よくリアクションを返してくれる元気な打ち止めに、瑛嗶の弄る攻撃が勢いを増していく。どうやら反応が楽しくなってきたようだ。

空は曇り空だが、しかし夜にもなるとあまり変わらない。雨はしつとりと空気を冷たくする。瑛嗶は傘がなかったので、普通に『逸らす』能力で雨を逃れていた。

打ち止めはどうやら防ぐことなく雨に降られたのか、来ていた白い

Yシャツが濡れている。薄着の彼女はそのままだと普通に風邪を引きそうだ。

「ほれ、これ着てな」

「ん？ わーい！ ありがとう！ って、ミサカはミサカは渡されたパーカーを羽織りながら感謝してみたり！」

というわけで、子供に対して優しきを見せる瑛叟。濡れたYシャツを脱いだ打ち止めは、その上から瑛叟のパーカーを着て、前を閉じた。サイズの関係で下に来ているワンピースがほぼ隠れているが、それも愛嬌だろう。

しかもこのパーカー。瑛叟が過去着てきた着物が神の手によって変質したもので、頑丈さは折り紙付きだ。上質な防弾チョッキ並の防御力を誇るのである。弾丸なんて効きやしないぜ。

「あつたかーい♪」

「そりゃよかった」

パーカーを渡したことで、瑛叟は黒の長袖ヒートテック（ユニ○口製）に、下がグレーのチノパンというラフな恰好になっていた。夏は七分のズボンだったのだが、寒くなってきた季節、すっかり長ズボンである。

まあ、元々瑛叟に気温はあまり関係なかったのだが、肉体が若干衰えを見せている今、防寒も必要なのだろう。

「んーそれにしても……むむむ」

「？」

「貴方の身体って凄いいよねって、ミサカはミサカは服の上からでも分かる筋肉に見とれながらセクハラしてみたり」

「まあね。ほら、身体は資本だから」

「触っても良い？ ってミサカはミサカは既に触って事後承諾してみたり！」

ふおおお……！ と、感嘆の声を漏らす打ち止めには、瑛叟はまあいかと好きにさせた。瑛叟の逞しい胸板を小さな手でぺたぺたと触っている打ち止めを、瑛叟は放置して周囲を見渡した。

目覚めた時から感じていた違和感。それが少し前から完全な異変

として感じ取れるようになっていた。

特典として『人類の習得しうる全ての技術』を持っている瑛嗶からすれば、それが魔術によるものだということも理解している。瑛嗶は超能力を得ている以上魔術は使えないのだが、技術の副産物である知識には、発動している魔術の詳細があつた。

ぶつちやけ、人が行使出来る魔術においてはインデックス並の知識を誇る瑛嗶である。まあ発動出来ない魔術も載っている魔導書を十萬三千冊管理している以上、彼女に知識量で勝ることは出来ないのだが。

だが、瑛嗶が周囲を見渡して認識したのは、魔術による変化ではなかった。

「むぎゅお!!」

打ち止めが変な声を上げるのも構わず、瑛嗶は打ち止めをその胸の内に抱き寄せ、その場から跳び退いた。

瞬間、座っていたバス停が爆発と共にはじけ飛ぶ。

「は、はわわわ!!? なになに? 何が起こってるの!?! って、ミサカはミサカは困惑してみたり!」

「さあ? でもまあ、何かが起こったんだよきつと」

瑛嗶に抱き寄せられたままであるが故に、足をぶらぶらさせたまま瑛嗶の服をぎゅつと握りしめる打ち止め。困惑している様子だが、瑛嗶の言葉に現状を認識しようと周囲を見渡した。

すると、爆発した地点の周りからぞろぞろと武装した人間が表れる。銃を持っていることから、学園都市の暗部か何かだろうと予想する瑛嗶だが、打ち止めにとっては唐突なことで分からないままだ。

とりあえず瑛嗶は打ち止めを下ろし、その頭にパーカーのフードを被せた。こうしておけばとりあえず銃で撃たれても大丈夫だろう。パーカーは無敵の防御アイテムなのである。

「さて……狙われてるのは多分お前さんだよね?」

「やっぱりそうなのかな……ってミサカはミサカは怯えてみたり」

「帰っていい?」

「此処で見捨てられるなんて!?! ってミサカはミサカは思わぬ裏切り

に驚愕してみたり!」

いや、関係ないし、と瑛嗶は眩くも、武装者の一人が瑛嗶に一発撃ってきたので、目撃者は逃がさない系の話なのだろう。とりあえず弾道を逸らして回避。

「んー、てかこれってさ、どう考えても計画的なモノじゃん？ セロリの方にも絶対誰か行ってるよね、刺客」

「で、でもあの人には能力があるよ？ ってミサカはミサカは進言してみる」

「能力っても万能じゃないじゃん？ 反射が万全でも打ち破る手段がないわけでもないじゃん？ 開発側の研究者とか、弱点ぐらい把握してるもんじゃないの？」

「た、確かに……だとすればあの人危ないかも！ ってミサカはミサカは慌ててみたり！」

瑛嗶は沢山の銃に囲まれてなお冷静。というか、この程度の武装で瑛嗶は倒せない。それで倒せていたら瑛嗶はとっくの昔に死んでる。

つまり――

「じゃあ、助けに行きますか。お前さんも返却しないといけないし」「え!?! いつの間にか!? ってミサカはミサカは驚愕を隠し得ない!」

――瑛嗶にとっては、危機的状況でもなんでもないのだ。

なんと、打ち止めが気が付いた時には、武装者が全員倒れ伏していた。

「空気を掴んで、投げた。それだけ」

「うわー……ぶっ飛んでるかも」

幾ら銃で武装しようと、弾数には限りがある。対して瑛嗶は無制限だ、何せその場にある空気ですら、彼にとっては弾丸になり得るのだから。

◇◇◇

そして所変わって一方通行は、瑛嗶達を襲った武装集団『ハウンドドック獵犬部隊』

に襲撃を受けていた。

彼らは学園都市統括理事の保有している武装部隊であり、アンチスキルと違つて裏の事情を知っている暗部の武装隊である。

彼らは統括理事の依頼で殺してもなんでも、あらゆる汚い手段を以つて遂行する、名の通り猟犬の如き武装隊なのだ。

今回の依頼は、侵入者前方のヴェントを迎撃する為のキーとして、ラストオーダー打ち止めを回収すること。

その為には、彼女を保護している学園都市第一位、アクセラレータ一方通行が邪魔。彼を襲撃したのは、そんな邪魔である彼を潰すための部隊だ。

リーダーは木原数多。きはらあまた

能力開発の研究者として、一方通行の能力開発をしていた人物でもある。染めた金髪に、顔の半分を黒い模様に入れ墨で飾った、一目で悪人と分かるような悪人面。

殺しも手馴れているのか、第一位の一方通行を前にしても平然と佇んでいた。

「久々だなア、木イ原君よオ……そんな思わせ振りの登場で、期待させてくれんじゃねエか」

「はあ、本当にムカつくガキだよなあテメエは……昔から何度ぶち殺してやろうと思つたか……」

「ハッ、知らねエよバアカ。ンで？ 今更こんな演出して襲撃かました理由は何だ？ まさか、俺の能力を知らねエワケじゃねエよなア」

「誰がテメエの能力を開発してやったと思つてんだ？ いつまでも最強気取つてんじゃねえぞ、クソガキ」

木原数多と一方通行——二人は顔見知りであり、お互いに嫌い合っている。可能ならば自分の手で殺してやろうとすら思う二人が、今は敵としてそれが可能な立場にいる。

となれば、殺し合いは必至。

「とりあえず——ぶっ殺してやるよクソガキ!!」

「ハッ、ぶち殺し確定だクソやろぐウツ!」

だが、勝負は初手から想定外の展開を見せた。

一方通行の能力は『ベクトル変換』、襲い掛かってくる障害、災害、

弊害、全てを跳ね除け無傷を誇る反射の力。

更に、原作と違って今の彼の能力はなんの制限もない。

万全のその能力を突破するには、それこそ上条当麻の様な『幻想殺し』や、瑛嘎の様な『触れる』能力がなければならぬ。

なのに、木原数多という能力開発すら受けていない一研究者が、彼の頬を殴り飛ばした。

「どオなつてやがる……!!」

「まあまったく、いつまで最強気取ってたんだ、ああ？ テメエの能力は無敵じゃねえだろうが……こちとらテメエの能力の計算式！ 傾向！

性格ウ！ 全部把握してんだつづのツとオ!!」

驚愕する一方通行に、次々とその拳、蹴りを確実に当てていく木原。一方通行は能力頼りの最強であり、体術や身体能力においては虚弱な人間だ。その拳や蹴りは、確実に一方通行の身体に多大なダメージを与えていく。

「グッ……ガアアア!!」

「ツハツハア!! 無駄なんだよクソガキがあ!!」

「ごぶっ……グハアツ!!」

ダメージを受けながらなんとか反撃しようと手を伸ばしてきた一方通行に、木原はするりと躲して更に二度三度、一方通行の顎に鳩尾に拳を叩きこんでいく。

どうして反射が効かないのか分からないでいる一方通行はやられるまま、迫る鈍痛とダメージに地面に倒れてしまう。

そんな彼を嘲笑う様に、木原は得意げな表情で一方通行の顔面を何度も何度も蹴り飛ばしていく。

「ほおら!! どう、なんだよ！ 元最強野郎！ 今の気分はア!!」

「グッ……ガッ……!!? ごぶっ……!! ウガア……!!」

「テメエの能力は単純だ……テメエは向かってくるもののベクトルを反対に変えてるだけ……つまりはテメエの身体に当たる前にこっちの拳を引きもどしいだけの話だ。テメエはわざわざ自分から殴られるに行ってるって訳だよ……分かったかな？ マゾヒスト君？」

「て……めエ……!」

「あーあー、もういいから、オマエの大事なもんもこっちで回収して置いてやるからよ。お前は人知れず、その辺で地面のシミにでもなつてくれや。その方が、テメエらしいだろ？」

大事な物——そう言われて、一方通行はハツとなる。

大事な物を回収、一方通行の人間関係、所有物の中で、こんな大掛かりに回収されるものといえれば一つしか思いつかない。そう、ラストオーダー打ち止めだ。

レディオノイズ欠陥電気計画によって生み出され、レベブル6シフト絶対能力進化計画に流用された妹達、その上位個体である彼女は、今尚他の研究者にとって旨味のあモルモットる研究素材なのである。

それは平穩を受け入れがたい一方通行にとって、好意を受け入れがたい彼にとつて、見過ごせない事態だった。

「ま、あの個体の場所はもう分かっているし、回収班ももう向かったから、もう捕えた頃だろ。生け捕りっていわれてるけど、ウチは中々凶暴なのばっかだからなあ？ もう死んでつかもなアオイ！ クツハハハハハ!!」

「木原ア……！ この、クソやろうがああああ!!」

「喚いてろよ一方通行ア!! テメエはどうせ此処で死ぬんだ」

「ぶっ殺す……テメエだけは……ぶっ殺してやる……!!」

「で、それが遺言つてことでもいいか？ じゃ、もう死ねよ」

倒れ伏す一方通行に、木原はその足を上げる。

大人の男が全体重を掛けて躊躇なく踏みつぶせば、一方通行でなくとも人の頭は容易く潰れる。しかも反射が利かないのだ。

「(くそ……くそがア……！ 起これよ奇跡……！ なんでもいい、手柄だつてくれてやる……！ だからあのガキを……!!)」

迫りくる足の裏を、それでも睨み付けながら一方通行は最後まで諦めない。

だが、その諦めずにいた精神を汲んでか知らないが——

「あ？」

——木原の足を止めた男がいた。

「誰だテメエ？」

彼は雨に濡れたまま、おそらく全力疾走してきたのだろう。軽く息が上がっていた。

木原の足を払いのけ、倒れ伏す一方通行の前に毅然と立ちほだかる。拳を握り、闘志をその瞳に秘めて、木原を睨み付けた。

一方通行は目の前に現れたその男を見上げて、呆然した表情を浮かべている。

「な……なんでテメエが……？」

「なんで？ 決まってるだろ」

何故こんなところにいるのか、という疑問ではない。何故彼が自分を助けるのか、という疑問が、彼の頭の中を埋め尽くす。

どうして、何故、そんな疑問が頭に浮かんだかは、分からずに消えていく。学園都市一の頭脳を持つとしても、この状況を理解することが出来なかった。

だが、その疑問は目の前の男が当然の様に答えた。

「助けが必要な奴が居たら助ける、当然だろ」

ツンツン頭に、学ランを着た男。

そう、現れたのは——上条当麻であった。

「俺の勝手だ。勝手に救うからなアクセラレータ一方通行」

本来ならありえなかった展開。

瑛嘎がああ計画を阻止した時に結んだ関係が今、一方通行を救う奇跡となった。



## シリアスの裏のギャグ

一方通行が危機的状況に陥っている状況に遭遇したのは、上条当麻にとつては本当に偶然のことだった。

瑛夏の探し人ゲームに付き合わされたり、御坂妹や御坂美琴とちよつとしたいざこざがあったり、インデックスが勝手にはぐれたり、様々な出来事があった一日であつたけれど、それでも一方通行のピンチに駆けつけられたのは、本当に偶然である。

たまたまインデックスを探している途中で、一方通行が殴打されているのを見つけただけのこと。

不幸体質故か騒動に巻き込まれやすい彼ではあるけれど、それでもこの時、打ち止めだいしなモノを護るために戦っている彼の姿は、どこか自分になつて見えた。

だからだろうか、ちよつとだけインデックスの気持ち理解出来て、ちよつとだけ助けられた自分が誇らしく思えた。

「……一般人は下がっててくんねえかなア？ そいつを殺したらすぐ撤収すつからよ」

「ふぎけんな、目の前で知り合いが殺されそうになつてんだ。はいそうですかといかねえだろ」

「はー眩しいねえ……お前、人殺したことないだろ？ そういう奴に限って、無駄に正義感強くてムカつくんだよな」

唐突に表れた一般人を前に、邪魔されて少々面倒くさげな木原数多。上条のことは一切知らない彼ではあるが、見られたからには殺す。そう判断して、パキパキと拳を鳴らした。

銃を持っていれば簡単に殺せるのだが、如何せん一方通行対策でやってきたので、車の中に銃は置いて来てしまった。

取りに行くのも面倒と判断したのか、とりあえず上条に関しては殴殺することにしたらしい。

「余計な真似……すんじゃね……エよ……三下ア……！」

「ハッハア！ お友達かな一方通行！ テメエみたいな化けモンにもまだ救いはあつたつてワケか？ 滑稽だぜ！ クハハハハハ！！」

「木原ア……！」

木原と上条が対峙する後ろで、呻きながら一方通行は上条に逃げろと告げる。確かに奇跡を願った一方通行だが、この状況は何も変わっていない。

上条当麻は無能力者であり、『幻想殺し』イマジネブレイカーは物理的な攻撃に対してなんの効果も持たない。つまり、どうあがいても木原に上条は勝てないのだ。

しかも、周囲には武装した『猟犬部隊』ハウンドドッグが囲んでいる。木原の指示一つで上条は蜂の巣になってしまうのだ。

「(クソ……どオなつても知らねエぞ……！)」

そんな状況で寝転んではいられない。そう思った一方通行は、上条の作り上げた僅かな均衡状態を使って立ち上がる。ふらつくものの、痛みや出血はそれほどでもない。戦闘にはそれほど影響は出ない筈だ。

「オイ三下ア……テメエ分かってんだろオな……命の保証は出来ねエぞ」

「分かってるさ、でなきやわざわざ助けになんてこないだろ」

「ハッ……良いか、俺が先に周りの雑魚を潰す……幾らオマエでも銃相手じゃ手も足も出ねエだろ……出来るだけ早く片付ける。だからその間、木原の相手はオマエがやれ」

上条の隣に立った一方通行は、上条の言葉に呆れた様な、それでもどこか嬉しそうに鼻で笑うと、すぐに木原を見据えながら役割分担を伝えた。

重火器の相手は、一方通行が。その間の木原の相手は上条当麻が。雑魚を片付けた後、一方通行と上条当麻の二人で木原を叩けば、勝つことだって出来ると踏んだのだ。

木原の攻撃に対して一方通行は防御の手段を持たないが、一方通行の攻撃が通用しないわけではない。今まで通り、一方通行に触れられれば木原と一溜まりもないだろう。血液の逆流、生体電気の逆流、神経信号を乱したって良い。

とにかく触れれば勝負が付くのだ。

「作戦会議は終わったかア？」

「待ってくれてどうもありがとなア、木イ原クンよオ……ぶち殺し確定だ」

「吼えてろクソガキ……んじゃ、二人まとめて殺すけど良いな？」

同時、駆け出す二名。上条と木原が互いに向かつて走り出し、一方通行は周囲の風を操って周りで銃を構えていた者に襲い掛かる。

一方通行の攻撃は一瞬だ。周囲に居るのは精々十数人。遠くにいる者は風で吹き飛ばし、近くにいる者は己の拳でスクラップにしている。一人ひとり、殺しては移動して全員を迅速に殺していく。

対し上条と木原はお互いの拳が届く距離に入った瞬間、その拳を振るった。

「ぐあッ……！」

「ハハハハハ!!」

やはり戦闘訓練を受けているからか、またリーチの差もあるのだろう。最初の一合は木原の拳が上条の頬を捉えた。

大の大人の繰り出す拳は重く、上条もある程度躲して芯は外したものの、一瞬視界が揺れる攻撃に後ずさる。

だが、木原の追撃に対して上条当麻は冷静だった。

「もう一丁——なっ!？」

「お返しだ!!」

後退った上条に、更に踏み込んで蹴りを繰り出した木原だったが、上条はそれをしゃがんで躲すと、打ち上げるように木原の顎に拳を叩きこんだ。

「ぐッ……があ!？」

「おおおおおおお!!」

それは自身が踏み込んだことが裏目になり、アッパーによってふらついた隙を更に二度三度、上条に攻撃を与える隙を作る。腹に、顔面に、上条はその拳を叩きこんだ。

木原も予想外だったのだろう、体勢を立て直すべく一旦大きく後退する。上条はそれを追わなかったが、木原の顔から余裕が消えたのが分かり、構え直した。

「(なんだこのクソガキ……やけに戦い慣れてやがるな……そこらのゴロツキとは動きが違い)」

上条を睨みながら、木原は冷静に頭を回す。

彼にとつて異質なのは、上条当麻が戦い慣れしていることだ。明らかに一般生徒とは違う空気に、もしかしたら風紀委員ジャッジメントか何かかと思つたが――

「(違うな……それなら最初から馬鹿の一つ覚えみたいに能力を使う筈だ……それに、こいつの纏う空気は――)」

――まるで命懸けの戦いを経験したことがあるようだった。

上条当麻の目には、命のやりとりをしている自覚があった。

如何に風紀委員ジャッジメントやアンチスキルでも、命懸けと言われて本当にその覚悟がある奴は稀だ。その証拠に、本当に命が惜しくなれば直ぐに逃げ出す奴が殆どだからだ。

だが上条当麻は違う。本当に殺し合いをしている自覚がある目をしていて、そういう戦いを潜り抜けてきた空気を纏っている。

木原にはそれが気持ち悪かった。

殺し合いをしている覚悟があるのに、人を殺したことがないような甘い戯言を吐く。

「なんなんだテメエは……!」

「……」

「ヤケにあのクソガキに肩入れしてるじゃねえか。そんなに化けモンが大事か? アレと本当に友達になれるとでも思ってるのかオイ」

「……」

「チツ……ムカつくなア、テメエは一方通行よりもイライラするぜ」  
「言いたいことはそれだけか?」

上条の言葉が木原の勘に障つたのだろう。木原は一気に駆け出し、上条に迫つた。握つた拳を振りかぶり、鋭く速く、ソレを振るつた。

上条はその拳をなんとか躲し、時には防御するも、油断のなくなつた木原の猛攻は凄まじい。反撃しようにも出来ない拳の嵐に、上条は防戦一方だ。

だが、それでも上条はあえて笑みを浮かべた。

「何笑ってんだクソガキが!!」

木原はそんな上条の顔面に、一層力のこもった拳を叩きこもうとする。

——だが、上条の視線は木原を見ていない。

それに気づいた瞬間、木原はハツと我に返る。忘れてはいけないものを忘れていたことを、思い出す。自分が誰を殺すためにやってきたのかを思い出す。

上条当麻に気を取られて、背後を取られていることに気が付かなかった。

そう、

「しまッ——」

「お返しだア!! 木イ原クンよオオオ!!」

学園都市最強のレベル5、第一位『一方通行』、その拳が今——木原の顔面を捉えた。

バクトルを操作して、その威力は普通に殴る威力の二倍以上。顔面からぐしゃつという鈍い音が響き、木原の身体は大きく宙を舞う。

鼻血が出たのだろう、宙を舞う身体の勢いに、血液も同じように宙を舞った。背中を打つように地面に倒れた木原は、まだ生きているらしく呻き声を上げる。

「ハア……ハア……!」

「やった、みたいだな……」

「ウ……かはっ……!」

息を荒くして、拳を振り切った状態の一方通行。視線の先で、木原が気を失ったのを確認すると、ガクンと膝を折った。

「つと……大丈夫か?」

「……」

だが、それを上条が支える。一方通行は思いがけず上条に寄り掛かるような体勢になってしまったが、それを振り解こうとはせず、自分の腕を掴んでいる上条の右手に視線を移した。

反射は常時展開している。木原のようなやり方でもなければ、一方通行に触れることなど出来ない筈だった。

——それでも、コイツには関係ねエンだな……

ハ、と短く笑った一方通行は、上条の肩を借りて折れた膝に力を入れた。人に頼ることなど知らなかった、しなかった彼が、唯一上条の差し出した手を取ることが出来た。

「ウチのクソガキが狙われてんだ……俺はもう行く」

「助けは必要か？」

「要らねエよ……だが、助かった……悪いな」

一方通行はそう言っただけで、勢いよく空を飛んでいく。残された上条の方へ振り返ることはなかった。

「……ハハ、素直じゃない奴」

だがそれでも、彼の伝えたいことは伝わったようだ。

◇ ◇ ◇

「んー……どうしたものかな」

「そんなこと言われても困るよって、ミサカはミサカは呆れてみたり」  
一方その頃、瑛嗶と打ち止めはといえば、一方通行との合流は勿論出来ていなかった。上条当麻が助けに入らなければやられていたというのに、何故瑛嗶ともあろう者が足踏みしているのか。

その理由は、途中で襲い掛かってきた新たな刺客による妨害があったからだ。

瑛嗶の目の前で倒れ伏している、黄色い修道服の女。

そう——前方のヴェントである。

瑛嗶が打ち止めと共に歩いている所に襲撃を掛けてきた彼女。風の砲弾ともいえる魔術攻撃を連打し、更に天罰術式を行使する為の挑発行為、もつと言えれば手持ちの巨大なハンマーでの直接攻撃すら行った。

完全な奇襲——少なくとも打ち止めは初撃が自分達の身を襲うまで気が付かなかったし、瑛嗶が気付いていたが放置したそれは、完全

な形で決まった筈だった。

にも拘らず、気が付けば彼女は良く分からないままに倒れ伏す形になったのだ。

「……?!?!」

「えっと、修道服っぽいし……魔術関係の人かな？ 小手調べに送り込まれた雑魚って所か……ってことは纏め役のリーダーがいる筈だよな」

「ッ」

困惑するヴェントだが、瑛嗶の言葉にその困惑は怒りにシフトした。

確かに奇襲を仕掛け、容易く捻られたが、小手調べの為の雑魚と思われるなど、彼女のプライドが許さない。何より、彼女の辞書に否定の言葉は存在しないのだ。

ハンマーを杖代わりに立ち上がり、ヴェントはギョロリと大きく目を動かし、瑛嗶を睨み付ける。その瞳に宿るは憎悪と怒り。

「言ってくれんじやない……誰が雑魚だって?」

「お前」

「ハッキリ言い過ぎかも!? って、ミサカはミサカはマイペースな貴方を窘めてみたり!!」

「いやだって……これなら流石に法の書の時の名も知らないシスターの方がマシだったし……」

「法の書……? 良く分かんないけど、この人絶対主要人物だと思うよ!?! って、ミサカはミサカはってあぶなあ!?!」

いちいちヴェントの勘に障るような言い方でコケにしてくる瑛嗶。優しい打ち止めはそれを窘めるが、既に切れているヴェントは会話の途中で風の砲弾を打ち出した。

まるでギャグの様に飛び退いた打ち止めだが、半分もろに貫つてしまふ。だがその体に傷はない。瑛嗶の素敵防御パーカーが全ての衝撃を受け流していた。

ヴェントはそれを見て『歩く教会』的な物かと判断するが、思い違いである。ただちよつと頑丈なパーカーなだけだ。

「ブッコロス」

「ぎゃー!!? ってミサカはミサカはおよそ女の人がしていい形相じゃない顔に悲鳴を上げてみたり!」

「おちよくってんのかガキイ!!」

「その通りだ」

「違うよこのお馬鹿あ!! って、ミサカはミサカは弁護士を呼べって要求して見る!!」

「どうも、弁護士の瑗唄です。えー、打ち止めさんに情状酌量の余地はありません。よって、死刑で行きましょう」

「弁護士の意味!!」

カオスな空間になった状況。流石に一方通行を助けることが出来なかったのも、納得できた。



## 崩れ落ちた二人

——前方のヴェントは内心焦っていた。

というのも、暗殺対象でもある主の敵——琰嗶があまりにも強かったからだ。

仮にもローマ正教の暗部、まさしく切り札とでもいうべき四つの戦力の一角を担う彼女だ。それなりの自負はあったし、それ相応の実力に見合うだけのプライドや信念と呼べるものもあった。

それがたった一人の男によって打ち砕かれようとしている。それが彼女に焦燥と恐怖を与えているのだ。

しかも、彼女のソレを加速させる要因として、自身の天罰術式が証明してしまう事実があった。

彼女の天罰術式は、簡単に言えば『彼女に敵意を持った人間を昏倒させる術式』である。その効果はどんな強者であろうと例外なく発揮されるものであり、イギリス清教の禁書目録の持つ『歩く教会』でもなければ防ぐことなど出来はしない筈なのだ。

だが、現に目の前にいる琰嗶は昏倒する素振りも無ければ、何か防御術式を展開している様子も、防御霊装を見に付けている様子もない。

それはまさしく、何の敵意も抱かれていない証拠だ。

この前方のヴェントを前に、敵意すら抱かず圧倒してくる相手。しかも、漫才染みたりとりを幼女と繰り広げながらだ。

ヴェントにとってそれは、絶望的ともいえる格の差を見せつけられている気分だった。

「あの人さつきから様子を伺っている状態で止まってるんだけど。何？ サファ○ゾーンの感じ？ ターン制なの？ サ○アリアルボール投げて捕まえるべき？」

「ポケ○ンじゃないから！ 此処現実だから！ って、ミサカはミサカは突っ込んでみたり！」

「いや昨今では現実世界でもポ○モン捕まえる時代じゃん。ポケモ○

G——」

「言わせないよ!? って、ミサカはミサカはメタ発言ギリギリを行く貴方に驚愕してみる! 最早アウトだし! ってミサカはミサカ」

「そっか、興味ないや。でさ」

「最後まで言わせてよ! でさ、じゃないよ! 何その強引な話題の変え方!? 擲擲うのもいい加減にしろこのおバカ——いたたたたたた!?! ってミサカはミサカはアイアンクローに耐えながら貴方の心の狭さに涙目になってみrいたたたたた!?!」

そう、こんなやり取りを未だ目の前で繰り広げる二人を、ヴェントは今までにないくらい警戒し、そして隙を探している。

こんなやり取りをしながらも、どこから攻撃を仕掛けようと返り討ちに遭う未来しか見えないのだ。馬鹿げているにもほどがある。

勝てない、と判断したヴェントは一旦退くべき、という考えに至り、目標を一先ず『幻想殺し』の方へと変えることを決めた。

琰嗶と戦って死ぬのは別段怖くはない。元より死ぬことなどヴェントにとって恐怖にはならない。

彼女にとつて今最も避けるべきなのは、今何も成すことが出来ずに此処で息絶えることだ。

琰嗶がダメなら、せめて幻想殺しだけでも殺す。

それがヴェントの出した結論だった。その後琰嗶に殺されたとしても、それはそれで一矢報いられたことになるだろう。

「あれ? 逃げるのか?」

「ッ……!」

「まあ、追わないし逃げてても良いけど——そこから一步でも動いてみる、どうなるか分かってんだらうな?」

ほんの数ミリ、ほんの僅かに重心を後ろへと傾けただけだ。なのに悟られた。撤退しようとしたその心を、行動を、実行に移す前に止められてしまった。

何故分かる——ヴェントにしてみれば、ほんの僅かな心の動きすら読み透かされている様な気分だ。琰嗶の此方を見る青黒い瞳は、吸い込まれそうな程深く、そして雨の中、日も出ていないのに鈍い眼光を映し出している。

動いたら、殺られる。

そう理解するのに、時間は要らなかつた。目と目が合っただけで、理解させられた。

だが、それでも——ヴェントは気持ちで負けるつもりはなかつた。彼女には覚悟がある。科学に弟を殺され、そして復讐に身を投じたあの日から、彼女の内には強固な意志と死をも恐れぬ覚悟がある。

それは如何に強大な敵が現れようとも関係ない。臆すことはあれど、それでも誓った復讐の炎と強固な覚悟が、彼女の気迫だけは崩させなかつた。

「動いたら……どうなるってのよ……ッ……！」

故に、気丈に返す。言葉を紡げば紡ぐだけ、肉体が、本能が、恐怖という警鐘を鳴らし、嫌な汗を全身に噴き出させた。雨のせいではなく、彼女は己の汗で感じる生温い恐怖に身を震わせた。

膝が笑っている。肩も震えている。それでも瞳だけは揺れず、一点を見つめていた。

それを見た瑛嗶は、一つ笑みを浮かべながら言い放つ。

「動けば、俺達は、帰るー！」

「ッ勝手に帰れよクソがああああ!!」

ヴェントは遂に膝から崩れ落ちた。泣きたい、それだけだった。

◇  
◇  
◇

——原作という本来の流れであるならば、この日起こつたヴェントの襲撃は、後々にヒューズⅡカザキリと呼ばれる天使擬きとも呼べる存在を顕現させる筈だった。

しかし、この世界においてソレは起こりえない。

無論、瑛嗶が居たからだ。

アレイスターの予想とは大きく外れていく事態は、瑛嗶によって打ち止めが安全圏にいることや、一方通行の能力が万全なままであるこ

と、ヴェントが誰よりも先に瑛嗶と遭遇してしまったことなど、瑛嗶によって変えられた歴史の積み重ねによって、変わってしまった現実。

本来ならば、ヴェントの襲撃によって九割方機能停止に陥った学園都市で、対ヴェント策であるヒューズⅡカザキリの顕現を引き起こし、その為に打ち止めを介したウイルスによるミサカネットワークの支配、木原数多と一方通行の衝突による一方通行の覚醒、その後の一方通行の暗部入りなど、事態はより深淵へと進んでいく筈だった。

瑛嗶という最強の個が、世界を変えている。

これは最早、アレイスターにとつても無視出来ない波紋となっていた。

「前方のヴェントが倒されたも同然の状況に加え、打ち止めも安全圏内ラストオーダーにいる。となれば、事態は収束に向かっただけだろう……」

アレイスターは考える。己の持つプランを修正していき、どう行動すべきか、どう駒を動かすべきかを考える。

だが、ありとあらゆる道筋の先で、やはり瑛嗶という存在が介入してくる可能性が、プランの破綻を匂わせていた。

「ふむ……やはり、君は私にとつては障害にしか成り得ないらしい」  
故に、アレイスターは決める。

それは、前方のヴェントを送り出してきたローマ正教と全く同じ決断。

「君には、この辺で消えて貰うことにする」

——泉ヶ仙瑛嗶いずみがせん おうかの、暗殺。

この瞬間、瑛嗶は魔術サイドと科学サイドの両陣営から敵として認識された。

魔術サイドの最大勢力であるローマ正教と、科学サイドの最高峰である学園都市、その両方が瑛嗶という個を潰す為の姿勢を取った。

つまり、世界の半分と半分を占めてきた両サイドが同じ敵を見つけたということ。

そして、琰嗶は世界から敵として認識されてしまったということ。琰嗶の力は最早無視出来ないレベルまで高まっている。このままでは、世界にどんな影響を及ぼすかも分からない存在を、人類は放っておくことなど出来なかったのだ。

「故に、プランとは少々違うが——ヒューズⅡカザキリは切らせて貰う。但し、ヴェント対策ではなく……」泉ヶ仙琰嗶抹殺の為に「目の前に移るウィンドウには、打ち止めと共にじゃれ合いを繰り広げる琰嗶の姿がある。アレイスターは不敵に笑った。

行動を実行に移す為に、アレイスターは持ちうる駒に指示を出そうとする。

そして気付いた。

「……」

Q、ヒューズⅡカザキリの顕現に必要な条件はなんでしょうか。

A、打ち止めの確保が必要です。

アレイスターは試験管の中ゆえに呼吸を必要としていないにも拘らず、どうやったのか大きく息を吸った。そしてわざわざ口を大きく開けて気泡と化す空気を吐き出す。

そして何秒かウィンドウを眺めた後、ぽつりと呟いた。

「……どうしよう」

——その打ち止めは今、琰嗶と共に居るのである。

頓挫してしまったプランに、またも修正を加えるべく頭を抱えたのだった。

## 前方のヴェント編が終わった日

結局、前方のヴェントは瑛嗶の前に敗北し、学園都市に対するローマ正教の切り札は早々に一つ潰えた。

神の右席という名前すら、そもそも知られる前に計画は頓挫してしまったのだ。目標であった筈の『幻想殺し』——上条当麻すら、彼女に会う前に全てが終わった。

全ては瑛嗶という存在がしつちやかめつちやか掻き回したせいでありとあらゆる不幸が打ち砕かれている。

さて、瑛嗶の前で崩れ落ちたヴェントだが、その後どうなったかというところ。

「……殺しなさいよ」

「え？　なんて？」

「殺しなさいって言ってるのよ……目的を達成出来なかった私に、生きる価値はないわ」

「え？　なんて？」

「……」

もう全てが終わりとばかりに、己の命を差し出すヴェント。

だが瑛嗶はその言葉もなんのその、どこぞの難聴系ラノベ主人公の如き耳の遠さで、決死の覚悟を一蹴した。

ヴェントはそんな瑛嗶の馬鹿にしたような表情に、殺す価値もないということなのかと軽く心を抉られながら唇を噛む。

目標に返り討ちにされ、目的を達成することも出来ず、最期に死ぬことすら許されない。それがどれだけ惨めなことか、ヴェントはその身で思い知っていた。

しかし、それは瑛嗶という人間が人を無暗矢鱈と殺さないということの証明ではないだろうか。

そもそも彼は平和ボケした日本の人間——敵だとしても殺したくないという甘さを持っているのか。そんなことを考え、とんだ甘ちゃんだと反吐が出る。

すると、そんな考えにハッ、と嘲笑が漏れた矢先。

「殺しなさい、じゃないだろう——人にモノを頼むときはそれなりの態度つてえ物が？　あるんじゃないでしょうか？」

どうして甘い奴だなんて考えてしまったんだろう。

ヴェントは琰嗶のとても楽しそうな表情に、思わず無表情になって遠くを見つめてしまった。

甘い奴？　平和ボケした日本人？　敵だとしても殺したくない？　何を馬鹿な。コイツは例え味方だとしても平気で手を下せる鬼畜だ。まだその辺によく居る殺人鬼の方が可愛げがある。

琰嗶の言葉で生じた一瞬の思考停止、その隙を衝いてヴェントはその頭を地面に踏みつけられてしまう。

「あぐっ！」

「ねえ、どう見ても貴方の方が悪役に見えるんだけどって、ミサカはミサカはドン引きしながら訴えてみたり……」

「殺してもいいのは、殺される覚悟のある奴だけだッ」

「結構カツコいいこと言ってるけど、貴方が言うて凄理不尽を感じる！　って、ミサカはミサカは慣れてみたり!!」

「まあ、冗談として」

ヴェントの頭から足をどけ、琰嗶は不意にその辺にあつた建物の屋上へと視線を移動させる。

その視線の先には、雨の中見辛いが人影が一つあるように見えた。打ち止めも、そのなんだか不穏な空気に騒がしい口を閉ざし、琰嗶の視線の方へと目を移す。

そこに居たのは、常人よりも大分大柄な男だった。筋骨隆々と言えば分かりやすい程に鍛えられた身体は、自身の着ている服を押し上げて尚その主張をやめない。そして強面な顔には、明らかな警戒と敵意の表情が貼り付けられていた。

「お前さん、この子の仲間だろ？　見ての通りだ……俺は別にどうこうしようとも思っていないから、連れて帰るなら止めないぜ」  
「……そうであるか」

屋上から飛び下り、男はその見た目に似合わぬ軽やかさで着地した。

佇まい、そしてその歩き方から、武の心得があることが分かる。それも、かなりの実力者だ。身体能力だけなら、瑛嗶が今まで出会った中でもトップクラスだろう。

男は蹲るヴェントの隣まで歩み寄り、瑛嗶と改めて対峙した。

「私は神の右席が一人……後方のアックアである」

「どうも、学園都市の一般生徒A、瑛嗶さんだよ」

「ふ、貴様が一般生徒であれば、この世界は魔術と科学で二分化などされてはいない。もっと混沌とした世界になっていた筈——今回は一度退かせてもらうが、再び相見えることになるであろう」

「そりやどうも」

そう言うと、後方のアックアと名乗った男は踵を返してその姿を消した。魔術ではなく、どうやら超スピードで跳んでいった様だ。故に、打ち止めには見えなかったが、瑛嗶はその背中を見送っていた。

そしてその姿が見えなくなった時、瑛嗶もまた踵を返して歩き出す。打ち止めもハツと気づいてその背中を追いかけた。

「さ、帰るかな」

「結局なんだったの……って、ミサカはミサカはドツと疲れを表してみる」

また軽快なテンポで会話を繰り広げながら、瑛嗶と打ち止めは仲良く雨の中に消えていくのだった。

「……………あーれー？ あの流れで私放置ですか？」

前方のヴェントを置き去りにしたままに。



その後、打ち止めは無事に一方通行の下へと返され、前方のヴェントは煤けた背中を隠すことなく、誰にも見つからないルートでトボトボと帰ったらしい。

そして雨が上がった頃には、学園都市はいつも通りの機能を回復。



木原数多に関しては、天罰術式から目が覚めた『警備員』アンチスキルによって、銃刀法違反で逮捕。意識のないままに搬送された。目が覚めた時、檻の中に居た状況に『ふあ!』と声を上げたのは彼だけの秘密だ。

学園都市中を何やら崇高な正義感と使命感に突き動かされ、打ち止めを探し走り回っていた上条当麻も、ばったり出くわした瑛嘎にあの子なら帰ったよと告げられたことで、無意味なマラソンを止める。

打ち止めが無事だったことを安堵すべきか、無駄に何キロも走ったのに、実は木原を倒した辺りで全部終わっていた事を嘆くべきか、彼には分からないのであった。

そして瑛嘎はというと、軽い散歩を終えた後、アイテムのアジトへと帰って寝た。

瑛嘎にとつてはこれといった厄介事もなく、いつも通りの日常を過ごした位だ。前方のヴェントも、特に能力を使うまでもなく撃退し、迷子を保護者に返す途中の片手間にしか感じていない。

また、後方のアツクアに関しても、興味がなかったのかあまり覚えてもない。アツクアは覚えているが、その前に付いていた方向を忘れる位には、興味がなかったのである。

「はあ……さて、と……そろそろなんか面白いこと起きないかね」  
そんな呟きは、誰もいない空間に響いて消えていった。

瑛噺が動くきっかけを与えた犯人はアイテムの方々です

この世の中、数十億という人間がいればその分だけの思想や願望が渦巻いている。

それは科学サイド、魔術サイド問わず同じこと。それぞれがそれぞれの思想に基づいて、何らかの目的を達成しようと努力を重ねている。

中でも、両サイドのトップと呼ぶべき存在達は、世界そのものを変えかねない目的の為に動いていた。この時代、この瞬間において言うのなら、アレイスター・クロウリーとローマ正教、もとい神の右席だろう。

先日、アレイスターが管理している科学の最高峰学園都市に、神の右席である前方のヴェントが侵入した。目的は科学サイドへの復讐——そしてとある人物たちの殺害である。

一人はこの世界の異能を例外なく殺す『イメージブレイカー幻想殺し』、上条当麻。そしてもう一人は、おそらくこの世界において最強の存在、泉ヶ仙瑛噺。

しかしそれぞれの保有する能力は、世界規模で見れば大したことはない。至ってシンプルで、大したことのない能力。何せ『右手で触れば異能を消せる』、『あらゆるものに触れることが出来る』、『あらゆるものを逸らせる』、この程度の能力だ。

どれも対峙した時、危険性のある能力とは言えないだろう。どちらかといえどどれも守りに特化した能力なのだから、攻撃性は一切ない。

だが、問題は能力ではない。上条当麻はその能力の本質が、泉ヶ仙瑛噺は泉ヶ仙瑛噺であることが問題だった。

上条当麻の『イメージブレイカー幻想殺し』は実際の所、その能力の本質が一切分かっていない。超能力でもなければ、魔術でもない、それでも危険視しな

ければならない程の何かを秘めている。もつと言えば、彼を中心に最早上条勢力と言っても良い程の戦力が集まっているのも問題だった。

泉ヶ仙瑛嗶は、元々保有していた『触れる能力』に加え、どういう訳か二つ目の超能力である『逸らす能力』を獲得した異例の存在。しかも、その戦闘力は素の状態で異常なまでに高い。しかも二つの能力を巧みに使い、前方のヴェントを圧倒してみせた。

故にこそ、この両名は互いのサイドにとって、非常に重要な人物となっている。

特に泉ヶ仙瑛嗶は危険だ。

彼は既に魔術サイド、科学サイドのどちらからも排除すべき対象として命を狙われている。いっどこで襲われるかもわからない状態だ。勿論、全暗部には見かけた場合問答無用で殺す様に指示が出されている。

ソレは勿論、アイテムの面々にもだ。

「……正直、こんな命令に従うのは癩だわ」

「それには超同意ですね……」

「でも……いうこと聞かないと、私たちも狙われちゃうって訳よ」

「……南西から信号が来てる」

彼女達は今いつものファミレスにおり、内心穏やかではなかった。

瑛嗶の姿はないが、話の中心は瑛嗶のこと。彼女達にも下された瑛嗶殺害命令——これは彼女達にとつてとても心苦しいモノだ。

今まで数々の汚い連中を始末し、その手を血で汚してきた彼女達。今更命を奪うことに対して躊躇はないし、仕事であればどんな人間でも手に掛ける覚悟はあった。

しかし、瑛嗶に対してそうするには……楽しい思い出が増えすぎた。

良くも悪くも、彼の登場によってアイテムのメンバー同士の親交も深まったし、それによって全員が瑛嗶に対して普通以上の信頼を寄せている。瑛嗶を殺すという命令に対し、彼女達の心境は重かった。

「というか、瑛嗶の奴を殺すって無理だっつの」

「どうやっても超殺せそうにありませんしね」

だからだろう。彼女達は平気ですと言わんばかりの表情のまま、瑛嗶を殺さないという選択を取る言い訳を探す。口々にあーだのこーだの命令に対して文句を付け、自分達が動かなくても良いという正当性を探していた。

それはとどのつまり、彼女達が瑛嗶を殺したくないということの表れだった。

そしてそれは彼女達だけに留まらない。

この学園都市には暗部の組織としてアイテムの様なチームがいくつかある。アイテム、スクール、ブロック、グループ、メンバー等々。勿論全てのチームに指示は下されていた。

だが、ここでアレイスターの誤算が生まれた。

その大半チームが瑛嗶抹殺の命令に対して肯定的ではなかったのだ。

アイテムは勿論、垣根帝督率いるスクールも、情報に精通している土御門元治が所属しているグループ、この三つのチームはそれぞれの理由でこの命令を聞かなかった。

瑛嗶と全く接点のないブロック、メンバーに関しては——瑛嗶を殺そうとした瞬間、返り討ちにあったのだ。気付いたら全員が牢屋の中に入れられていたのだから、彼らの心境は複雑だっただろう。

まあ、彼らの力で瑛嗶が殺せるなら苦労していないのだが。

「おーす、今日は何の集まり?」

「あつ、瑛嗶!」

するとそこへ瑛嗶がやって来た。驚いてアイテムの面々は全員身体が硬直する。

見つけ次第殺せという命令は、いついかなる状況であろうと実行に移して構わないということだった。故に、命令に従うのなら、この場で瑛嗶に攻撃を仕掛けるのが正解なのだろうが、咄嗟のことに行動に移せない。

「あ、えと……」

「その……」

言いつらそうにしているのは、絹旗とフレнда。二人は認めないだ

ろうが、どちらも瑛嗶に懐いていた。四人の中でこの二人が最も複雑な心境なのだろう。

「ん？ 何？ もしかして俺を殺せとでも命令された？」

「!？」

「アンタ……知ってたの？」

だが瑛嗶のその言葉で、四人の表情はまた驚愕に染まる。

「知ってる知ってる、だってもう何百人ほど返り討ちにしたし」

「そんなゲームのモンスターいっぱい狩ってきましたみたいな言い方」

「まあ正直、レベル5級が何百人来たところで問題ない」

「アタシらの悩みを返せ」

「そのパフェ貰っていい？」

「超自由ですか」

相も変わらず瑛嗶は平常運転。

シリアスな席を一瞬で霧散させてしまうマイペースに、アイテムの面々はアホらしくなって脱力してしまう。瑛嗶に関して悩むことは無駄な労力だと悟った。

「でも結局、瑛嗶を狙う奴はいっぱいいるわけよ。どうするの？」

「あーそうだなあ、確かにこの状況が続くのは面倒くさいかもなあ」

「ちよつと、それ私のパフェなんですけど」

「面倒だし、学園都市滅ぼすか？」

「やりかねないから怖い!? 止めて欲しい訳よ!」

「やります」

「駄目!!」

瑛嗶の暴走が始まらない内に、滝壺以外の全員が必死に引き留める。

学園都市を滅ぼすと決めたら、本当にやりかねないのがこの瑛嗶という男だ。彼女達の基準で言うのならレベル5を全員振り回す破天荒さと、ソレが出来るだけの圧倒的実力を兼ね備えている人物。どこから現れたのか、何者なのか、それすら分からない存在。

にしても、こんなに軽々と学園都市滅ぼすと言えるのも瑛嗶クオリ

テイか。

「というか、こんな命令出るなんてなにしたのよアンタ」

「え？ 特に何もしてないけど」

「超嘘でしょ！」

「なんだお前、人間卒業させてやろうか」

「どういう脅し!? 一体何になる訳よ！」

「雌豚か、神」

「差！」

わはは、と笑う瑛嗶に四人はまたもぐぬぬと何も言えなくなる。

どうも瑛嗶が笑っている姿を見ると、自分の中の何かが心地よさを感じてしまって何も言えなくなってしまうらしい。彼女達もどうやら大分瑛嗶の世界観に絆されてしまった様だ。

まあ、瑛嗶が寝ているところに潜り込んでくるくらいには、懐いてしまっているくらいだ。おそらく瑛嗶になら命を預けても良いくらいには、信頼してしまっている。

それはなんだか、悪くない気分だった。

「まあさておき、心当たりがない訳じゃない」

「そうなの？」

「どうせアレイスターが原因でしょ。俺が好き勝手するから、なんかの邪魔になっただんじじゃない？」

「超ありそう」

「てことで、手っ取り早いのはまあアレイスターの坊ちゃんをコロコロしちゃおう」

「わあ可愛い！ で、結局コロコロってなににする訳？」

「ぶっ殺す」

「私はなんてことを可愛いだなんて！」

「というか統括理事に会えるのがまずおかしいんだけどな」

フレンドを除く三人は理解していた様で、フレンドのアホな子加減にしらーっとした目を向けていた。ダブルでショックを受けるフレンドである。

わはは、と瑛嗶がまた笑う。どこまでが本気でどこまでが冗談なの

かが分からないから余計に性質が悪い。

瑛噺は絹旗のパフエをサラツと食べ終わると、その器にカラン、と音を立ててスプーンを放る。絹旗があ、と声をあげると同時に瑛噺はゆらりと笑みを浮かべた。

瞬間、全員の視線が瑛噺に集まる。

この笑い方をした時、瑛噺が何かしでかすことを経験で理解しているからだ。また今度はどんな無茶苦茶をするつもりなのかと、ハラハラしつつ、でも内心で期待している自分がいた。

結局、あーだこーだと言いつつ、何を考えておきながら、心の底では結論は出ていたのだ。

瑛噺が何かしでかすなら、命懸けでそれに付き合ってやろうと。

「じゃ、軽く戦争でも終わらせよっか」

でも、そのスケールは予想してない。

## オナイヌス、 出番終了

瑛嗶がこの世界で好き勝手に暴れた結果、原作とは変わってしまったことが多々ある。

まず第一に、一方通行の能力が万全のままであること。あの実験に瑛嗶が関わったせいもあるが、彼の能力は何の制限も付かない状態で今まで通り使えるままだ。

つまり、依然として学園都市最強の能力者という事実は一片の傷もない。今後の原作内容を鑑みれば、中々後に影響を残す変化だろう。そして第二に、レベル5の大半が顔見知りになり、それなりの親交を深めてしまったこと。原作通りならほぼ初対面、かつ立場上敵対関係になる可能性が高かった彼らは、瑛嗶という存在を挟むことでその可能性を極めて低くした。

ましてこの先敵対関係になろうものなら、確実に面白がって瑛嗶が関与してくると、聡明な彼らはすぐに予想を付けた。そしてそれが彼らの敵対行動を大きく妨げている。

さらに第三、暗部組織の無力化。

瑛嗶がアイテムに加入してしまったことにより、暗部にいる実力者の大部分が瑛嗶に丸め込まれてしまった。レベル5勢が瑛嗶に絆された以上、それ以上の戦力はほぼ無力化されたと言って良いだろう。如何に科学の力を駆使しようが、レベル5の面々に連携でも取られようものなら、すぐさま灰塵と化すこと必至だ。

ついでに第四、魔術サイドの侵略阻止。

瑛嗶がこの学園都市にいる以上仕方がないのだろうが、神の右席を筆頭に、この学園都市で起こった大体の攻撃や魔術師達の思惑が悉く阻止されているのだ。

夏休みの『御使墮し』エンゼルフォールを始め、『法の書』事件、『女王艦隊』事件、そして『前方のヴェント侵略』事件。学園都市の中だけではなく起こった事件ではあるが、その全てが瑛嗶の干渉によって粉々にされたのだ。

軽く挙げただけでもこれだけの原作改変が起こっている。



その結果が、世界中のローマ正教徒と学園都市暗部を敵に回すという事象を引き起こしているのだが、瑛嗶からすればそれでも大して問題は無い。

いや、現在瑛嗶の肉体は転生を繰り返した結果、全盛期ほどの性能を発揮出来ない状態。物量で攻められた場合は体力切れで敗北する可能性もないわけではないが、それでも瑛嗶は個人で世界中を相手に出来る存在なのだ。

そしてこれからの話だ。

瑛嗶に出された抹殺命令を聞いた結果、当の瑛嗶によって『ブロック』と『メンバー』の暗部チーム構成員が返り討ち、全員拘留されてしまった。

そして一方通行アクセラレータの能力が万全、それによって木原数多の打破ラストオーダーに原作で使用した黒翼の発現がなかった。またここまで目立った打ち止めの危機が悉く阻止されていることもあり、彼の暗部入りがそもそも成り立っていない。

そう、つまりアレイスターへの交渉権を獲得すべく動く筈だった『ブロック』が消滅したこと、一方通行アクセラレータが表舞台において、能力が万全であること、瑛嗶というアレイスターへの直接連絡手段を持っている存在が要ること、これらが絡み合い、暗部内での抗争事件そのものが消滅したことになったのだ。

それはつまり、

原作では一方通行アクセラレータに虐殺された垣根帝督。

『スクール』との戦いの中、麦野沈利によって肅清され死亡したフレンド。

抗争中に『体晶』を使い過ぎて衰弱した滝壺理后。

暴虐を尽くし始め、浜面仕上によって撃破され重傷を負った麦野沈利。

これら全てが無傷のままになるということに他ならない。なんなら、瑛嗶という過剰戦力がいる以上、浜面仕上がアイテムに来る必要がないまでである。滝壺もフレンドも麦野も無事、どころか瑛嗶のおかげでアイテムの結束はより固くなっているのだから、不幸なことには

ならない。

よってアレイスターの計画は、以上の事柄から殆どが破綻に向かっているのだ。ヒューズ・カザキリの出現が阻止されたせいで、かの『法の書』をアレイスターに伝えたときれるエイワスと呼ばれる霊的存在も顕現出来ていない。

全て瑛嗶のせいで、破綻した。

「……これは、どうしたものかな」

アレイスターはほつりと呟く。

こんなことは予想外だった。瑛嗶の出現は確認していた——突如学園都市内に現れ、その身に良く分からない能力を保有していた怪物。

それがまさか此処までプランをしつちやかめつちやか掻き回していくとは思わなかった。人の身である以上は、なんら障害にならないとすら思っていたのに。

狙いすましたかのように邪魔してくる。

しかも、根本からごつそり邪魔してくるのだから手に負えない。殺そうにも彼を殺せそうな手段が現状見当たらない。

この世界の流れは、アレイスターの脳内に詰みの文字すら感じさせていた。

「……神の右席による彼の殺害も、期待値は半々といったところか」

残る手段は、魔術サイドの干渉を利用することだが……それでも可能性は半分以下。いつそ神頼みしたくなるほどだ——科学サイドの長としては、皮肉な話ではあるが。

「全く、魔神とは別の意味で、厄介だな……」

彼は焦っていた。

◇  
◇  
◇

その後、瑛嗶はアイテムの面々と別行動を取る。

その夜、一人誰もいない場所へとやってきていた。学園都市の外の道路上。人もおらず、夜遅く故にそこを通る車もない。学園都市に行

くためだけの道故に、イレギュラーが起こらない限り他の人間が来る可能性はまずないだろう。

そんな場所で、瑛嗶はプラプラと右手を振る。

そして発動するのは『触れる能力』。

これは『逸らす能力』とは違って、神によって直接与えられた力だ。あらゆるものに触れるという効果は、本当にこの世界の”あらゆるもの”に干渉することが可能な代物である。

そう、つまり——”この世界そのもの”に触れることだって可能だろう。

「よっ」

瑛嗶の手が空中の見えない何かを掴んだ。

普段使っている空気を掴む能力行使とは、何かが違う。その証拠に、ソレに瑛嗶が触れた瞬間、この世界そのものがぐらりと揺れた様な衝撃が生まれた。

瑛嗶は今、世界そのものに触れているのだ。

無論、このまま瑛嗶が掴んだソレを滅茶苦茶に振り回せば——至極当然、世界は粉々に砕け散ることだろう——瑛嗶を残して。

だが瑛嗶の目的はソレではない。

「やめろ」

瑛嗶の行動を阻止しようとする声が、誰もいない場所に響く。

瑛嗶の口端が吊り上がり、瑛嗶の手がソレを放した。

そして声がした方へと振り返ると、そこには先程まではいなかった筈の存在が、冷や汗を流し、警戒するように佇んでいた。

眼帯を付けた隻眼、なんとも露出の多い革の衣装、鍰広の帽子を被った金髪の少女。

瑛嗶はゆらりと笑みを浮かべ、彼女に対面する。

「さて、お前さんは何処の誰かな？」

「……私の名前はオティヌス、魔術サイドにおける魔神と呼ばれる存在だ」

「へー」

「お前、今何をしようとしていた？」

「ちよつと世界をひっくり返してみようかと思っただけだよ」

「……お前、一体何者だ？」

現れたのはオティヌスと名乗る少女だった。

瑛嗶は別にこの少女に用があったわけではない。だが、この世界に来てからそういう存在がいることは理解していた。

瑛嗶は転生特典で「人類の習得し得る全ての技術」を保有している。それはつまり、人類が現在過去未来において行使することの出来る技術とその知識を脳内で検索し、知識と共に行使することが出来るということだ。

それは科学においても、魔術においても同じこと。

”魔術書の原本の知識”だって例外ではない。

この世界において魔術書の原本の数々を解読、分析し、魔術の究極に至り、神の領域に足を踏み入れた者を『魔神』と呼ぶのなら、瑛嗶は既にその資格を得ているといっても過言ではない。

瑛嗶は使わないだけで、遠い未来に存在する、超能力を保有しながら魔術を行使する技術すら持っているのだから。彼はその気になれば、魔神と同等以上のことが出来る。

故に、先ほどやろうとしていたことの理由は単に、魔神を呼び寄せるためだ。

「俺は泉ヶ仙瑛嗶——面白いことが大好きな男だよ」

そして同じく魔神であるオティヌスと呼ばれる少女は、そんな瑛嗶の放つ圧倒的なプレッシャーに息を飲んでいた。

彼女はその気になればなんだって出来る力を持った少女だ。現状は弱点や欠点もある不完全な状態ではあるが、それでも内包する力は世界を自在に消滅、創造することが可能な程の力なのだ。

そんな彼女が、瑛嗶を前に警戒心を最大まで引き上げているのだ。

「その力……魔術ではないな？　かといって超能力でもない……私も理解出来ない力など、明らかに常軌を逸している」

その最たる理由は、世界を容易く破壊することの出来る力が、何の

儀式も、霊装も、呪文もなく、ただ指先を動かすだけで行使出来るということ。それがどれほど危険なのか、想像すれば子供でも分かる。

瑛噺が軽く指を振るだけで、この世界が壊れるのだ。

「何が目的だ？」

オティヌスは慎重に、瑛噺に問いかけた。

——その目的はなんだと。

瑛噺はゆらりと笑みを浮かべ、そしてその問いにこう答えた。

「いや、なんか暇だったから」

オティヌスはその答えに、ぽかんと口を開けた。

## 全世界VS瑛嘎（十巻き込まれた上条当麻）

さて、此処までの物語を読んだなら、あとは簡単だろう。

瑛嘎の仕業でありとあらゆる物語が破綻してしまった。

暗部の抗争は起こらないし、アレイスターのプランは最早瑛嘎をどうにかしなければ実現不可能だし、ローマ正教も瑛嘎をどうにか出来ない以上下手な行動は取れない。両サイド共に全く動くことの出来ない状態に陥ってしまったのだ。

ソレに厄介なのは、瑛嘎という最強の存在だけでも邪魔なのに、そこに『幻想殺し』という切り札があるということ。これではどんな強力な霊装を使おうと、瑛嘎による強行突破によって上条当麻がなんら支障なく運ばれてきて、『幻想殺し』で破壊されるのは目に見えている。

頼みの神の右席も、前方のヴェントによる瑛嘎の報告によって無暗に特攻するのは無意味と判断している。左方のテツラの優先順位を変更する魔術でも、アツクアの聖人と原罪の消去による超戦闘能力でも、瑛嘎を前にすれば大したことはない。一撃の下に沈む可能性の方が高い。

それほどまでに強いのだ、瑛嘎という怪物は。

そしてそれは最早魔術サイドにおいては共通認識。ありとあらゆる魔術サイドのトップは瑛嘎の脅威性を理解している。ローマ正教が沈黙させられているというだけで、瑛嘎の実力は理解出来るというものだからだ。

だがそれは、原作において右方のフィアンマが引き起こした第三次世界大戦が起こらないということに他ならない。

ロシアの大統領に宣戦布告させようにも、敗色の濃い戦いを始めようとする馬鹿はいないからだ。

忘れてはいけないのだ。

仮に第三次世界大戦を引き起こした場合、敵は瑛嘎だけでないというこ

うことを。ローマ正教とロシア成教が協力したとしても、学園都市の戦力は勿

論、『幻想殺し』や科学サイドの超能力者を敵にするわけで、更にはそこにイギリス清教の魔術師たちも味方してくるのだ。『禁書目録』や聖人も脅威には違いない。

瑛嗶一人を相手にしても負ける可能性があるのに、追加戦力があるなど戦争してる場合ではない。

つまり、原作において引き起こされた第三次世界大戦が起こらないということは、右方のフィアンマはその右腕の力を高めることが出来ないということ。

それは『幻想殺し』や『禁書目録』、天使を一度身に宿したサーシャⅡクロイツェフを回収した所で同じこと。彼の右腕は、敵とした相手の力に応じた出力しか出せないのだ。戦争で巻き起こる悪意を対象にした膨大な出力は、これでは得ることが出来ない。

これで原作で起こった世界大戦中の何もかもが発生しないことになった。

残す原作イベントは『C文書』による魔術的精神支配事件だが、これは本来上条麻だけでも解決してしまう事件だったし、なにより瑛嗶がいる段階でローマ正教全体を結束させようと決定打にならない以上やる意味が無い。この事件も消えてしまう。

さて、こうなると各位に残された選択肢はなんだろうか。

学園都市は瑛嗶をどうにか出来ない以上、膠着するしかない。

魔術サイドも同様だ。

ならば神の右席は？ 右方のフィアンマはどう動く？

答えは簡単だ。

右方のフィアンマだけは、別の手段を持って動けばいい。

敵と設定した相手に応じた出力を出す右腕があるのなら、瑛嗶を敵に設定すれば世界大戦を起こさずとも相応の出力を手に入れることが出来る。

あとはどうにかして右腕を固定化させる素材を集めればいいだけのことだ。

彼は動いていた。

瑛嗶が『御使墮し』の時に天使を撃退したと聞いた時から、密かに動いていたのだ。瑛嗶が手に負えない存在だと確信して、取り返しがつかない状況になる前に。

「——これで、あとは『幻想殺し』だけだ」

彼は不敵に笑う。

その手には、一つの『霊装』が握られていた。

◇ ◇ ◇

瑛嗶がオテイヌスを遊んでいる内に、事態は着々と進んでいた。

それもそうだろう。神の右席は未だ前方のヴェントが退けられただけで、右方のフィアンマを筆頭に後方のアックア、左方のテツラと三人の実力者が残っている。

その中で右方のフィアンマが先陣切って動き出しているのだ、後方のアックアと左方のテツラも同様に動いていない筈がない。

アックアは元々、戦争などの騒動で起こる被害を最小限にするために動いている。ならばこれから起こるであろう世界規模の戦いにおいて、原因たる瑛嗶を放置することは出来ないだろう。

テツラは元々人々の平等な救済を目的に動いており、ローマ正教徒をその救うべき人々とみなしている節があることから、ローマ正教が関わる戦いが起こればそこに参加するに違いない。

フィアンマが対瑛嗶を想定して世界を救済する力を得ようとしている以上、彼は瑛嗶の前に対峙することになるだろう。その際は『幻想殺し』を手に入れるために学園都市に攻め入る可能性もある。

そうなった時、二人の戦いに巻き込まれて死ぬ人間がどれほどの人数になるのかは、想像出来ない。これだけでもアックアとテツラが出張ってくる理由になりえる。

つまりそう、

「随分と敵が増えたもんだな」

「瑛嗶さん、自業自得って言葉知ってます?」



「言葉の意味は知ってるよ、それがどうかしたのか？」

「いえ、なんでもありません」

瑛噺が上条当麻を抱えて、大勢の魔術師から逃げているのは、当然の状況といえた。

「なんでこうなってるんですか！」

「多分アレじゃね、幻想殺しブッコロスの結論がどつかで出たんじゃね？」

「不幸だ!!」

「まあまあ、狙いは俺でもあるみたいだし……守ってやるから、ちよつと口閉じてな。舌噛むぞ」

こうなった発端は、学園都市統括理事であるアレイスターから下された一つの指示が原因である――

## 娯楽主義者は、

学園都市の統括理事長であるアレイスターは、瑛嘎によって悉く破壊したプランを立て直すためには、どうにかして瑛嘎の存在を消してしまわないといけないと考えた。

正直な話、まだ彼のプランは終わったわけではない。瑛嘎の手によって始まる前に頓挫させられ続けているだけで、必要な材料や存在はまだ健在なのだ。一方通行や打ち止めも死んだわけではないし、レベル5の全員が生存しているし、幻想殺しも虚数学区もなにもかも消滅してなくなったわけではない。

瑛嘎さえ死ねば、今まで取りこぼしたものはどうにでも出来るのだ。

そしてそれは、アレイスターだけではなく、神の右席である右方のフィアンマも同じこと。今や瑛嘎のせいで無視出来ない程に膨れ上がった上条勢力は、魔術サイドとしてもローマ正教としても邪魔ではない。

上条勢力を潰す為には、まして神上に至る為には、瑛嘎の存在がどうしても邪魔ではない。

——敵の敵は味方。

そう、つまりアレイスターと右方のフィアンマはお互いが何を目指しているのかは知らないが、互いの動向を探る事で協調しようと打って出たのだ。

アレイスターはローマ正教が近い内に瑛嘎を始末すべく動くことを予想出来ていたし、フィアンマとて瑛嘎程の存在が学園都市の手に余ることを分かっていたのだ。

打ち合わせはない。必要もない。

瑛嘎を殺した後、お互いの背中を刺せば、勝者は一人。

アレイスターとフィアンマは互いの動向を探り合い、最適なタイミングで動き出したのだ。

最初に動いたのはアレイスター・クロウリー。

彼はローマ正教の準備が整ったことを知った瞬間、彼らが容易く入

り込めるよう学園都市に大きな隙を作り出した。  
つまり科学サイドの頂点、学園都市をパニック状態にすることである。

窓のないビルからあらゆるツールを使って学園都市の電気系統を狂わせた。一時的な停電状態を引き起こし、それに対応すべく動く警備員や関連会社のサーバーを一時ダウンさせた。

そうすることで学園都市を照らしていた明かりが全て消え、都市内は一気に暗闇へと落ちる。対応は遅れ、日常から非日常へと叩き落とされた学生達は困惑し、ほんの少しの時間身動きを取ることさえ出来なくなつた。

勿論能力を持った者は即座に動き出すことが出来るかもしれないが、それでも更なる緊急事態が訪れれば即時対応することは不可能だ。

そうつまり、停電になつた数分間でローマ正教の魔術師が大勢、学園都市に入り込んだのだ。目的は瑛暁の抹殺。

フィアンマのやったことは簡単だ。

まずローマ教皇に無理矢理指令書を書かせ、ローマ正教徒に学園都市への侵攻と上条勢力の討伐——特に泉ヶ仙瑛暁の抹殺を命じた。

さらに霊装であるC文書を使うことで、ローマ教皇の命令に魔術的強制力を持たせたのだ。

こうすることで、ローマ正教の魔術師達は学園都市に侵攻し、アレイスターが隙を作つた瞬間に侵入することに成功した。

当然アレイスターもわざわざ都市を無防備にする筈はない。瑛暁を殺す以外の損害は無いに越したことはないのだ。故に、すぐに停電は復旧し、各方面のサーバーも復活する。

さらに侵入者が入り込んでいることを風紀委員や警備員に伝達し、暗部すら駆り出して無駄な損害が出ないように手を回す。

事前に計画していた事ゆえに、タイミングはばっちりだ。大規模災害発生時対策としての、都市全学の避難訓練と銘打って、殆ど的一般

学生は避難所への誘導がほぼ済んでいる。

戦闘が起これば建造物などの被害はあれど、人命被害は最大限抑えられる。

「だが、それだけだと思ふなよ」

しかしアレイスターはこの混戦の中で、自分のプランを大きく進めるつもりでいた。裏で手を回し、更に打ち止めの確保、それによって一方通行の覚醒を促すつもりだったのだ。

侵入者が入り込んだとなれば、一方通行は安全な場所へ打ち止めを連れていく。それはおそらく避難所であり、警備員である黄泉川の手の中だ。一方通行の性格上、侵入者が何者で何の目的なのかを探るだろうが、どちらにせよ不穏分子は排除しにいく可能性が高い。

そうなれば打ち止めを確保することなど容易い。暗部を警備員に紛れ込ませて攫つてしまえばいいのだ。

「もつと言えば、打ち止めを利用し虚数学区の顕現が出来れば上々だろうがな」

アレイスターとて馬鹿ではない。密かに動こうと虚数学区を展開すれば瑛瓊は必ず動く。しかも相当頭も回る故に、瑛瓊はほんの些細な情報でアレイスターとフィアンマの思考に辿り着くこともありえるのだ。

下手に動けば全てが瓦解してしまう以上、アレイスターも慎重になつていた。

現状、魔術師達は上条勢力の殲滅を目的として動いている。

それはつまり、瑛瓊以外に確認されている上条勢力の人物も対象になるということだ。上条当麻は勿論、禁書目録やレベル5で親交のある御坂美琴、一方通行などが対象になってしまうのだ。C文書が使われた時点で、その命令の強制力は絶対——もつと言えば、フィアンマはこの混戦の中で幻想殺しを奪取しようと考えている。

アレイスターもフィアンマも、お互いの最終的な目的がどこにあるのかをまだ知り得ていない状況故に、裏の裏で互いの思惑を交錯させていた。

しかし忘れてはいけない。

その目的を達成するためには、最重要かつ大前提として――

――瑛嗶の抹殺を成し遂げなければならぬということ。

◇ ◇ ◇

そういうわけで大勢の魔術師から逃げている瑛嗶は、途中で同じく逃げていた上条当麻を抱えて走っていた。

その気になれば全員薙ぎ倒すことも可能なのだが、瑛嗶の特典である『人類が習得出来る全技術』の副産物の魔術知識が、襲い掛かってくる魔術師達の身体に刻まれた自爆術式を見破っていた。

その威力は一人が発動させただけでも、この辺りを吹き飛ばせる威力。それが何人も発動させたなら、瑛嗶はまだしも直撃すれば上条当麻は無事では済まない。右手で防ごうとしたところで、全方位からの爆発に同時対応は出来ないのだ。

故に、瑛嗶は上条当麻を抱えて逃げている。

だが、

「じゃあ上条ちゃん、今から俺が運ぶから、目の前にあの魔術師たちが来たら全部右手で触っていったらね」

瑛嗶は不可能なことだろうと可能にするだけの力を持っている。

「え、おわあああああ?!?!」

瑛嗶は上条当麻を担ぎ直すと、後方へ高く跳躍し、くるりと回りながら追ってきている魔術師たちの後ろへと移動した。

魔術師達の動きが一瞬止まるが、その瞬間に瑛嗶は一人一人の合間を縫って通り過ぎていく。その中で、上条当麻は目を白黒させながらも懸命に右手を動かし、目の前に現れた魔術師一人一人の身体に触れていった。

パキーンという甲高い音が響きながら、魔術師達の身体に刻印させていた自爆術式が破壊されていく。

そうして瑛嗶が再度魔術師達の先頭へと出てきた瞬間、その魔術師達が全員地面へと倒れ伏した。

「え？ え？ なんて？」

「上条ちゃんが触れたそばから全員気絶させただけだよ」

「うわー……」

「恐ろしく速い手刀だっただろ？」

「俺じゃ見逃しちゃうから!!」

瑛噎は上条当麻の右手が術式を壊した傍から、それぞれに手刀を叩きこみ、全員を気絶させていたのだ。あまりの早業に、上条当麻は驚きを隠せずとりあえず全力でツツコミをいれるしかなかった。

しかし学園都市に入り込んだ魔術師はまだいる。無限に湧いてくるわけではないが、こう何度も襲撃されては倒しを繰り返すのは、少々面倒くさいだろう。

「元凶は……なんとなくアレイスターかな？ でもローマ正教の魔術師がいるってことは、別にもう一人いそうだけど……どちらにせよ目的は俺か上条ちゃん、もしくは両方の抹殺ってどこか」

「察し良すぎてもうそれで合ってる気がする、流石瑛噎さん」

「多分合ってるよ」

「まさか元凶もなんとなくて正体割れるとは思わないと思うんですが！ いままで色々な相手とのいざこざに巻き込まれた上条さんでも、今回の元凶には少し同情してしまうのですが!!」

「ツツコミ長い、お仕置きな。ほい目潰し」

「不幸dぎやああああああ!! 目がア!! 目がア!!」

「さて、アレイスターの居場所は割れてるし……どうせならもう一方の方を探したいところだけど……!」

上条当麻と頓珍漢なやりとりを繰り広げつつ、この事件の真実に辿り着いた瑛噎は周囲を見回しながらアレイスターとは別の元凶、つまり右方のファイアンマを探す。

「おっと、上条ちゃんそこ危ないぞつと」

「え?! 目が見えないんだけどおおっ!!」

「ふっ!!」

瞬間、瑛噎は目を抑えて転がる上条当麻の襟首をつかんで横へと放り投げると、横から襲い掛かってきた青白い光線を『触れる』能力を

使つて真上に殴りあげた。

その青白い光線は殴られたことで強制的に軌道を変えられ、一度その勢いを失い消える。

瑛嗶は殴つた手の感触から、今の攻撃がかなりの威力が秘められた一撃だったことを理解する。拳を開いてゆらゆらと揺らすと、光線が襲い掛かつてきた方へ視線を向けた。

するとそこには、

「正直……今のを防ぐとは思わなかつたぞ」

この騒動の元凶の一人、右方のファイアンマが佇んでおり――

「警告……正体不明の力により、術式が破壊されました。逆算、失敗……対象の能力に対し有効となり得る可能性の高い術式を構成しませ……」

――かつて上条当麻が対峙した、『自動書記』状態のインデックスがそこにいた。

「一番大事なものを傍に置いておかないとは、不用心だぞ『幻想殺し』……だからこうやって横から掠め取られる」

「イン、デックス……!?!」

「あらら、洗脳でもされたかな?」

「そして泉ヶ仙瑛嗶……お前は这个世界の異物だ。正直、俺様にとってお前は邪魔でしかない……だから直々に殺しにきてやったぞ」

「へえ、そのバグってフリーズしたファミコンみたいな腕で?」

「ふん、まだ未成品なんぞ……だが完成の為の材料は此処に揃っている」

インデックスの姿に絶句している上条当麻をよそに、瑛嗶とファイアンマは言葉を交わす。片や殺しに来たローマ正教の切り札、片や世界最強の存在。

瑛嗶としても、自分を殺す為に此処まで綿密に計画を練ってきた相手は久々だった。流石にローマ正教程の巨大な勢力を敵に回したことは、数える程しかない瑛嗶なので、それも当然のことなのだが。

とはいえ、今までの敵の中でもかなりの力を持った相手なのは間違いないだろう。その証拠に、歪な形をしているが、フィアンマの右肩から生えている巨大な右手は、膨大なエネルギーを感じさせている。「禁書目録を使ってその右腕を回収するまでの間、お前は俺様が足止めさせてもらう……そして右腕を回収して、幻想殺しを取り込めば俺様の右腕も完成する。そうなれば、お前とて敵じゃない」

フィアンマは余程自信があるのか、不敵に笑みを浮かべながら両手を広げる。

その左手にはインデックスの遠隔操作霊装が握られており、右には巨大で歪な右手、勝利を確信したようなその笑みに、上条当麻は気圧された。

瑛嗶によって様々な事件を引つ掻き回された結果、上条当麻には原作程の経験値がない。対魔術師であれば赤髪の魔術師、ステイルⅡマクスや土御門元春くらいしか経験がないのだ。

そこそこ実力のある魔術師を倒したことがあるからと言って、急に世界をひっくり返せるような力を持った魔術師に敵がレベルアップするなど、理不尽もいところだろう。

まして、魔神と呼べるほどの力を持った禁書目録を右手一本で相手するなど無理難題にも程がある。

「っ……」

だからこそ、継るように上条当麻は瑛嗶の方を見てしまった。

インデックスは救いたい、けれど襲い来る恐怖心は無視できない。

しかし、視線を向けた先にいた瑛嗶は、

「どうしたもんかなー」

「お、瑛嗶さん……どうするんだ？」

「え？ いやまあ、どうしたらいいかなって思って」

「なっ……」

上条当麻は瑛嗶のその言葉に言葉を失う。



今まであれだけ無茶苦茶してきた瑛嗶が、まさか手に負えないと言うなんて、想像も出来なかつたからだ。それほどまでに凄まじい相手だということのか、そんな恐怖が彼の頭の中を埋め尽くす。

瑛嗶が勝てない相手——それだけで足が震えてしまった。けれど、そんな上条当麻に対して瑛嗶は訂正するようにこう続けた。

「さーて、どうしたら面白くなるかなあ」

ゆらり、口端が吊り上がり、顔を傾けながら瑛嗶は笑った。

「なに……？？」

「瑛嗶さん……？？」

その姿に、ファイアンマも上条当麻も困惑する。

それもそうだろう、この状況、圧倒的に優位に立っているのはファイアンマの方であり、彼の左手にある遠隔操作霊装が動けば、即座に魔神の力を行使したインデックスの猛攻が始まる。

如何に瑛嗶であろうと、幻想殺しであろうと、その力の猛威を受けて無事で済むとは思えない。さらにはファイアンマの右腕だって、無視できない脅威には違いないのだ。

にも拘らず、瑛嗶は笑っている。

だが——彼らは知らない。

これが泉ヶ仙瑛嗶の本質であり、どんな能力も魔術もスキルも魔法も関係ない、最も恐ろしい彼の神髄。

そう、どんな状況になつたとしても——

「面白いなあ」

——娯楽主義者は恐れない。

## 最終決戦だ

「——馬鹿な……そんな……!」

ほぼ最終決戦と呼べるこの戦いにおいて、状況、作戦、戦力、全てにおいてフィアンマは優位に立っていた。瑛嗶に気づかれることなく準備を終え、瑛嗶に気づかれることなく作戦を開始し、気付いた時にはほとんど詰みの状態に追い詰めていた筈だった。

にも拘らず、彼の作戦は片っ端から無意味化させられてしまった。たった一つ、瑛嗶を食い止めることが出来なかっただけで。

禁書目録を操り強力な戦力としたうえで、大量の魔術師を投入、アレイスターの協力もあって何の邪魔もなく最終段階まで作戦を進めることが出来たというのに、瑛嗶はたった一手でそれを覆して見せた。

その方法とは、

「——」神よ、何故私を見捨てたのですか」

「ぐう……ッ!? 何故能力者であるお前が……!」

——禁書目録の遠隔操作霊装の奪取である。

フィアンマの歪な右腕は、神の右席として振るう天使の力『神の如き者』の持つ奇跡の象徴である『聖なる右』。

敵となる対象に対し、適切な出力を自動で発揮する性質を持っているこの右腕は、振れば倒すことが出来る以上破壊力や速度といった倒すために必要な能力が必要ない。原作では上条当麻により、『RPGのコマンドに『倒す』という選択肢があるようなデタラメさ』とすら言わしめた力なのだ。

だが、それを扱うために必要な材料として、幻想殺しや禁書目録などを求めた以上、通常の状態では二三度振るえば空中分解してしまう程脆い。

禁書目録を奪った段階で、なんとか右腕の固定化に成功していたのだが——

「なんだそのデタラメな速度は!!」

——瑛嗶は単身でその右腕と違う意味で、同じことが出来る。

近づこうと思えば認識できない速度で近づくことが出来るし、倒そうと思えば一撃で倒すことが出来るし、如何に人数を増そうと、間合いを詰めようと、策を練ろうと、護りを固めようと、彼は圧倒的な力でそれを捻じ伏せることが出来る。

なにせ彼の持つ『触れる』能力は、この世界における神ではなく、真正銘全ての世界を司る神から与えられた力なのだから、『聖なる右』程度では到底太刀打ち出来はしない。

故に瑛嗶はフィアンマの手から容易く遠隔操作霊装を奪い取り、その知識を行使して禁書目録の制御に成功。敵になった禁書目録の猛攻を防ぐべく右腕を振るうも、禁書目録による右腕の固定化を失った以上、その右腕はすぐに空中崩壊して消えてしまった。

「ほーれほーれ」

「くそー！ こいつ俺様で遊んでやがる！」

瑛嗶は禁書目録を操作して、敢えて攻撃範囲を手加減した魔術攻撃（効果がエグイ）でピシピシと攻撃している。

フィアンマは右腕を失った以上それを防ぐ術がなく、転がるようにその魔術攻撃を躲していた。いや、躲させられていた。完全に遊ばれていると分かっているけど、それをどうにかする為には相手が悪すぎた。

「あれ、前回の俺のシリアスどこいったんでせう？」

「いつものことじゃん」

「どうかインデックス取り返したなら元に戻してくれよ!? なに継続して操ってんの!?!」

「盛り上がってるところ悪いけど残念ながら上条ちゃん」

「な、なんだよ」

「これが最終決戦だ」

「これ最後!? こんなグダグダなのが最終決戦!? 今までどの戦いもグダグダだったけど!! 全っ部瑛嗶さんが台無しにしてきたじゃん! 多分もうちょい真剣にやったら本にしたとき、大人気ライトノベルとしてアニメ化までいける超大作になった戦いが出来たと思うんですが!!」

「ごめんな」

「それで済ませるような問題じゃないだろうがああああ!!」

瑛嗶の言葉に上条当麻がメタ発言も混ぜながら全力でツツコミを入れてくる。

それもそうだろう。此処までの戦い、全て瑛嗶が台無しにしてきたのだから、物語としてはかなり破綻してしまっている。起承転結の起の時点で強制終了するような所業を繰り返してきたのだから、当然だろう。

だが思い返してみてもほしい。

瑛嗶が行動した結果、なにか悲劇が起こっただろうか？

妹達編から瑛嗶の介入が始まり、一方通行は強制的に光の世界へと連れていかれ、打ち止めも無事に救出。御使墮しは引き起こされたが、被害者はなく天使も無事強制送還、土御門元春も重体にならずに済んだ。風斬氷華の一件もレベル5巡りをしていた瑛嗶の乱入で魔術師を撃退、風斬自身も無事。法の書の一件なんてただの茶番だったし、それによって引き起こされた女王艦隊も瑛嗶の介入で壊滅、首謀者など変な教えを受けておかしくなる始末だ。大覇星祭ではあつちこつちへと無茶苦茶やって、色んな悪事を挫くことに成功し、なおかつレベル5達同士のコネクションすら繋いで暗部を崩壊させるに至る。アレイスターのプランを悉く邪魔をして、神の右席を容易く撃退、拳句の果てに最後の最後で出張ってきた右方のフィアンマすら簡単に弄んでいる。もっと言えば、魔神であるオティヌスも気分だからかっていた。

原作崩壊どころか、原作の事件を悉くうやむやにしてきた結果、被害者が誰一人として存在しないストーリーが出来上がっているのだ。

「信念も野望も願ひも、正しく叶えなきやただの傍迷惑だろ？」

「な……そんな理由でこれまで散々邪魔をしてきたと言うのか？」

「別に誰かの為にーとか考えてたわけじゃないよ。ただ、全部阻止したらどうなるのかなーってちょっと興味があったただけだ」

「そんな……」

瑛嗶の言葉に、フィアンマは膝を着いた。

神上に至り、世界の救済を成そうとした——だがそれはただ一人の  
人外の興味本位で打ち崩された。魔術サイドだの、科学サイドだの、  
そんな小さなことを意識していたからか、盤外からすべてを滅茶苦茶  
にされたような気分だった。

事実、瑛嗶の行動によって不幸になった者はいない。

勿論、復讐を遂げられなかったり、目的を達成できなかったものも  
いるが、それはそもそも多くの命を蔑ろにした上で成り立つ話だ。阻  
止されても文句は言えない。

原作という基盤があり、それに沿って進むには、あまりに強大すぎ  
る存在だったのだ、瑛嗶という人外は。

だからこそ——この世界を人間達の物語とするのなら、

「まあ、人生そんなもんだよ」

——人外は物語に干渉してはいけなかった。



アレイスターは瑛嗶とファイアンマの戦いの様子を見て、機械に生命  
維持を任せているのにも拘らず息を呑んだ。背筋に悪寒すら感じて  
いるような気さえした。

当然だろう、ファイアンマの持つ力は『世界を救済する力』。それは不  
完全な右腕だったとしても十分脅威的な力だ。

瑛嗶がいかに人外だと言っても、人の域にいるのならファイアンマの  
力でどうにか殺せるのではないかと思っていた。仮に殺せずとも、重  
傷くらいは負わせられるのではないかと思っていた。

けれど蓋を開けてみればどうだ。

ファイアンマの力を正しい方法で無力化した上で、禁書目録が瑛嗶の  
手に渡ってしまった。しかもどうやらその操作も容易く行っている。

「魔術では殺せない、ということなのか……」

呟きアレイスターは逆さの状態のまま天を仰ぐ。見えるのは地面  
と生命維持機の底のみ。

此処までくれば嫌でも理解出来る——瑛嗶には禁書目録すら凌駕

する魔術知識があり、魔術において根幹ともなる様々な魔術的意味を無意味化できるのだ。もつと言えば、禁書目録の『歩く教会』を完璧に修復し、聖遺物である『いばらの冠』の原点を所有していたくらいなのだ。

他にも聖遺物を持っている可能性はあるし、キリストや十字教の始まり、更にそれ以前の神話の世界に生きていたとしたら、そもそも魔術や魔導の原点に関与している可能性すらある。

つまり、瑛嗶はアレイスターの常識から外れた領域に生きる存在であるとする、最早アレイスターでは殺しようがないのだ。

「魔術的な方法では殺せない……科学でも殺せない……」

いや、そうではない。そういうことではない。

「そうではない……もはや奴を殺せるか殺せないかの話ではないな」

アレイスターの目的は、プランの目的は、

——理不尽な悲劇を消し去り、誰もが当たり前前に泣いて、笑える世界の創造なのだ。

小さな規模ではあるが、それは今まで瑛嗶がやり遂げてきたことだ。

命が失われることその物ではなく、命が失われることに対して仕方がないで済ませず、素直に憤慨して立ち上がれないことがどれほど悲しいことなのかと思っていた彼に、瑛嗶は心のままに立ち上がり、自身の関与する全ての悲劇を阻止してきた。

それはアレイスターがこうあればと思ったことの体現なのだ。

そんな彼を否定し殺すことは、自身の目的の否定にも等しい。

ならば、アレイスターに瑛嗶は殺せない。

「……プランの遂行は、不可能か」

アレイスターは素直に笑うしかなかった。

瑛嗶が生きている限り、アレイスターのプランは悉く頓挫する。それはもう今までの経験から理解出来ている。瑛嗶が老衰で死ぬのかどうかはわからないが、神話の時代から生きているのであれば、最悪この宇宙が終わるまで生きる可能性すらある。

ならば、

「詰んだ」

アレイスターの表情が崩壊した。

## 憂い

「で、結局何がしたかったのお前ら」

それから。

瑛嗶とファイアンマの戦いは当然の様に瑛嗶の勝利で収拾した。禁書目録を奪われ、右腕も機能しないときは降参するのも当然の結果だろう。

決着がついた後は、瑛嗶はファイアンマを引きずってアレイスターのいる窓のないビルへ向かった。当然の様に破壊不可能な程強固なビルの壁を壊しながら侵入し、嘘だろとでも言いたげなアレイスターの表情を無視しながらその隣にファイアンマを正座させたのである。

そして現在、今回の事件の主犯であるアレイスターとファイアンマの前に、瑛嗶は呆れた様な表情で問い質している最中だ。

「いや、何がって……それは」

「俺様、予想はしていたけれど生きていたことが驚愕な存在が隣にいるって事実リアクションも取れてないんだが」

「それを言ったら私だって破壊不可能な此処の壁を壊して入って来たことにリアクション取れてないんだ、余計なこととは言わない方がいい」

「なんでそんなちよつと慣れた感じなんだ？」

「お前ら仲良いな」

「初対面だ」

瑛嗶という人外の被害者という共通点は、本来敵同士であり、各サイドのトップ的存在である二人に対し、初対面であるにも拘らず仲間意識が生まれてしまう程の強烈さが与えられるらしい。

というか、世界最高の魔術師や世界を救う力を保有する神の右席の前に尋問まがいなことができるのは、後にも先にも瑛嗶のみだろう。この状況自体、あらゆる策や技を物理一極で突破されて出来上がっている。

正直、流石の二人でもどうすりやええねん状態だ。

申し開きがあるかと問われたら、意味分からなすぎるから逆にお前



が申し開けと言いたかった。

「俺を殺そうとしたみたいだけど、ぶっちゃけ何がしたかったの？」

「俺様は世界を救おうとしました」

「理不尽な現実を無くそうとしました」

「結果は？」

「クソゲーだった」

「ハハッ」

「ハハッじゃねえよ」

原作ではあれ程までに強大な存在として強烈なインパクトを残した稀代の魔術師二人に、此処までツッコまれる瑛嗶。

結局二人の計画は全て頓挫し、今後も瑛嗶が生きている内はどうしようもない上、瑛嗶が半永久的に生きられる可能性があるという事実がどうしようもなく二人を打ちのめしてくる。

最早尊大な態度を保つ余裕すらなかった。

「で、こっからどうする？ とりあえず殴られとく？」

「君は鬼だ」

「あれだけ俺様で遊んだろうが」

「ほら、俺って衝動で生きてる所あるじゃん？」

「いや知らないが」

「でもそうだろうなって思ってるよ」

「お前ら多分ラスボスじゃん？」

「どっちかというラスボスは君だがな」

「お前がラスボスなら人類全員勇者でも足りないけどな、クソゲー野郎」

「フィアンマから殴る」

「ごめんって」

最早尋問というよりただの男子会のようになっているが、瑛嗶の前で正座していたフィアンマが段々投げやりになってきた。もうどうにでもなれというような目をしている。

そんな彼を見ると、アレイスターもそんな気分になってきたのか、ぽやーつとした表情になってきた。

稀代の魔術師二人が、揃ってぼけーつとした表情で空を見ている光景が出来上がる。

「幼稚園かここは」

関係なく拳骨は落とされたが。

◇ ◇ ◇

窓のないビルから出て、瑛嗶はフィアンマおよび侵入した魔術師全員を学園都市の外へと放り出した後、一人アイテムの拠点の屋上で街を眺めるように立っていた。

既に空は夕方を少し過ぎた頃独特の、赤と青と黒の混じったような色をしている。冬も近くなっているからか、この時間になると少しだけ涼やかな風が吹いていた。

瑛嗶はなんとなく、この転生の人生を始めてからのことを思い返していた。

直感しているのだ。

この禁書目録の世界に来るまでに何兆年も生きて、妻も、親友も、娘も、妹も、ペット(?)も、生徒も、仲間も、沢山出来た。自分が紡いできた人との縁の数を数えれば、最早百や二百では足りない。

この世界では瑛嗶と対等な目線で話せる存在こそいないが、馬鹿騒ぎをするには十分な学生や魔術師がいっぱいいる。

楽しいと思うし、面白いことばかりで人生は常に充実している。

だからこそ、瑛嗶は直感してしまっている。

「そろそろ飽きるだろうな」

転生して、別の世界、別の原作を楽しみながら生きる。

それはきつと楽しいし、一度は誰しもが望むようなファンタジー。でも何兆年も生きるということは、原作が終わってしまった後の時間は退屈な時間も多かったということだ。

思い返してみれば、辿ってきた各世界での瑛嗶の様子を見ると、それぞれ何処か違った。

最初のハンターの世界。

最強クラスとはいえまだ他を圧倒する程ではなかったから、戦いの緊張感や頂点を目指す充足感があり、まだ等身大の年齢であったが故の青さがあつた。

次のなのはの世界。

既に完成した強さと特典によるチートあつて、苦戦はしなかったものの、娘や妹と呼べる存在を得たことで、大切なものを守るために激怒したこともあつたし、それを経て精神的にも大人になった。

次のめだかボックスの世界。

心身ともに完成した瑛暎は、此処で娯楽主義者としての本質を獲得した。何兆年という時間を生きるには、人間の精神ではいられないからだ。生物としても、能力にしても、精神的にも、彼は此処で人外となった。

それでも精神崩壊を起こさなかったのは、ひとえに同じ時を生きる同じ人外が妻として一生添い遂げてくれたからだ。

次の問題児の世界。

彼は人外として初めて、人間以外の種族や存在が多く存在している世界にやってきた。ある意味、自分と同じ人外が普通に存在している世界に。妻と離れたのは思うところはあつただろうが、お互い人外故に時間が経てば会えると確信していたから、瑛暎はその世界を心置きなく楽しんだ。

なのはの世界でも、めだかの世界でも、問題児の世界程積極的に行動してはいなかったのは、周囲が簡単に殺してしまえる人間ばかりだったから。同じ人外ばかりの世界で生きた瑛暎は、思い切り全力を出せたわけではないが、ある程度はしゃいで動くことができたのだ。そう、眠っていた娯楽主義者としての本質が目覚めたかのよう

に。  
そして妻と再会を果たしてしまえば、彼はもう止まらない。自分をセーブしてくれる妻がいるということは、彼自身が意識して制限する必要がないという安心感を与えてしまったからだ。

そうして楽しんだ彼は、不幸なことに禁書目録の世界にやってきてしまった。

——人外らしき人外が少ない世界に。

この世界に来てから、瑛嗶は積極的に事件に介入しては滅茶苦茶をやらかしてきた。

それは問題児の世界での感覚が消えていかなかったからだ。ましてこの世界にはセーブしてくれる妻もいない。

やりすぎなほどの手加減と、この世界を楽しみたい娯楽主義者としての本質の矛盾が、知らず知らず瑛嗶にとってフラストレーションになっていたのである。

だから、瑛嗶は今の自分の状況に飽き始めているのだ。

好きで始めたこの転生生活だが、あまりにも強過ぎる自身の力がそれを十分に楽しませてくれないようになってしまった。

「煩わしくなってきたな、この特典も」

思い返せば、最初の自分の選択をぶん殴りたくなる瑛嗶。

何が『人類の習得出来る技術全て』だ、出来ないことがあるから面白いのに。

何が『強靱な肉体』だ、限界を超える楽しみを手放してどうする。何が『チート』だ、そんなものがあつては逆境なんてありえないではないか。

特典もチートも最強も、娯楽主義者には必要ない。

それで楽しめるのは見ている側だけだ。それを羨むのも見ている側だけだ。

そうつまり、娯楽主義者が世界を楽しむ為には、

——最強になつてはいけなかった。

「最強だから娯楽主義に生きられるんじゃない」

瑛嗶は知らず知らず見失っていた。目を逸らしていた。

自分は楽しんでいて、自分は面白いと思っっている、そう思い込んで、力があることに不満はないと無意識に思っていたのだ。

そうしなければ、瑛嗶が今まで生きてきた世界を否定してしまう気がしたから。

今までの世界を自分が楽しんでいなかったとしたら、その全てが嘘になってしまう。自分の理解者は誰一人いなかったことになる。や

はり瑛嗶も、それだけは嫌だったのだ。

だが、瑛嗶はこの世界におけるラスボスともいえる二人を簡単に打倒できてしまったことで、直感してしまったのだ。その事実には

娯楽主義者は恐れない。

認識してしまったのなら、そこに向き合うことに恐怖はない。だから少し考えればそれを受け入れられたし、見失っていたことにもすぐに気づくことができた。

「いつからだったかな、娯楽主義者とか言い出したのって」

瑛嗶は屋上の手すりに背中から寄り掛かり、空を仰ぐようにして目を閉じる。

そうして思い返すのは今までの人生。

娯楽主義者とは、瑛嗶が勝手に創った造語で、本来存在しない主義だった。

今までの長い人生で、ソレに影響されてか色々な場所で瑛嗶のように生きる人間も数多く出てきたが、本来それはチートなくしては成立しないようなものではない。

チートを振りかざして、好き勝手に振る舞い、自分のやりたいようにやる生き方が娯楽主義者ではないのだ。

瑛嗶は目を開け、ゆらりと笑う。

「娯楽主義者ってのは生き様だ」

そして、すうっと片手を空へと伸ばし何かに触れるように何かを掴まむ。

「生き様を貫くことに、力は必ずしも必要じゃない」

それはまるで、本の一ページを掴まむような仕草。

そこに本があるわけではないが、瑛嗶は本当にページを掴まんだような様子で、それを捲っていく。

すると、

「いつか誰かが言ってたな、めだかちゃんだっけ？」

捲られたところから空間が裂けていく。

『世界は平凡か、未来は退屈か、現実 is 適当か、安心しろ。それでも、生きることは劇的だ』—— 全くその通り、俺の人生は俺が生きる。

そして、」

世界を壊している訳ではない、けれどそこには別の空間が広がっているのが分かった。

白く、何処までも白い空間。瑛嗶にとってはなじみのある空間だった。

「娯楽主義者は、面白いことに飢えている」

瑛嗶は跳躍し、開いた空間へと入り込む。

すると、その空間は閉じ——瑛嗶は禁書目録の世界から消えた。

## エピローグ

真っ白な空間にやってきた瑛嗶を待つていたのは、当然のように神様だった。

瑛嗶が来ることが分かっていたように彼は待つていて、その表情は珍しく真剣な様子。彼もまた、瑛嗶の転生生活に付き合ってきた人物だ。瑛嗶よりも長い時を生き、瑛嗶と同じ時間を共に過ごしてきた。

故に、彼もまた瑛嗶の考えていることを理解しているのだろう。

転生生活において、瑛嗶は神様の想像を超えて、娯楽主義者という人外に成長した。それを傍観しているのは楽しかったし、彼自身も一つのエンターテイメントを見ているような気分でいられたので退屈しなかった。

けれど、瑛嗶自身はそうではない。

強大な力を手に入れてしまった末に到達したのは、自分が全力で遊んでしまうと、周囲が耐えられないという現実。

全力で遊ぶことができない。

全力で戦うことができない。

難解な場面に直面しても、特典のせいできして問題なく突破することが出来てしまう。

現に、リリカルなのはの世界ではその特典を駆使して死者蘇生すら成し遂げてしまったのだから、最早出来ないことなどなくなってしまうのだ。

それはつまらない。

安心院なじみではないが、探すまでもなく『出来ない』を失ってしまい、そもそもこの世界が全て原作のある漫画の世界だと知っている瑛嗶は、退屈とストレスを感じているのだ。

あまりにも強くなりすぎると、最終的には見ているくらいしか楽しむことが出来なくなってくる。それでは意味が無い。

「やあ瑛嗶、そろそろ来ると思ってたよ」

「ああ、まあ理由は分かっているよな？」

「うん、流石のチート無双も、行き過ぎればそれも出来なくなるんだね

……僕も学ばせてもらったよ」

「だから、そろそろ潮時だと思ってるな」

「うん、それでいいと思うよ」

瑛嗶の言葉が意味するのは、この転生生活の終わり。

神様もそれを察しており、そしてそれを受け入れている。長い転生生活の旅は、いよいよもって終結が見えてきたのだ。

「でも、こんな終わり方は流石に面白くない」

「そうだね、僕もそう思う」

だが、瑛嗶と神様は鏡写しのように笑う。

「あと一回——転生しようと思う」

「正真正銘ラストライフだね、君の希望は分かっているよ」

「ああ、俺が最初に望んだ特典の全てを返却するよ」

「人類の全技術、強靱な肉体、そしてその世界に合った能力をランダムに一つ、それら全てを回収する、だね」

神様がそう言った瞬間、瑛嗶の身体から魂だけが飛び出て、肉体が光となって神様に吸収された。全ての特典や瑛嗶が培ってきた身体能力が全て消えたのだ。

そして神様が次に出したのは、先ほどの瑛嗶の肉体と同じ姿形をした肉体だった。

瑛嗶の魂はそこへ吸い込まれるように入っていく、そして動き出す。

「ん……おお、身体めっちゃ重い」

「以前の様な特殊な肉体じゃないからね、君の要望に合わせて人間と変わらない性能だから、超高速で動くとか超絶パワーとかはないよ。まあ、すぐに慣れるようしっっかり鍛えてある身体にはしてあるけど、常識の範疇に収まっているから」

「それに全技術も失ってるから変な知識もなくなってる」

「まあ一度使ったことのある技術や知識は、記憶として残っちゃってるから消せないけど、大した問題じゃないよ」

「うん、それは大丈夫」

瑛嗶は身体の調子を確かめるように色々動いてみるが、やはり以前



の肉体とは雲泥の差で、拳も蹴りもキレはあるが超絶パワーとは程遠い。

「まあ魂の強度が尋常じゃないから、多少そこに引つ張られて肉体強度も上がるだろうけど、刃物を通さないとかそんなレベルにはいかな

いから安心していいよ」

「さんきゅー、神様」

「で、どうする？ 禁書目録の世界はお終いにして次の世界に行くかい？」

「ああ、そうだったね」

神様が指差したのは、瑛嗶が開いた空間の裂け目。

そこからは先程まで瑛嗶が居たとある魔術の禁書目録の世界が広がっていた。確かに、瑛嗶としてはこの世界から次の世界に行きたいところではあるが、自分のフラストレーションを発散するように無茶苦茶にしてしまった世界である以上、どうにか帳尻は合わせておきたいところである。

瑛嗶は少し考えた所で、神様に言う。

「この世界は俺が転生した地点まで巻き戻して、俺がいなかったことにしてくれ」

「いいのかい？ この世界で関わった全員が君のことを忘れて原作通りに生きることになるわけだけど」

「いいよ、原作通りに生きるってことは、全員がちゃんと自分の人生を歩くってことだ。俺が居た場合の方が死ななかったり、悲劇が起らなかったとしても、それは本来あの子達が乗り越えるべきことだったんだから、いつかどこかでしっぺ返しが来る」

「あの子達は望んでないかもしれないよ？」

「多分そうだろうね」

「はあ、分かった……じゃあそうするよ」

神様は次元の裂け目を閉じると、すいっと指を一振りした。

おそらくは瑛嗶の要望通りに世界を修正したのだろうが、神様は少しだけ含みのあるような笑みを浮かべた。

「どうした？」

「いいや、なんでもないよ」

「ふーん……じゃ、そろそろ最後の世界に行こうかな」

「ああ、当然行先はランダムだよ。まあ、原作に干渉できる程度の加護的な力を付けておくから、安心して楽しんできてよ」

「加護？」

「一般人では感知出来ない領域とか、空間とかで練り広げられている戦いとかだったら、困るでしょ？　そういうのに関わらず、君は原作に干渉できる存在にしておくってことさ。チート能力とかではないから安心していいよ」

神様の言葉に、瑛嗶はなるほどと頷く。

すると神様がパチンと指を鳴らし、瑛嗶の目の前には白い扉が現れた。どうやら此処を通れば次の世界に行くことが出来るらしい。

瑛嗶は早速とばかりに扉のノブに手を掛けて次の世界へと行こうとする。

すると、神様が不意に声を掛けた。

「そうそう、これが最後だからね……次の世界で死んだら君は輪廻の輪の中に取り込まれて、普通の魂と同じように輪廻転生することになる。此処に来ることはもうないから、これでお別れだね」

「……そうか、じゃあ長い間世話になったね。神様のおかげで楽しく楽しい人生を送ることが出来た、ありがとな」

「こちらこそ、最後まで楽しませてもらうよ。娯楽主義者の最後の人生を」

瑛嗶は笑い、神様も笑った。

そして扉は開かれ、瑛嗶がその奥へと姿を消す。

扉が閉まった後に残されたのは、神様ただ一人――  
だが、

「さて瑛嗶、今まで好き勝手やってきた君が、僕の特典も培ってきた力も手放した。君は言ったね、全てを返却するって」

残された神様は楽しそうに笑う。

「実は言ってなかったけど、面倒にならないように君には色々と加護を授けていたんだよ」

愉快そうに、心底楽しそうに、笑う。

「それに、禁書目録の世界でも一人だけ、君の記憶を消してないんだ」  
瑛嗶が予想していなかったこと、それは瑛嗶自身が言ったことだ。  
今まで好き勝手に生きてきた瑛嗶の人生、そのしっぺ返しはいずれ  
瑛嗶自身にも襲い掛かる。神様はそれを分かっている、瑛嗶に与えた  
全てを回収したのだ。

そしてそれは、禁書目録の世界でも同じこと。

「君は色んな世界に転生してきたね、ハンターハンター、リリカルなのは、めだかボックス、問題児、禁書目録……色んな種族、色んな人間と絆を紡いできた君だからこそ、起こり得る面倒ごとを防ぐのは大変だったんだから」

神様は瑛嗶の出でいった扉を開くと、ふいつと指先を揺らした。

「可哀想だから、これくらいのサポートはしてあげよう」

改めて扉を閉め、指を鳴らして扉を消す。

「さて瑛嗶——君が出会ってきた子達が、君を放っておくとは思わないことだよ」

神様は、今までで一番楽しそうにケラケラと笑った。